

若宮宮田工業団地関係 埋蔵文化財調査報告

第 3 集

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡の調査

1980

福岡県教育委員会

若宮宮田工業団地関係
埋蔵文化財調査報告

第 3 集

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡の調査

1980

福岡県教育委員会

序

地域振興整備公団による若宮・宮田工業団地造成に伴う発掘調査は昭和51年度に始まり、当54年度をもってすべての調査を終了致しました。工業団地は東西に走る九州縦貫自動車道に沿って同一丘陵上に造成されるため、両方の用地内にまたがって存在する遺跡もあり、8地点17,000㎡について発掘調査を実施しました。

原始・古代の悠久の眠りから突如として目を覚まし、現代の光と空気に触れた遺構や出土品についての整理もすべて終了し、ここに、若宮・宮田工業団地関係の最後の報告書として第3集を刊行致します。

本書は昭和51年度から同54年度にわたって調査を行った柳ヶ谷遺跡、都地遺跡・同古墳群についての発掘調査報告書であります。

十分な報告書ではありませんが、文化財保護活動や地域の歴史を知る上で本書を活用して頂ければ幸甚です。

本文作成の過程で、種々の御協力を頂いた方々に深謝致します。

昭和55年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

例 言

1. 本書は、地域振興整備公団による若宮・宮工業団地造成によって破壊される遺跡について、福岡県教育委員会が受託事業として発掘調査したもののうち、昭和51年度から昭和54年度に調査した柳ヶ谷遺跡、都地遺跡、都地古墳群についての報告書である。
なお、付編として、県道室木・下有木・若宮線の建設にともなって事前調査をした、平原古墳群の報告を掲載する。
2. 都地遺跡出土の黒曜石石核については、調査補助員日高正幸が原産地で採集した黒曜石とともに、東京学芸大学教育学部助教授大沢真澄氏に分析して頂き、その成果を本書に掲載することができた、深く感謝致します。
3. 本書に掲載した写真は調査担当者が、遺物実測図は調査担当者、調査補助員が撮影および実測したものだが、他に、九州歴史資料館学芸一課石丸洋氏、同写真室平島美代子氏、県文化課小池史哲氏、同調査補助員荒武麗子氏、宇美町教育委員会観音浦古墳群発掘事務所平ノ内幸治氏の協力を得た。
4. 遺構の実測、地形測量については調査担当者、調査補助員がこれにあたり、とくに、柳ヶ谷遺跡・都地遺跡のトレンチ調査における広大な面積のトレンチ設定にあたっては調査補助員日高正幸（測量士）に負う所が大きい。
5. 製図は、遺構については主として日高、豊福弥生が、他は児玉が担当した。
6. 本文の執筆については、各項目ごとに氏名を記して文責を明らかにした。
7. 本書の編集は児玉が担当した。

本文目次

	頁
I 調査の経過	1
II 周辺古墳群の位置と性格	3
III 柳ヶ谷遺跡の調査	7
1 東区の遺構	7
(1) 住居跡	7
(2) 土 壙	9
(3) 溝状遺構	11
(4) 掘立柱建物	11
2 東区の出土遺物	17
(1) 弥生式土器	17
(2) 石 器	26
(3) 須恵器・土師器	28
3 西区の遺構	30
(1) 貯蔵穴	30
(2) 住居跡	30
(3) 土 壙	37
4 西区の出土遺物	37
(1) 弥生式土器	39
(2) 石 器	39
5 小 結	41
IV 都地遺跡の調査	42
1 トレンチ調査	43
(1) 第10トレンチ	43
(2) 第22トレンチ	44
(3) 第33トレンチ	48
2 都地古墳群東支群の調査	49
(1) 都地E-1号墳	49
(2) 都地E-2号墳	49
(3) その他の遺構	54

(4) その他の出土遺物	55
3 都地古墳群西支群の調査	60
(1) 都地W—1号墳	62
(2) 都地W—2号墳	68
(3) 都地W—3号墳	69
(4) 都地W—4号石室	73
(5) 都地W—5号石室	74
(6) 石組み遺構	75
4 小 結	79
V 都地遺跡出土黒曜石の産地について	80
IV 付・平原古墳群の調査	90
1 はじめに	90
2 平原1号墳	92
3 小 結	97
VII 結 語	98
堅穴系横口式石室とその消長	98

図 版 目 次

本文対照頁

図版 1	柳ヶ谷遺跡・都地遺跡周辺航空写真	7
2	柳ヶ谷遺跡周辺航空写真（南東上空から）	7
3	(1) 柳ヶ谷遺跡東区全景（南東上空から）	7
	(2) 柳ヶ谷遺跡西区全景（南上空から）	7
4	(1) 柳ヶ谷遺跡東区ピット群（西から）	7
	(2) 柳ヶ谷遺跡東区26号住居跡（南西から）	7
5	(1) 柳ヶ谷遺跡東区27号住居跡（南から）	9
	(2) 柳ヶ谷遺跡東区27号住居跡（北から）	9
6	(上) 柳ヶ谷遺跡東区1号土壙土器出土状態	9
	(下) 柳ヶ谷遺跡東区1号溝状遺構土器出土状態	11
7	(1) 第1号掘立柱建物（南から）	12
	(2) 第2号掘立柱建物（南から）	12
8	第5・6号掘立柱建物と溝状遺構（北から）	12・16
9	(上) 第7号掘立柱建物（西から）	16
	(下) 第3号掘立柱建物（北から）	12
10	(1) 柳ヶ谷遺跡西区全景（西上空から）	30
	(2) 柳ヶ谷遺跡西区全景（北上空から）	30
11	(1) 柳ヶ谷遺跡西区住居跡とピット群（西から）	30
	(2) 柳ヶ谷遺跡西区22号住居跡（南から）	30
12	(1) 柳ヶ谷遺跡西区23号住居跡（南から）	31~32
	(2) 柳ヶ谷遺跡西区24号住居跡（南から）	32~33
13	(1) 柳ヶ谷遺跡西区25号住居跡（南から）	34
	(2) 柳ヶ谷遺跡西区貯蔵穴	30
14	(1) 都地遺跡第22トレンチ全景（西から）	44
	(2) 同上土壙および土器出土状態（南から）	44
15	(1) 都地遺跡トレンチ北半部全景（南から）	42
	(2) 都地古墳東支群1号墳全景（北東から）	49
16	(1) 都地古墳群東支群2号石室全景（東から）	49~53
	(2) 同上閉塞石、石積み除去後の状態	49~53

17	(1)	都地古墳群東支群 2 号石室閉塞状況（北から）	49～53
	(2)	同上閉塞除去後の状態（北から）	49～53
18	(1)	都地古墳群西支群調査前全景（北から）	60
	(2)	都地古墳群西支群全景（南西から）	60
19	(1)	都地古墳群西支群 1 号墳石室全景（南西から）	64
	(2)	同上天井石除去後全景（南西から）	64
20	(1)	都地古墳群西支群 1 号墳閉塞状況その 1	64
	(2)	同上その 2	64
21	(上)	都地古墳群西支群 1 号墳奥壁	64
	(下)	同上床面および閉塞部	64
22	(1)	都地古墳群西支群 1 号墳積み石状態	64
	(2)	都地古墳群西支群 1 号墳全景と溝状遺構	64
23	(上)	都地古墳群西支群 2 号墳石室全景（南から）	68～69
	(中)	同上腰石と掘り方（南から）	68～69
	(下)	同上全景（南から）	68～69
24	(1)	都地古墳群西支群 3 号墳石室全景（南西から）	69～70
	(2)	同上奥壁石積みの状態	69～70
25	(1)	都地古墳群西支群 3 号墳右壁石積みの状態	69～70
	(2)	都地古墳群西支群 3 号墳土器出土状態	71
26		都地古墳群西支群 3 号墳墳丘盛り土の状態	69
27	(1)	都地古墳群西支群 4 号石室全景（西から）	73
	(2)	同上石室と掘り方の関係	73
28	(1)	都地古墳群西支群 5 号石室全景（西から）	74
	(2)	都地古墳群西支群石組み遺構（西から）	75
29	(上)	平原 1 号墳石室	94
	(下)	平原 1 号墳奥壁石積み状況	94
30	(1)	平原 1 号墳後室床面全景	94
	(2)	同上遺物出土状態	94
31	(1)	平原 1 号墳後室入り口と前室床面	94
	(2)	平原 1 号墳閉塞状況	94
32		柳ヶ谷遺跡東区 1 号土壙・1 号溝出土土器	17～21
33		柳ヶ谷遺跡東区 1 号溝・ピット群出土土器	17～21
34		柳ヶ谷遺跡東区出土土器	22～24

35 (1)	柳ヶ谷遺跡東区出土土器	22~24
(2)	柳ヶ谷遺跡東区出土石器	22~24
36 (1)	柳ヶ谷遺跡東区出土土器	26~27
(2)	柳ヶ谷遺跡東区出土石器	26~27
37	柳ヶ谷遺跡東区出土土器	28
38 (1)	柳ヶ谷遺跡西区出土土器	37~39
(2)	柳ヶ谷遺跡西区出土石器	39~40
(3)	柳ヶ谷遺跡西区出土土器	39~40
39 (上)	都地遺跡10トレンチ出土黒曜石石核 1	43~44
(下)	同 上 2	43~44
40	都地遺跡10トレンチ出土黒曜石石核 3	43~44
41	都地遺跡10トレンチ出土黒曜石石核 4	43~44
42 (上)	都地遺跡10トレンチ出土黒曜石石核 5	43~44
(中)	都地古墳群東支群出土石器	55
(下)	同上石核	55
43 (1)	都地遺跡22トレンチ土壙出土土器	45~46
(2)	都地古墳群東支群 2 号墳石室出土鉄器	54
44	都地古墳群東支群出土土器①	55~58
45	都地古墳群東支群出土土器②	55~58
46	都地古墳群東支群出土土器③	55~58
47 (上)	都地古墳群西支群 1 号墳墳裾部出土土器	65~66
(中)	同上石室出土鉄器	66
(下)	同上石室出土玉類	66
48 (1)	都地古墳群西支群 1 号墳出土土器片	65~66
(2)	都地古墳群西支群 3 号墳出土玉類	72
49	都地古墳群西支群 3 号墳出土土器	71
50 (1)	都地遺跡・同古墳群表採近世陶磁器 (内面)	
(2)	同 上 (外面)	
51	平原 1 号墳出土土器	94~96
52	平原 1 号墳出土土器	94~96

挿 図 目 次

本文対称頁

第1図	若宮・宮田工業団地用地内調査地点図 (1/3,000)	2
第2図	若宮・宮田町遺跡分布図 (1/50,000)	5
第3図	柳ヶ谷遺跡周辺地形図 (1/2,000)	6
第4図	第26号住居跡実測図 (1/60)	8
第5図	第27号住居跡実測図 (1/60)	8～9
第6図	第1号土壙実測図 (1/30)	10
第7図	第2号土壙実測図 (1/60)	10
第8図	第1号溝状遺構実測図 (1/60)	10～11
第9図	第1号溝状遺構土器出土状態実測図 (1/30)	11
第10図	第1号掘立柱建物実測図 (1/60)	13
第11図	第2号掘立柱建物実測図 (1/60)	13
第12図	第3号掘立柱建物実測図 (1/60)	14
第13図	第4号掘立柱建物実測図 (1/60)	14
第14図	第5号掘立柱建物実測図 (1/60)	15
第15図	第7号掘立柱建物実測図 (1/60)	15
第16図	第6号掘立柱建物実測図 (1/60)	16
第17図	第26・27号住居跡出土土器実測図 (1/4)	17
第18図	第1号土壙出土土器実測図 (1/4)	18
第19図	第1号溝状遺構出土土器実測図① (1/4)	19
第20図	第1号溝状遺構出土土器実測図②	20
第21図	東区出土土器実測図① (1/4)	22
第22図	東区出土土器実測図② (1/4)	23
第23図	東区出土土器実測図③ (1/4)	24
第24図	東区出土土器実測図④ (1/4)	25
第25図	東区出土石器実測図① (1/2)	26
第26図	東区出土石器実測図② (1/3)	27
第27図	東区出土土器実測図 (1/4)	29
第28図	貯蔵穴実測図 (1/30)	30
第29図	西区遺構配置図・全体図 (1/300)	30～31
第30図	第22号住居跡実測図 (1/60)	31

第31図	第24号住居跡実測図 (1/60)	32
第32図	第23号住居跡実測図 (1/60)	32~33
第33図	第25号住居跡実測図 (1/60)	33
第34図	第1~3号土壙実測図 (1/30)	35
第35図	第4~5号土壙実測図 (1/30)	36
第36図	西区出土土器実測図 (1/4)	38
第37図	西区出土石器実測図① (1/2)	39
第38図	西区出土石器実測図② (1/3)	40
第39図	都地遺跡トレンチ配置図 (1/2,000)	42
第40図	10トレンチ出土石核実測図 (1/3)	44
第41図	第22トレンチ実測図 (1/200)	45
第42図	土壙実測図 (1/30)	46
第43図	土壙出土土器実測図 (1/3)	47
第44図	第33トレンチ実測図 (1/200)	48
第45図	都地古墳群東支群周辺地形実測図 (1/200)	50
第46図	都地古墳群東支群遺構実測図 (1/200)	51
第47図	都地古墳群東支群E-1号墳, 土盛りA・B土層断面図 (1/80)	52
第48図	都地E-2号墳石室実測図 (1/40)	53
第49図	都地E-2号墳出土鉄器実測図 (1/2)	54
第50図	土盛り状遺構A・B出土の石器 (1/2)	55
第51図	溝・土盛り状遺構出土土器実測図① (1/4)	56
第52図	溝・土盛り状遺構出土土器実測図② (1/4)	57
第53図	都地東支群周辺出土瓦片拓影 (1/3)	59
第54図	都地古墳群西支群地形実測図 (1/200)	61
第55図	都地古墳群西支群全体図 (1/200)	62
第56図	都地W-1・W-3号墳墳丘断面図 (1/60)	63
第57図	都地W-1号墳石室実測図 (1/30)	64~65
第58図	都地W-1号墳出土土器実測図 (1/3)	65
第59図	都地W-1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	66
第60図	都地W-1号墳出土小玉実測図 (1/1)	67
第61図	都地W-2号墳石室実測図 (1/30)	68
第62図	都地W-3号墳石室実測図 (1/30)	68~69
第63図	都地W-3号墳出土土器実測図① (1/3)	70

第64図	都地W—3号墳出土土器実測図② (1/6)	71
第65図	都地W—3号墳出土玉類実測図 (1/1)	73
第66図	都地W—4号石室実測図 (1/30)	74
第67図	都地W—5号石室実測図 (1/30)	75
第68図	都地W—5号石室周辺出土土器実測図 (1/3)	75
第69図	石組み状遺構実測図 (1/30)	75
第70図		81
第71図		81
第72図		87
第73図		87
第74図		87
第75図		87
第76図		87
第77図		87
第78図	平原古墳群周辺地形図 (1/200)	91
第79図	平原古墳群地形実測図 (1/200)	92
第80図	平原1号墳石室実測図 (1/60)	93
第81図	平原1号墳出土土器実測図① (1/4, 1/6)	95
第82図	平原1号墳出土土器実測図② (1/3, 1/6)	96
第83図	平原表採の磨製石斧 (1/3)	97
第84図	汐井掛古墳群竪穴系横口式石室集成図 (1/50)	
第85図	汐井掛14号墳石室 (1/60)	
第86図	汐井掛16号墳石室 (1/60)	

付 図 目 次

- 付図① 柳ヶ谷遺跡東区全体図 (1/300)
付図② 柳ヶ谷遺跡東区遺構配置図 (1/300)

表 目 次

表 1	発掘調査工程表	2
表 2	都地 W—1 号墳出土ガラス小玉計測表	76~78
表 3	都地 W—3 号墳出土ガラス小玉計測表	78
表 4	都地 W—3 号墳出土管玉計測表	78
表 5	出土黒曜石・原産地黒曜石試料一覧表	81
表 6	原子吸分析法——測定条件	83
表 7	機器中性子放射化分析法——定量に用いた核種の核的性質	83
表 8	主成分元存在量——原子吸光分析法による	84
表 9	元存在量——機器中性子放射化分析法による	86

I 調査の経過

若宮・宮田工業団地内に所在する遺跡の発掘調査は昭和51年7月に開始し、頭初は主に遺構の遺存範囲確認のため丘陵全体にわたるトレンチ調査と併行しながら、周知の遺跡の調査を実施した。よって、トレンチ調査で遺物および遺構を検出しなかった部分についてはそれ以上の調査を行わず、多少とも遺物・遺構を検出したトレンチの拡張、および頭初からその存在が明確な遺構（特に古墳や汐井掛墳墓群）の調査を中心に行った。

ここに報告する柳ヶ谷遺跡東区・西区、都地遺跡・同古墳群、平原古墳群は上記の手順を経て昭和51年度から同54年度にわたって順次調査したものである。

昭和51年度は柳ヶ谷東区の調査をまず行った。この部分は九州縦貫自動車道用地内の柳ヶ谷遺跡東区に東接する所で、住居跡・掘立柱建物等の集落遺構が更に東に広がることを確認した。調査区域内で遺構は中央部分に多く分布し、東・西側はピットの密度は薄くなっていく。調査区東方の平地に幅5mのトレンチを十文字に設定して調査を行ったが（第1図7地点）、遺物・遺構は検出されず、本遺跡の東限は本調査区内におさまると判断した。また小道をはさんで本調査区の北側平坦部は、松が植林されて移植時に径2m前後の根まわりの壤が多数存在し、遺物の散乱も見られず、調査計画からはずした。10月30日に写真撮影、実測図作成を終了した。なお、昭和53年度にSB4について、一部補足調査を実施した。

東区の図面整理等終了後、昭和51年11月24日～同52年1月14日の間、柳ヶ谷西区周辺の平坦部に幅5mのトレンチを12本設定し、遺構の広がりや遺存状況の確認調査を行った。遺構・遺物は平坦部には見出されず、南側斜面の縦貫道調査西区の北接部分に住居跡を検出した。

昭和52年度は、汐井掛遺跡・南ヶ浦古墳群の調査終了後、前年度のトレンチ調査の結果を踏まえて8月1日～9月16日にわたって柳ヶ谷西区の調査を行った。調査は東側から西へ向って遺構検出を行い、東・西両端部は遺構密度が薄くなり、特に西側は傾斜がきつくなることもあって、遺構は西へ更に連続する可能性はないと判断した。

柳ヶ谷西区の調査終了後、高平古墳群・天神ノ上遺跡の調査を経て、昭和53年度は都地遺跡のトレンチ調査を継続した。北半部は前年度のトレンチに直交する形で設定し、南半部は田の畔に沿ってトレンチを入れた。10トレンチで黒曜石の石核を22トレンチで縄文時代の土壌を、33トレンチで溝とピットを検出しただけで他のトレンチでは遺構・遺物は全く検出されず、遺構はないと判断し、周知の都地古墳群東支群の調査にはいった。前年度のトレンチ調査の際に須恵器片を多量に検出していたが、今回の調査ではそれに伴う遺構は溝しか検出されず、古墳は2基とも盗掘をうけ、1号墳は内部主体すら残っていなかった。多くの須恵器片は遺構と共に削平されて原位置から遊離したものである。調査は9月15日に終了したが、その間、県道室

木・下有木・宮田線にかかる平原古墳群の調査を6月に行った。

調査終了後、報告書作成にはいり、汐井掛古墳群・高平古墳群・南ヶ浦古墳群をまとめて第一冊目の報告書を刊行した。

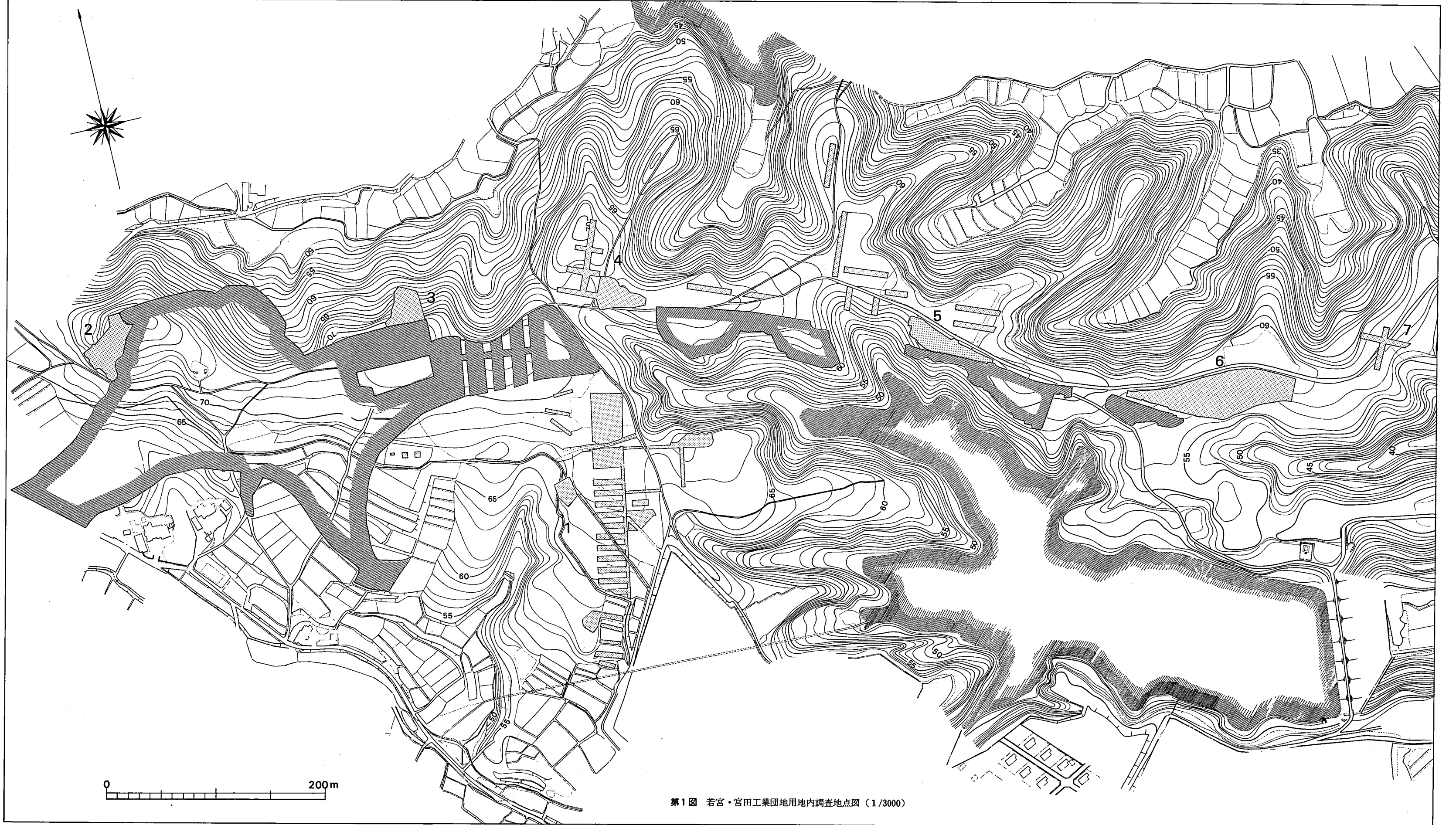
昭和54年度は主に報告書作成にかかり、10月29日～12月1日の内に、都地古墳群西支群の調査を実施した、調査前まで、円墳2基からなる古墳群と承知していたが、調査の結果、小石室3基が増え、調査区周辺の旧地形の残っている部分を中心にボーリング調査を密に行ったが、石材は確認できなかった。また4・5号石室の存在の仕方から、これらは3号墳との関係を考慮すべきであり、古墳群内で小石室の分布に規則性があるならば、墳丘の明確なものに付随したものであろうと考えられ、発掘区外への小石室の分布の広がりはないだろうと判断した。本古墳群の調査をもって若宮・宮田工業団地に関する発掘調査はすべて終了した。

なお、昭和54年度の調査関係者は次の通りである。(児玉)

地域振興整備公団九州支部 支部長 桑山 六郎
 筑豊事務所 所長 山田 文吾 管理課長 小野 恭三
 福岡県教育委員会管理部文化課
 課長 藤井 功 課長補佐 武久 耕作
 課長技術補佐 松岡 史 庶務係長 大淵 幸夫
 庶務係事務主査 平尾 一 調査第一係長 宮小路 賀宏
 調査第二係長 栗原 和彦 同主任技師 浜田 信也
 同技師 児玉 真一 同技師 池辺 元明

地点	遺跡名	内 容	所 在 地	調 査 面 積 ・ 期 間				備 考
				51年度	52年度	53 年 度	54 年 度	
1	都 地	散布地・古墳 5基・ 小石室2基	若宮町 大字沼口字都地			4.17～9.15 4,000㎡	10.29 ～12.1 900㎡	53・54年度 調査
2	汐 井 掛	土壙墓・木棺墓 箱式石棺墓 石蓋土壙墓 円墳2基	若宮町 大字沼口字汐井掛 宮田町 大字上有木字高平		4.1 ～6.30 1,260㎡			52年度調査
3	高 平	円墳3基	大字上有木字高平		9.4 ～10.31 900㎡			52年度調査
4	天神の上	土壙墓・木棺墓 箱式石棺墓 石蓋土壙墓	大字上有木字坂元	1.17 ～2.25 1,245㎡	11.1 ～12.15 800㎡			51年度 トレンチ調査 52年度本調査
5	柳ヶ谷西区	住居跡・貯蔵穴 土壙墓	大字上有木字坂元	11.24 ～1.14 1,960㎡	8.1 ～9.16 1,035㎡			51年度 トレンチ調査 52年度本調査
6	柳ヶ谷東区	住居跡・掘立柱 建物	大字上有木字坂元	7.26 ～10.30 4,227㎡				51年度調査
7		散布地	大字上有木字坂元	11.1 ～11.20 415㎡				遺構ナシ
8	南ヶ浦	円墳6基	大字中有木字 南ヶ浦		7.1 ～8.11 932㎡			52年度調査
計				7,847㎡	4,927㎡	4,000㎡	900㎡	

第1表 調査工程表



第1図 若宮・宮田工業団地用地内調査地点図 (1/3000)

II 周辺古墳群の位置と性格

北流して玄海灘に注ぐ遠賀川は、その上流で多くの支流が流れ込み、そこかしこに盆地や谷状の平野を形成する。そこには古くから人々が住みつき、彼等の生活の跡が無数に存在する。

直方市内で遠賀川に合流する犬鳴川にもさらにいくつかの支流が流れこみ、若宮町・宮田町周辺では南流する支流として西から、黒丸川・山口川・有木川・倉久川が存在し、北流するものとして八木山川があり、各々流域周辺の丘陵には多くの古墳群が形成されている。これらの古墳群の形成母体となった集落跡の調査は、九州縦貫自動車、道工業団地にともなる発掘調査で検出された小原遺跡（註1）、柳ヶ谷遺跡（註2）、都地原遺跡（註3）、咲花遺跡（註4）等が知られているにすぎず、集落遺跡の実体は不明な部分が多い。

この平野で古墳時代後期の群集墳形成に先だって存在する古墳として、黒丸川流域では剣塚古墳（前方後円墳）、帆立貝式前方後円墳1基を含む高野古墳群、八幡塚古墳（註5）が見られ、犬鳴川左岸の金丸丘陵にはすでに消滅したが西ノ浦古墳（註6）が見られる。現在では4世紀代にさかのぼる可能性のある古墳の存在は確認されておらず、既応の調査例では、円墳で箱式石棺を内部主体とし、剣・鎌・鍬先・斧等の鉄製品を副葬した西ノ浦古墳は5世紀中葉～後半の年代が想定され、同じく円墳で竪穴系横口式石室を内部主体とし剣・刀・鍬などの鉄製武器や馬具を副葬品とする八幡塚古墳は、5世紀後半に比定されている（註7）。内部主体の不明な先述した剣塚古墳は現状では主軸長58m、後円部径30mを測る前方後円墳で、謂所「畿内型古墳」として本平野で初現的なものであり、後円部に埴輪列がめぐると想定されることから4世紀代にはのぼり得ず、現状では5世紀前半代におかれる。また、剣塚古墳南方500mの丘陵上に構築された高野1号墳は主軸長40m、後円部径30mの帆立貝式前方後円墳で、前方部の形状は古式の帆立貝式前方後円墳より発達したものであり、前方後円墳の全国的規制のうち第二次規制の段階に相当すると思われ、5世紀中葉をのぼらないだろう（註8）。八幡塚古墳を含めて、これら3基はこの平野部の盟主的な地位にあった人物の奥津城と思われる。西ノ浦古墳は、墳丘規模が径6～8m、高さ1m程の円墳とされており（註9）、剣塚古墳→高野1号墳→八幡塚古墳という世代交代の系列の中には含まれず恐らくこれら盟主的古墳をヒエラルキーの頂点としたその下部系列につながるものと推測される。

これらの古墳は、分布的には「畿内型古墳」の「地方」への拡充という認識のうちにとらえることが可能だが、八幡塚古墳は竪穴系横口式石室を内部主体としており、謂所「畿内基古墳」の範疇から脱脚しつつある（註9）。このように5世紀後半代の八幡塚古墳の段階からこの地方は新たな歩みをみせる。八幡塚古墳東方100mに別当塚古墳（註10）、別当塚古墳南方60mに斉藤塚古墳（註11）が存在したが、現状では詳細不明であり、八幡塚古墳とのつながり

はわからない。その後、約1世紀の空白期間を置いて、竹原古墳が成立する。黒丸川が犬鳴川に合流する付近の黒丸川両岸丘陵には、この平野の主要古墳が集中しており、汐井掛古墳群の調査結果からみて、八幡塚古墳の段階以降に山口川流域においても小円墳が累世的に構築され群集墳を構成することとなる。九州縦貫道、若宮・宮田工業団地に関する調査で、発掘された古墳群およびその周辺古墳群で堅穴系横口式石室をもつ古墳が存在するのは東から宮田町下有木1号墳（註12）、若宮町都地西支群1・3号墳（本報告書掲載）、汐井掛古墳群では10基の堅穴系横口式石室およびその系譜上にある石室が知られている（註13）。これらは5世紀後半代以降～6世紀前半代に相当するもので、群集墳形成の初期段階では堅穴系横口式石室が内部構造として使用されたことがわかる。汐井掛古墳群では6世紀中葉以降は単室横穴式石室が内部主体として採用され6世紀後半代にはいつて複室構造の石室が採用される。現状では汐井掛古墳群よりも後出して築造が開始される小原古墳群では調査された1～8号墳（註14）の出土土器でみる限り6世紀中葉までさかのぼりえず、汐井掛古墳群のような古式の横穴式石室は検出されてはいない。しかし、小原古墳群の形成母体の一つとなったと推測される小原遺跡（註15）は6世紀中葉代からの住居跡が検出されており、本古墳群のうち未調査分の中には、単式の横穴式石室をもった6世紀中葉代の古墳が存在する可能性はある。

このように、山口川流域周辺の古墳時代文化は盟主的な剣塚古墳、高野1号墳・八幡塚古墳の成立後、5世紀後半から群集墳形成が開始され、6世紀代を通じて精力的に古墳構築が行なわれ、7世紀代にはいと、ほとんど古墳はつくられなくなるようである。6世紀後半から追葬が開始され、7世紀代におよぶ。（児玉）

- 註 1 児玉真一編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XI— 1977 福岡県教育委員会
 2 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—VII— 1977 福岡県教育委員会
 3 2に同
 4 2に同
 5 柳田康雄「竹原八幡塚古墳の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第13集 1979 福岡県教育委員会
 6 佐野一・亀井明德「福岡県鞍手郡若宮町西ノ浦調査概報」九州考古学36・37 1968
 7 5に同
 8 小野山節「五世紀における古墳の規制」考古学研究63 1970
 9 6に同
 10 鶴久嗣郎「別当塚古墳の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1976 福岡県教育委員会
 11 10に同
 12 石山勲「下有木1号古墳」『宮田町誌』上巻所収 1978 宮田町誌編纂委員会
 13 上野精志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XXII— 1978 福岡県教育委員会
 14 1に同
 15 1に同



第2図 若宮・宮田町遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | | |
|------------|--------------|-----------|-----------|
| 1. 都地遺跡 | 2. 汐井掛遺跡・古墳群 | 3. 高平古墳群 | 4. 天神ノ上遺跡 |
| 5・6 柳ヶ谷遺跡 | 7. 南ヶ浦古墳群 | 8. 平原古墳群 | 9. 下有木古墳群 |
| 10. 都地原遺跡 | 11. 咲花遺跡 | 12. 北田遺跡 | 13. 小原遺跡 |
| 14. 小原古墳群 | 15. 茶臼山城跡 | 16. 里古墳 | 17. 平原遺跡 |
| 18. 片ノ熊古墳群 | 19. 竹原古墳 | 20. 八幡塚古墳 | 21. 金丸古墳 |
| 22. 田尻遺跡 | 23. 剣塚古墳 | 24. 高野古墳群 | |



第3図 柳ヶ谷遺跡周辺地形図 (1/2,000)

Ⅲ 柳ヶ谷遺跡の調査

柳ヶ谷遺跡は鞍手郡若宮町大字水原・宮田町大字上有木にわたって所在する弥生時代から奈良時代におよぶ集落跡で標高 57m～62m 付近の丘陵鞍部から南側緩斜面に営まれている。現在、釜底溜池および九州陶器の建物をはさんで南に水田が開け、柳ヶ谷遺跡とこの水田面との比高差はおよそ25m 前後を測る。この平野の中央部には見坂峠に源を発する山口川が遠賀川水系たる犬鳴川に合流し、水田耕作を行なうにあたっては十分な水資源が存在する。

柳ヶ谷遺跡は昭和49年度に九州縦貫自動車道の路線にかかる部分が福岡県教育委員会によって調査され、住居跡21軒、貯蔵穴3、掘立柱建物5棟、蔵骨器1、ピット群等の遺構を検出している（註1）。この調査の時点で遺構は東・西両調査地区の北側にのびることが予測されており、工業団地用地内に存在する遺構について昭和51年度に昭和49年度の東区に、昭和52年度に同西区に沿った部分の調査を実施した。今回の調査においては蔵骨器を内蔵する墓と古墳時代の住居跡の検出はできなかったが、前回調査とはほぼ同様の遺構を検出した。ただ、遺構の密度はうすく、弥生時代の住居跡6軒、掘立柱建物7棟、貯蔵穴1、土壙、溝状遺構の検出にとどまった。なお、今回検出した住居跡については前回検出したものから通し番号を付し、第22～第27（H22～H27）号住居跡とした。また、本報告書第1集で「柳ヶ谷遺跡Ⅰ」、「柳ヶ谷遺跡Ⅱ」とした（註2）のは、ここで報告する東区および西区にそれぞれ対応する。（児玉）

1 東区の遺構

東区は南面する標高57m～60m 付近に位置し、北側は痩せた丘陵鞍部をはさんで20m～30m 下は、現在、谷水田となっている（図版1・2、第1図）。また、南側の現在の水田面までは直線距離にして400m～500m がある。

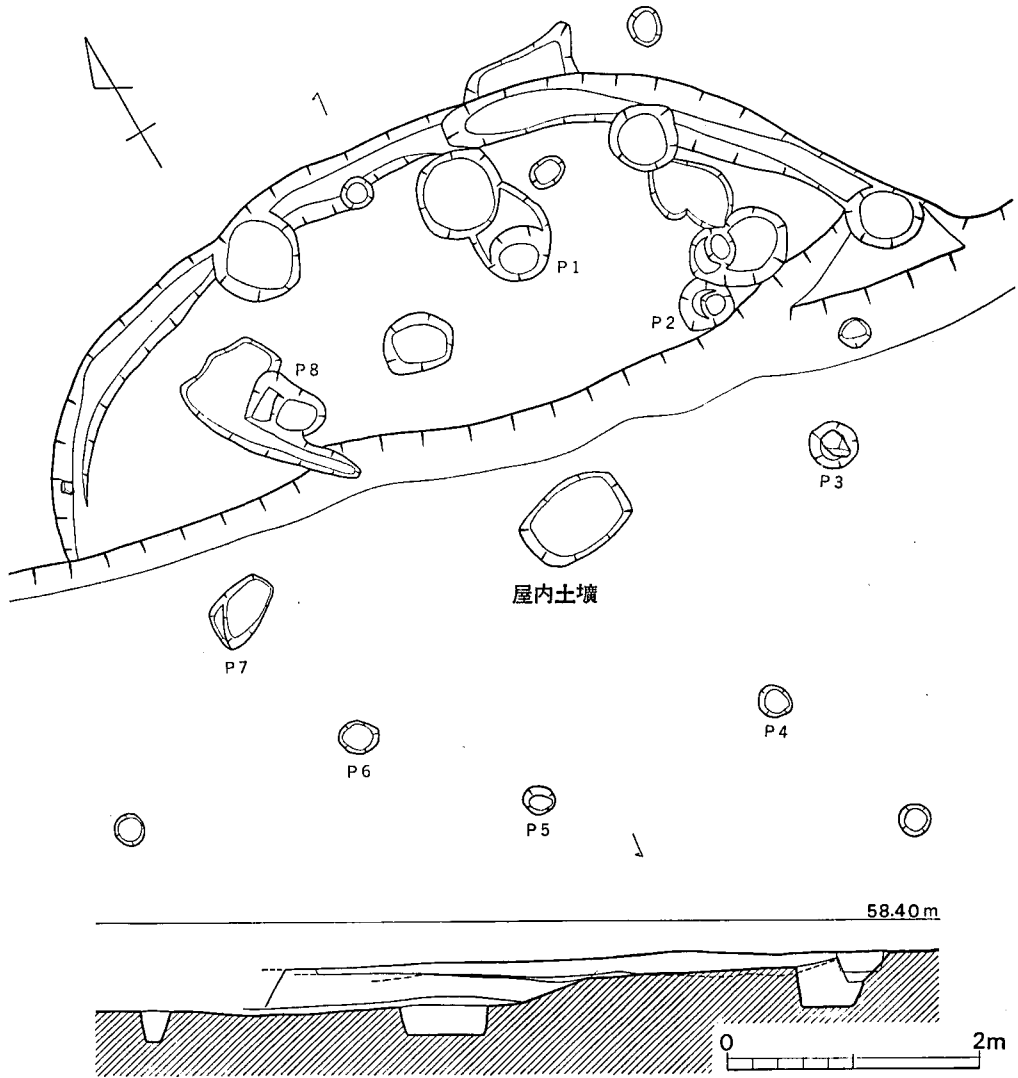
調査の結果、住居跡2軒、土壙2、溝状遺構2条、掘立柱建物7棟、無数のピット群を検出した。

(1) 住居跡（図版3～5、付図①・②）

調査区のほぼ中央部（H27）と西部（H26）に2軒検出した。調査区のほぼ中央を東西に走る段落ちのために住居跡の南側は削られている。

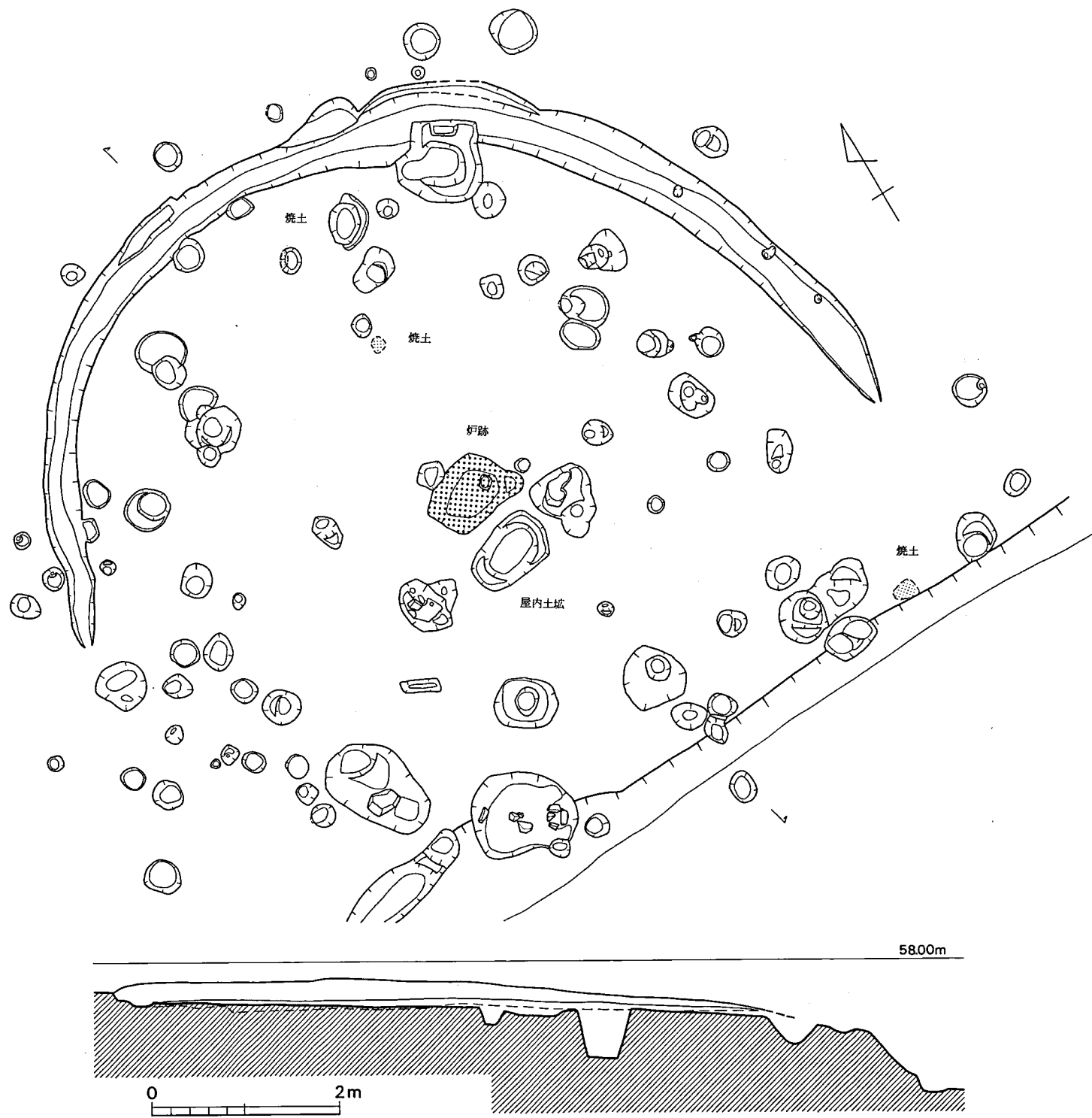
第26号住居跡 H26（図版4・第4図）

円形の平面プランを呈する住居跡である。南側過半は削られて段がついており、その部分の



第4図 第26号住居跡実測図 (1/60)

壁は全く残っていなかった。現状で壁高は最も残りの良い部分で約20cmを測り、壁に沿って幅30~40cm、深さ10cm前後の溝がつくられている。炉跡の部分は削り取られていて現状では残っていない。柱はP1~P8の8本柱と推定され、P1・P2・P8は現状では住居跡床面から50cm前後の深さを有し、P3~P7についても現状の床面が同じ高さで南側にのびていたと仮定して50cm前後の深さとなり、柱穴底面のレベルにさ程の差はない。またP3の柱穴底面には20cm~30cm大の石を据えている。また、屋内土壇かと思われる長辺85cm、短辺60cm、深さ55cm(現状で残っている床面からの推定の深さ)を測る略長方形プランを有する遺構が住居跡のは



第5图 第27号住居跡実測图

ば中央に存在する。この土壙の埋土は上下2層にわかれ、上層は炭を含む暗茶褐色粘質土で、下層は黒褐色粘質土で上層よりも多く炭と焼土を含んでいる。この住居跡はこの土壙を含めて大きく削平されており、人工遺物を全く含まず確言はできないが、炭化物・焼土を含むこと、壙底の高さが柱穴群とほぼ等しいこと等により屋内土壙と推定した次第である。

この住居跡は8本の支柱穴と推定される柱穴の配置の状態から直径7m前後に復原される。

第27号住居跡 H27 (図版5・第5図)

円形プランを呈する住居跡で南半分が削平を受けており、壁は北半分しか残っていない。最も残りの良い部分は20cm程で、壁に沿って幅40cm～50cm、深さ10cmに満たない溝がめぐっている。炉跡は住居のほぼ中央につくられ、長さ80cm、幅60cm、深さ7cm程の隅丸不整形を呈する。炉底はそれ程明瞭ではないが焼けて赤白色を呈していた。住居の床面は北から南に向かってやや傾斜し、20cm弱の比高差を有する。支柱穴はP1～P10と推定され、10本柱であったろうと想定する。床面のピットは後世に掘り込まれたものが存在し、P5・P6の北側のピットは深くしっかりとしており支柱穴と見まごう程であるが埋土中から奈良時代の須恵器坏蓋片が出土している。また、住居の外にも直径30cm前後、深さ30cm前後のピットが壁から20cm前後離れて住居の周囲をめぐり、支柱的なものの存在を思わせる。

P1の東、炉跡の南、P6・P7の間に3つの土壙が存在する。これらの住居床面からの深さは炉跡南の土壙が55cmで、他は30cm前後である。P6・P7間の土壙底には10cm～15cm大の自然石が8個存在した。この3つの土壙の機能については出土遺物がないために明瞭ではない。

住居床面には焼土が小範囲がなら3ヶ所に存在する。しかし、この住居が火災を受けた確証はなく、床面から出土した石剣片は熱を受けてなかった。

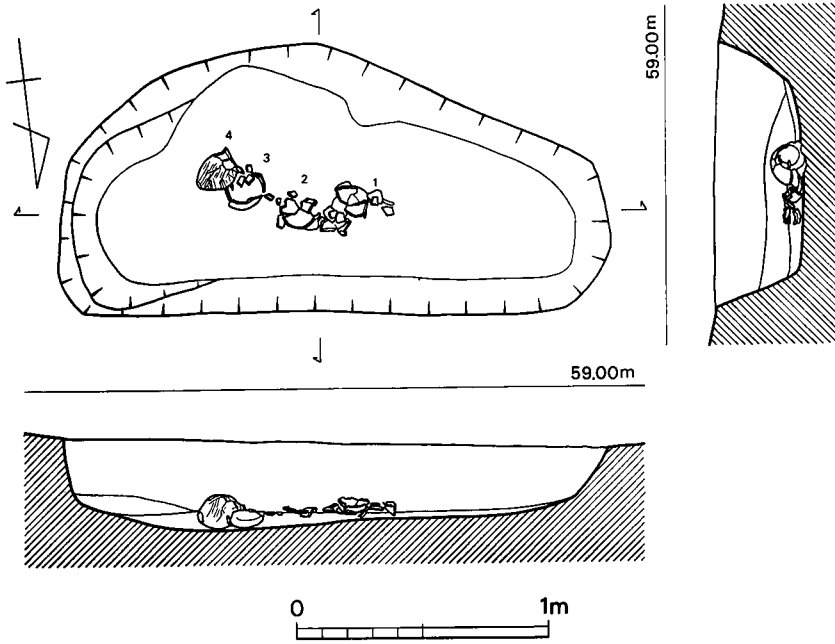
この住居跡は南半の壁を欠くが、支柱穴の配置状態から直径9m前後であったろうと思われる。この住居跡は若宮・宮田両通内で発見された弥生時代住居跡で最大のもので、総床面積はおよそ63㎡近くである。

(2) 土壙 (図版3・6、付図①・②)

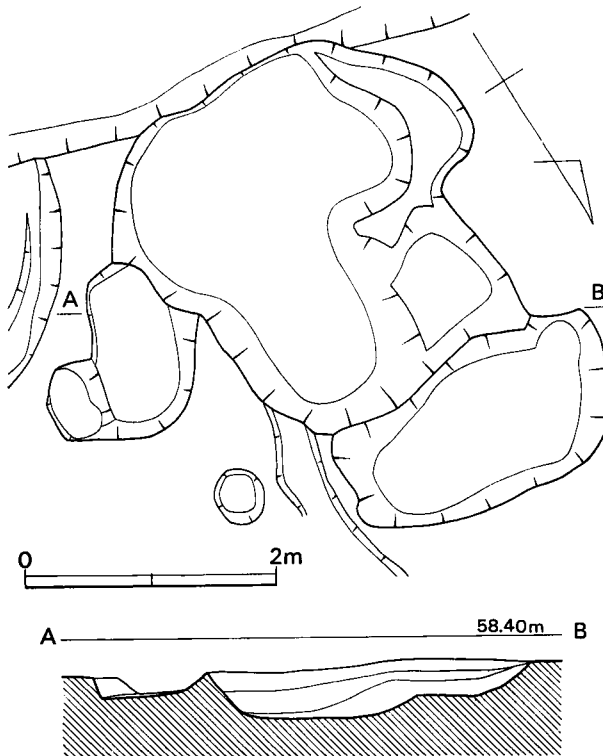
調査区の東端近くに孤立して1基、H26西側に1基、計2基を検出した。土器や土壙の形状から、その時期・性格は異なるようである。

第1号土壙 D1 (図版3・6、第6図)

長軸2.17m、最大幅1.07mを測り、南壁が外側にふくらむ不整形長方形プランを呈する土壙で、深さは最深部で0.36mを測る。底部は舟底に近い形態を示し、壁面は西側が垂直に近いが他の部分は傾斜している。土質の関係にもより、残念ながらこの土壙を掘削するに際して使用した工具痕を検出することはできなかった。床面において甕形土器4個体分が倒れた状態で検出された。



第6図 第1号土壙実測図 (1/30)

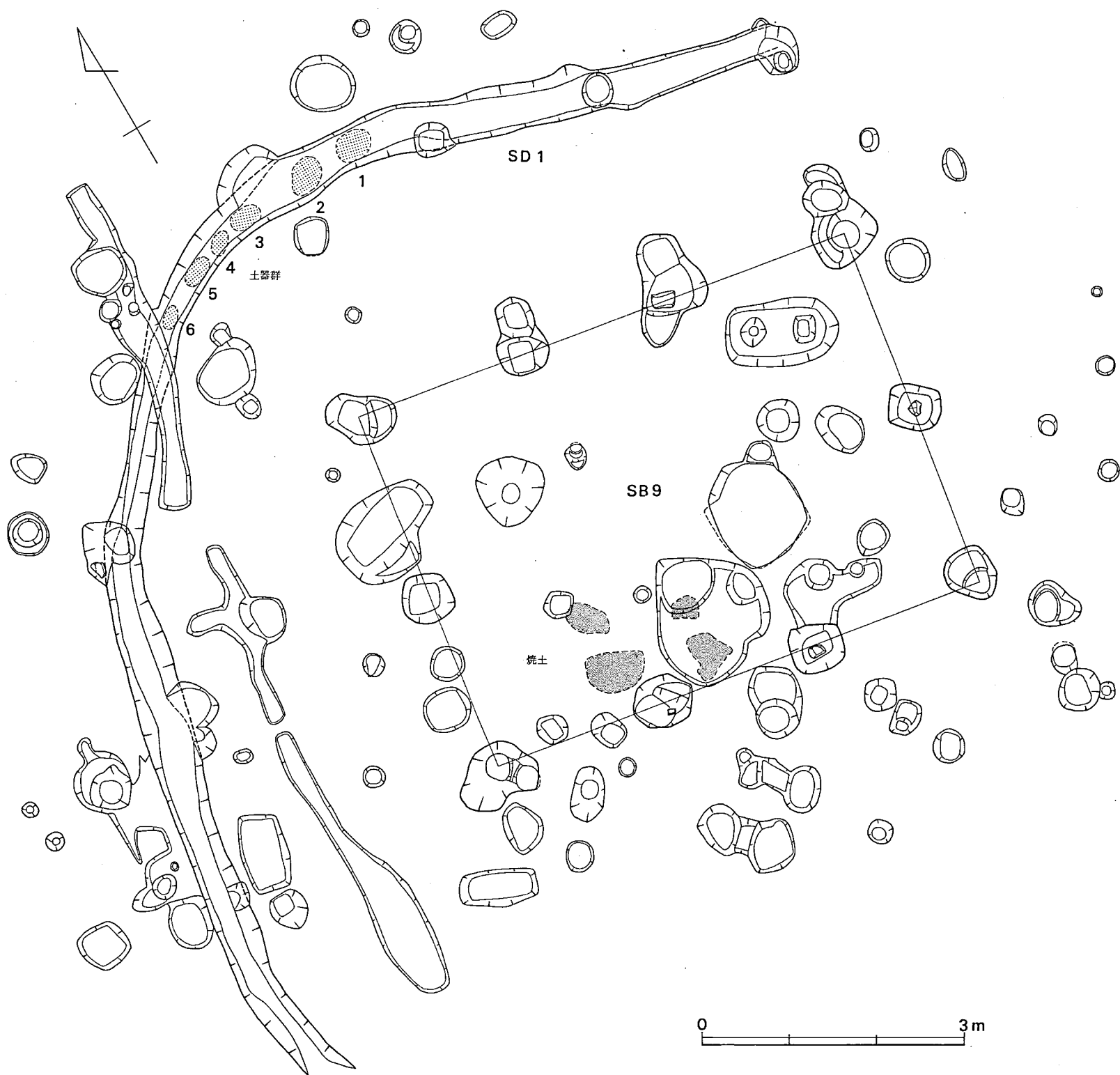


第7図 第2号土壙実測図 (1/60)

この土壙は現状では他の併存すると思われる遺構とは離れて存在し、その性格については明確にしがたい。

第2号土壙 D2 (第7図)

S B 7 と H 2 6 の間にある不整形土壙で、土壙の長軸は、S B 7 長軸とほぼ直交する。長さ約 3 m、幅 2 m ~ 2.8 m、深さ 40 cm 程で埋土は 3 層に分かれる。上層は黒褐色土で土器が出土した。中層は炭・焼土を含む黒褐色土層で若干の土器を含む。下層は全く遺物を含まぬ黄茶褐色土層で以下は地山である。各層は土壙のほぼ全面に広く分布している。土器は投棄された状態で出土し、奈良時代に属する。



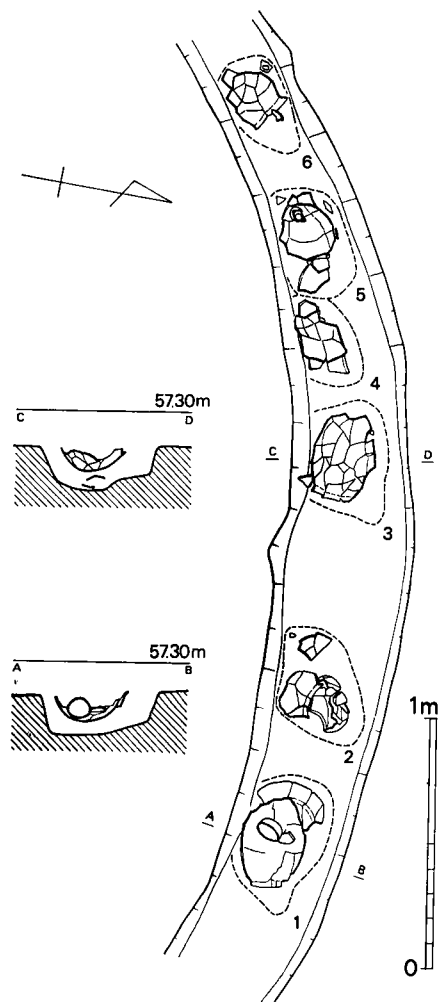
第 8 图 第 1 号沟状遺構実測図 (1/60)

(3) 溝状遺跡 (図版2・3, 付図①・②)

H26北側で弧状溝を2条, SB5の北西で1条の屈折した溝状遺構(第1号溝状遺構)を検出した。前者は単なる溝で浅く9m程の長さで完結しており, 弥生式土器細片が数点出土したにすぎず, 壁を欠失した住居跡等の可能性を検討したが柱穴に相当するピットのまとまりがなく, ここでは遺構として特に記述しない。よって第1号溝状遺構についてだけ説明を加えたい。

第1号溝状遺構 (図版6・8, 付図②, 第7図)

掘立柱建物SB5の東隅部から北および西柱列に沿った形で検出した。SB5東隅部から先へはのびず, 遺構面を削って検討したが現状ではこれより先へのびる形跡は認められなかった。この溝はSB5北隅部でゆるい弧線を描きながら南にはほぼ直角に曲がり, 総全長19m程を測る。幅は総じて50cm前後, 深さは20cm程度である。溝底は東から西へ, 北から南へ地形に沿ってゆるやかに傾斜している。暗褐色土の溝埋土中には弥生式土器片が混入し, 特に溝中央部から東側3.5mの間には上半が削平された状態の土器が6群にわかれて出土し, それらは溝底に最大5cmの厚さの暗褐色粘質土をはさんで横たえられていた。この土器群は, 甕・高坏・碗等からなっている。図および写真に示されるように, この土器群の土器割れ口と溝の肩の高さはほぼ同一で, 後世の削平で上半部が削り取られたものであり, この土器群は本来的には完形品かそれに近いものであったと推測され, 溝自体も当然のことながら, 現状よりも深く, 幅が広がったであろう。また, この溝とSB5の関係については速断を避けたい。



第9図 第1号溝状遺構土器出土状態実測図 (1/30)

(4) 掘立柱建物 (図版2・3, 付図①・②)

発掘区の北側に2棟(SB1・SB2), 南側に5棟(SB3~SB7)の計7棟を検出した。柱列が整然と並ぶものは少ない。棟木の方法はSB6が南北で他は東西であるSB4~S

B 6 の 3 棟は割と接近してまとまった在り方を示すが他は各々孤立している。S B 7 の柱穴は過半が削られて残っていなかった。

他にピットが無数に存在したが、建物らしく柱穴のまとまりを示すのは、7 棟だけであった。建物番号は調査を東側から開始したので発見順に番号を付した。また、掲載図中の数値は柱穴の中心に仮の基点を設定してトランシットで計測したものである。

第 1 号掘立柱建物 S B 1 (図版 7, 第 10 図)

掘立柱建物としたが、A—B 列の柱穴はあまりしっかりしたものではなく、この部分の桁行方向の柱列は調査区の北側の道路下にあるのかも知れない。A—D, B—C の両柱列の柱穴は比較的しっかりして、柱穴底面の高さもほぼ等しいが、各々の柱間寸法はかなりまちまちである。

第 2 号掘立柱建物 S B 2 (図版 8, 第 11 図)

S B 1 から 20m 程離れて西側に位置する。桁行 4 間、棟行 3 間の建物になるだろうと思われるが、A—B 列の柱穴は 3 間分しか検出できなかった。柱穴はしっかりとしたもので 40cm～60cm の深さを有する。四隅の角度はほぼ直角であるが柱間寸法に統一性は見られない。

第 3 号掘立柱建物 S B 3 (図版 9, 第 12 図)

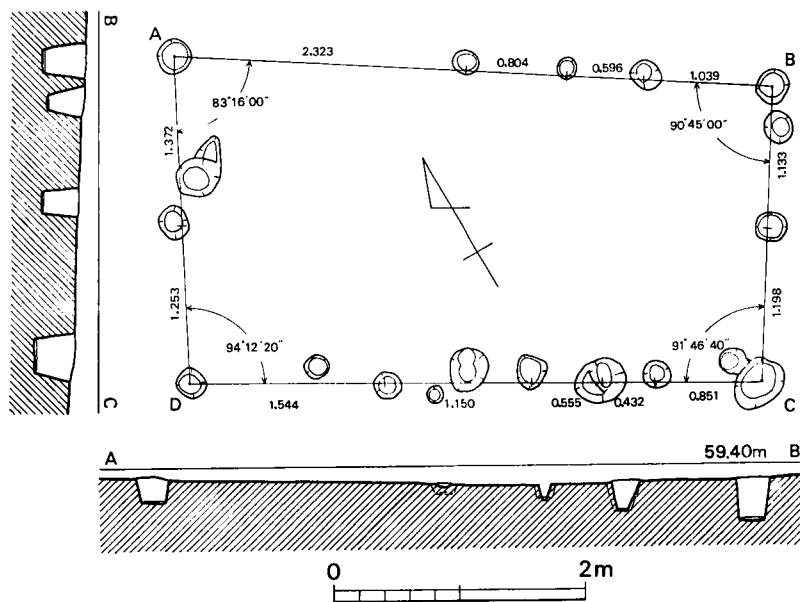
H26 南東側に検出した桁行 3 間、梁行 2 間の建物で棟木は東西方向に置かれている。この建物周辺はかなり削平されており、柱穴の残りは悪い。柱間寸法はあまり統一性はない。四隅の角度は一部で 2 度の狂いを示すがほぼ直角とみてよかろう。

第 4 号掘立柱建物 S B 4 (第 13 図)

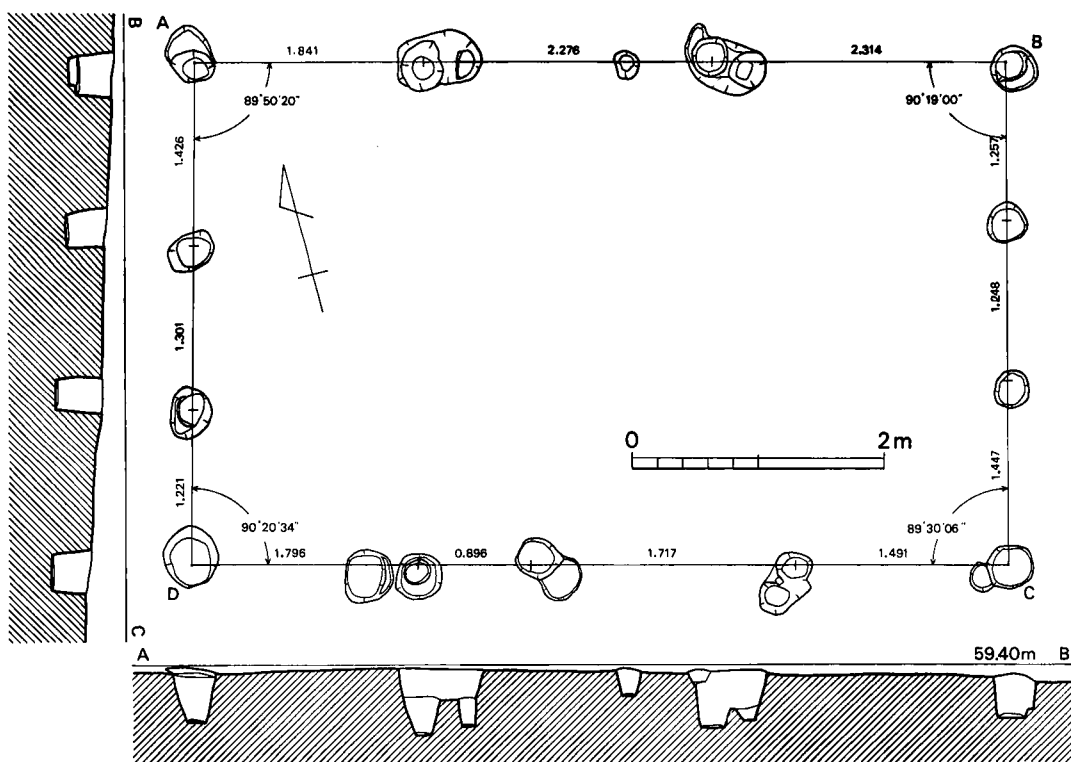
H27 の西に検出した桁行 3 間、梁行 2 間の建物である。棟木は東西方向に置かれ、削平されているが柱穴はわりとしっかりしている。桁行方向のおのおの対応する部分の柱間寸法は、測点の関係で多少の相違はあるが、1 尺を 30cm 前後と仮定すれば、西からおよそ 7 尺、6 尺、6 尺となる。梁行方向の寸法に 34.7cm の差があるが、これは測点の位置と柱の位置が合致していないかみれず、また、柱の立て方等によってこの寸法の差を解消したものであろうと推測する。

第 5 号掘立柱建物 S B 5 (図版 8, 第 14 図)

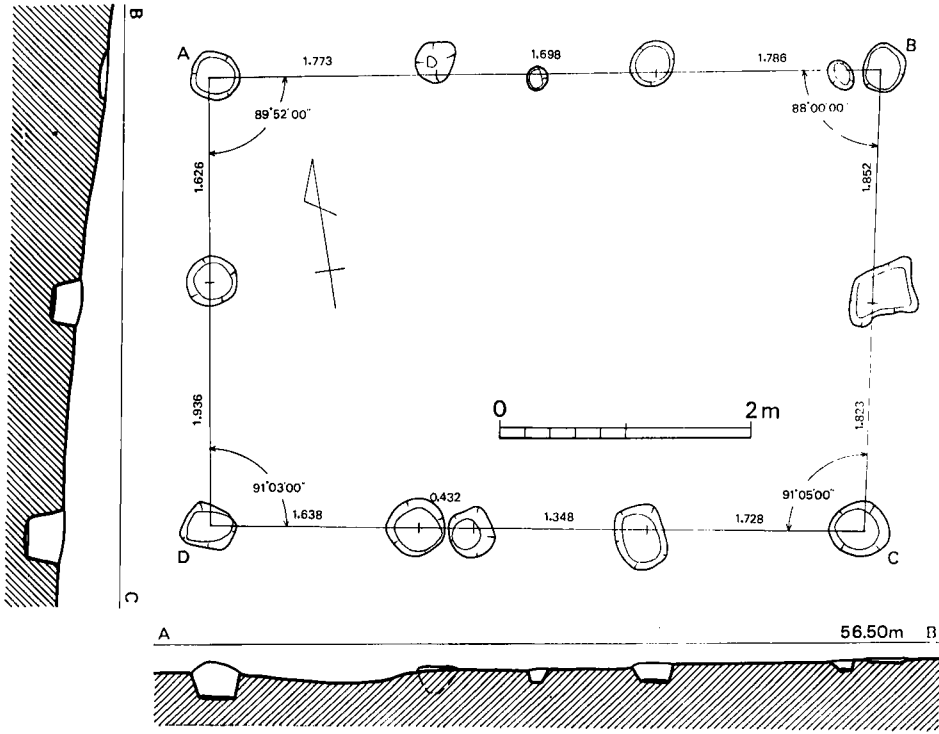
現状では S D 1 内部に存在する建物で東西に棟木をおき、桁行 3 間、梁行 2 間の整然とした柱穴が並ぶ。柱穴は他の建物と比べて大きく、深さは上部を削平されているので判然としないが、S D 1 土器群の削られ方から推測して現状より 20cm は深かったであろう。浅い柱穴の底には平たい小石を置いたものがあり、柱の受けとして、あるいは柱の天場を合わせる目的でおかれたものであろう。柱間寸法は梁行が 7 尺等間 (1 尺≒30cm と仮定)、桁行が 6～6.5 尺と推測する。建物の四隅の角度はほとんど直角で、東柱と推定される小柱穴の存在等から、この建物は 7 棟のうちで最もしっかりとしたものであったと思われる。S D 1 との関係は後に述べることとする。



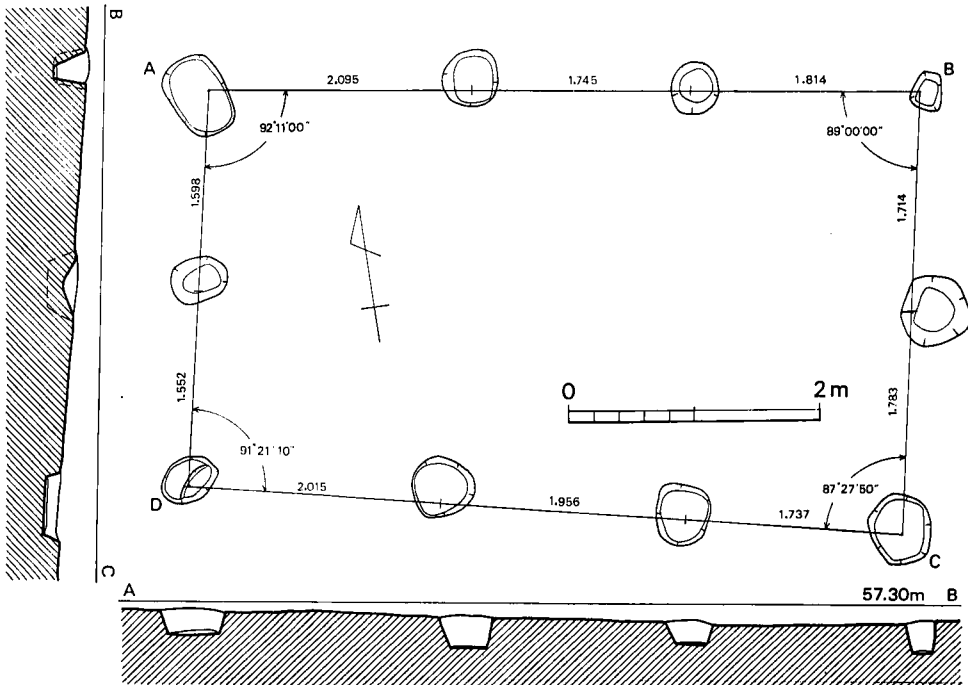
第10图 第1号掘立柱建物实测图 (1/60)



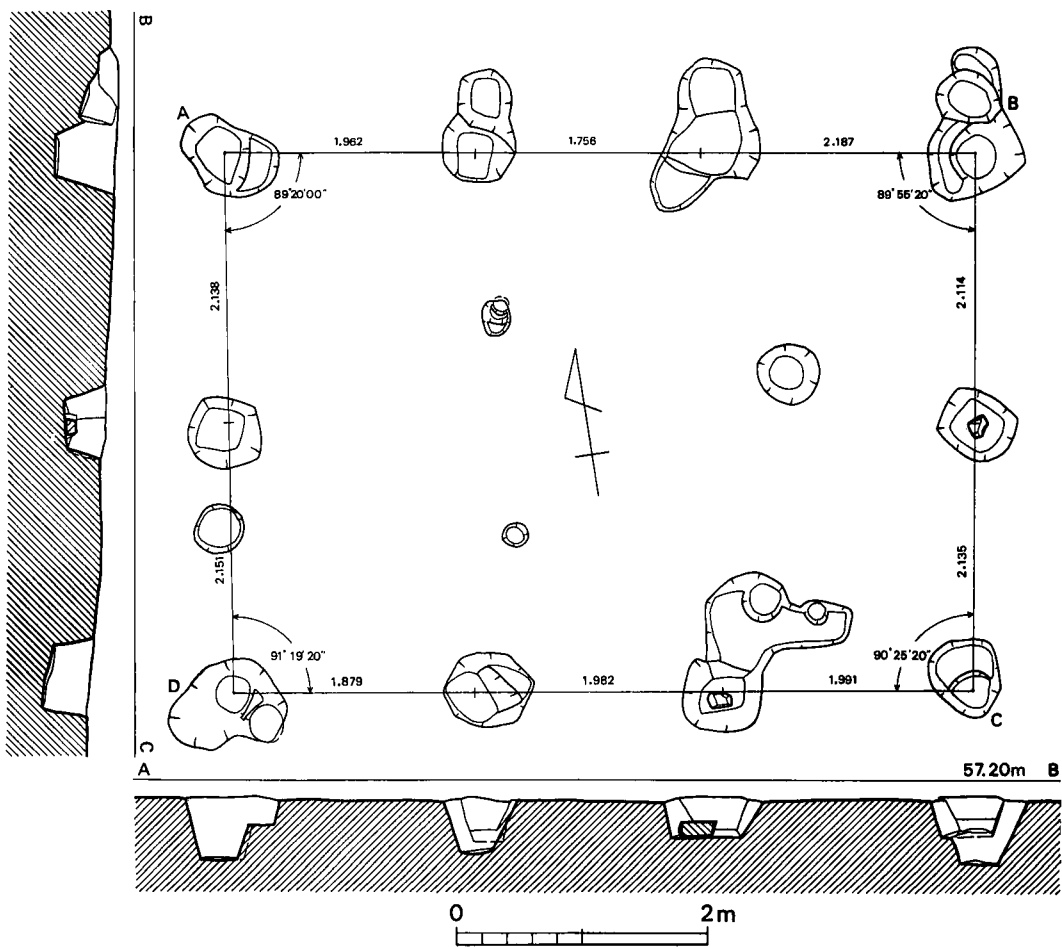
第11图 第2号掘立柱建物实测图 (1/60)



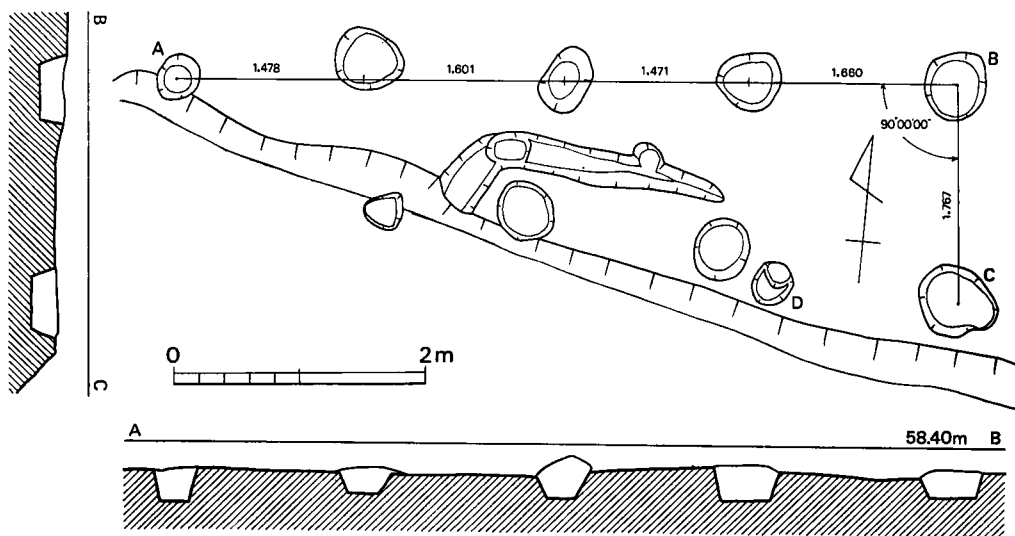
第12图 第3号掘立柱建物实测图 (1/60)



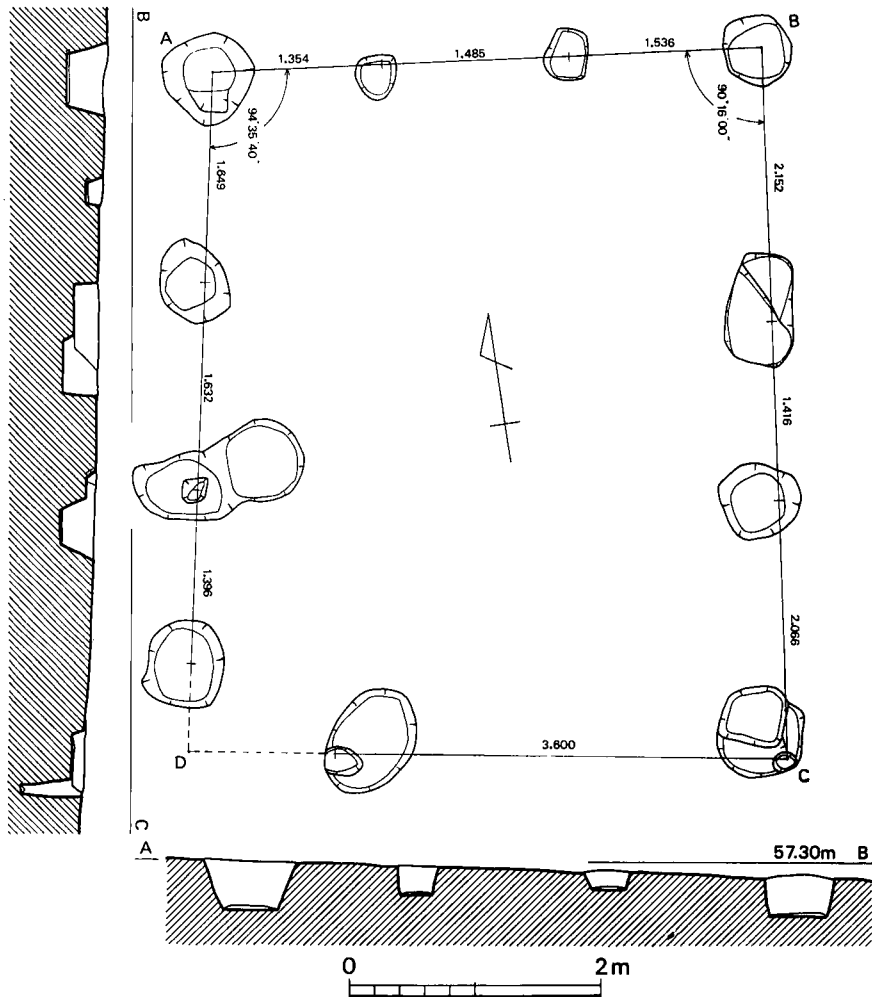
第13图 第4号掘立柱建物实测图 (1/60)



第14图 第5号掘立柱建物实测图 (1/60)



第15图 第7号掘立柱建物实测图 (1/60)



第16図 第6号掘立柱建物実測図 (1/60)

第6号掘立柱建物 SB6 (図版8, 第13図)

SB5の西に存在し、棟木を南北におく。現状では柱穴が足りず、まとまりが悪い。桁行を3間分検出したが、更に発掘区外(南側)にのびる可能性があり、C-D間柱列は本来の梁行柱列ではない可能性もある。SB5と同様に柱穴は大きくしっかりとしている。

第7号掘立柱建物 SB7 (図版9, 第14図)

後世の削平により柱穴は桁行4間分、梁行1間分しか検出できなかった。棟木は東西方向におかれていたと思われる。柱間寸法は桁行方向が5~5.5尺(1尺≒30cmと仮定)、梁行方向が6尺と推測する。ピットDがこの建物は総柱となる可能性を示し、今回検出した建物群のうち唯一の倉庫となるかもしれない。(児玉)

2 東区の出土遺物

弥生時代から奈良時代に及ぶ遺物が各遺構やピット群から出土し、その内訳は弥生式土器、土師器、須恵器、弥生時代の石器である。遺跡周辺は後世に削平を受けて荒らされており、出土遺物も削平の及ばなかった部分に若干の完形土器を検出したにすぎない。今回は後世の混入以外に金属器は出土しなかった（註3）。

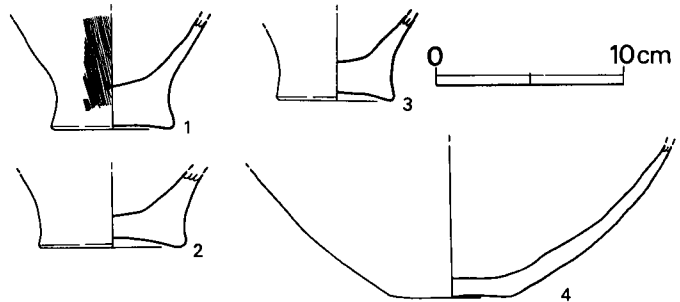
(1) 弥生式土器

中期前葉および後期終末の時期を中心とした土器が出土し、量的には前者の方が圧倒的に多い。遺跡周辺が後世に削平されており、出土土器のうち完形で出土したものはごく少量で、多くは図示できるものではなく、実測可能なものは57個体にすぎなかった。

住居跡出土の土器（第17図1～4）

すべて小片で図示できるものは4個体にすぎない。

1・2はH26周溝内出土の甕形土器底部である。上げ底の底部で1は縦方向に刷毛目残り、2は器面が剝落して刷毛目は残っていない。内面および外底面はナデられている。胎土に多



第17図 第26・27号住居跡出土土器実測図（1/4）

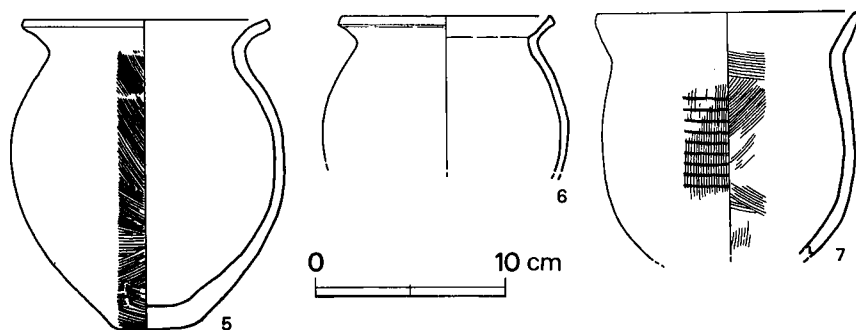
量の砂粒を含み、焼成不良でもろく、暗褐色を呈する。

3・4はH27ピット内より出土した甕形土器、壺形土器の底部でともに上げ底である。両者とも器面が剝落しており、外面の調整は不明である。内面はナデられている。

4個体とも中期前葉のもので、H26・H27はこの時期の所産であろう。

第1号土壇出土の土器（図版32，第6図，第18図一5～7）

土壇底からまとまって4個体分出土した（第6図）。6はNo.1の土器で口縁部径11cm，胴部最大径13cm，器高は現存部で8.2cmを測る。口縁部はわずかに内彎し，端部はつまみあげている。頸部内面は指圧痕がうすく残り，体部内面はナデ，口縁部内外面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み，焼成はややあまく淡茶褐色を呈する。7はNo.2の土器で口縁部径14cm，現存高13cmを測る。胴下半部はふくらみもち，口縁部は外反する。胴部内面はハケ目調整を，外面はタタキの上からハケ目調整を行っている。砂粒を含み，焼成ややあまく褐色を呈する。



第18図 第1号土壙出土土器実測図(1/4)

5はNo.4の土器で口縁部径13cm, 器高16.4cmを測る完形品で底部は厚く丸味を持っている。胴部外面はタタキの後に刷毛調整をし, 部分的にわずかにタタキの痕跡が残る。底部外面は荒い刷毛目残り, 胴部内面はナデ, 口縁部はヨコナデ調整を行っている。胎土に砂粒を多く含み, 焼成良好で淡茶褐色を呈する。図示しなかった他の1個も甕で, この土壙は後期終末頃の時期に比定されよう。

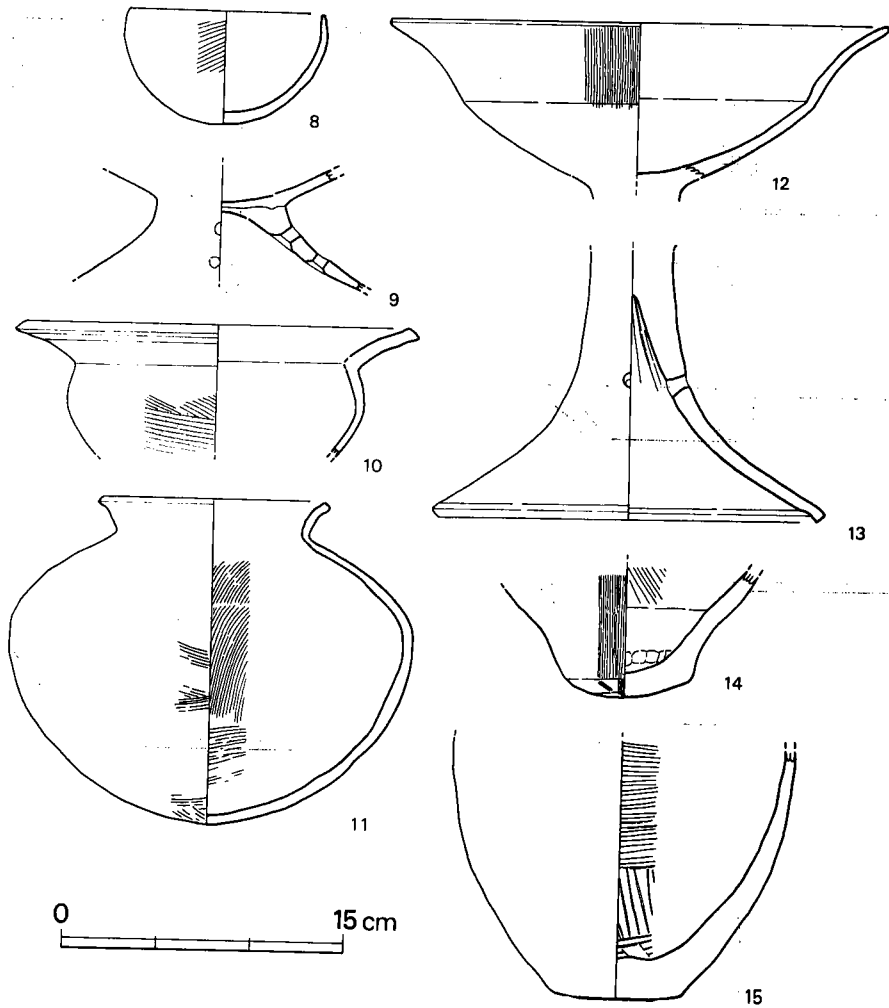
第1号溝状遺構出土の土器 (図版32・33, 第19・20図)

溝底および埋土中から20個体を越える土器が出土した。この溝は先述したように後世に削平され, 本来は完形品であったと推測される土器の上半部を欠失しているものが存在する。器種は甕・壺・高坏・埴・器台の5種類におよび, 甕形土器の量が最も多い。これらの土器のうち, まとまって出土したものを東から1群~6群土器とした(第9図)。1群土器の高坏を除いて他の土器はすべて口縁を東側に向けて横に寝た状態で出土した。溝埋土は暗褐色土で下層がわずかに粘質をおびるものの分層せずに1層とみなして差し支えなく, 土器の出土状態と勘案して, これらの土器は一括資料とみなされる。

1群土器 (8・12・22)

高坏・甕・埴からなる。削平からまぬがれた部分だけが残っており, 埴は甕内部に当初から入れられていたようである。坏は坏部内面を上に向け, 脚部は欠失した状態で甕の直下に検出した。

8の埴は完形品で口縁部径10.3cm, 器高6cmを測る。底部は丸底である。体部はゆるく内彎し, 口縁部はやや内傾する。荒らい斜方向の刷毛目とナデによる調整がなされ, 口縁部下の内面は横にヘラによりナデられているように見受ける。胎土に砂粒を多く含み, 焼成良好で淡黄褐色を呈する。12の高坏は坏部 $\frac{1}{2}$ 程の破片で復原口径26.5cm, 坏部の高さ9cmを測り, やや深めである。底部は内彎し, 坏部中位より上で大きく外反する。内面はナデ, 外面は口縁部下は縦方向の刷毛目調整を行い, 屈折部より下は器面が荒れて明瞭ではないが横方向にヘラをあてているように見える。胎土に砂粒を多く含み, 焼成は普通程度で橙色を呈する。22は長胴の甕



第19図 第1号溝状遺構出土土器実測図① (1/4)

で底部は欠失して不明である。復原口径 23.7cm 、現存器高 35.5cm を測り、胴部最大径は中位にあり 28.5cm である。口縁部内外面はヨコナデ、胴下半部外面はナデ、他は刷毛目調整を行っている。胎土は砂粒を多く含み、焼成はあまく若干軟質で暗褐色を呈し、煤が付着している。

2群土器 (11)

溝底で検出した1個体分の壺である。口径 12.7cm 、器高 17.2cm を測り、胴部最大径は中位よりやや上にあって 21.3cm である。口縁部内外面と胴上半部はヨコナデ、他は刷毛目調整を行っている。胎土は粗砂粒を多く含み、焼成は普通程度で淡赤褐色を呈する。5群と接合する。

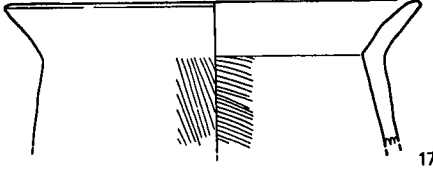
3群土器 (23)

溝底との間にわずかの土をはさんだ状態で出土した甕である。底部を欠失し、全体の $\frac{1}{3}$ 程が残る。復原口径 22.4cm 、現存器高 31.5cm を測り、胴部最大径は胴中位にあって 26cm である。胴

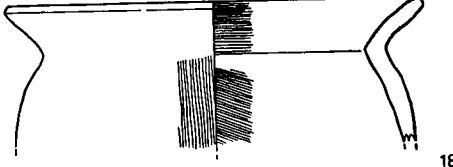
20



16



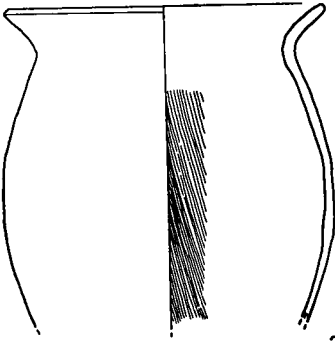
17



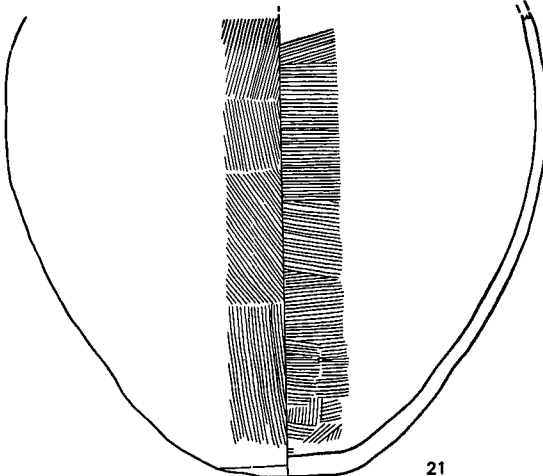
18



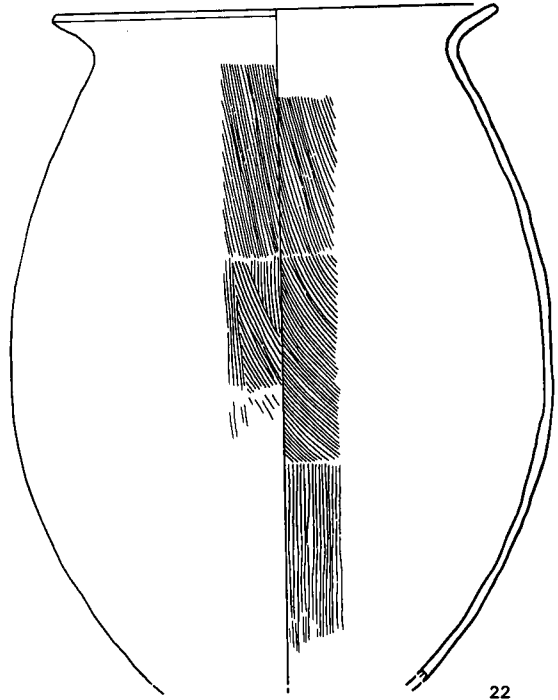
19



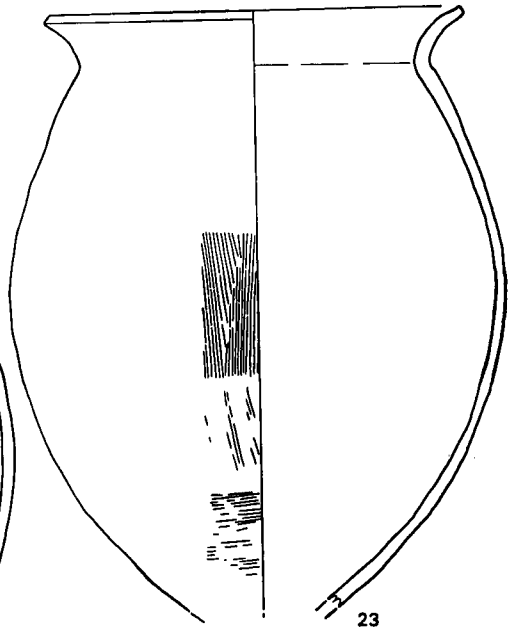
20



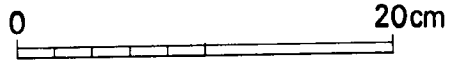
21



22



23



第20图 第1号沟状遗构出土土器实测图② (1/4)

部中位より下は刷毛目調整，口縁部内外面はヨコナデ，他はナデによる調整を行っている。砂粒を多く含み，焼成はあまく赤褐色を呈し外面には煤が付着している。

4 群土器

胴部だけの破片である。大きさは，1群・3群土器と同程度と思われ，調整・つくりとも類似している。図示していない。

5 群土器 (11)

図上で完形に復原される壺形土器で，口縁部径12.2cm，器高17.2cmを測る。胴部最大径は中位よりやや上にあって21.3cmを示す。内外面とも刷毛目調整がなされ，口縁部はヨコナデ調整をしている。胎土に砂粒を多く含み，焼成良好で茶褐色を呈する。2群と接合する。

6 群土器 (20)

溝底との間に10cm程の土をはさんで横にねた状態で検出した。復原口径17cm，現存器高16.8cmを測り，胴部最大径は中位にあって15.5cmである。胴部内面は刷毛目，口縁内外面はヨコナデ，他はナデによる調整を行っている。胎土に粗砂粒を含み，焼成あまく淡赤褐色を呈する。

その他の出土土器

甕形土器 (14~19) 1・3・4群の甕と比べてひとまわり小形のもので復原口径22cm前後で胴部以下は欠失して不明だが，15は胴部から底部にかけての破片で平底，14は不安定な底である。総じて胎土に砂粒を多く含み，焼成はあまい。口縁部内外面はヨコナデ，他はナデおよび刷毛目調整を行っている。

鉢形土器 (10) 小破片で復原口径21.5cm，現存高7cmを測る。少し肩が張り，それ以下は粗い刷毛目調整を行なっている。口縁部内外面はヨコナデ，頸部以下の調整は器面が荒れて明瞭ではない。砂粒を多く含み，焼成良好で赤褐色を呈する。脚台のつく可能性がある。

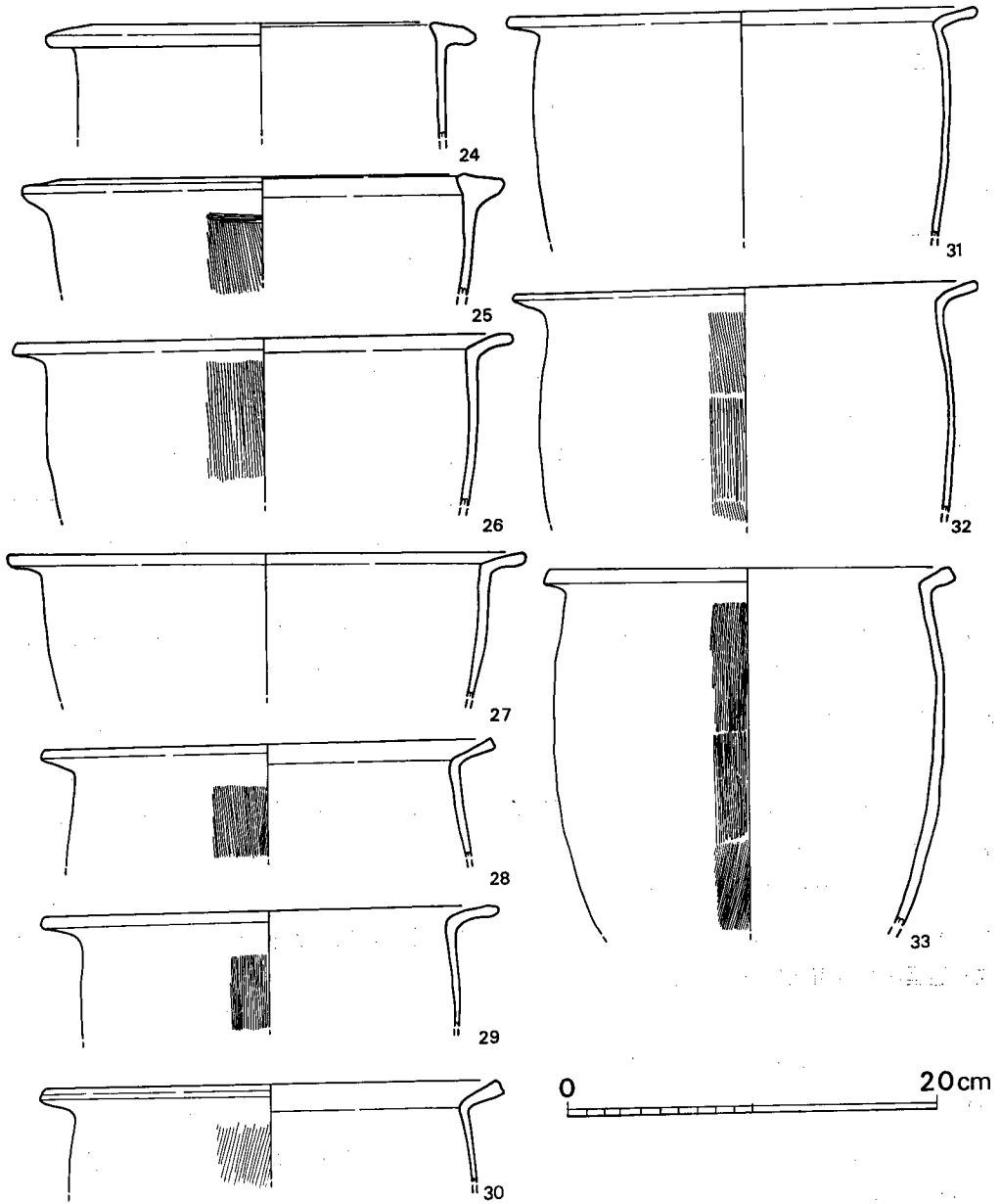
器台形土器 (9) 小片のため法量は不明である。焼成前に脚部の四方に径6mmの2段の円孔を外から穿っている。胎土に多量の砂粒を含み，焼成不良で赤褐色を呈する。器面の剝落が著しく調整は不明である。

高坏 (13) 坏部はなく，脚下半の $\frac{1}{2}$ を欠失する。脚裾径cm，現存高cmを測り，4ヶ所に径6mm程の円孔を穿つ。器面の剝落が著しく，調整は不明である。胎土に多量の砂粒を含み，焼成普通程度で淡黄褐色を呈する。

これらの土器群のうち，比較的まとまって検出された1群~6群の土器は，先述したように口縁部を東に向け，1群土器のうち壙が甕の内に意識的に置かれた状態であり，他の土器群も本来的には完形品かそれに近い状態にあったと推測され，投棄されたと考えるよりも意識的に置かれた可能性が高い。終末期頃の土器群と思われる。

ピット群出土の土器 (図版34・35; 第21~24図)

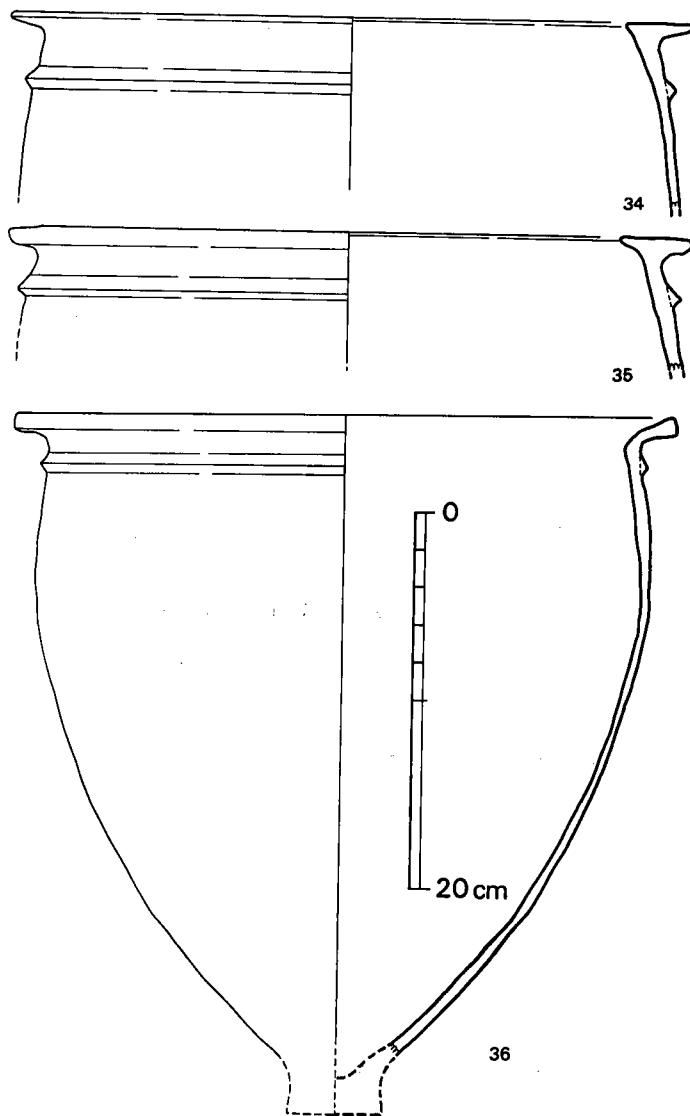
遺構としてまとまらないピットから出土した土器である。中期前葉の土器が主体を占め、甕の破片が量的に多く、壺がこれに次ぐ。



第21図 東区出土土器実測図① (1/4)

甕形土器 (24~50)

口縁部径25cm前後の小形品と、35cm前後の大形品にわかれ、前者の出土量が圧倒的に多い。完形品はなく、36だけは図上で口縁部径35cm、器高37cmに復原される。大形品の口縁部下には三角凸帯を貼りつけているが小形品にはそれがない。口縁部は単に外側に折り曲げた状態で外反するものと、逆L字状を呈するものとに二分されるが、前者の量が多く小形の甕の多くは外反した口縁である。底部は破片しか出土しておらず、上げ底である。底部の接合状態を明瞭に観察できるものはない。器面の剝落が著しいが外面は刷毛目が残り、口縁部内外面はヨコナデ、他はナデ調整を行なっている。これらは胎土

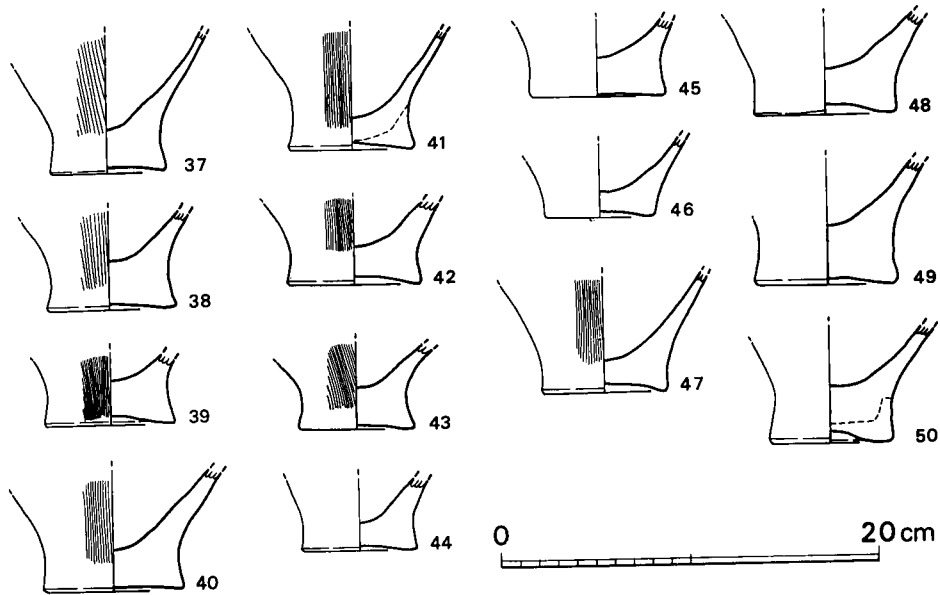


第22図 東区出土土器実測図② (1/4)

に多量の砂粒を含み、焼成は全体にあまく茶褐色～黄褐色を呈する。時期は中期前葉に属すると思われる。

壺形土器 (51~56)

みな破片資料で、口縁部の形態がおのおの異なる。51・52は鋤先状口縁を呈し、は胴部に三角凸帯を貼りつける。51は口縁部外径15cm、同内径10cm、胴部最大径26cmを測る。調整はヨコナデ、ナデおよびへらによヨコナデを行っている。52は51よりやや大きめでその形成は同じである。53は胴部だけの破片で片が張り、胴部最大径25.5cmを測る。器面が剝落して調整は不

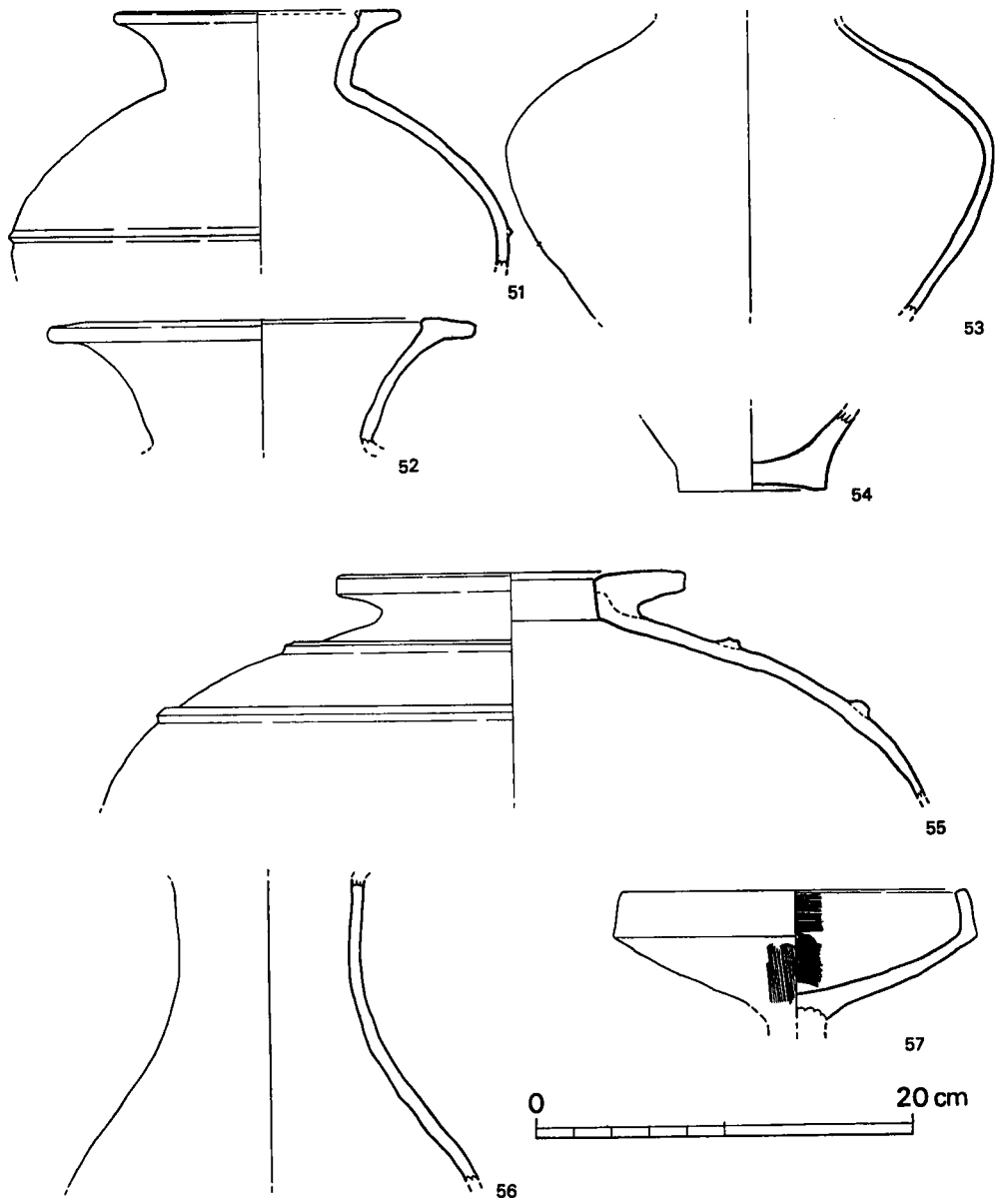


第23図 東区出土土器実測図③ (1/4)

明である。55は体部に比して口径の小さな口縁部がつく。胴上半部に2条の口唇状の貼り付け凸帯がめぐる。凸帯以下はヘラによるナデ調整を行ない、他はヨコナデ、ナデ調整を行っている。56は小片のため、傾き等は正確を期し難いが、長頸壺になると思われる。口縁部は袋状になると思われる。55は実測可能な唯一の壺底部で、上げ底を呈する。これらの壺は胎土に砂粒を多量に含み、焼成はあまく軟質で、黄褐色～赤褐色を呈する。51・52は中期前葉の典型的な土器で55はやや降ると思われる。

高坏 (57)

脚部を欠失し、口縁径18.5cm、現存高7cmを測る。坏部の口縁部は折れまがった形状を呈してやや内傾し、内面は横方向の、外面は縦方向の刷毛目調整を行っている。胎土は細かい砂粒を多く含み、焼成良好で暗褐色を呈する。



第24图 东区出土土器实测图④ (1/4)

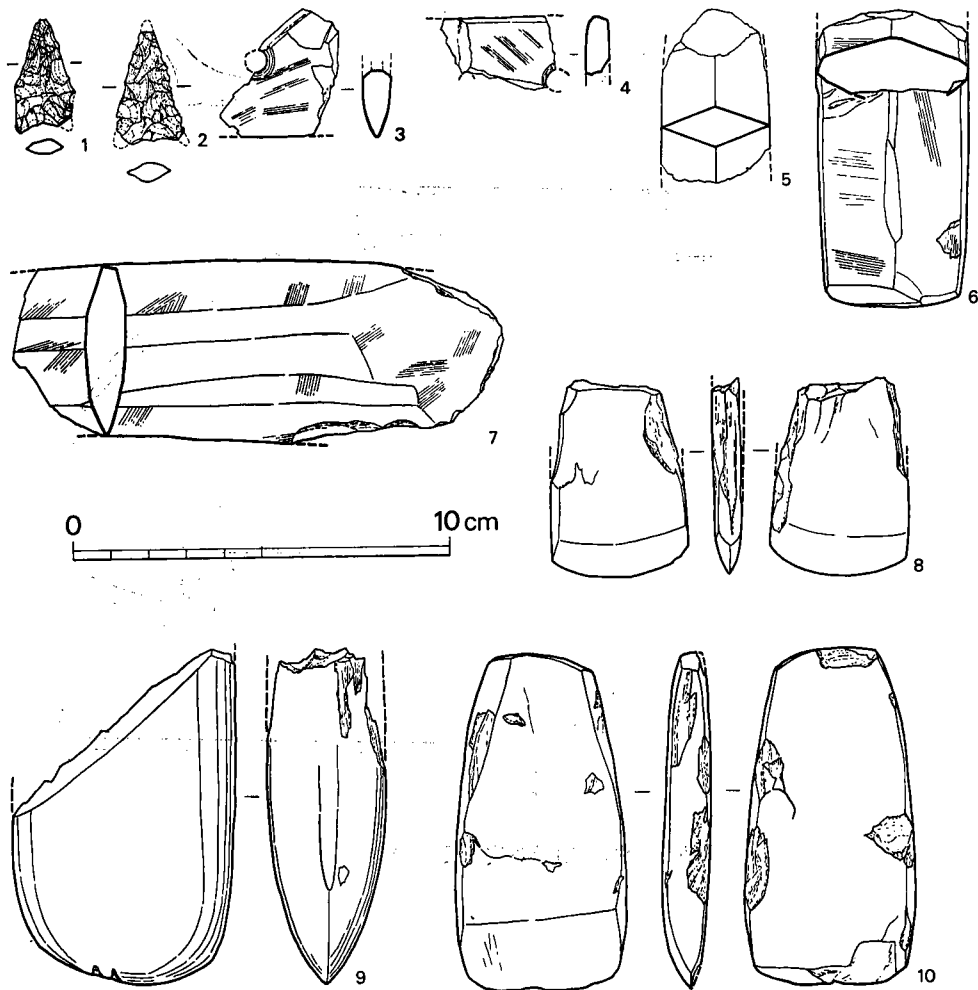
(2) 石器 (図版36, 第25・26図)

住居跡とピットから、石鏃・石庖丁・石剣・石鎌・石斧・砥石が出土した。住居跡出土品を除いて時期を特定できるものはない。

第27号住居跡出土の石器 (1・3・5)

石鏃 (1) 覆土中からの出土品で腸袂の一部を欠失するが長さ2.97cm, 最大幅1.56cm, 厚さ0.37cmを測る。腸袂部幅1.2cm, 深さ0.24cmで重量は1.5gである。安山岩製である。

石庖丁 (3) 床面からの出土品で小片である。厚さ0.7cm弱で刃部断面は左右対称ではない。石材は片岩系統と思われ、灰色を呈し、笠置山産の輝緑凝灰岩製石庖丁とは異なる。



第25図 東区出土石器実測図① (1/2)

石 剣 (5) 磨製石剣の尖先に近い部分と推定される。断面は菱形で中央に鑿が通る。幅2.9cm, 厚さ1.05cmで, 石質は片岩系統と思われる。

ピット出土の石器

(図版36, 第25・26図)

石 鏃 (2) 安山岩製の打製石鏃で先端と脚部を欠失するが長さ3.4cm, 最大幅2cm程度に復原できる。重量は2gである。

石 砲 丁 (4) 小片で全形を知りえない。厚さ0.6cmで背部断面は左右で異なる。石質は3と同質である。

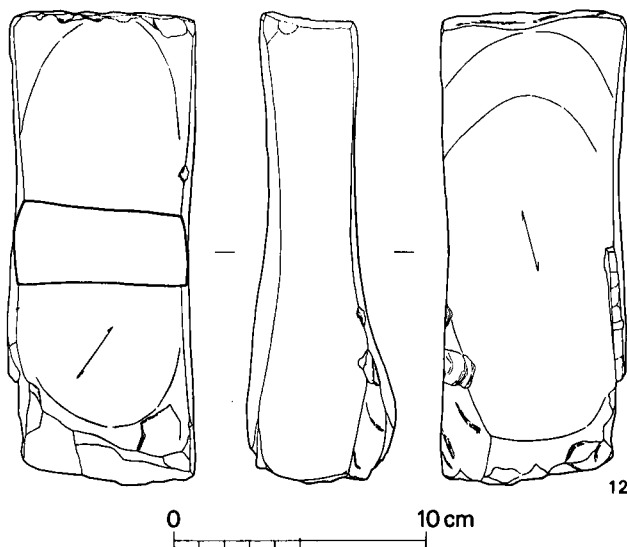
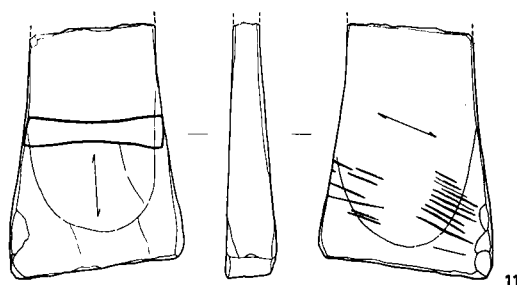
鉄 剣 形 石 剣 (6) 把部の破片で中央に部分的に鑿がある。断面は圧縮された六角形を呈し, 幅4cm, 厚さは推定で2cmを超える。

石 鎌 (7) 刃部・背部は

ゆるい弧線を描いて内彎する。断面は左右対称ではなく, 厚さ1cm, 幅4.8cmを測る。

石 斧 (8~10) 8は小形の磨製石斧で断面は扁平で, 刃部幅3.5cm, 厚さ0.8cmである。9は片刃の磨製石斧で刃部幅4cm, 長さ8.8cm, 厚さ1cmで断面は扁平である。10は刃部幅5cmで横断面は楕円形を呈し厚さ3.2cmを測る。蛇紋岩製である。この点の石斧は刃部および全体の形態の相違から, 各々異なった機能を有していたと推測される。

砥 石 (11・12) とともに砂岩製のもので小口を除いた四面が磨滅しているが使用面は表裏の二面に集中していると思われる。17の片面は砥石長軸と斜方向に幅2mm前後の削痕状のものが観察され, 利器の刃部を斜めに立てて研いだものと推測される。最大幅6.8cm, 現存長9.8cm 厚さは研ぎ減りした部分で0.8cmである。18は17より大形で最大幅7.4cm, 長さ18.8cm, 厚さ3cm前後である。厚い方を手前に置いて使用したと思われる。



第26図 東区出土石器実測図② (1/3)

(3) 土師器・須恵器 (図版37, 第27図)

第2号土壌, 住居跡覆土, ピットから出土している。

第2号土壌出土の土器 (2・4・5・7・9・11・12・13~15・18) 坏蓋・坏身・台付壺の須恵器, 坏・甕の土師器が出土している。

須恵器 (2・4・5・7・9・11・12) 2は低い宝珠形つまみを有す復原口径14cmの坏蓋である。天井部外面は逆時計まわりのヘラケズリ, 同内面はナデ, 他は回転ナデ調整である。4・5は口径12cm前後, 器高5cmの有高台坏で内底面はナデ, 他は回転ナデによる調整である。7は高台を有する壺で外面はカキ目調整がなされ, 他はナデおよび回転ナデ調整である。長頸か短頸かは明確ではない。9・11・12は口径14cmの坏で, 底部は時計方向のヘラズリを行なっている。これら7個の須恵器は総じて焼成良好で灰色~暗灰色を呈し, 総じて焼成良好である。

土師器 (13~15・18) 13は半球形の坏で口縁径14.6cm, 器高5.8cmを測る。器面が荒れているが外面はヘラミガキを行なっている。14は平底の坏で全体的に器面が荒れているが, 内底面はナデ, 外面はつよい回転ナデ調整がなされている。15は高台のつく復原口径20.1cmの坏で, 内外面とも細かくヘラミガキを行なっているが, 外面の調整痕は明瞭ではない。18は復原口径25.4cmの甕で外面は刷毛目調整を行ない, 内面はヘラケズリを行なっている。15は赤褐色を呈して焼成良好で他は茶褐色~暗褐色を呈する。

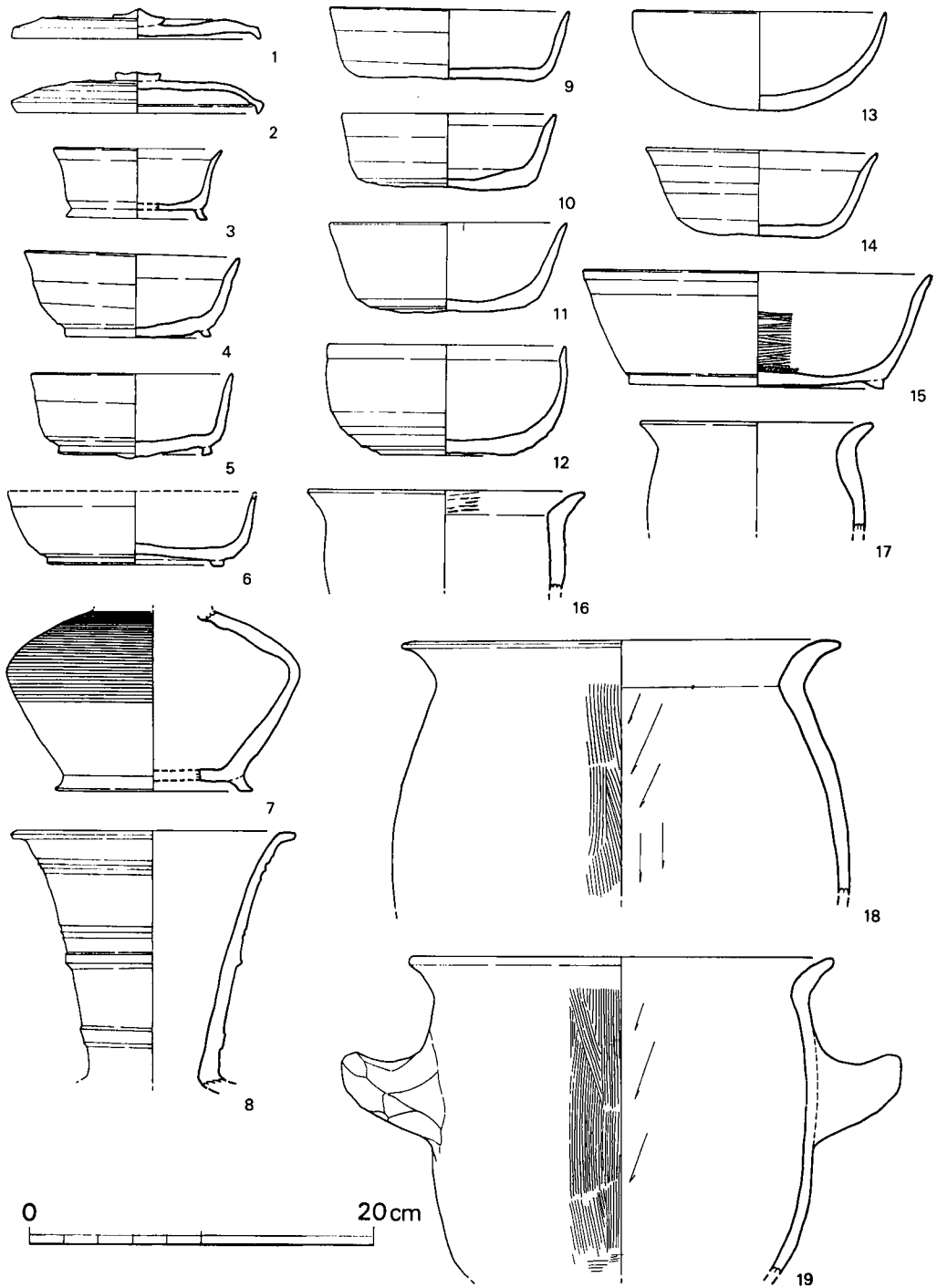
その他の出土土器

10がH27覆土から, 他はピット群からの出土品である。

須恵器 (1・3・6・8・10) 1は口径14.7cmで2と同様のつくりである。3は小形の有高台付で復原口径9.7cm, 同器高4cmを測る。内底面はナデ, 体部は回転ナデによる調整を行っている。6は口唇部を欠失するが, 器高の低い坏で低い高台を有する。10は器肉の厚い坏で, 口唇部はつまみあげられて薄くなっている。8は長頸壺で体部以下を欠失する。頸部中位と下端に帯状に粘土を貼りつけて凸帯とし, 口縁部下と上部凸帯の上に2条の沈線がめぐる。これらの須恵器は総じて焼成良好で暗色~暗灰色を呈している。

土師器 (16・17・19) 16・17ともに小形の甕で前者は口縁部内側に刷毛目調整をするが他の部分は器面が荒されており不明である。17は体部上半以下はナデ, 他の部分は回転ナデ調整を行っている。19の甕は復原口径24.5cm, 現在高20cmを測り, 外面は刷毛目調整, 内面はヘラケズリを行なっている。

- 註 1 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』一Ⅷ一 1977 福岡県教育委員会
 2 児玉真一編「若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第1集」1979 福岡県教育委員会
 3 昭和49年度の調査では青銅製鋤先片が東区第1号住居跡から出土している。(酒井仁夫「東区の調査内容」<『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』一Ⅷ一 1977 福岡県教育委員会>所収)



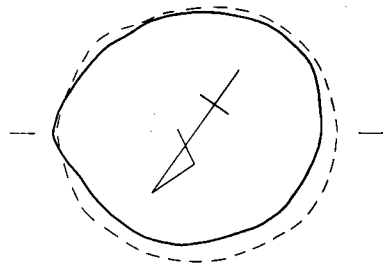
第27图 东区出土土器实测图 (1/4)

3 西区の遺構

柳ヶ谷遺跡西区の調査の発端は、昭和49年9月10日から同8月5日にかけて実施した九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査で、南向きの緩斜面に18軒の住居跡、5棟の掘立柱建物、蔵骨器1が検出されたことによる（註1）。工業用地はこの縦貫道の北側に隣接しており、地形から判断して北側の平坦部には大規模の集落足が検出されるものと推定されるものと推定された。このため遺跡の広がりを確認するため、昭和51年11月24日から昭和52年1月14日までトレンチ調査を実施した。トレンチは12ヶ所設定し、総面積1,960㎡を調査（第1図、表1）したその結果、多数の遺構を推定した平坦地はすべて植林地造成のため削平が地山（赤褐色土層）まで達しており遺構は確認できなかった。住居跡、ピットを検出できたのは南側の緩斜面だけで、この部分約800㎡を昭和52年8月1日から9月16日まで発掘調査を実施した。調査の結果、貯蔵穴1基・住居跡4軒・土壙6基が検出された。その多数の大小ピットを検出したが建物遺構の柱列を思われる配置を示すものは判明できなかった（図版10、第29図）。なお住居跡番号は縦貫道関係で報告したものからの通し番号である。

(1) 貯蔵穴（図版13、第28図）

第23号住居跡の北西側約6mで検出したもので上部は削平されている。上面残存径1.05m、底面径1.1m、残存する深さ78cmの円形の貯蔵穴である。内部は中位までは褐色土層が入り、それ以下は炭化物を含む暗褐色土層から弥生式土器が数点出土している。

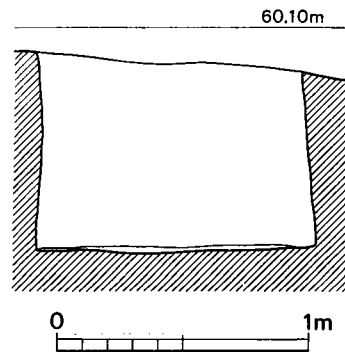


(2) 住居跡（図版10、第29図）

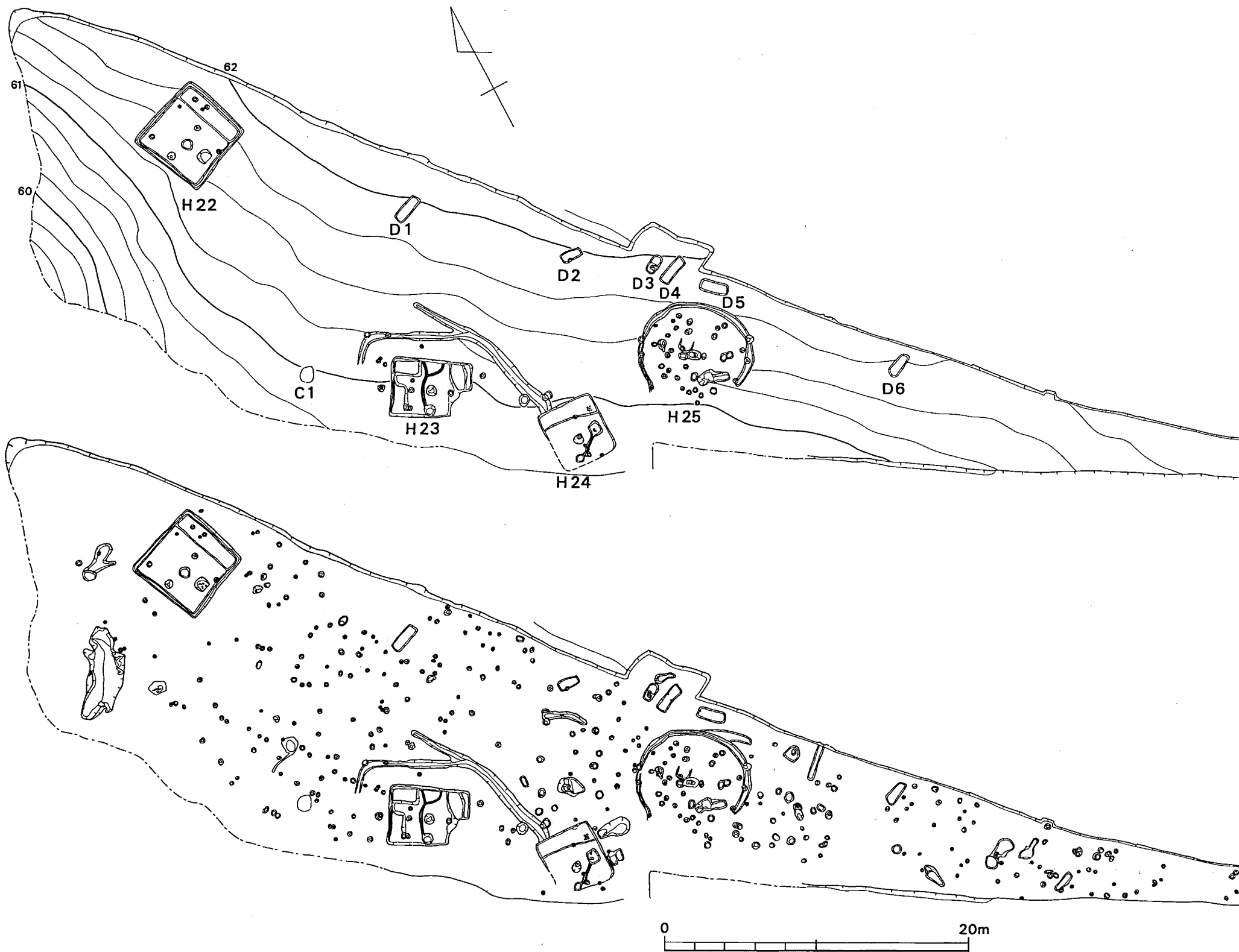
住居は、方形住居跡3軒、円形住居跡1軒を検出した。いずれも南西側の緩斜面に立地している。

第22号住居跡 H22（図版11、第30図）

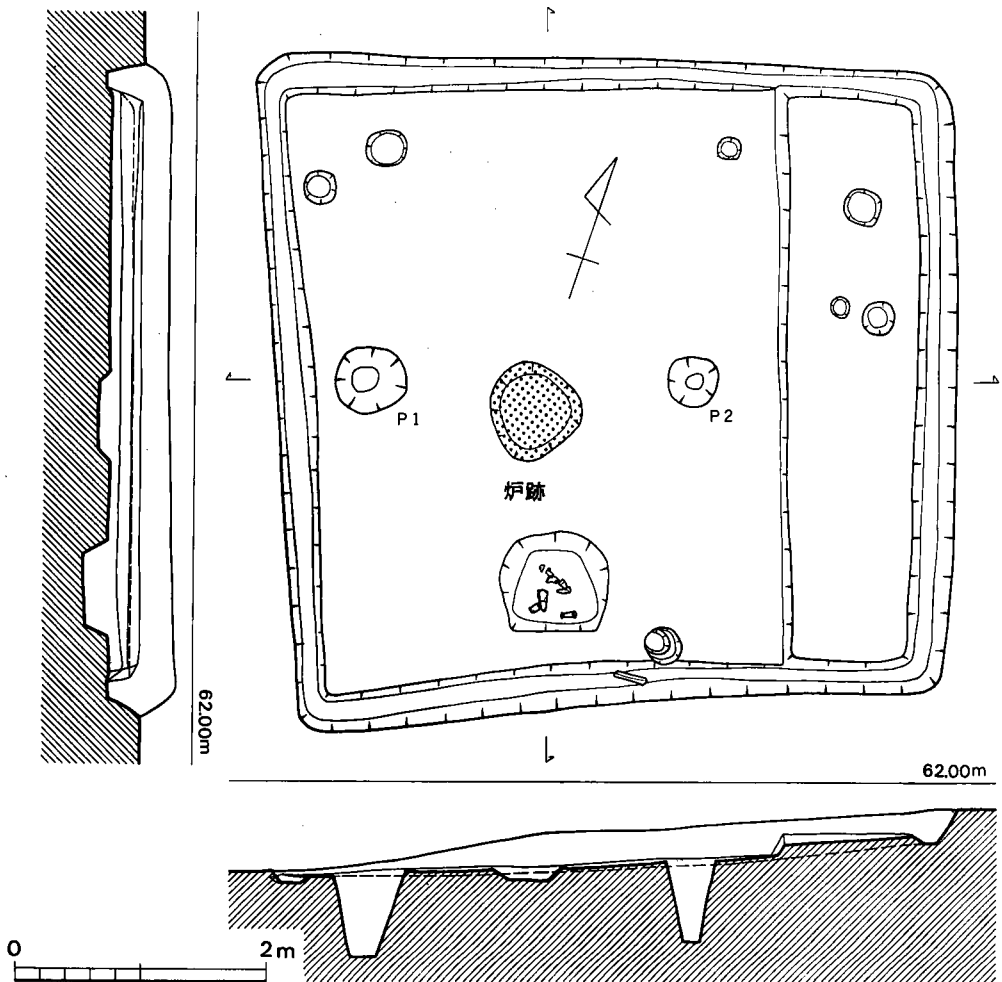
遺跡の北側端から検出した。プランは方形を呈する。上面はかなり削平を受けており、壁沿い走る溝から壁上端との比高差は、東側で25cm、西側10cm前後の残存状況である。



第28図 貯蔵穴実測図（1/30）



第29图 西区遺構配置図・全体図 (1/300)



第30図 第22号住居跡実測図 (1/60)

住居の規模は、東辺で49m、西辺5.4m、北辺5.5m、南辺が5.1mを測る。支柱穴はP1・P2の2本で柱間寸法は2.6mを測る。P1は上端径55cm、底径約20cm、深さ約70cm、P2は上端径約40cm、底部径約13cm、深さ約65cmを測る。中央には径約75cm、深さ10cmの円形の摺鉢状のくぼみがある。炉として使用されたもので焼けており、内部、周囲には灰の拡がりがあった。東側には、地山を削り出した幅約1mのベッド状遺構がある。また炉の南側にある隅丸方形の深さ20cm程のピットがある。その他に7個ピットがあるが、住居に伴うものではない。

第23号住居跡 H23 (図版21, 第32図)

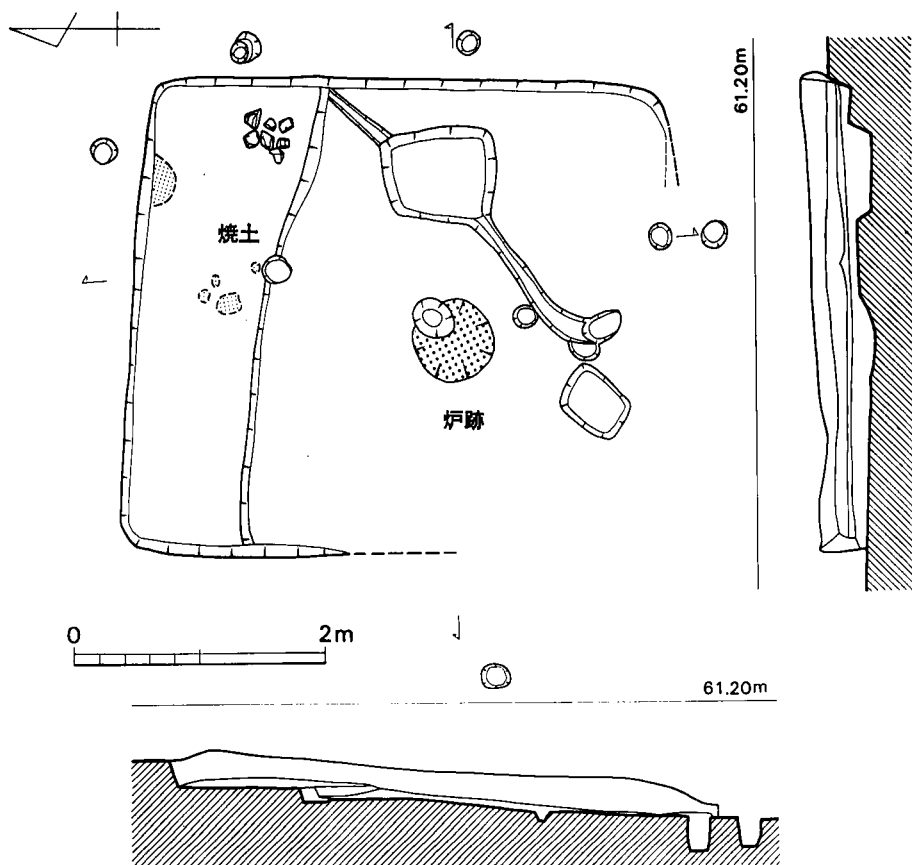
遺跡のほぼ中央部南側から検出した。長方形プランを呈する住居跡である。上部はかなり削平を受けており、南側隅のコーナーは確認できない。

住居の規模は、長辺5.4m、短辺4mを測る。支柱穴はP1・P2の2本で柱間寸法は2.7mを測る、P1は上端径約35cm、底径約20cm、深さ約35cm、P2は上端径約32cm、底径28cm、深さ約36cmを測る。中央部に凹状のくぼみがある。周辺には焼土塊があり炉として使用されたものであろう。溝は西壁と北壁では壁に沿い、さらに北壁の中央から床面炉の西側を通過して炉の南側のピットへつづく。削り出しのベット状遺構は、北西隅、南西隅と東側壁に沿って確認された。

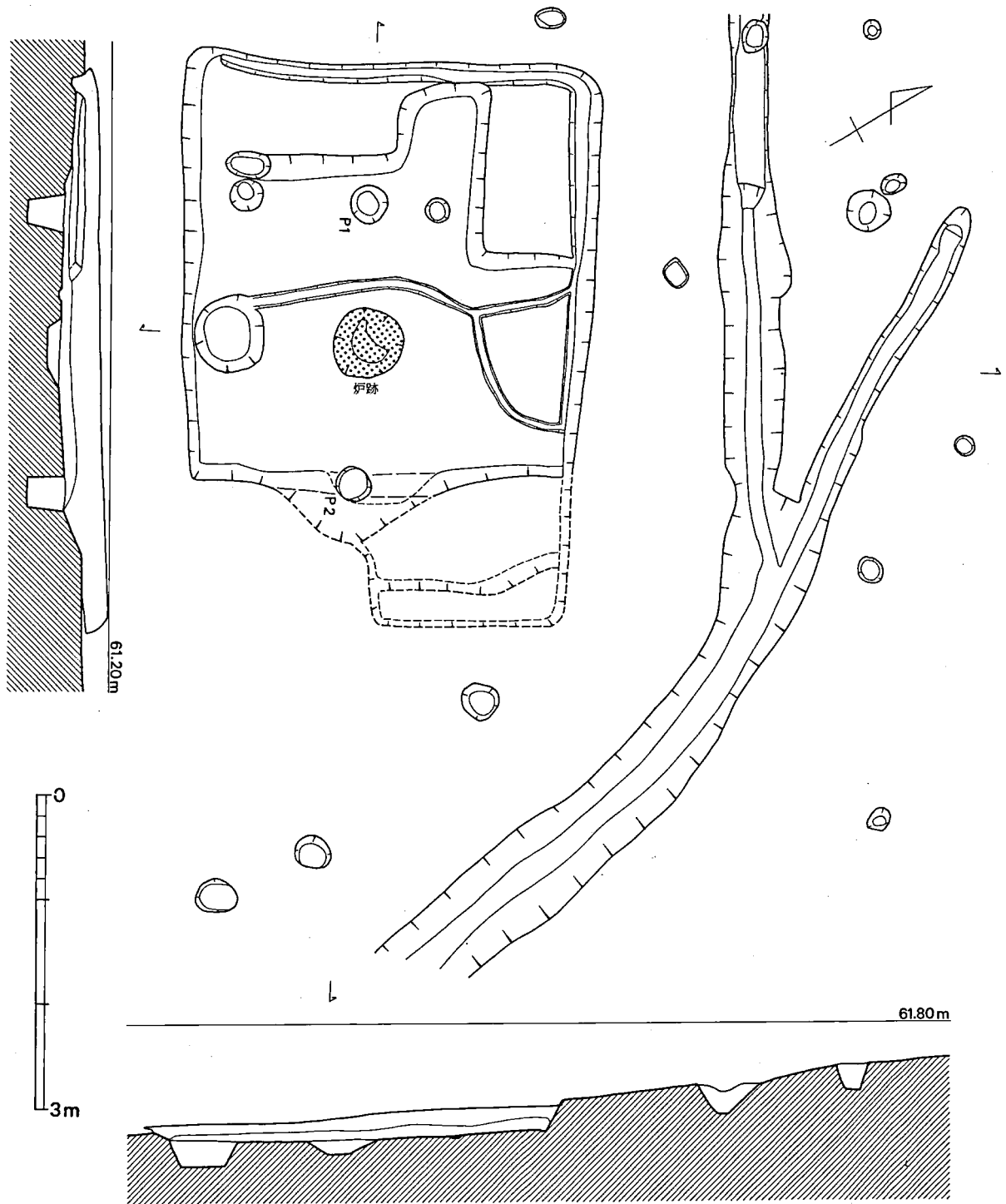
また住居跡の付属施設と考えられる断面U字形を呈する溝が、住居跡の北側の高い部分に住居をとり囲む様に存在する。溝は中央部で幅約60cm、深さ約30cmを測る。住居を水の進入から守る排水溝と考えられる。

第24号住居跡 H24 (図版12, 第31図)

23号住居跡から北東5mから検出した。方形の住居跡である。上部は削平を受け、南壁と南西のコーナーは検出できない。残存壁高は、北壁で約20cm、東壁約20cmを測る。

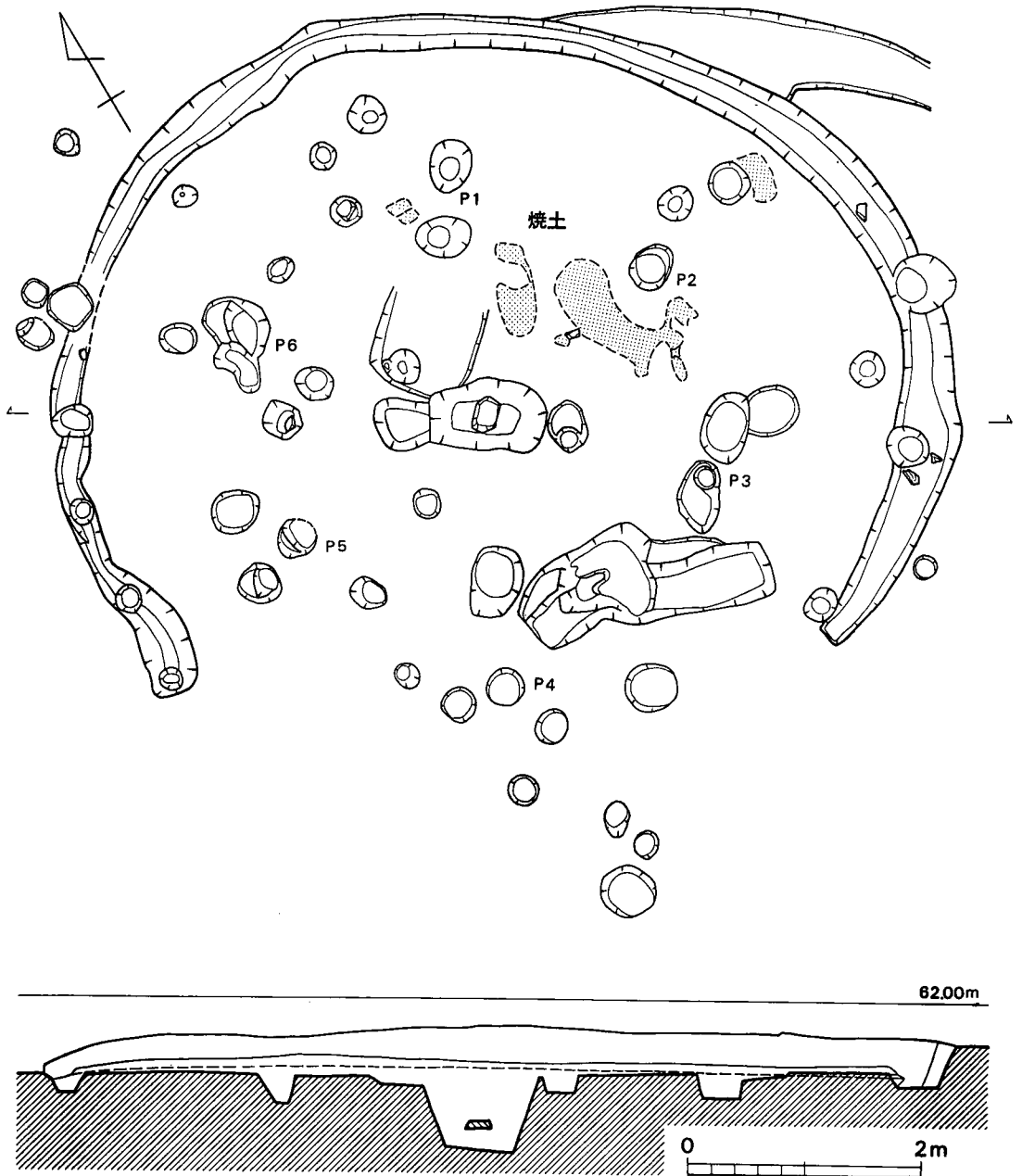


第31図 第24号住居跡実測図 (1/60)



第32图 第23号住居跡实测图 (1/60)

住居の規模は北辺3.7m, 東辺4mを測る。床面上にはピットが6個みられるが、どれが主柱となるのかは不明である。床面中央からやや南ように円形のくぼみがある。内から焼土・灰があり炉として使用されたものであろう。炉の東側と南側には長方形の浅いピットがある。東壁から北壁に向って斜めに溝が走る。北壁に沿って削出しのベッド状遺構がある。このベッド上面に炭化物が数ヶ所に検出された。また東端には7個の10~15cmの小石が並べられているが、性格は不明である。



第33図 第25号住居跡実測図 (1/60)

第25号住居跡 H25 (図版13, 第33図)

24号住居跡の東側約4mの地点に造られた直径7.8cmの円形竪穴住居跡である。上部は削平を受け、最も壁が高く残っている北側で高さ35cmあるが、南側の約4分の1ほどは壁を失っている。壁に沿って幅約20~45cm、深さ約15cmの周溝がめぐり排水溝と考えられる。床面はしっかりした地山の床面であるが、北東側から南西側に向ってやや傾斜している。張床は確認できなかった。住居跡の中央には1個の土壙状竪穴があり、炉跡と思われるが、壁面や底部は多少堅くはなっているが、強い熱は受けていないようだ。内には約40cm大の石が入っていた。また土壙状竪穴の北東側の床面に数ヶ所、かなり広い範囲に焼土を確認した。焼土の下にはピット等の施設は発見できなかった。床面には上部から切り込んだピットを含めて多数あるが、竪穴を中心として廻る柱穴P1~P6が主柱と思われる。補助的柱と考えられる柱穴も数個ある。

(3) 土 壙

柳ヶ谷遺跡西区からは、6ヶ所で長方形の平面プランを呈する土壙を検出している。調査区の西側から1~6の番号を付けた。

第1号土壙 D1 (第34図)

長方形プランを呈し、主軸方位は、N-70°-Eを示す。上部はかなり削平を受けている。内法は長さ1.84m、幅62cm、幅62cm、残存する深さは10cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。床面は北東側が高く南西に向って傾斜する。

第2号土壙 D2 (第34図)

長方形プランを呈すが床面の東側は不整形である。主軸方位は、N-87°-Wを示す。内法は長さ1.24m、幅55cm、残存する深さ15cmを測る。床面は西側がやや低い。南側壁にピットがあるが、これは上部からの掘り込みで直接関係はない。

第3号土壙 D3 (第34図)

4号土壙と並んで検出されたもので、隅丸長方形を呈する。主軸方位は、N-62°-Eを示す。内法は、長さ1.13m、幅54cm、残存する深さは13cmを測る。床面は水平である。床面には20cm大の石があり、焼土も若干認められた。南側壁面では甕の底部片が出土している。側壁は斜めに立ち上がる。南東側床面中央の落ち込みは後の掘り込みである。

第4号土壙 D4 (第35図)

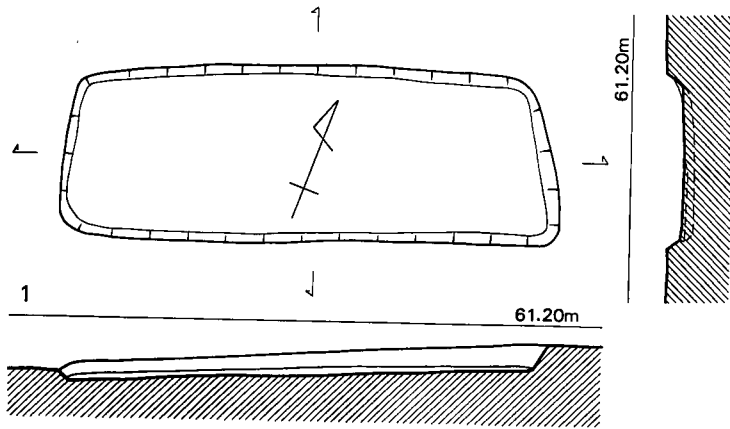
隅丸長方形を呈する土壙である。主軸方位をN-69°-Eにとる。内法は長さ1.84m、幅56cm、残存する深さ10cmを測る。床面は北東側から南西に向って傾斜している。

第5号土壙 D5 (第35図)

4号土壙の南東側に検出した隅丸長方形を呈する土壙で、主軸方位はN-47°-Wを示す。

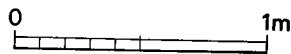
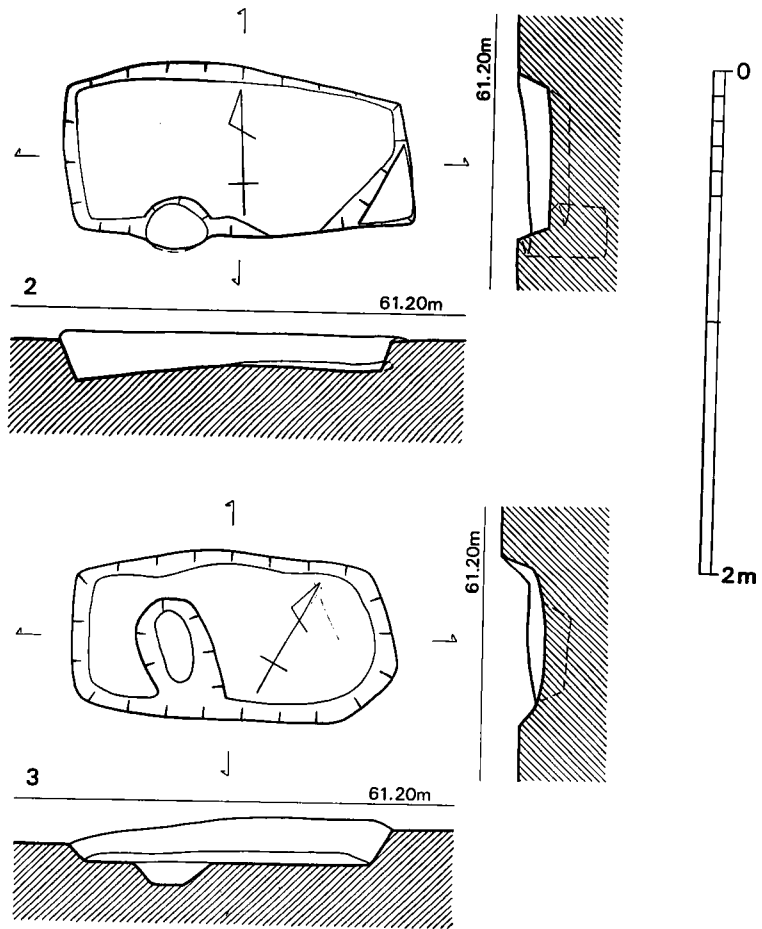
(池辺)

内法は、長さ
1.75m、幅70
cm、深さ15cm
を測る。床面
は中央部がや
や低くなって
いる。壁はや
や斜めに立ち
上がる。

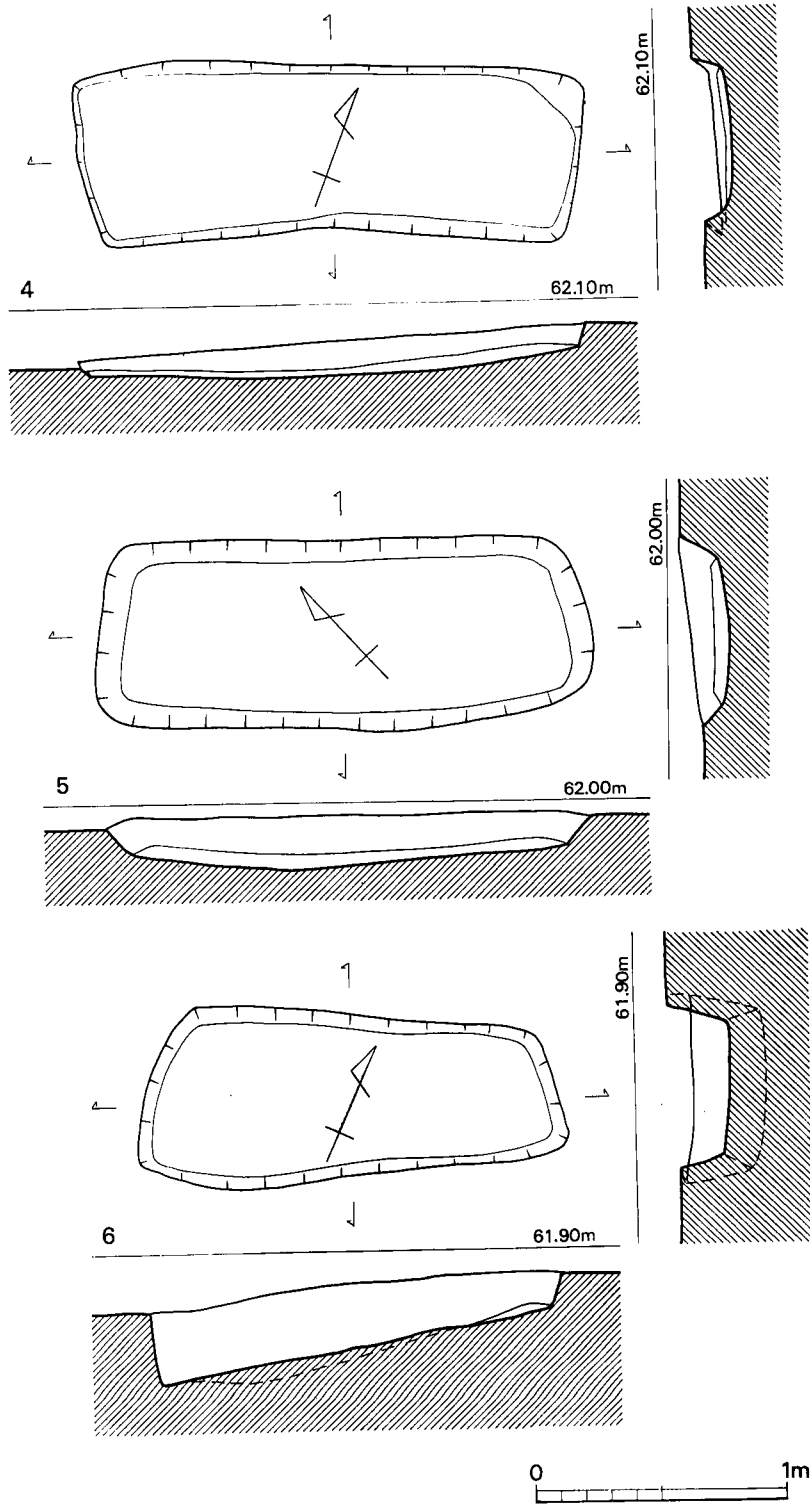


第6号土壇
D6 (第35図)

調査区の東
側から検出し
た土壇で、不
整長方形のプ
ランを呈する。
主軸方位は、
N—66°—E
を示す。内法
は、長さ1.54
cm、幅は北東
側が40cm、南
西側59cm、深
さ28cmを測る。
床面は北東側
から南西にか
なり傾斜して
いる。



第34図 第1～3号土壇実測図 (1/30)



第35图 第4~5号土坑实测图 (1/30)

4 西区の出土遺物

表土直下及び貯蔵穴、住居跡から弥生式土器の小片が出土した。時期は中期前半から後期にかけてのものである。ここでは図示した器形の判明したものについて説明を加える。

(1) 弥生式土器 (図版38)

貯蔵穴出土土器 (第36図)

甕形土器 (10~12) 10は復原口径24cm, 最大胴部21.5cm, 現存高11.5cmを測る。口縁部はヨコナデされ、胴部外面はタテ方向の刷毛目調整されている。胴部内面は器面剝落のため不明である。11は復原口径26cm, 現存高6.3cmを測る。口縁部内面及び口唇部はヨコナデされ、外面はヨコ方向の刷毛ナデ調整されている。10・11ともに焼成はややあまく、胎土には砂粒を多く含む。色調は淡茶褐色を呈する。12は底部片である。焼成はあまく器面は剝落している。胎土は砂粒を多く含む、色調は赤褐色を呈する。10・11は後期前半の所産と考える。

第22号住居跡出土土器 (第36図)

壺形土器 (1・2) 1・2ともに床面から出土した壺形土器の口縁部片である。1は復原口径19cm, 外稜径22.2cm, 現存高7.1cmを測る。口唇部は内側に傾斜する平坦面をなす。口縁部はヨコナデ、頸部外面はタテナデされ、内面はナデ調整されている。胎土には砂粒を多く含む、色調は淡茶褐色を呈する。2は復原口径18cm, 現存高5.7cmを測る。焼成はあまく器面の剝落が著しく整形痕は不明である。胎土には砂粒を多く含む、色調は淡黄褐色を呈する。

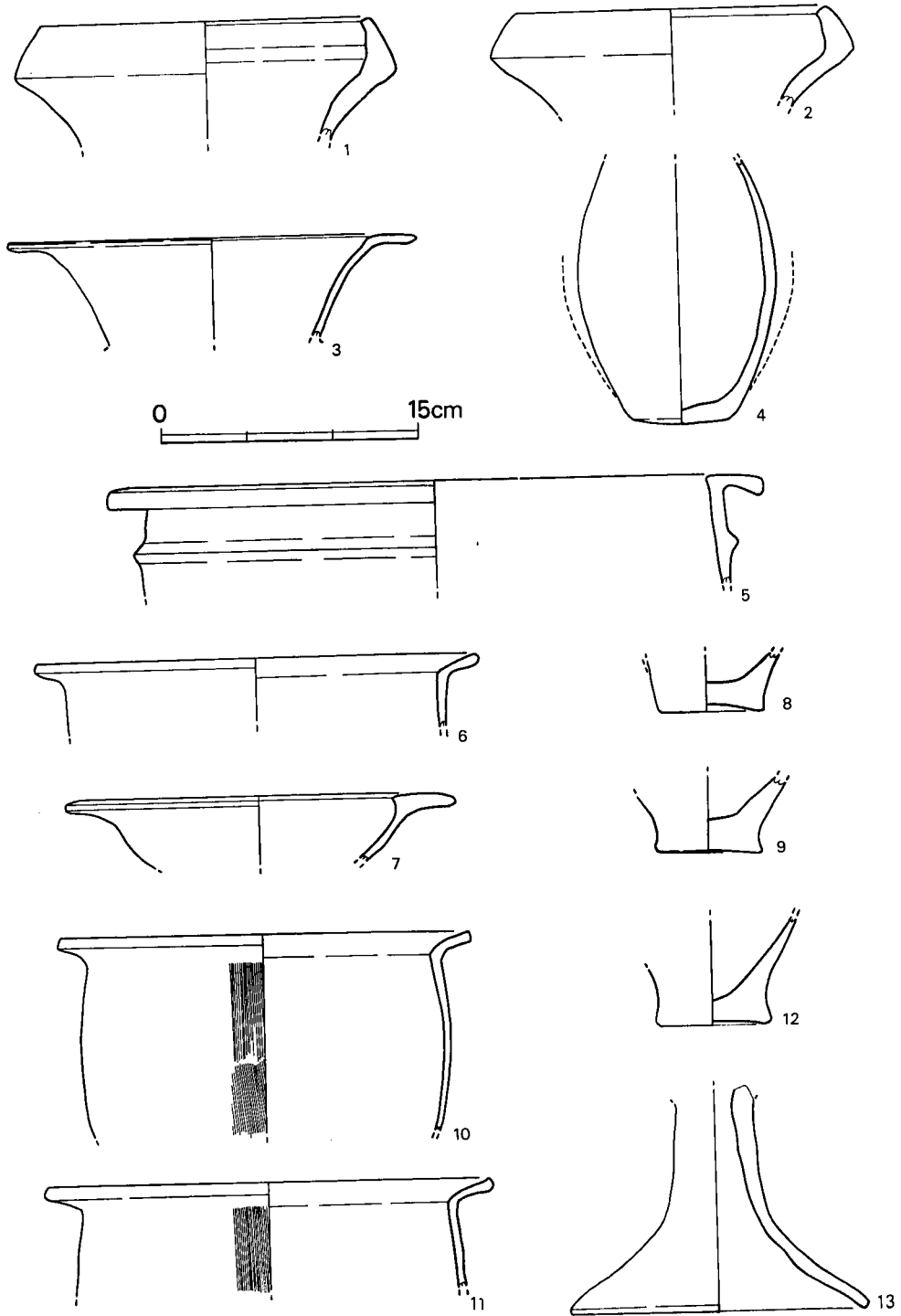
第24号住居跡出土土器 (第34図)

3は住居跡の埋土上面から出土した壺形土器の口縁部片である。大きく開く頸部をもち、復原口径は23.7cmを測る。器面は著しく剝落しており調整は不明である。焼成はあまく、胎土は砂粒を多く含む。色調は淡黄褐色を呈する。4も埋土中出土の土器片で全体の形状は不明である。上から見るとやや楕円形を呈し、断面図と直交する胎部の張りは点線で示すとおりである。焼成はあまく器面は剝落している。胎土は砂粒を多く含む、色調は明茶褐色を呈する。

第25号住居跡出土土器 (第36図)

甕形土器 (5・6)

5は住居跡南東側周溝の上面から出土した。甕の口縁部片で復原口径38cm, 現存高6.2cmを測る。口縁部下に一条の三角凸帯が巡る。焼成があまく器面が剝落し調整は不明である。胎土には砂粒が多く含む。色調は淡黄褐色を呈する。6は住居跡埋土中から出土した甕の口縁部片である。復原口径25.7cm, 現存高約4cmを測る。焼成はあまく、器面の剝落が著しく調整は



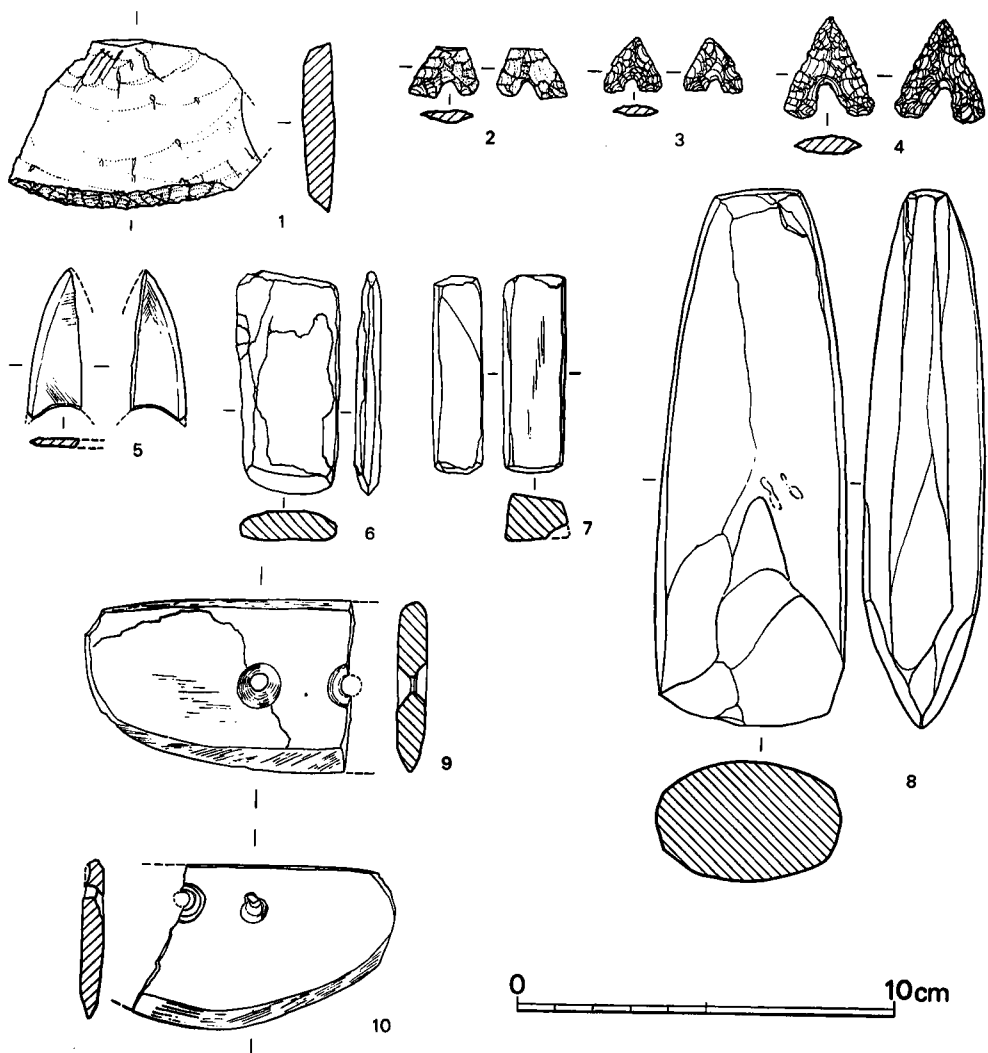
第36图 西区出土土器实测图 (1/4)

不明である。7は埋土中出土の高坏の坏部片である。復原口径22.6cmを測る。器面は剝落し、色調は淡黄褐色を呈する。8・9は底部片である。いずれも焼成があまく、器面が剝落し調整は不明である。色調は8が淡黄褐色、9は赤褐色を呈する。13は表土直下から出土した高坏脚部片である。焼成はあまく器面は剝落し、整形痕は不明である。色調は褐色を呈する。

(2) 石器 (図版37, 第37・38図)

スクレイパー (1)

横剥ぎの剥片を用い、主要剥離面先端部のエッジの部分に刃部を作り出している。他に調整は全く見られない。石材はサヌカイトである。



第37図 西区出土石器実測図① (1/2)

石 鏃 (2~4)

2は24号住居跡埋土中から出土した サヌカイト製の石鏃で先端部を欠損している。現存長1.3cm, 幅1.8cmを測る。2・3は黒耀石製の石鏃である。2は長さ1.4cm, 幅1.5cmを測る。3は長さ2.7cm, 幅2.4cmを測る。

扁平磨製石鏃 (5)

23号住居跡の埋土上面から出土した扁平磨製石鏃である。一部欠損するが入念な研磨により調整されている。長さ2.9cmを測る。頁岩製である。

石 斧 (6・8)

6は25号住居跡埋土中から出土した頁岩製の小形扁平石斧である。全面に研磨の痕跡が認められるが風化が著しい。長さ6.2cm, 幅2.5cm, 重さ19gを測る。8も25号住居内で出土したもので、石材に玄武岩を使用し、全面打撃調整を施した後に研磨による仕上げを行っている。長さ14.4cm, 幅4.9cm, 中心部の厚さ3.2cm, 重さ345gを測る。

砥 石 (7)

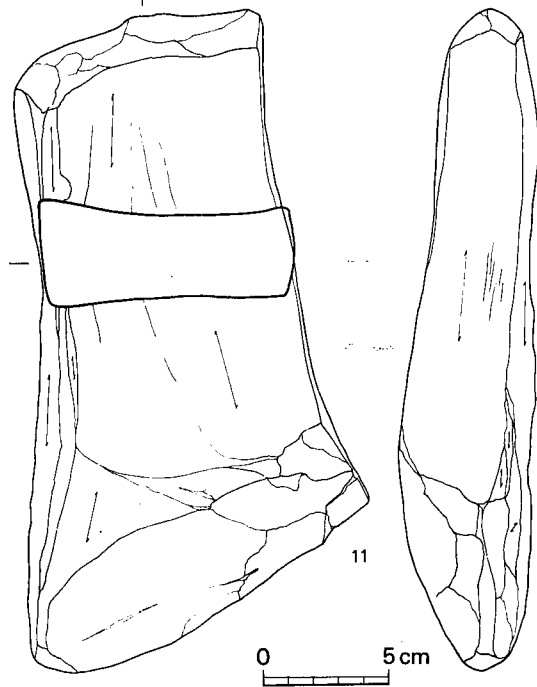
7は25号住居跡から出土した小形で硬質砂岩製の砥石である。現存値は長さ5.4cm, 幅1.4cm, 厚さ1.1, 重さ19gを測る。全面に磨滅痕が認められる。

11は西区の調査区のトレンチで採集した資料である。硬質砂岩製で仕上げ用の砥石である。表裏両面, 両端部ともに砥面として使用している。よく使い込まれており各使用面共中央部がくぼんでいる。長さ26.3cm, 幅10cm, 厚さは中央部で3.2cm, 重さ1,930gを測る。

石 庖 丁 (9・10)

9は25号住居跡から出土した輝緑凝灰製で破片である。ほぼ中央に対応する2孔が両面から穿たれている。現存値では長さ4.5cm, 幅7cm, 厚さ8mmを測る。10は表採質料である。輝緑凝灰岩製で約1/3を欠損する。よく研磨され, ほぼ中央の上位に対応する2孔がある。現存値で長さ4.15cm, 幅6.9cm, 厚さ6mmを測る。

(池辺)



第38図 西区出土石器実測図② (1/3)

註 1 池辺元明編『九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告』一Ⅷ― 1977 福岡県教育委員会

5 小 結

柳ヶ谷遺跡は間に空白期間をおくが、弥生時代から奈良時代にわたる集落跡で、九州縦貫自動車道および若宮・宮田工業団地に関する調査を通じて東西両地区で、住居跡27軒、貯蔵穴4個、土壙8、掘立柱建物12棟、溝等の遺構とともに青銅製鋤先、各種石器および弥生時代終末期頃の一括土器を含めて多量の土器片を検出した。

柳ヶ谷遺跡は4世紀～6世紀中葉の時期に空白期間があり、とりわけ4・5世紀代の集落跡は、九州縦貫道・工業団地関係の発掘調査では未検出である。すなわち、木棺墓・土壙墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓等からなる汐井掛遺跡や天神ノ上遺跡の形成母体と想定できる集落跡の実体について不明な部分が多い。山口川をはさんで対岸の小原遺跡（註1）では、弥生時代後期終末期頃の住居跡を検出してはいるが、汐井掛遺跡との間は1本の河川によって区切られ、汐井掛遺跡の形成母体となった集団との関係性は当然存在するにしても、その墳墓群との直接的関係性を認めるにはその根拠に乏しい。

郡地原遺跡（註2）や柳ヶ谷遺跡（註3）においては先述した埋葬遺跡と時期的にその一点を共有し得る住居跡、溝、土壙を検出している。住居跡は方形に近いプランでベッドを持ち、2本あるいは4本の支柱穴を持つものが多く、土器を出土するものは少ないが、おおむね後期後半～終末期頃の住居跡が存在する。柳ヶ谷遺跡においては、この時期の住居跡は西区に多く存在する。

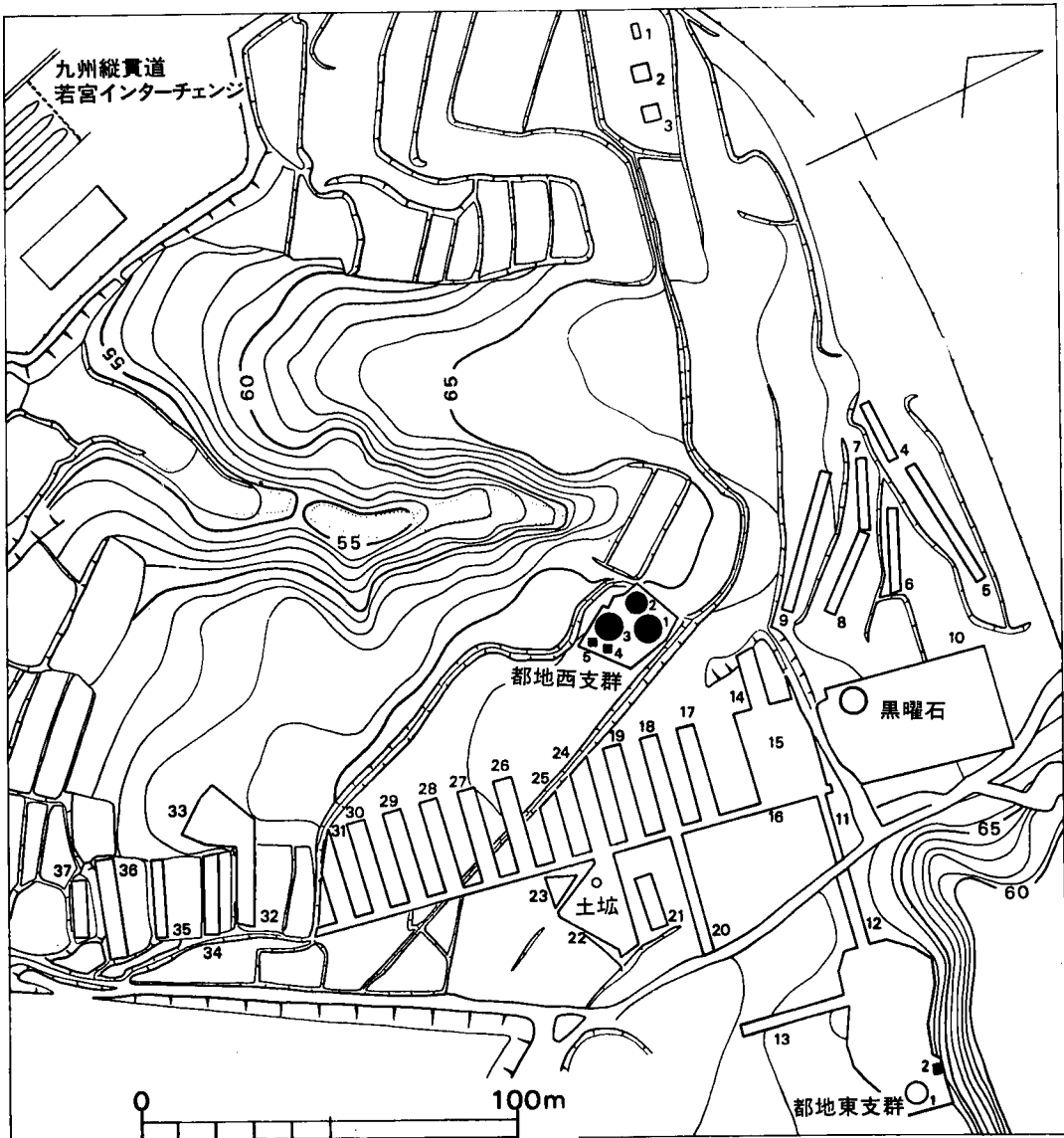
今回報告した東区の1号土壙および溝は、その出土土器から溝の方がやや先行するようである。溝出土器群は、その口縁部を東側に向けて横に倒れた状態で検出したが、出土状態からみて意識的に置かれたものと推測され、あたかも“まつり”に際しての供献土器の印象を与えるものである。溝自体も上半部を削平され、溝の内側の実体が不明であり、この遺構については、人間の社会的活動（行為）の中で極めて精神的な営為の所産と推定される。この溝よりやや時期的に降る1号土壙の土器の出土状態も当初は立てて置かれていたようであり、接近して同時期の遺構は全く存在せず、その性格について不明な部分が多い。

上述の二つの遺構は弥生時代後期終末期頃の所産と考えられるものであり、この時期の他の遺構は離れて西区に存在し、直接に生活に関係する遺構とそうでないと想定される遺構との空間的な分離性を推察することができそうである。 (児玉)

- 註 1 児玉真一編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』一Ⅺ― 1977 福岡県教育委員会
 2 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』一Ⅷ― 1977 福岡県教育委員会
 3 2に同。

IV 都地遺跡の調査

ここに報告すの都地遺跡は、九州縦貫自動車道建設用地内で16棟の掘立柱建物が根出されており（註1）、周知の古墳および掘立柱建物等の遺構の存在を想定して調査を実施した。調査対象地域はすでに開墾されて田畑となった部分が大半で標高はほぼ60m～70mを示し、旧地形を残す部分のごくわずかであった。よって、遺構の遺存状態およびろがりを確認するために昭



第39図 都地遺跡トレンチ配置図 (1/2,000)

和52年度に幅2mのトレンチ調査を行ない、南北に140m、東西に40m程のトレンチを発掘調査したが、遺構と認定されるものはなかった。昭和53年度に更にトレンチの数を増やして調査を実施したが、第22・第34トレンチで土壙・ピット等が、第10トレンチで黒曜石の石核が単独で出土したにすぎず、遺構はほとんど残っていないと判断し、都地古墳群の東支群の調査を実施した。この周辺は明治時代に草競馬場として利用され、広く削平されており、明確な遺構としては2基の古墳を検出したにすぎない。昭和54年度に最後の調査として都地古墳群の西支群を調査した。この古墳群は当初は墳丘の明確な1・3号墳の2基からなると想定していたが、代採終了時にわずかな墳丘を明する2号墳が発見され、発掘調査の過程で墳丘を全く欠失したか、当初から墳丘を持たない4号・5号石室を検出した。(児玉)

1 トレンチ調査

総数37本のトレンチを設定し、ピットや土壙を検出した部分だけ拡張して調査を実施した。各トレンチとも厚さ約15cm程の表土層、10cm前後の暗褐色土層を経て地山に達する。第22トレンチで縄文時代晩期の土壙1、所属時期平明のピットを、第33トレンチで時期不明のピット、溝状遺構を検出した。また、第10トレンチで黒曜石の石核を検出したが、二次堆積した土層が周囲に存在しており、石核に伴う遺構は存在しなかった。その他のトレンチでは1個のピットすら存在せず、黒曜石片が数点出土したにすぎない。よって、トレンチを設定した部分には古墳を除いて遺構は存在しないと判断した。

(1) 第10トレンチ (第39図)

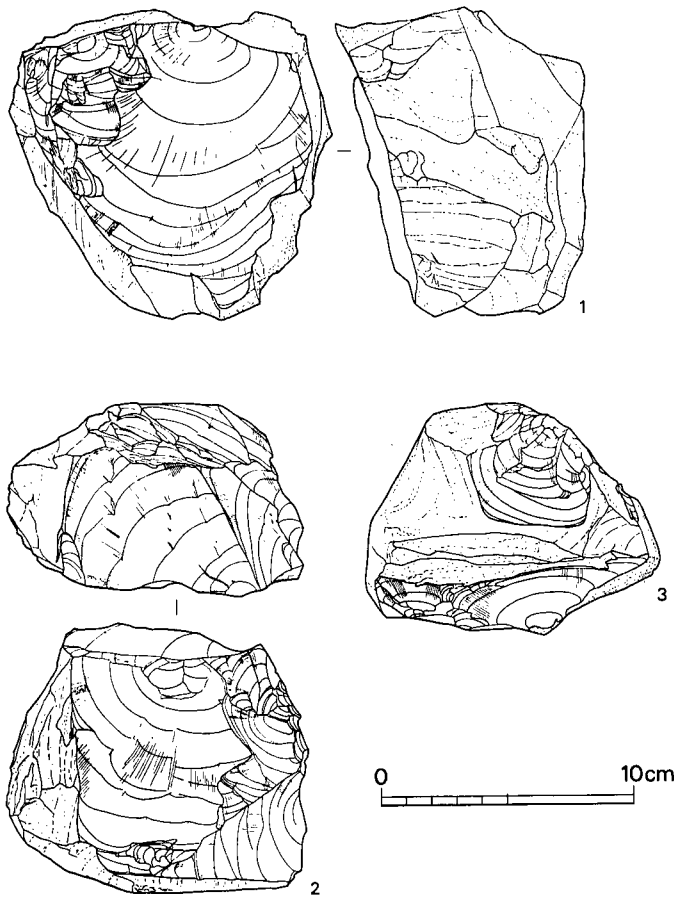
約1,000㎡を発掘したがピット1つすら検出できなかった。しかし、南西部地山上および地山からやや浮いて5個の黒曜石石核を検出した。2m以内の範囲内ではぼまとまって出土したが、チップ等は全く検出されなかった。この丘陵が削平された折に原位置を移動して二次堆積した可能性がある。(児玉)

石核 (図版39～42, 第40図)

5点まとまって出土した資料で、いずれも漆黒色で透明度のある腰岳産とみられる黒曜石製。このうち重量1.6Kgを越す1が最も大きく、最も小さい2は拳大よりひとまわり大きい。

これらの石核は、原石の一部のみに剝離面がみられ大半に自然面を残す1・2・5のグループと、自然面が半分も残らない3・4のグループとに区別できる。

前者では、1が平坦な自然面を選んで打面とし、数回一定方向の剝離を加えているが、剝離面からみて法量的にまとまった剝片を得たとはし難い。2では打面を作り出し、2・3回長さ



第40図 第10トレンチ出土石核実測図(1/3)

(2) 第22トレンチ (図版14, 第41図)

調査対象地域のはぼ中央に設定した幅5m, 長さ25mのトレンチで, 南壁に沿って縄文時代の土壌を検出した。遺構の広がりを確認するためにトレンチを拡張したが, 性格不明のピットと現代の畑に伴なう溝を検出したにとどまった。

土 壌 (図版14, 第42図)

長軸1.5m, 短軸1m, 現状での深さ0.4mのはぼ長方形のプランを呈する土壌である。床面は水平で埋土中に縄文土器を検出した。土器は浅鉢1, 深鉢2で, 土壌内に土砂が若干流入した後に埋没した状態で検出した。

(児玉)

6cm, 幅3.7cm程度のやや縦長な剥片を得ている。5は広い剥離面が1ヶ所にみられる。

後者では, 原石の各方向から無雑作な剥離作業を行っており, 不定形な剥片しか得ていないとみられる。しかし原石が大きく粗割りによって法量を減じたと考えることも可能である。これらは, 石核として十分な役割を果たす以前に埋没した資料であるが, 伊万里市腰岳産黒曜石であるとするれば, 約90kmもの距離を原石自体が運搬されたことになる。5点の1kg前後の重量は用途と運搬面からの公約数的な数値と言えよう。共伴遺物はないが, 腰岳産黒曜石が多用される縄文時代後期を考えたい。(小池史哲)

土壇出土の土器（図版43，第43図）

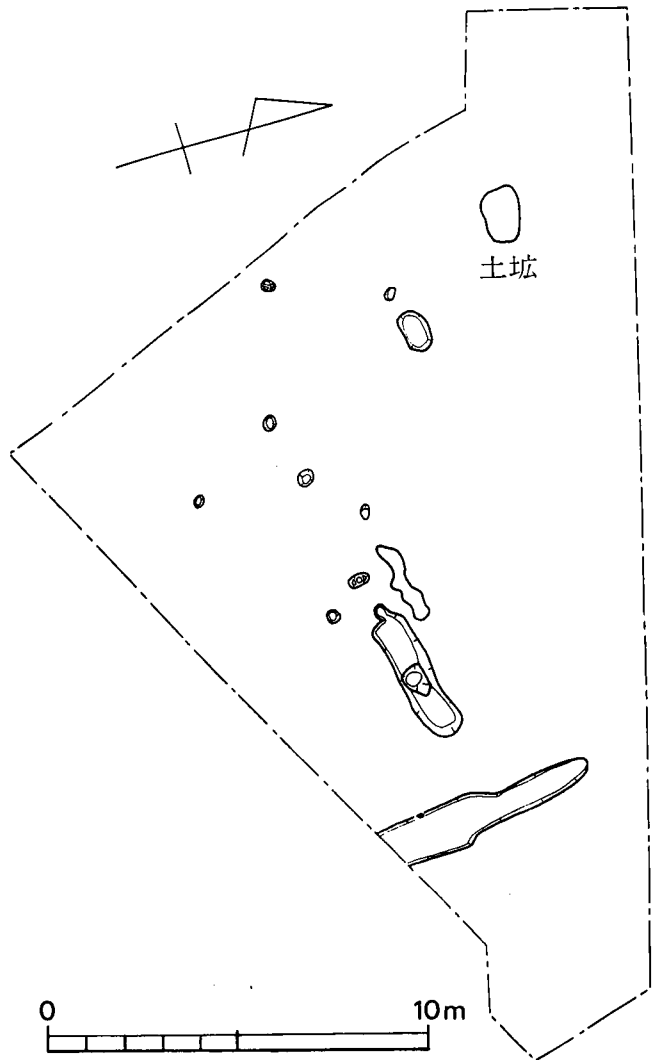
1は完形に復原できる精製の浅鉢形土器で，全体の4分の1以上が残存する口縁部径26.4cm，器高8.5cm・底径5.2cmを測る。底部は凹レンズ状の上げ底を呈す。低平な胴部は最大径20cmを有し，直立気味の頸部を介して，大きく外反して広がる口縁部へと続く。口縁部はやや直線的に伸び，口唇端部は丸味をもって収まるが，口唇部内面には1条の凹線がめぐる。また胴部界線の外面には2条の凹線がめぐる。

5～6mmの器壁には砂粒が含まれるものの精良な胎土で，焼成も良好だが，器面は風化によって荒れており，黄褐色ないしは茶褐色の器面に研磨仕上げの痕跡がわずかにみとめられる。

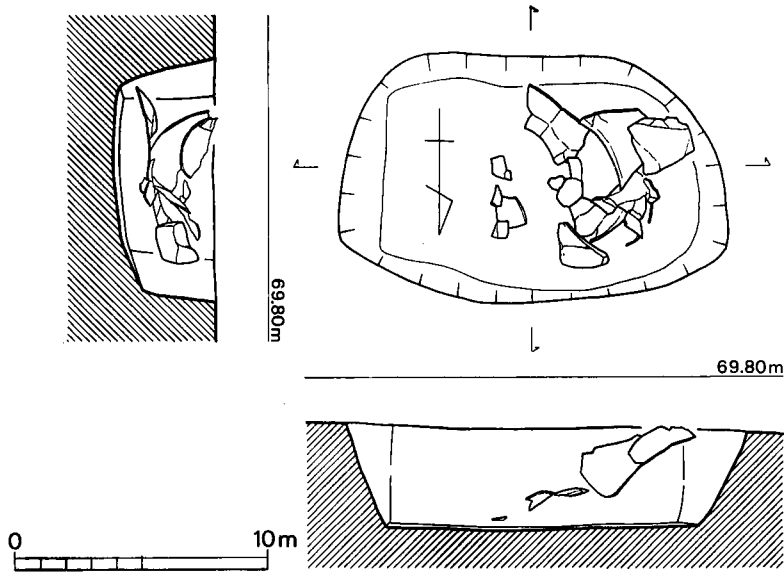
2・3は精製の深鉢形土器である。2は，口縁部が全体の約半分・胴部約3分の2を欠失するが，完形に復原できる。復原値では，器高50.2cm・口径48cm・胴部最大径38.8cm・底部径8.2cm・器壁厚6～10mmを測る。

器形は，やや上位にある胴部最大径から内彎する頸部を介して緩やかに外反する口縁部が伸び，一方胴部から緩やかに窄まる底部がレンズ状の上げ底となる。口唇端部は平坦にまとめられる。胎土には1mm前後の砂粒を含み，焼成良好で黄褐色ないしは淡褐色の色調を呈す。

内外面共にナデ調整されるが，外面の胴部や内面の上半部には4～6mm程度の幅をもつ条痕に近いナデ痕が残る。粗製土器とはいえ比較的精良なつくりで，外面の肩部に幅4mm程度の浅い凹線が2条めぐる。



第41図 第22トレンチ実測図 (1/200)



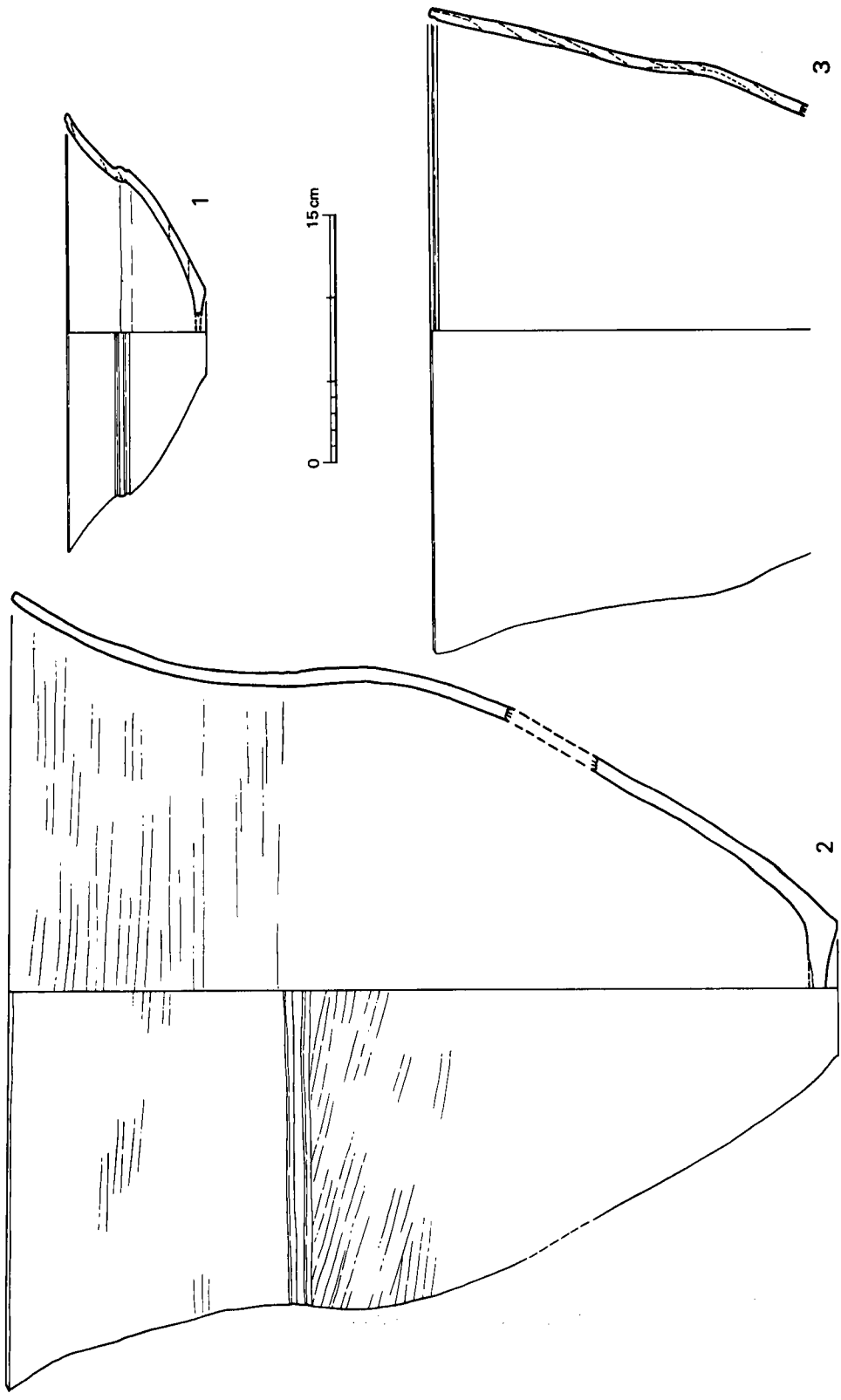
第42図 土壌実測図(1/30)

3も粗製深鉢形土器で、胴下半を欠失するが、2に比して頸部の内彎度が浅く胴部から口縁部に向ってやや直線的に広がる器形を呈す。約半分余りの残る口縁部径は38.9cmで、現存高23cm・胴部最大径32cm・器壁厚6～7mmを測る。

内外面共にナデ仕上げされ、口縁部内面に1条の凹線がめぐり、外面には何らの文様も配されない。胎土に1mm程度の石英・花崗岩・閃緑岩質の砂粒を含み、焼成良好。淡褐色の色調を呈し、風化が進んでいるが、器壁に製作時接合面が顕著に観察できる。

以上3点の土器は、共伴する一括資料である。いずれも胴部が緩やかに脹らみ、深鉢形土器にみられる肩部ないしは胴部上半に2条の凹線あるいは口縁部内面に1条の凹線を配すことが、浅鉢形土器に兼ね備えられた状態でみられることが注目される。また底部がレンズ状の上げ底になることも共通する。

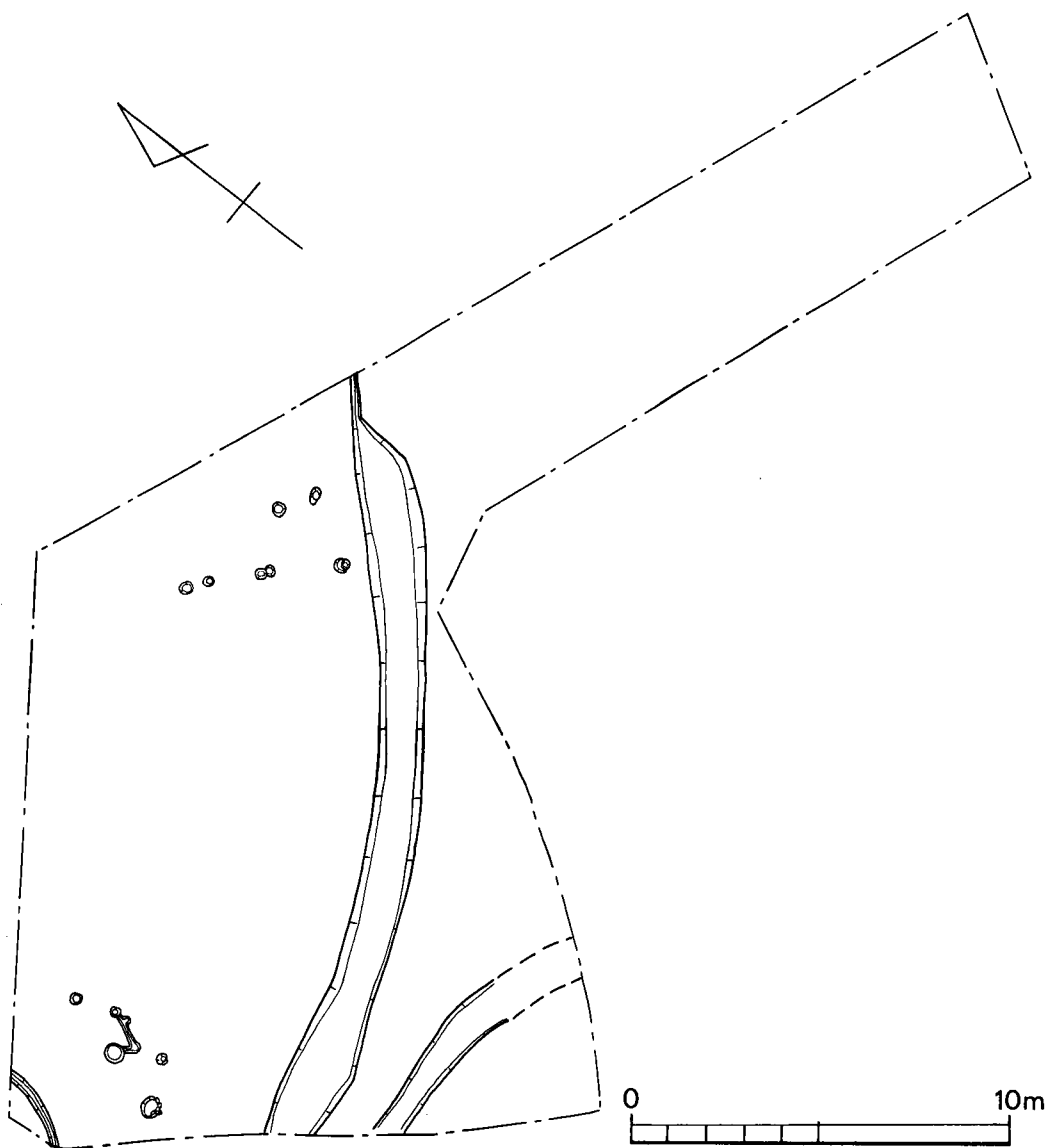
浅鉢形土器の口縁部が大きく広がり口唇部内面に1条の沈線を施す例は、縄文晩期前半期に盛行するものの、外面にも沈線を伴うことが多い。一方胴部に凹線が2条めぐり例は後期後半の宮滝式あるいは三万田式系の土器にみられる。また口縁部外面に2条・内面に1条、胴部外面に複数の凹線をめぐらせる例が瀬戸内地方の後期末頃にみられることからみて、当該資料は縄文後期末～晩期初頭頃に考えるのが妥当であろう。九州の御領式・大石式に類例をみないが、地域的な特徴として考えるべきであろう。(小池)



第43图 土壙出土器实测图 (1/4)

(3) 第33トレンチ (第44図)

調査対象地域南部に設定したトレンチで、ピット、溝状遺構を検出した。溝、ピットとも浅く、遺構としてのまとまりはない。このトレンチのすぐ南西は最近まで幕地として利用されており、幕石が散乱しているため、幕の部分へのトレンチの拡張は敢えて行わなかった。本トレンチから数片の弥生式土器片が出土したが、器形を判断できるものではなかった。(児玉)



第44図 第33トレンチ実測図 (1/200)

2 都地古墳群東支群の調査

昭和52年度のトレンチ調査の折に、1号墳の墳丘西側に幅8m、長さ20m、高さ1m程の土盛りがふたつ存在し、この周辺からかなりまとまった量の須恵器片が出土した。器種は坏身・坏蓋・高坏・甕・器台等におよび、数基の古墳が破壊されているだろうと推定した。昭和53年度の調査の結果、1号墳（都地E-1号墳）の北西側に石室を1基（都地E-2号墳）検出したにとどまった。この東支群含めて、南および東側の現在平地になっている部分は、明治年間に削平されて草競馬場になっており、明治16年および17年製の一銭銅貨各1枚、蹄鉄が調査区内から出土している。

(1) 都地E-1号墳

墳丘（図版15，第45・46・47図）

墳丘北側に東西3m、南北4mの盗掘拡が存在し、墳丘の平面形は裾部が削られているために径7m前後の不整形を呈し、高さは0.6m程度であった。調査の結果、盛土は最大で約60cm程の厚さしか残っておらず、推定される古墳の直径はおよそ8mである。

石室

盗掘されて全く残っていなかった。周辺からはⅢA形式をさかのぼる須恵器片は出土しておらず、おそらく、横穴式石室を内部主体としていただろうと思われる。

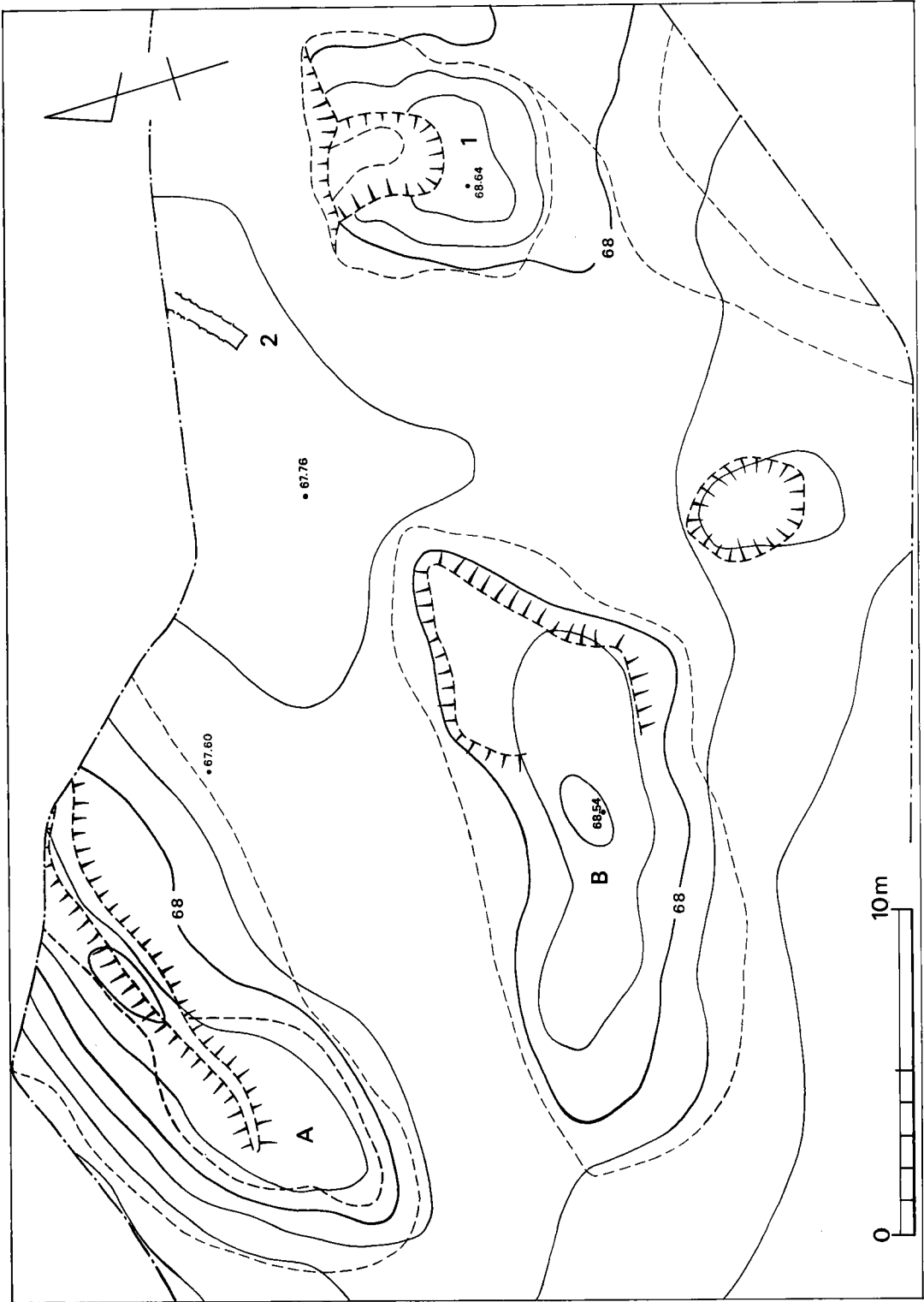
(2) 都地E-2号墳

墳丘（第45図）

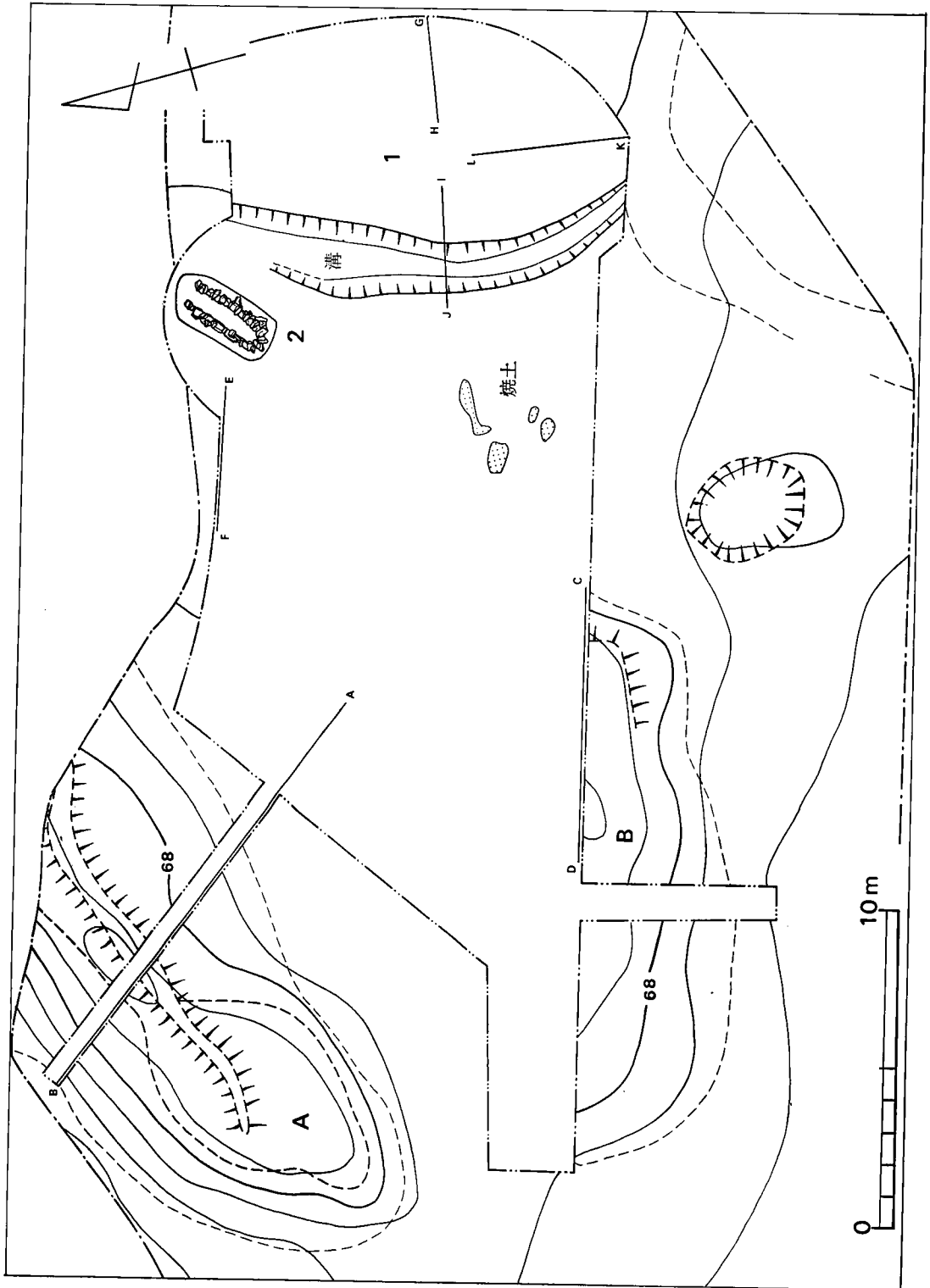
墳丘盛土は全くなかった。周溝も検出されず、頭初から墳丘があったことを示唆する証拠はないが、もし墳丘があったとしても低平なものであったろうと思われる。

石室（図版16・17，第48図）

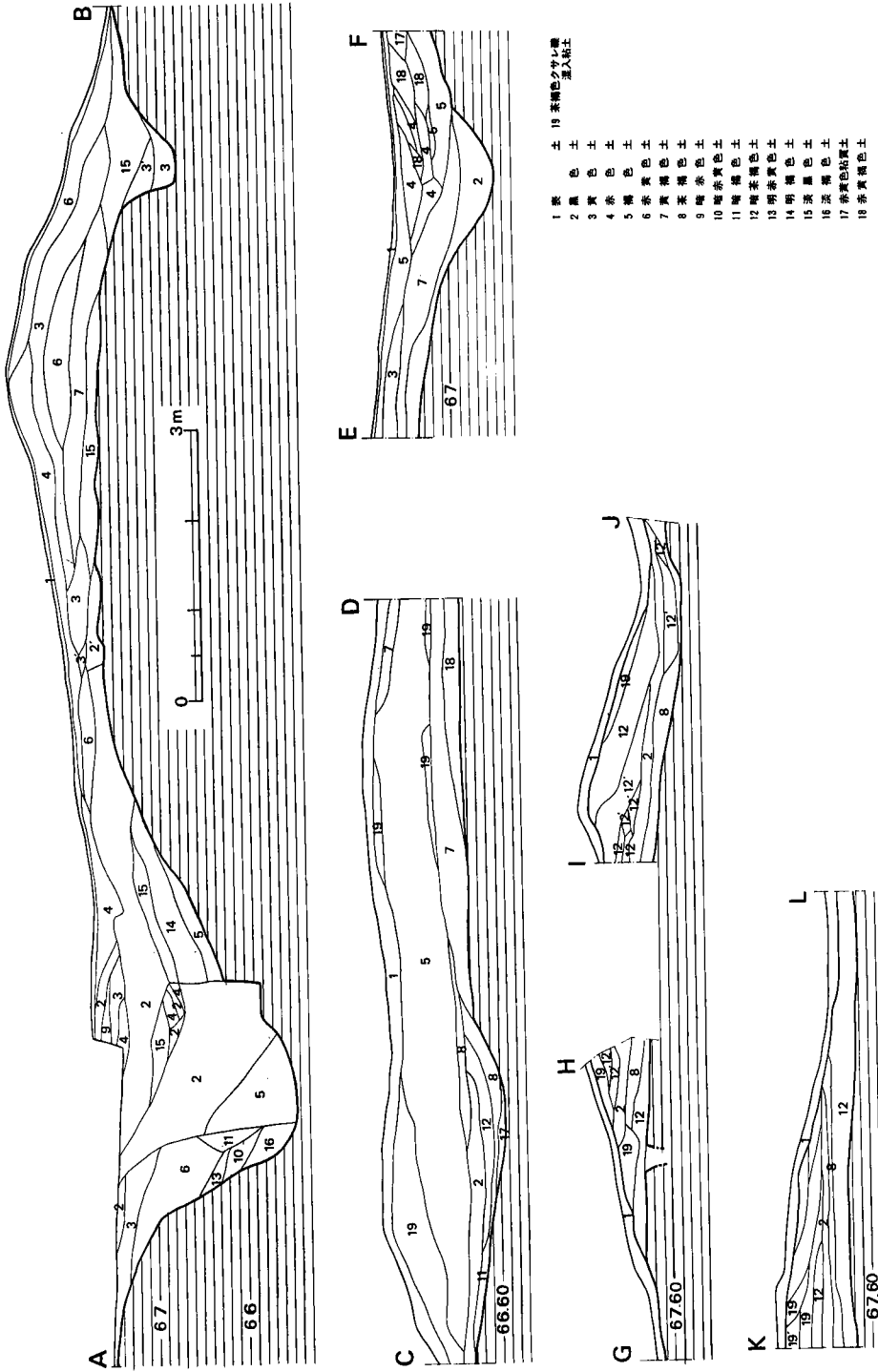
幅1.8m、長さ3.4m内の掘り方内に構築された北東に開口する小形の石室で、石室内法は幅0.6m前後、主軸長2.6mを測る。石室床面には5cm～10cmの大きさの小円礫を重層的に敷きつめ、横口部は現状では20cm～40cm大の自然石15個で閉塞している。仕切り石や袖石的なものがない構造の石室で、玄室に相当する部分に小円礫が敷かれているためにそれと判断できるにすぎない。周壁の石材は玄室に相当する部分は大き目の腰石を使用し、閉塞部の腰石は小さい。腰石の上は自然石を小口積みし、現状では3段の石積みが残っている。天井石を欠失しているので、床面から天井石下面までの正確な数値はわからないが、本石室の構造から推測して1m



第45図 都地古墳群東支群周辺地形実測図 (1/200)



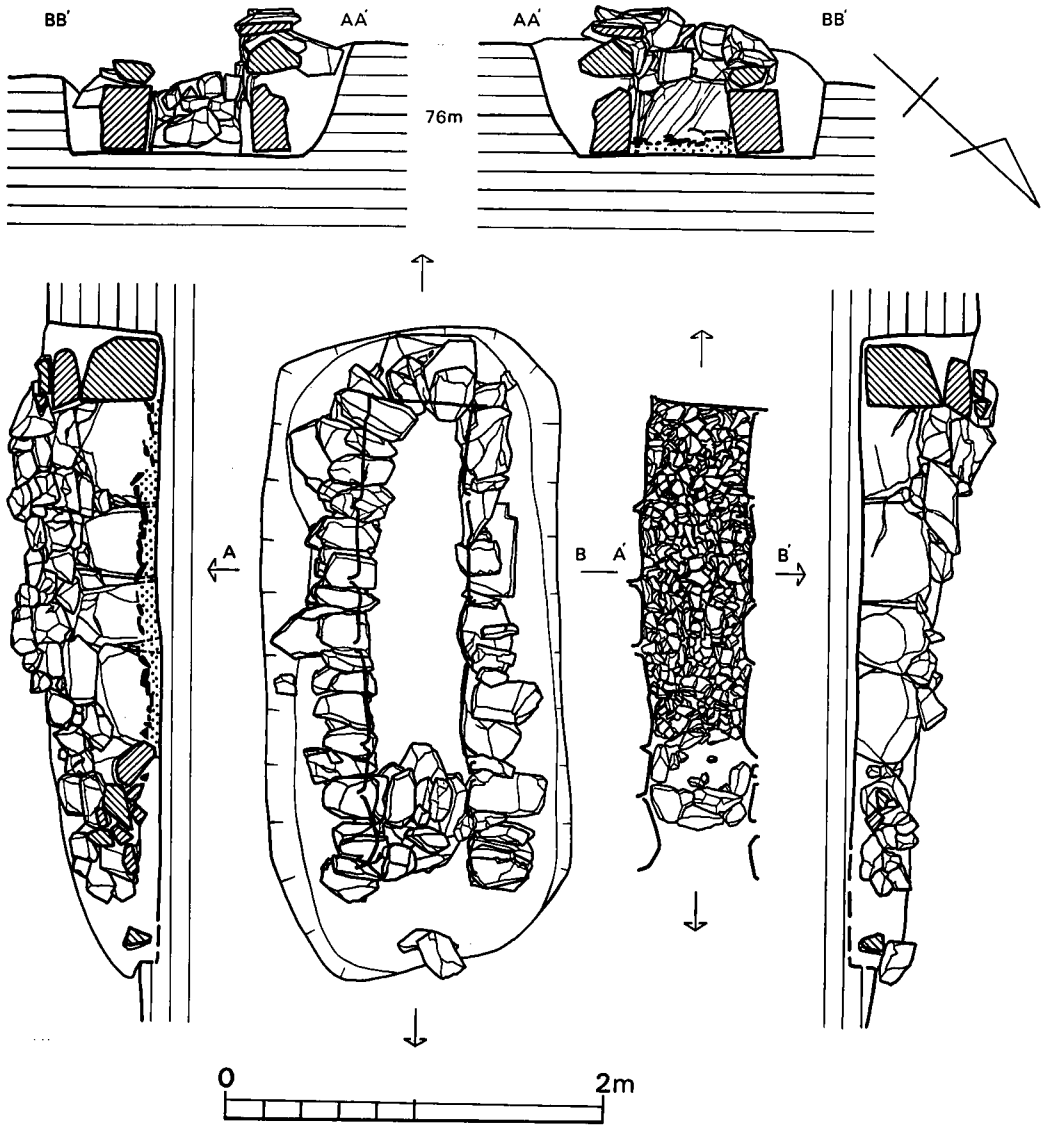
第46図 都地古墳群東支群遺構実測図 (1/200)



第47图 都地古墳群東支群E-1号墳，土盛りA・B土層断面図(1/80)

を超えることはないと思われる。周壁と掘り方との間の空間には石材による裏込めはしておらず、掘り方掘削時に生じた地山の土をつき固めている。本石室は追葬を行っており、耳環4個の出土状態がそれを裏づける。

本石室は一般の横穴式石室とは異なった構造をしており、玄室に相当する部分に注目すれば細長くて箱式石棺をひとまわり大きくした程度の規模であり、控え積みはなく、壁体の石積みの状態などから「石棺系堅穴式石室」（註1）に類似しており、本石室は「石棺系堅穴式石室」を母体にして成立した構口式石室だろうと思われる。



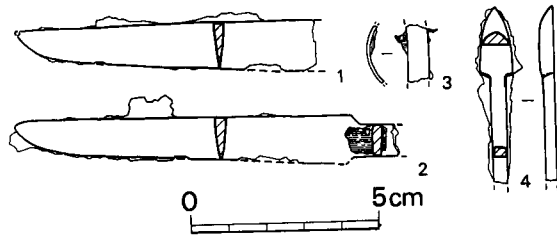
第48図 都地E-2号墳石室実測図 (1/40)

出土遺物

鉄刀片，鉄鏃，刀子，耳環が床面から出土した。遺存状態が悪く，鉄刀は酸化が進行して原状をとどめない。鉄器すべて右側壁に沿って出土し，耳環1対が第1次床面出土であるほかはすべて追葬時の第2次床面からの出土品である。

刀子（図版43，第49図—1・2）

1は身だけの破片で，関の形態は不明である。現存長8cm，最大幅1.4cmで先端部に向かって細くなる。木質の付着は見られない。2は茎の過半を欠失し，現存長10.3cmを測る。身の長さは9cm，幅は関付近で1.3cmを測り，先端に向かってやや細くなる。



第49図 都地E-2号墳出土鉄器実測図（1/2）

。両関で，関から茎にかけて木質が残り，木柄が装着されていたことがわかる。

鞘金具（図版43，第49図—3） 幅5.5mm，厚さ1mm程度で過半を欠失している。木質が銹着しており，木目は金具と直角方向にはしる。

鉄鏃（図版43，第49図—4） 片丸造りの小型の鉄鏃で，茎の過半を欠失して現存長4.8cmを測る。木質の銹着はなく，矢柄に装着されずに副葬されたのかも知れない。他に茎の破片が数点出土している。

鉄刀（図版43） 小破片となり，銹化が進行して旧状を推定できず図示しなかった。鉄片の量から推測して副葬されたのは1振りと思われる。

(3) その他の遺構

溝（第46図）

1号墳の西裾を南北に走る幅1m～2.5，深さ0.5m程の溝で，溝底は北側が低くなる。北端の溝底から須恵器の甕・坏等が出土している。

焼土（第46図）

上述した溝の西側で検出した。何に伴う焼土であるか不明である。

土盛り状遺構（第46・47図）

中世墓を想定して調査を実施したが，そのような形跡は見られず，盛土中に須恵器，土師器，黒曜石片および同石器を含んでいた。おそらく，この地を草競馬場として削平した時の寄せ土であろうと思われるが確証はない。（児玉）

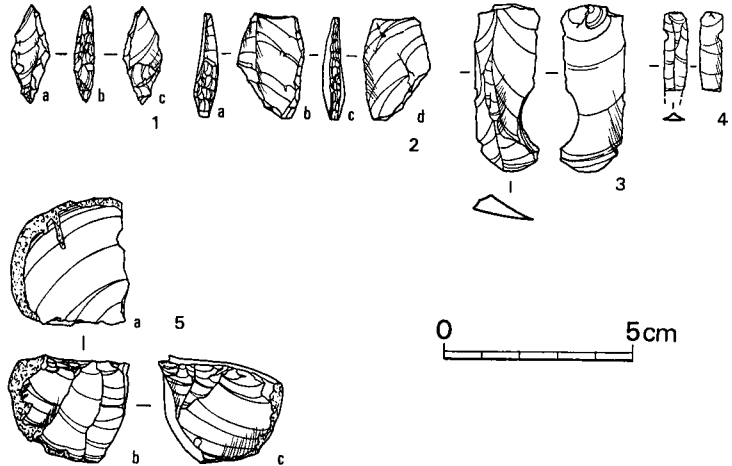
(4) その他の出土遺物

土盛り状遺構から石器4点と須恵器片が多量に出土した。これらは原位置を移動して破碎されたものであり、完形、あるいはそれに近い状態に復元できるものは少ない。

土盛り状遺構出土の石器 (図版42, 第50図)

ナイフ形石器 (1

・2) 1は土盛り状遺構(以下、土盛とする)Bから出土した。不定形の剝片を用い、c面(主要剝離面)左側辺部に刃潰し加工を行い、背を作り出している。a面左側辺部下位はエッジの部分に刃潰し加工を行っている。c面下部は左



第50図 土盛り状遺構A・B出土の石器(1/2)

右からの平坦剝離を施している。長さ2.5cm, 幅1.05cmを測る。石材は黒曜石である。2は縦長剝片を用いて基部を作り出しの際、打面をカットしている。a面・c面の刃潰し加工は、d面(主要剝離面)から行われており、b面左側辺部に刃部を形成している。現存長さ2.7cm, 幅1.8cmを測る。石材は黒曜石である。

石核(5) 卵大の小礫を半割し、その際にできた面を打面として、a面を作り出してからの数回の打撃によって、c面(側面)を作り出している。c面作り出し後、a面端部に加撃することで剝片削取が開始される。石材は黒曜石である。

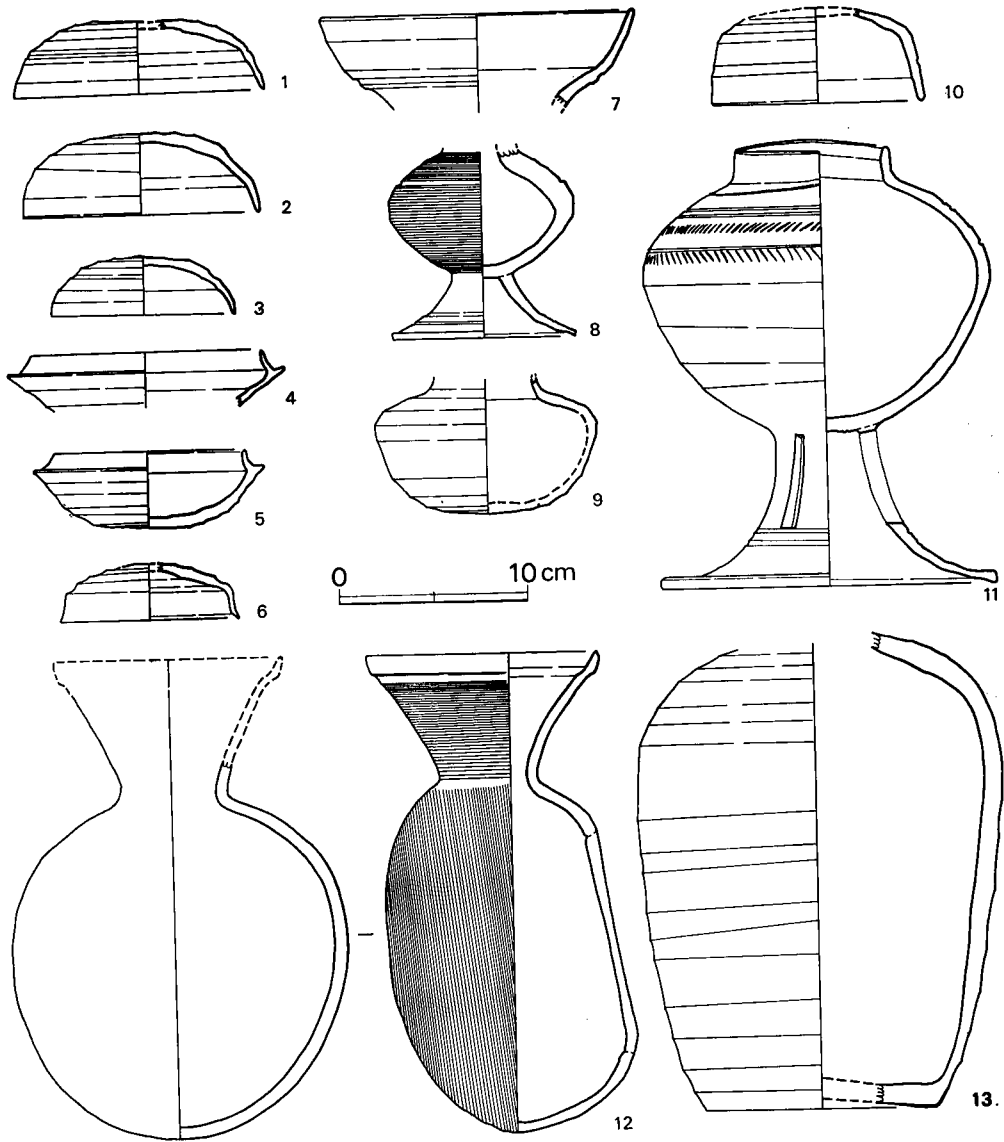
剝片(3) 不定形石核から剝離された縦長剝片で、長さ4.4cm, 幅1.6cmを測る。石材は黒曜石である。

刃細石(4) 末端部を打面したもので現存長20cm, 幅0.6mmを測る。石材は黒曜石である。

(平ノ内)

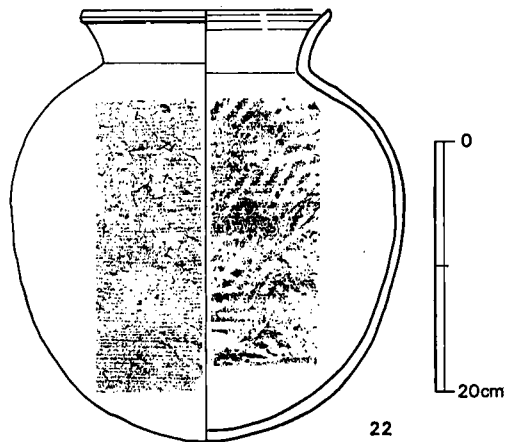
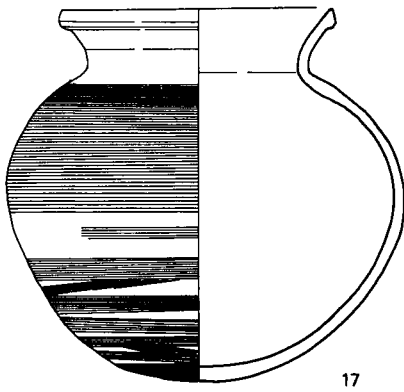
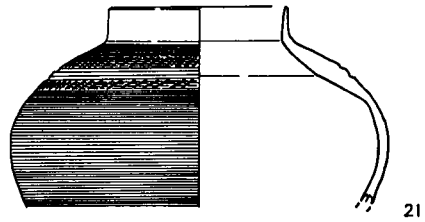
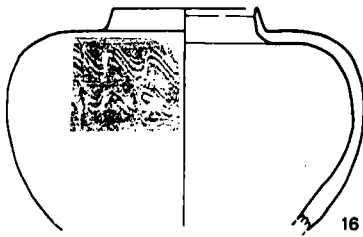
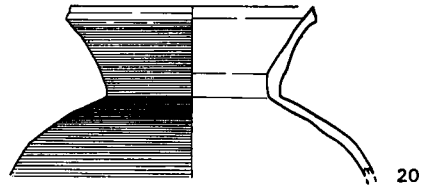
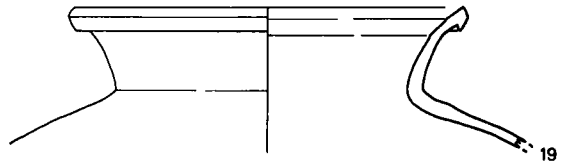
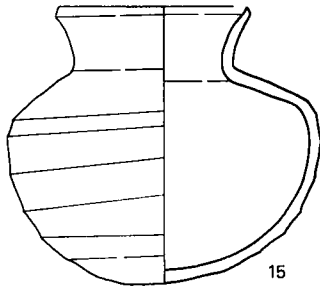
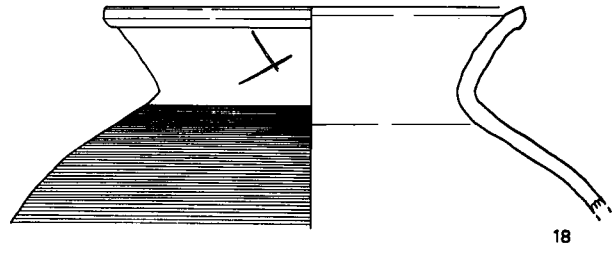
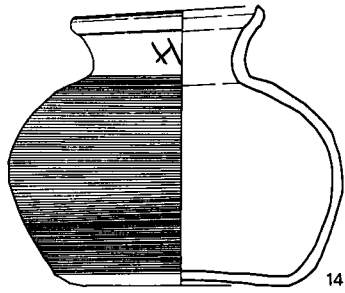
須恵器(図版44~46, 第51・52図)

ⅢA型式以降の坏蓋・坏身・蓋・甕・提瓶・平瓶・壺・甕・脚台付短頸壺・器台等が出土している。器台はトレンチ調査の折に脚部が細片で出土している。長方形の透し孔とヘラ描きの文様がはいることまでわかるが図上復元はできない。以下、多量の須恵器のうち、実測可能ものについてのみ記述する。



第51図 溝・土盛状遺構出土土器実測図① (1/4)

坏 蓋 (1~3) 1は1号墳表土, 2は土盛状遺構(以上, 土盛と略記) A, 3は溝から出土した。1から3に小型化するにしたがって天井部ヘラ削りの範囲はせまくなる。ロクロの回転方向は1が逆時計廻り, 2・3は時計廻りである。調整はナデおよび回転ナデである。とにも砂粒を多く含み, 焼成は良好である。3は天井内面にヘラ記号を有する。



第52图 溝・土盛状遺構出土土器実測図② (1/4)

坏身(4・5) 4は土盛B, 5は溝から出土した。4は不明だが5はヘラ削りの範囲は底部の $\frac{1}{2}$ 程で、ロクロの回転方向は両者とも時計廻りである。調整はナデおよび回転ナデである。砂粒を多く含み、焼成は良好である。

蓋(6・10) 6は土盛A, 10は溝から出土した。6は短頸壺の蓋で、天井部と口縁部の境は広い凹線状のものが一巡し、口唇部は外側にはねている。天井部のヘラケズリの範囲は広く、ロクロは退時計方向に回転している。10は11の脚台付短頸壺とセットをなす可能性のある蓋で、天井部ヘラ削りの範囲はせまく、ロクロは時計方向に回転している。ともに多量に砂粒を含み、焼成良好で堅固である。

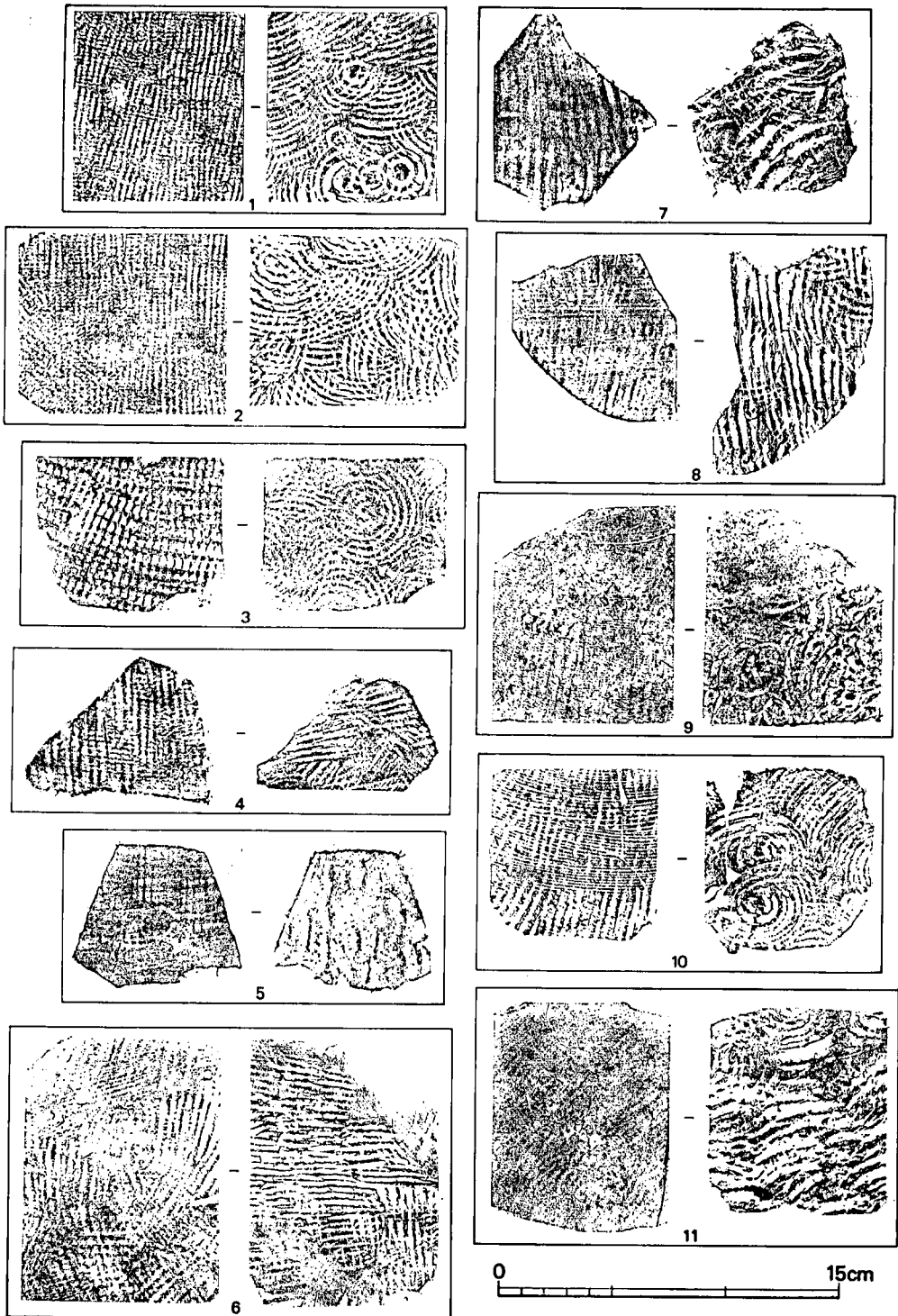
甗(7) 口縁部径16.5cmを測る大型甗片である。口縁部下と頸部に楕描波状文を入れる。調整はロクロの回転を利用したナデで、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で黒灰色を呈する。

脚台付壺(8・11・21) 8・21は土盛A, 11は溝から出土した。8の壺部は器肉が厚く全体にカキ目調整を行っており、体部上半にヘラにより一条の沈線がめぐり、脚部はラッパ状に裾広がりとなり、内外面は回転ナデ調整を行っている。11・21はほぼ同様の器形を呈すると考えられる。11は溝, 21は土盛Aからの出土である。11は体部上半の2ヶ所に沈線を巡らし、沈線の下位にクンにより施文している。脚部は長方形の透し孔を三ヶ所に配する。頸部に重ね焼きの痕跡を残す。21は体部をカキ目調整した後に2条の沈線を巡らし、沈線の上下にヘラで施文している。ともに多量の砂粒を胎土に含み、焼成良好で黒灰色～灰色を呈する。

提瓶(12) 溝からの出土で口縁部を一部欠失するがほぼ完形である。口縁部を除いて全面にカキ目調整を施している。胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で、部分的に灰をかぶり、暗色～暗灰色を呈する。

壺(13・15～17・20) 13は1号墳, 16は土盛A, 20は土盛B, 他は溝から出土した。13は蔵骨器と推測され、高台付坏底部が13付近から出土しており、蓋として使用されたと推定される。口縁部は存しないが打ち欠いたと思われる。15は口縁部の $\frac{1}{2}$ を残して完存する。体部～底部はヘラ削りを行い、底部周辺はヘラ削り後にナデ調整を施している。口縁部～体部上半は灰をかぶっている。16は短頸壺で肩に楕描き波状文がはいる。脚台のつく可能性がある。17は完形品で肩以下にカキ目調整を施す。体部下半のカキ目は断続的である。体部内面に青海波文がのこり、本来は外面にタタキを行っていたと思われるが、現状では全く残っていない。20は他と比して頸部がやや長目で、口唇部はロクロの回転を利用してつまみ出されている。外面は全面にカキ目調整を行っている。ともに胎土には多量の砂を含み、焼成良好にして堅固で暗灰色～黒灰色を呈する。大きさは、13が現存高25cmを測るが、他は15cm～20のものである。

甗(18・19・22) 19は土盛A, 他は溝から出土した。18は口縁部下にヘラ記号が見られ、体部外面は平行タタキ目を消し去るように入念にカキ目調整を行っている。内面は青海波文が残る。19は外面に平行タタキ目、内面に青海波文が残る。22は略完形で、口縁径19.5cm, 器高



第53図 都地東支群周辺出土甕片拓影 (1/3)

64.5cmを測る。体部の器形に特徴があり、長胴形で安定感がある。体部外面は入念にカキ目調整を行っており、タタキの痕跡は残らない。内面は底部近くは青海波文が、上部は板目の圧痕が交叉している。3個体とも胎土に多量の砂粒を含み、焼成良好で硬質である。

大壘片（第53図）ともに体部の小破片で、焼成良好で硬質である。厚さは1cm前後である。タタキ板に使用された板材の木目は1・2のように割と狭いものと、3・4・10のように広いものがあり、木目と直交して細い溝を彫り込んでおり、タタキの痕は格子目状を呈する。また7～9のように木目と平行に溝を彫り込んだものもあり、これらにも精・粗の差がみられる。タタキ目調整を施した例がある。タタキは縦方向に割と整然と行われているものが多いが、一部に6のように不定方向にタタキが見られる例も存在する。

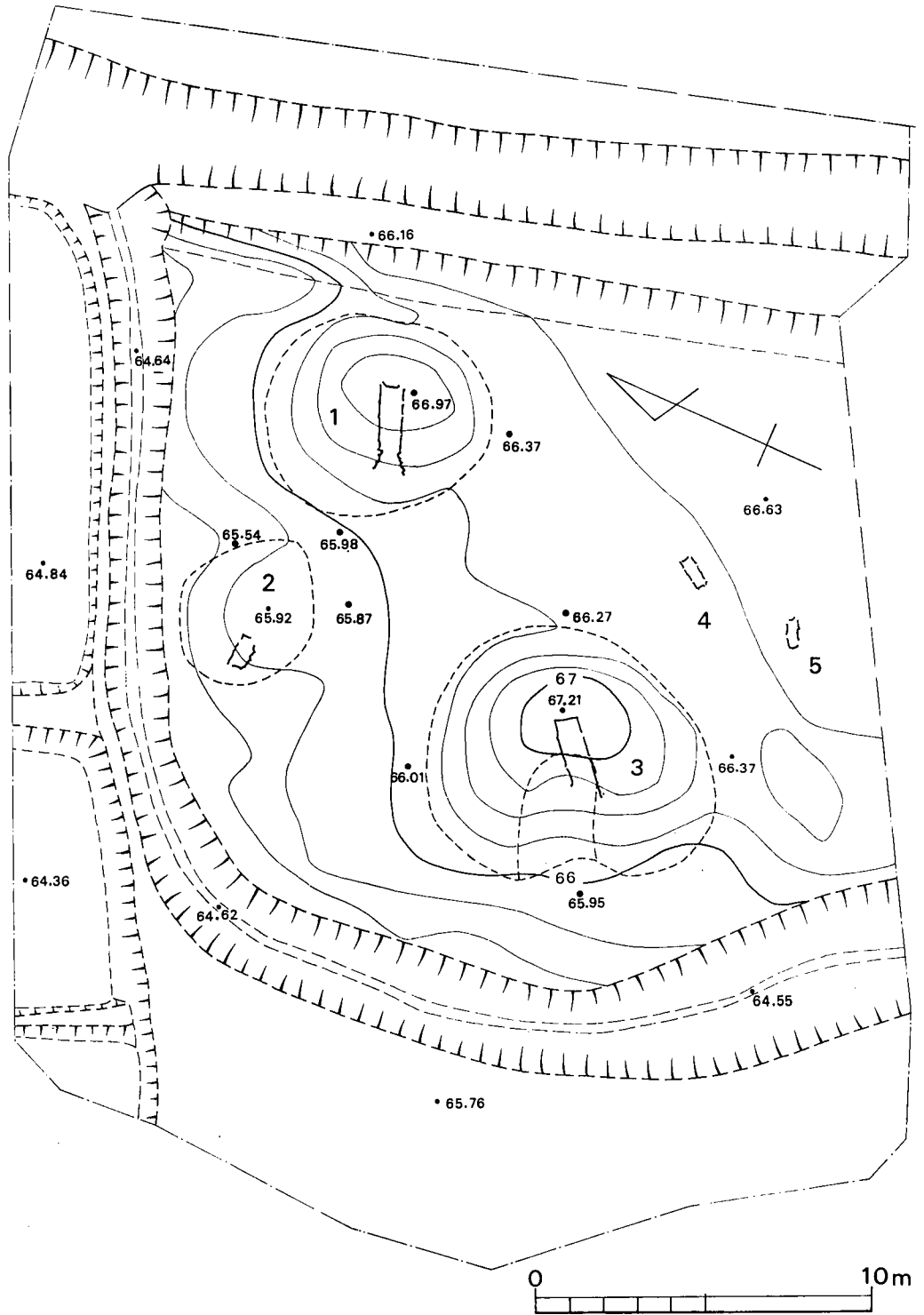
内面の当木は、木材を木目と直行するように横に切断したものを使用した例が多く、同心円文状にその痕跡が残っている。当木の直径は内面に残る同心円状の痕跡で計測すると、1・3・10が5cmを超えず、2が6cm程度、9は更に太いものを使用している。7・11のようにわずかなカーブを描くものは、太い木を縦割りし、木心部側を割って捨て去り、木皮に近い部分を当木として使用したものと推測される。また4・6のようにタタキ板と同様な直線的な圧痕を残す例があるが、破片のため、当木の大きさは明瞭ではない。

以上のように、本遺跡出土壘のタタキ板は基本的には1種類で、木目と平行するか直交するか相違があるにせよ直線的な溝が痕跡として残るものであり、木目と直交するものについてはタタキ板が道具として完成するまでに溝を彫り込む作業が追加されるにすぎない。当木は木材の小口を使用するか否かで二種類に分けられ、小口部分を使用する場合、木心部をとり除いて木皮側だけを使用する場合と、木心部を含めて細いものを使用する場合にわかれる。使われ方の差は現状では必ずしも明確ではない。また、タタキ板、当木は使用された木の種類によっては道具として完成する以前に焼かれた可能性を考慮しなければならないだろう。（児玉）

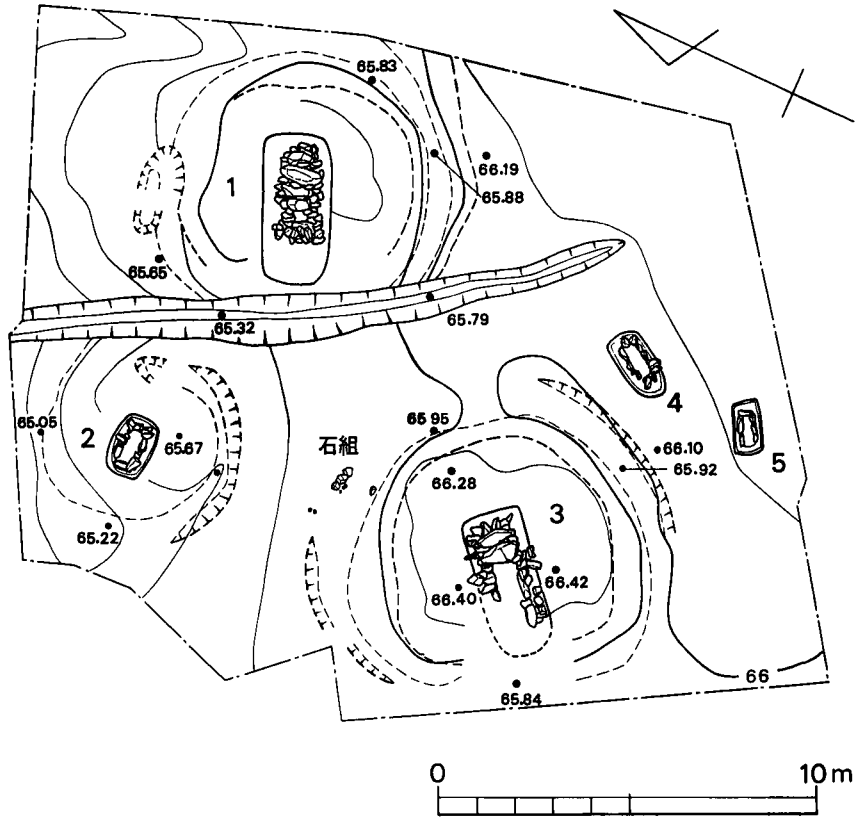
註 1 山中英彦『東宮ノ尾古墳群』 1974 北九州市教育委員会

3 都地古墳群西支群の調査

墳丘の存在が明瞭な1・3号墳（都地W—1・W—3号墳）は当初からその存在が確認されており、古墳2基の予定で調査にはいった。この古墳群周辺はすでに田畑地として開墾が進んでおり、旧地形に近い状態を残す本古墳群の存在する部分を調査対象地とした。樹木の伐採の過程で低墳丘を有する2号墳を確認し、発掘調査の過程で、現状では墳丘を有さない4号・5号石室を検出した。これらは標高65m～66m台の平地に構築されており、水田面との比高差は約20m程である。古墳群周囲は放置された田畑に樹木や竹の群生する藪である。



第54图 都地古墳群西支群地形实测图 (1/200)



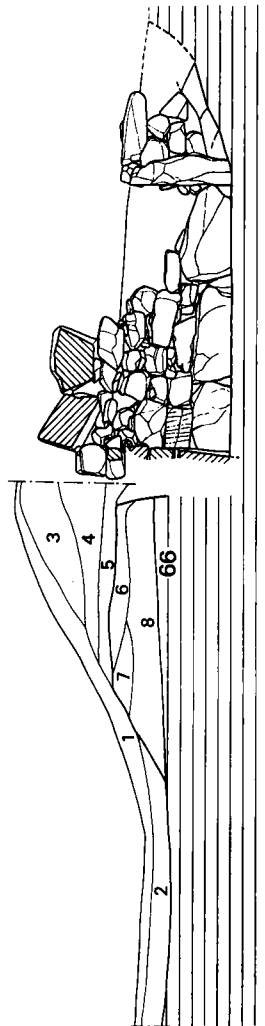
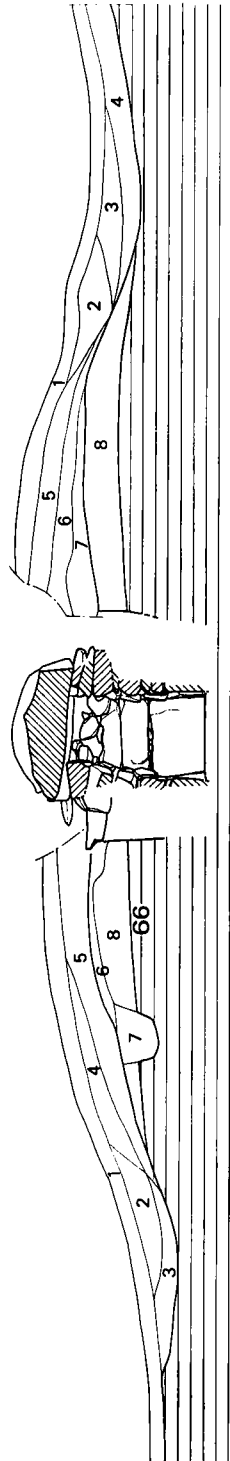
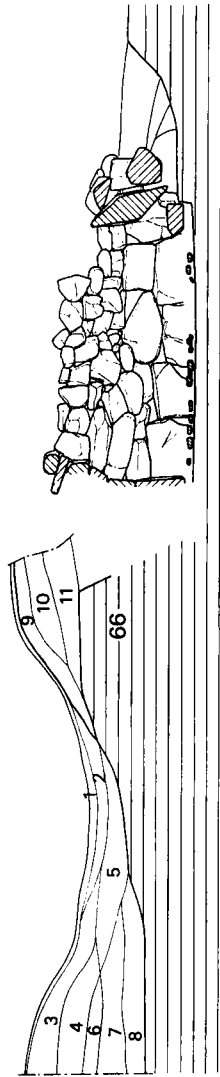
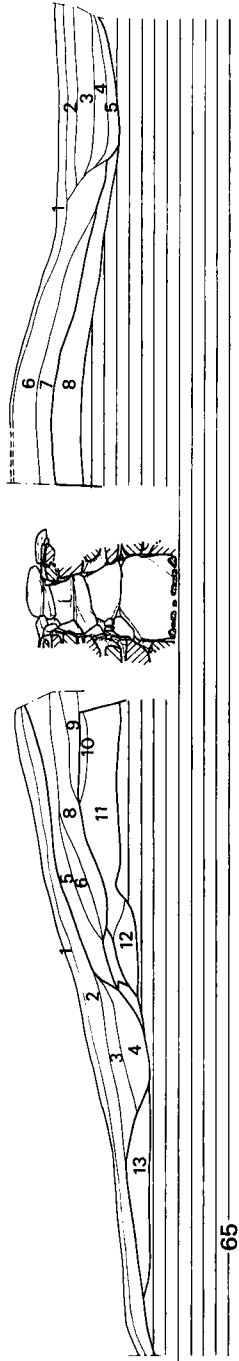
第55図 都地古墳群西支群全体図 (1/200)

(1) 都地W—1号墳

墳丘 (図版18, 第54~56図)

樹木伐採後の墳丘の見かけの規模は直径6m~6.5m, 最も比高差のある部分で高さ1m程度である。この時点で天井石の一部がすでに地表に露出しており, 墳丘盛土はかなり流失していることが予測された。調査の結果, 墳丘の南半部に弧状の溝を検出し, これをもとに直径7m前後の円墳に復原され, 墳丘の高さは溝底から1.5m~2m程度であったろうと思われる。

墳丘盛土については, 明確な旧表土層や石室周囲を特に入念に土を積んで第I次墳丘を形成したあとは観察されず, 古墳構築に先だって周辺の地山整形をし, 石室掘り方・弧状溝を掘り込み, 石室構築と併行して一気呵成に盛り上げたと推測される。現存する盛土の厚さは60cm程で天井石全体を覆うのには不足し, 墳丘中央部では厚さ0.5m~1m程度の盛土が流出してい



第56图 都地W-1 (上2段) · W-3 (下2段) 号填丘断面图 (1/60)

ると推測される。墳丘調査においては、石室構築—墳丘構築に先だつてのまつりに使用された土器は検出されず、送葬儀礼に伴う土器を少量検出したにすぎない。

石室（図版19～22，第57図）

主軸長4 m，幅1.8 m，深さ約1 mの略長方形プランの掘り方内に構築された竪穴系横口式石室である。石室は主軸を東北東～西南西におき，西側に横口部を設置している。

天井石は四枚残存するが横口部寄りの一枚が盗掘時にはずされており，本来は5枚の天井石が架構されていた。天井石相互の間隙には大きさが30 cm前後の自然石を詰め込んで石室内への土砂の侵入を防ぐ努力をしているが粘土は使用されておらず，完全に密閉するまでには至っていない。

石室は主軸全長2.6 mで，石室内部は奥壁から仕切石までの主軸長1.93 m，幅0.65～0.7 m，天井石までの高さは約1 m程ではほぼ直方体の空間を構成する。この空間は，長さとの比が3対1，長さとの高さが2対1であり，石室の長さが本石室の規模を決定した重要な要素であったろうと推測される。

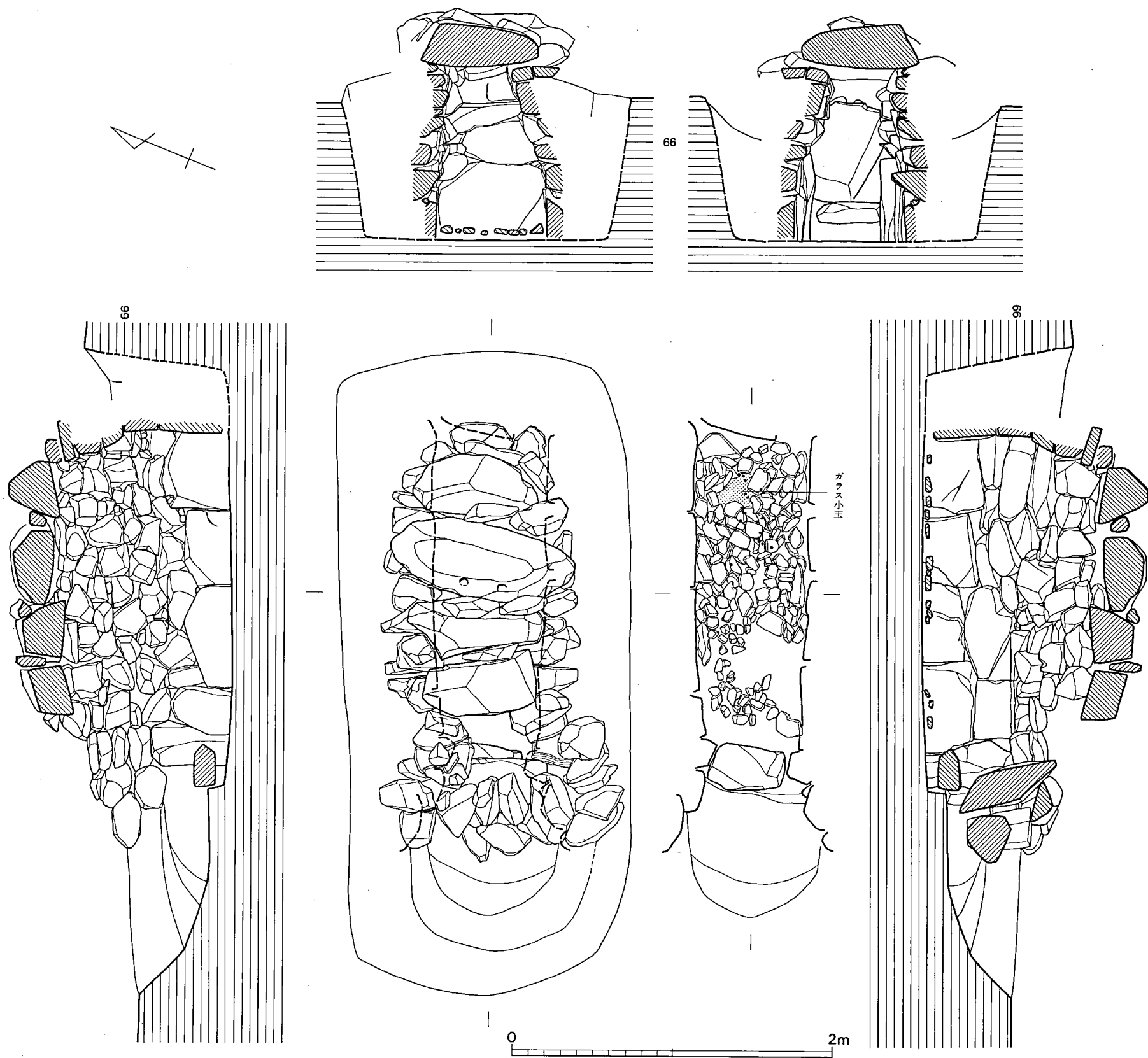
石室周壁は腰石上に5段程度の石積みを行って壁体を構成し，その使用石材は腰石に大きめの石を用い，その上の石積みは左壁に比して奥壁・右壁はやや大き目の石を積んでいる。石積みの状態は荒し，隙き間が目につくが小石を使って間詰めをする努力はなされていない。石室床面は本来は小石が敷き詰められていたと詰められていたと思われるが，盗掘時にかなり荒されており，敷石を欠失した部分もある。床面の敷石は一重である。

横口部分は幅0.6 m，高さ0.8 m程で一枚の平石と10個程の自然石で閉塞されている。袖石は幅20 cm，高50 cm程の石材が立てられ，石室不面図に見る限りは袖石としての機能を果たしているが，立体的にはかなり形骸化したもので側壁に同化しつつある。両袖石間の仕切り石は平石を用い，石室掘り方床面との間に7 cmの土をかんで設置されている。それは，前庭部床面と石室内の掘り方床面との間に約10 cmの落差があることに起因すると推測される。

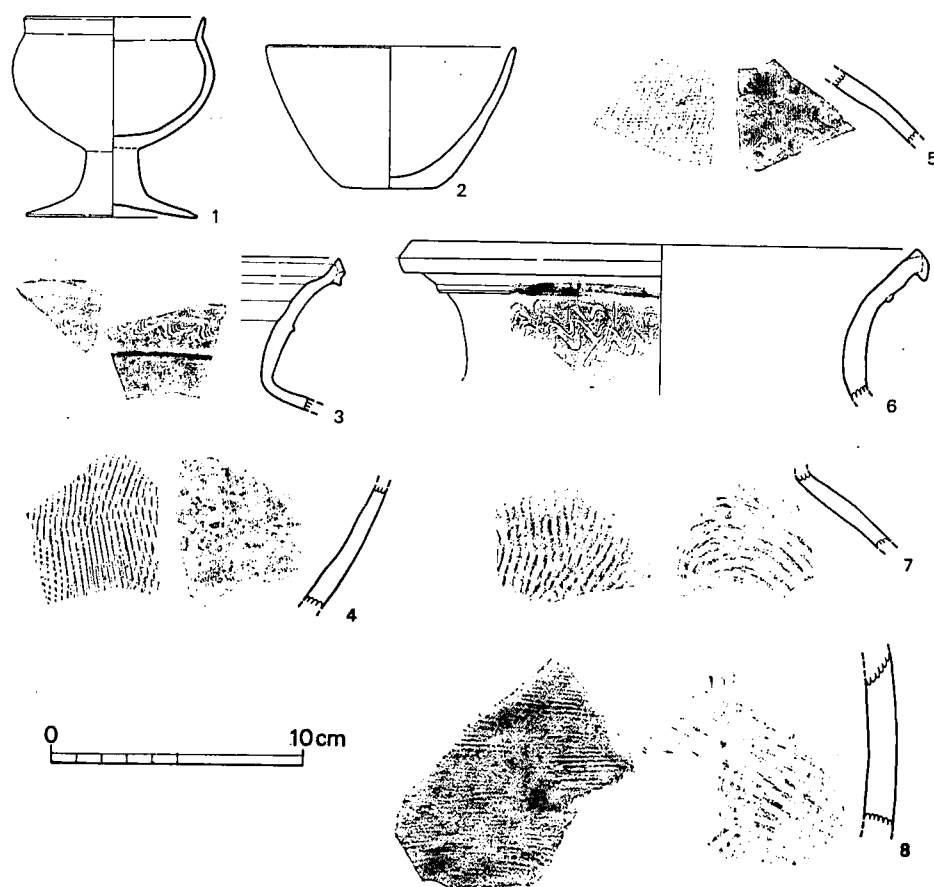
前庭部壁体は両側壁に対して「ハ」字形に開き，その積み石の下段の石は床面の傾斜に沿って設置されるため，外側ほどレベルが高くなり，石積み自体は極めて不安定である。前庭部の閉塞石は地山面から10 cm以上浮いており，この地山面が初期の床面であるならば追葬の可能性を示唆している。

出土遺物（図版47・48，第58～60図，表2）

石室床面から多量のガラス小玉・鉄器片が，墳丘盛土から弥生式土器小片が，墳丘南西裾部から土師器および須恵器片が出土した。墳丘裾部出土の土器は遺体埋葬時の「まつり」に使用された土器だと思われる。



第57図 都地W-1号墳石室実測図(1/30)

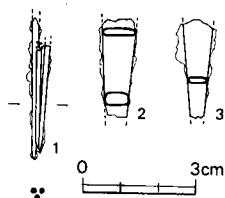


第58図 都地W-1号墳出土土器実測図(1/3)

須恵器(3~8) すべて甕の破片で小片のため図上復原は困難である。3は各々異なった部分の破片から推定復原したが口縁部径は出し得ず、傾きも正確ではない。頸部中位に削り出しの凸帯を有し、口縁部とこの凸帯の間に楡描き波状文が巡る。口唇部は断面観察によれば粘土を貼り付けて形成しているように見え、その形態は古式の特徴を示している。4・5は3と同一個体と思われる破片で、4は底部付近、5は肩部付近に相当する。ともに内面は同心円文をすり消しているが、5はわずかに同心円文が残る。外面はきめの細かいタタキが入念に行われ、肩部付近は8本で1単位となる楡状器具でカキ目状の調整をタタキの上から行っている。これらとともに胎土は小砂粒を含み、焼成良好にして堅致で暗灰色を呈する。6は復原口縁部径20cmを測る口頸部小片で、口唇部に粘土を貼りつけて垂れ下がり気味の口縁部をつくっている。頸部上位に断面が台形の凸帯を巡らし、凸帯下に楡描き波状文の装飾を行う。しっかりとした土器で、胎土に砂粒を含み、焼成良好で堅固であり、ネズミ色を呈する。7は肩から頸部

にかかる部分の小片で3～5と比して目の荒いタタキ目が観察され、内面の同心円文はすり消されていない。8は大甕の胴部皮片で他の須恵器にくらべて焼成はやや悪く、外面はタタキ痕跡が残らない程カキ目調整を行い、内面の荒く直線的な当木の圧痕は放置されたままですり消されてはいない。

土師器 (1・2) 1は脚台を有する鉢で、口縁部径7cm、器高8cmを測る。器面が荒れており調整は不明である。2は口縁部径9.8cm、器高5.7cmを測る鉢形の土器で、器面が荒れて調整は不明である。前者は化粧土を用いているようで器壁は明赤黄色を呈する部分がある。



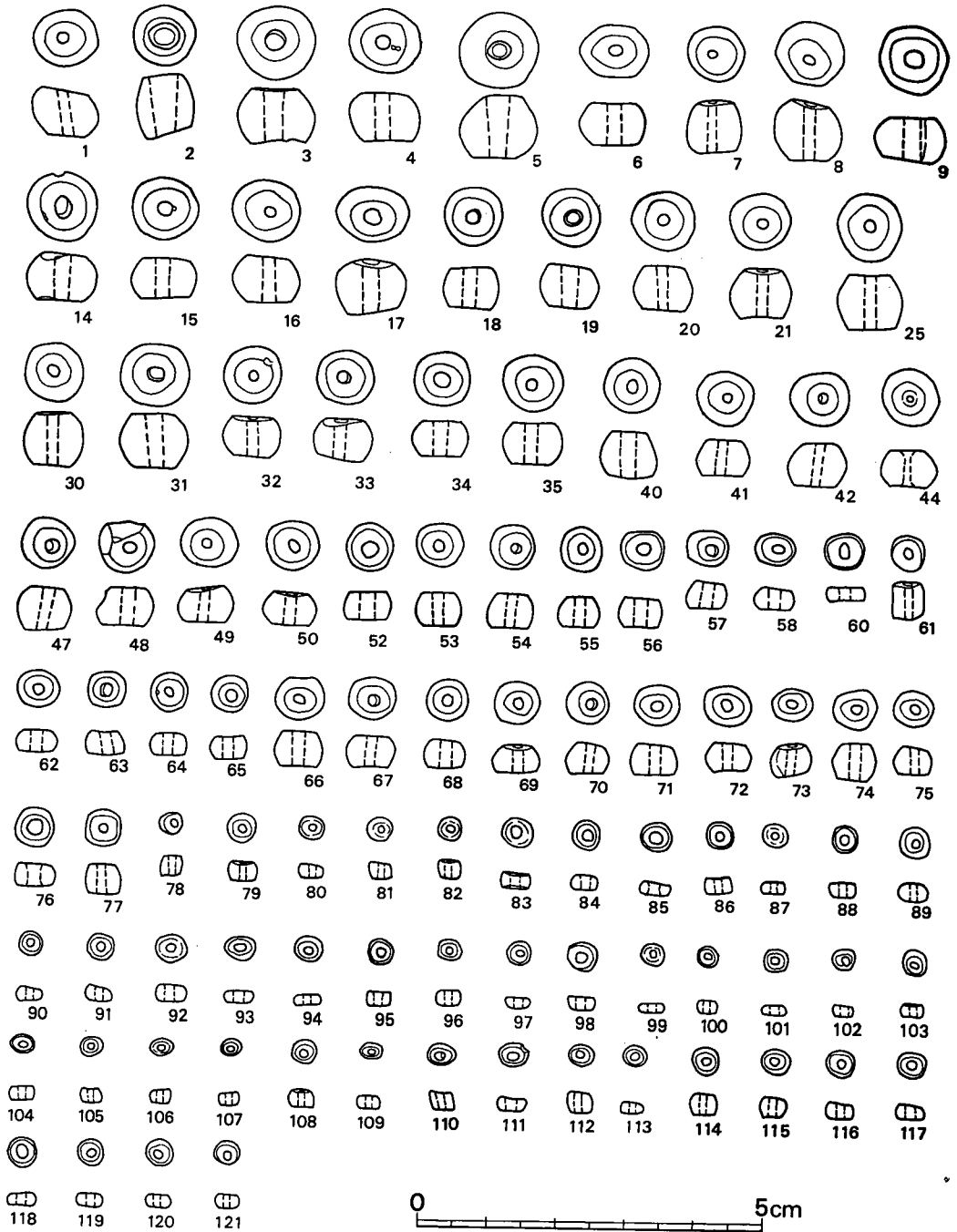
第59図 都地W-1号墳出土鉄器実測図(1/2)

鉄器 (1～3) 石室床面から玉類とともに出土した。針3本と鉄片2である。1は針で、錆着した状態で出土し、先端部を3cm～4cm程残すだけで上半部は欠失している。径1mm程で先端に向かって径を細める。たばねた状態で副葬されていたものと推測される。2・3は鉄鏃片かと思われるが、2は両端部で厚味が著しく異なり、3は薄く、鉄鏃の身から茎にかかる部分としては厚さの点で疑問が残る。(児玉)

ガラス小玉 (1～121) ガラス玉は、第56図の床面プランに示す通り、石室床面中央部から奥壁より出土し、とくに奥壁から約40cmの部分の敷石の間に最も集中して出土した。小玉は計測できたものだけで205個を数えた。このほか脆く片として取り上げたものが約20個分ほどある。一連の糸に通すと全長74.5cmとなる。

205個のガラス小玉を形態と大きさから、A～Eの5類に分類できる。Aは最も大きなグループで径が8～9mm前後、厚さ6～7mm前後を測るもので、外形は他に比べて丸味をもつが歪んだものも多く51個ある。Bは6mm前後の径をもち4mm前後の厚さを測るもので26個ある。Cは最も数の多いグループで92個あり、4mm前後の径をもち、厚さは3mm前後のものである。B・CはAに比べて形もよく揃っている。Dは14個あり、径は3mm以下のものが多く、厚さ2mm前後の玉で、全体に扁平な感じを受ける。このA～Dはいずれも、引延法による切断後に切断面を整えるために、孔の周辺を研磨して平坦面をつくっている。Eは20個ほどあり、径、厚さともに2.5mm前後のものである。切り離し後の切断面はそのままに近い状態のもので角がとれていない。

色の分類をすると、コバルトブルー(122個)、グリーンブルー(54個)、スカイブルー(24個)、ブルーグリーン(3個)、イエローグリーン(2個)の5種がある。全体の計測値は、表2の通りである。



第60图 都地W-1号墳出土小玉実測図 (1/1)

(2) 都地W-2号墳

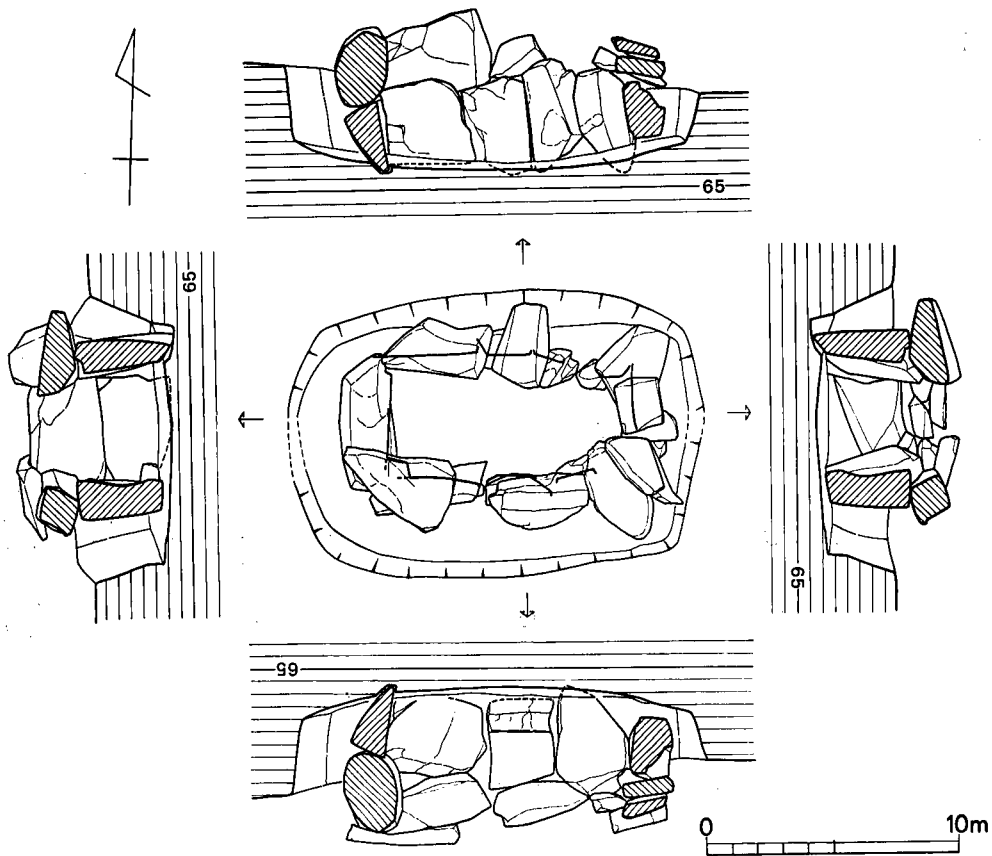
墳丘 (図版18, 第54・55図)

1号墳の西側に隣接する古墳である。封土は一層(暗褐色粘質土層)をわずかに残すだけで削平され、東側裾部を後世の溝によって破壊されている。発掘前の地形及び、調査後の周溝から判断して、南北4.5m、東西4mを測る円墳であることが判った。

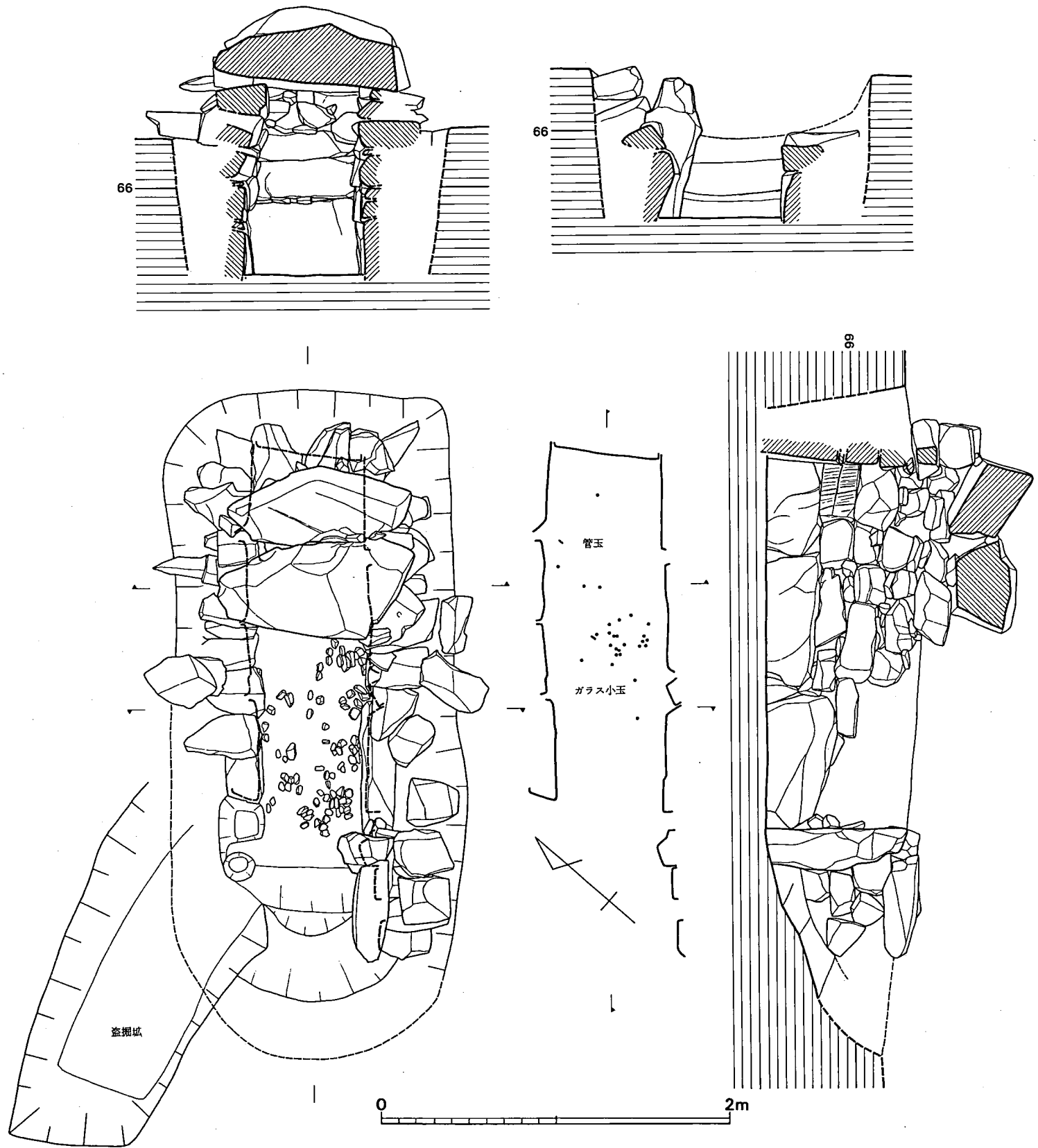
石室 (図版23, 第61図)

長さ1.65m、幅1.1mの不整長方形の墓壇に、長方形に組み合わせた石棺系の堅穴石室である。主軸方向はほぼ東西方向を示す。石室の長さは、北側側壁で95cm、南側側壁で1m、中軸で97cm、幅は西側小口で47cm、南側小口で36cm、中心で48cmを測る。

基部は壇底をわずかに掘り下げて、西側小口1枚、北側側壁4枚、南側側壁3枚の腰石を立てて据えている。ただ東側小口の腰石は棺底より数cm浮いた状態で据えられている点が注目される。



第61図 都地W-2号墳石室実測図 (1/30)



第62図 都地W-3号墳石室実測図 (1/30)

両側壁の残存状況は、北側2段、南側は一部3段目まで残存している。両小口は、西側2段、東側3段目まで残存しているが、西側2段の石は割合大きな石を用いて積んでいるのに対して、東側は20~30cmの大小の石を乱雑に積み上げている。蓋石は破壊されているためなんともいえないが、2・3段目の上面は高さが不揃いのため蓋石との間に数段積石されていたものと考えられる。棺底から南側側壁3段目上端までの高さは、56cmを測る。床面には敷石はない。副葬品等の遺物は発見できなかった。

(池辺)

(3) 都地W-3号墳

墳丘 (図版18・26, 第54~56図)

墳丘は盗掘により墳頂部が陥没しているものの、わりあい遺存状態はよい。おおむね平坦な場所に築かれている。まず、平坦部を削り出し、即ち墳丘の周辺部を浅く掘りくぼめることによって、40cm前後の高さとなし、これに盛土を行っている。墳丘は現存高が1.2mで、それほど高くはない。周溝は墳丘の北と南側にみられ一周していない。盛土は粘性土と砂質土の互層であり、各層とも厚く、わりあい雑に築き上げている。

なお、墳丘の北トレンチにおいて、ピット状の浅い掘り込みを確認したが、これの内容については不明である。さらに北側の墳裾一角に花崗岩礫の集積されたものを確認したが、これについても単なる集積であるという確認は得られなかった。

また、墳丘盛土の除去作業の結果、地山に近い位置で遺物を検出した。いずれも出土状態からして供献土器と考えられる。即ち、石室の北西側でおおむね完形の須恵器甕1が、南東側の墳裾に近い位置で、須恵器の大甕2と坏身1ならびに甕1である。この南東側の土器群はわりあい接近した位置にある(図版25)。大甕はどちらも上部がくずれおちていたが、下胴部が据えられた状態で遺存していた。大甕のうち一方の胴上部の破片は周溝にまで散乱しており、これらの破片に混じって甕の破片がほぼ1個体分検出され、このことから、これらの土器群は、供献時において破碎されたものと推定される。

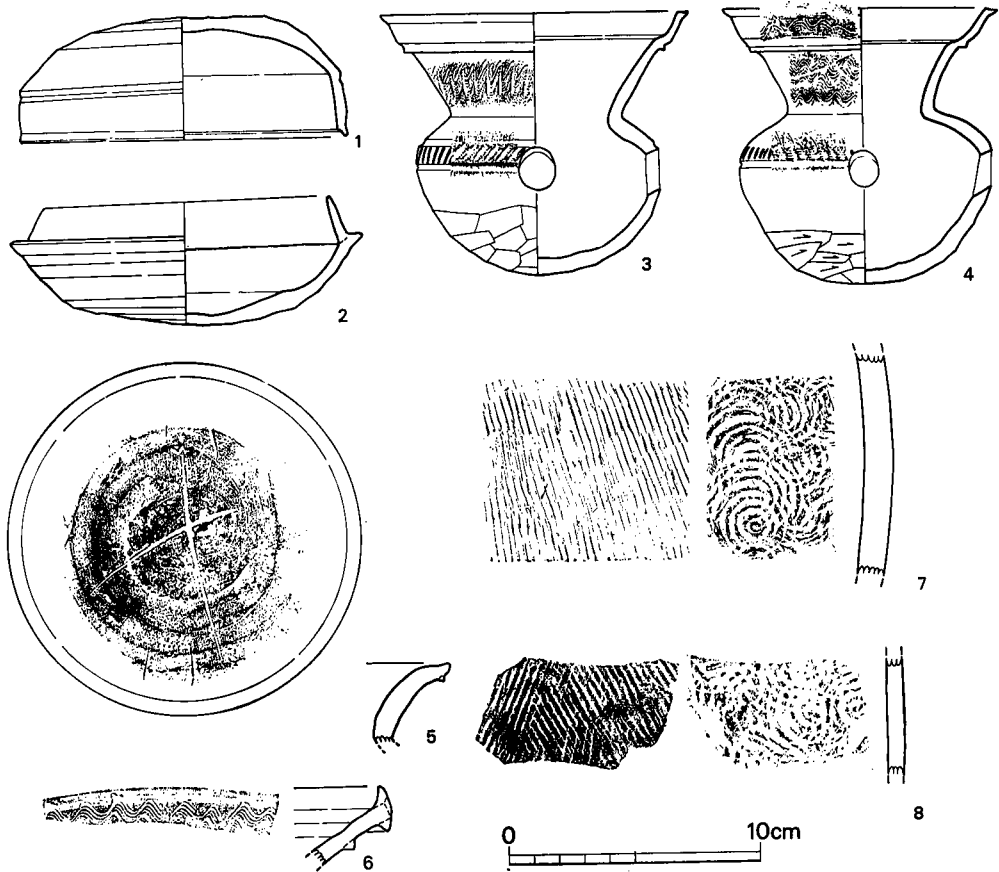
石室 (図版24・25, 第62図)

石室は、おおむね長方形を呈する掘り方内に構築されている。盗掘により石室前面と掘り方の一部が破壊を受けている。

掘り方は、平坦に削平された地山に掘り込まれている。その一部が破壊されているが、長さ約3.4m、幅2m前後で深さは1m強の規模のもので、これに小型の石室が構築されている。石室は堅穴系の横口式石室と判断される。現存長約2.5m、幅0.75m前後である。使用石材はほとんどが花崗岩で、小ぶりのものが多用されているが、腰石と天井石は大きいものを使用している。石の積み方は、玄室の腰石に板状の石を立てているのを除けば、石材の小口が壁面と

なるように積み上げているが、竪穴系の整然とした小口積みというものではなく、もとより薄手の石材を選んで積み上げている。わりあい残りのよい南東側の側壁では、奥壁より約2.2mの位置に棒状の石が立て据えられており、これが袖石と考えられる。これより外側となる壁は玄室にくらべ積み方がやや異なり、さらに袖石の肩後に積み上げられており、この部分の壁間は玄室の幅にくらべ当然広くなっていたいものと推定される。床面は玄室内では小さな河原石が敷かれており、袖部と考えられる位置よりなだらかに立ちあがっており、この部分が墓道と考えられ掘り方内におさまるもので、その外にまで延びてはいなかったと考えられる。

なお、袖石の外側に、これに接して宙に浮いた状態の石が確認されたが、これが原位置があるか否かは確定できず、かりに原位置であるとすればなんらかの方法により架構されていたのであろうが、その場合この石の下にできる空間にどのような意味あいをもつものかは判断できず、盗掘による崩壊がおしまれる石室である。(浜田)



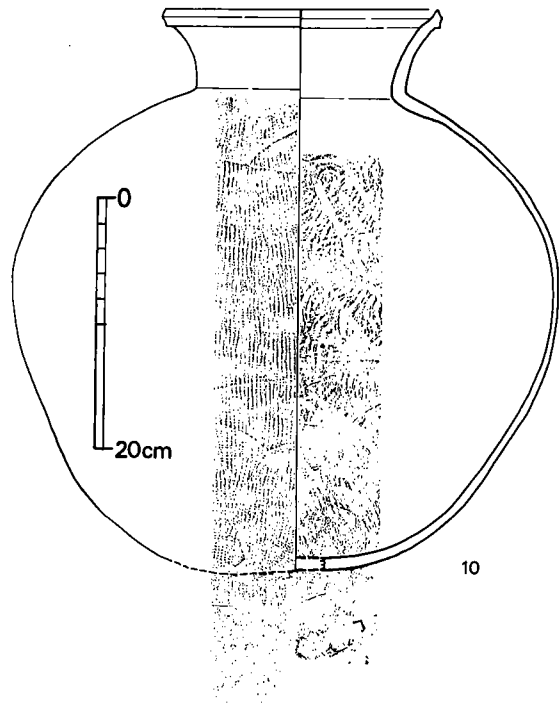
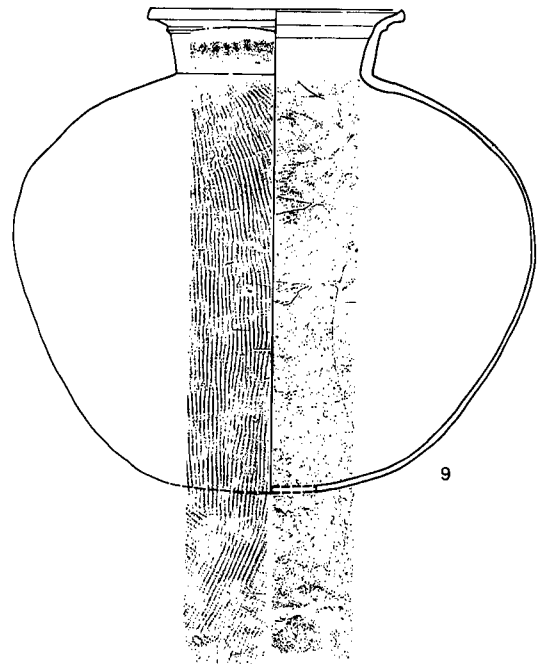
第63図 都地W-3号墳出土土器実測図①(1/3)

出土遺物（図版25・48・49，第63～65図，表3・4）

石室床面から碧玉製管玉，ガラス製小玉がした。また，墳丘南西部の石室掘り方切り込み面から甕が完形で1個，墳丘東側の墳丘斜面～周溝から坏蓋・坏身・甕・甕が出土した。前者の甕は古墳構築の途中で，おそらく地山整形後の段階でとり行われた古墳構築そのものに対する「まつり」に使用された土器だと推測され，後者の土器群は遺体の埋葬時に死者に対して行われた別離の意味を持った「まつり」に使用されたものと推測される。

須恵器（1～10）3は墳丘南西部の石室掘り方切り込み面で検出した完形の甕である。口縁部径12.3cm，器高10.5cm，頸部径6.8cmを測る。口縁下にシャープな三角凸帯を巡らし，頸部に楡描き波状文がはいる。体部上半部に楡状器具により刻み目を入れ，その上下に一条ずつの沈線を巡らす。底部は静止ヘラケズリ後にヘラナデを行っており，ヘラケズリの方向は不明である。内底面はナデ，他は回転ナデ調整をしている。胎土，焼成は極めて良好で堅緻であり，灰色を呈する。

1・2・4～9は墳丘東部斜面および周溝から，10は墳丘南東部墳丘斜面から出土した。1は周溝底に細片に割られて出土し，全体の½程を残す坏蓋で復原口径13cm，器高4.9cmを測る。口縁部と天井部の境に鈍い稜をつくり，口縁部は古式の特徴を示す。ヘラケズ

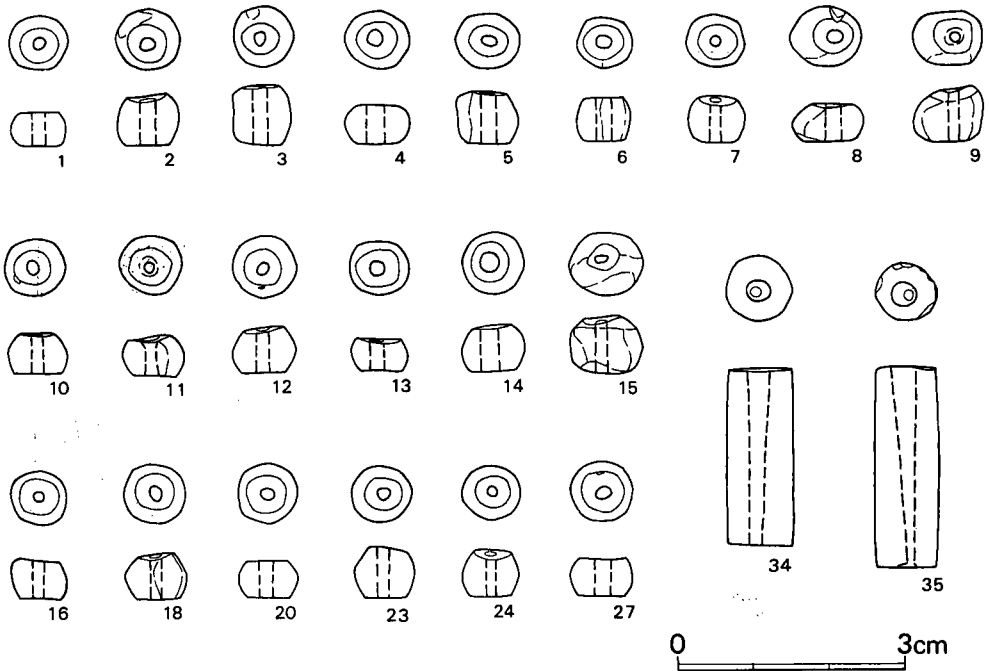


第64図 都地W-3号墳出土土器実測図② (1/6)

りの範囲は天井部の $\frac{2}{3}$ 程で、ロクロは時計廻りである。器面に砂粒が目立ち、焼成良好で暗灰色を呈する。2は口縁部径11.3cm, 受け部径14cm, 器高5cmを測る完形品で外底面にヘラ記号を有する。ヘラケズリの範囲は底部の $\frac{1}{2}$ 強でロクロは時計廻りである。胎土に砂粒を多量に含み、焼成良好で黒灰色を呈する。重ね焼きされており、内面は灰色である。4は周溝底に細片となって検出された甕で口縁部の $\frac{1}{2}$ 程を欠失するがほぼ完形で、口縁部径11cm, 頸部径5.8cm, 器高11cmを測り、3に比してスマートである。調整、施文法は胎土、焼成等は4と同じである。5は甕の口縁部小片で復原し得ないが、口縁部の形態から判断する限りにおいては古式須恵器の特徴をよく示している。6は3号墳出土甕の中では特異な口縁を持ち、凸帯下に櫛描き波状文を入れる。7・8は甕の胴部片で外面のタタキはしっかりとしているが、内面は擦り消されずに当木の圧痕をそのまま残しており、新しい要素を持っている。9は底部を打ち欠いた後に墳丘表土から壙を穿ち、据えられた甕で、仮器として「まづり」に使用された後は粉々に打ち砕かれており、その破片は周溝にまで及んでいた。底部を除いてほとんど完形品に復原でき、口縁部径20cm, 胴部最大径41.5cm, 器高38.7cmを測る。口縁下に一条の凸帯が巡り、凸帯下に櫛描き波状文が巡る。口縁部断面は短形に近く、頸部はやや外開きに立って凸帯の部分からは大きく外反する。器内は口縁部から肩部にかけては厚さ8mm前後と厚いが胴部は薄く4mm前後である。外面は縦方向のしっかりとしたシャープなタタキ目が観察され、内面は部分的には残るが同心円文を擦り消している。胎土はかなり精選されて緻密で、焼成は極めて良好で堅緻である。表面は灰をかぶっており、灰色～黒灰色を呈するが、割れ目を見ると生地はあづき色である。胴の張った安定感の強い甕である。10は9と同様な状態で9の南側に約2mの間隔をおいて据えられていた。小破片を接合した結果、底部を除いてほぼ完形に復原され、口縁部径21.7cm, 胴部最大径43.3cm, 器高40cmを測り、9と比べて胴が長く、口縁部から頸部にかけては9のように屈折することなく、外彎しながらタッパ状に開き、口縁部の形状が異なる。また、内面の同心円文は擦り消されることなくそのまま残っており、9と比べて新しい要素を示している。胎土、焼成は9に準じ、ただ底部だけは火まわりが悪く軟質である。(児玉)

ガラス小玉(1~20・23・24・27) 総計33個を数え、色調はすべてコバルトブルーである。1号墳で分類したAの形態に入る。径は8mm前後、厚さ6mm前後を測る。引延法による切断後に切断面を整えるために、孔の周辺を研磨して平坦面をつくっている。一連の糸に通すと全長19cmとなる。全体の計測値は表3の通りである。

管玉(34・35) 34・35ともに碧玉製の管玉で色調は、濃緑を呈する。孔は片側からの穿孔を行っている。計測値は、表4に示す通りである。(池辺)



第65図 都地W-3号墳出土土玉類実測図(1/1)

(4) 都地W-4号石室

墳丘

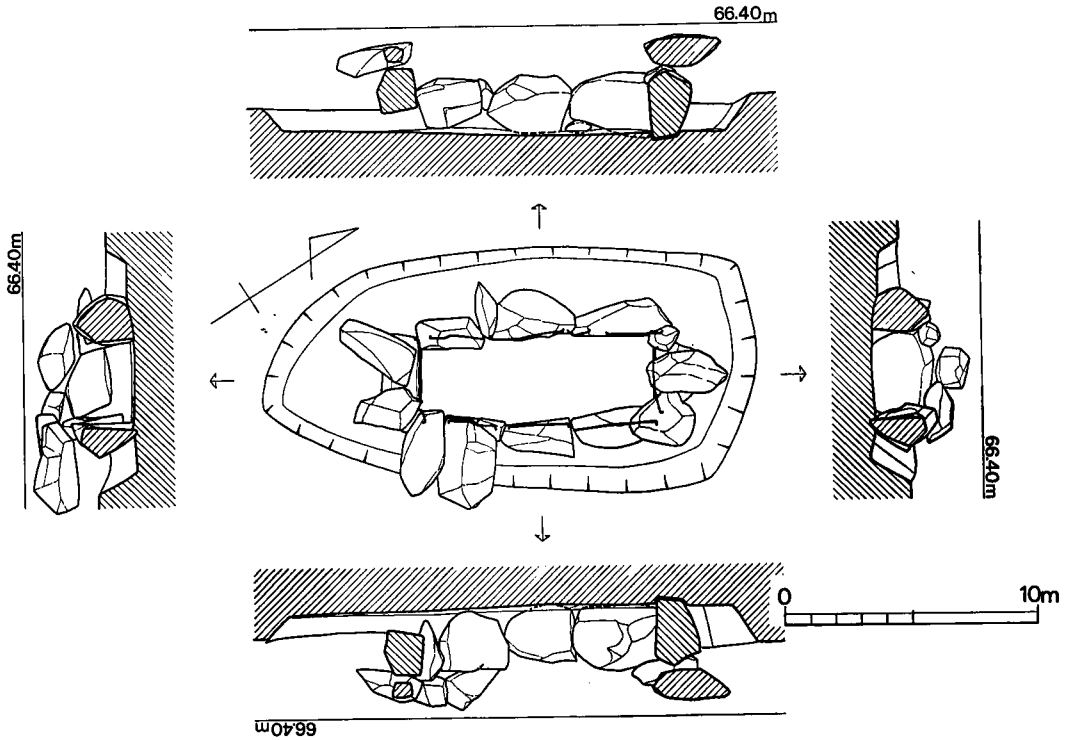
上部削平のため詳細は不明である。

石室(図版27, 第66)

長さ1.95m, 幅0.96mの不整長方形の墓壙内に構築された石棺系の竪穴石室である。主軸はN-32°-Eを示す。石室の長さは, 東側側壁で94cm, 西側側壁で93cm, 幅は北側小口で35cm, 南側小口で28cm, 中心36cmを測る。

基部は, 壙底をわずかに掘り下げて, 南側小口1枚, 両側壁3枚の腰石を立てて内傾するように据えられている。南側小口の腰石は2号墳と同様に棺底より10cmほど浮いた状態で据えられている。

積石は, 両小口部と, 東側壁の1部に横積みされ残存している。蓋石等の上部構造の詳細はまったく不明である。床面には施されていない。副葬品等の遺物は出土しなかった。



第66図 都地W—4号墳石室実測図 (1/30)

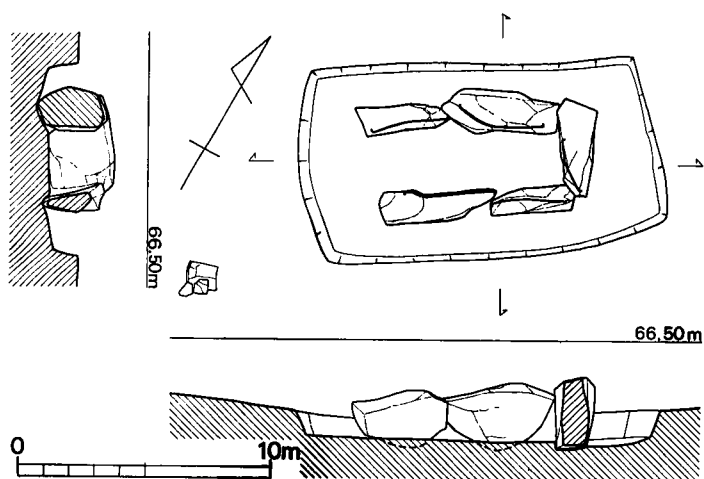
(5) 都地W—5号石室

墳丘

上部削平のため不明である。

石室 (版28図, 第67図)

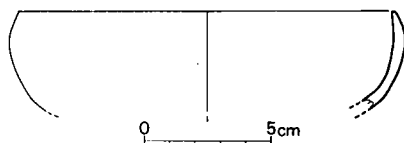
長さ1.44m, 幅78cmのほぼ長方形の墓壙内に構築された小石室である。主軸はN—60°—Eを示す。石室は、北東側小口1枚と、両側壁2枚の腰石を残すのみで、南西側小口部と二段目以上は削平を受け破壊されている。いずれの腰石も基部は壙底をわずかに掘り下げ、ほぼ同大の板石を用いて立てて据えている。南西側小口の腰石は、壙底に石の抜跡も検出できない。おそらく2号・4号の石室と同様の構造を持つ石棺系の竪穴石室と考える。石室の長さは南東側側壁で68cm, 北西側側壁で75cm, 幅は北東側小口で29cm, 南西側小口で24cm, 中心で29cmを測る。棺底は水平で敷石はない。石室からの出土遺物はない。墓壙の南側50cmの所で土器片を検した。



第67図 都地W-5号墳石室実測図 (1/30)

土師器 (第68図)

4号石室の北側地山から出土した。周囲には焼土が広がっていたが4号石室との関連はなく遺構も検出できなかった。残高約4cm、復原口径約15cmを測る土師器坏で、内外面ともにナデ調整されている。胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は良い。(池辺)

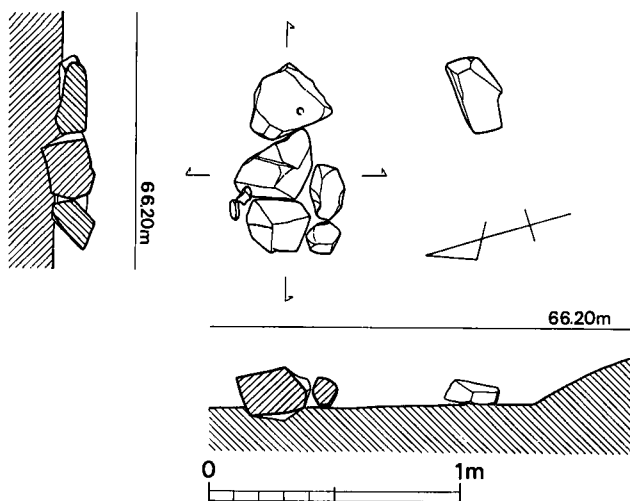


第68図 都地W-5号墳石室周辺出土土器実測図 (1/3)

(6) 石組み遺構

(図版28, 第69図)

3号墳北東裾部から80cm程離れた地点で、主軸をほぼ東西におく状態で検出した。20cm~30cm大の3個の自然石を横に使って一列に並べ、南西側に小さ目の石2個を添える。天場のレベルは西側が3m程高い。焼土・炭等は検出されず、遺構の性格は不明である。(児玉)



第69図 都地W-3号墳石室実測図 (1/30)

表2 都地W-1号墳出土ガラス小玉計表測

(単位mm)

№	径	厚	孔径	色	分類	№	径	厚	孔径	色	分類
1	9.8	7.1	1.7	コバルトブルー	A	42	8.75	6.0	1.7	コバルトブルー	A
2	9.35	9.1	5.0	"	A	43	8.05	6.1	1.85	"	A
3	11.95	7.7	2.8	"	A	44	8.05	5.05	1.95	"	A
4	9.45	6.55	1.8	"	A	45	7.3	6.35	1.35	"	A
5	11.0	8.65	2.7	"	A	46	7.3	6.65	1.4	"	A
6	9.4	5.75	2.2	"	A	47	7.25	5.9	2.1	"	A
7	7.8	6.95	1.35	"	A	48	7.75	5.4	1.85	"	A
8	9.45	8.0	1.9	"	A	49	8.35	4.9	1.45	"	A
9	9.65	6.0	2.85	"	A	50	7.55	4.25	1.95	"	A
10	9.0	5.85	1.75	"	A	51	7.8	5.95	1.45	"	B
11	9.25	4.65	2.2	"	A	52	6.85	4.3	2.5	"	B
12	8.9	6.2	3.05	"	A	53	6.95	4.8	1.7	"	B
13	9.5	6.35	2.0	"	A	54	6.05	4.8	1.75	"	B
14	10.2	6.3	2.65	"	A	55	5.9	4.55	1.15	"	B
15	9.3	5.3	2.05	"	A	56	6.2	4.05	1.95	"	B
16	9.6	6.6	1.8	"	A	57	5.2	3.85	2.0	"	B
17	9.75	7.25	2.55	"	A	58	5.65	3.35	1.4	"	B
18	8.25	6.2	2.0	"	A	59	5.4	3.4	1.8	"	B
19	8.55	6.05	2.4	"	A	60	5.75	2.05	1.8	"	B
20	8.4	6.15	1.7	"	A	61	5.25	5.3	2.25	"	B
21	8.0	6.75	1.5	"	A	62	6.15	3.25	2.15	ブルーグリーン	B
22	7.85	6.1	2.2	"	A	63	5.55	3.8	2.0	"	B
23	8.5	6.15	1.35	"	A	64	5.65	3.4	1.7	"	B
24	7.9	5.7	1.85	"	A	65	5.7	3.55	1.9	グリーンブルー	B
25	9.15	7.9	2.0	"	A	66	7.0	4.9	1.85	"	B
26	8.1	7.2	2.0	"	A	67	6.95	4.5	1.65	"	B
27	8.8	5.0	1.95	"	A	68	6.4	3.75	1.95	"	B
28	8.65	6.75	2.6	"	A	69	6.75	3.5	1.85	"	B
29	7.65	6.5	1.8	"	A	70	6.35	4.2	1.75	"	B
30	8.0	7.55	1.7	"	A	71	6.95	4.35	2.0	"	B
31	10.0	7.3	2.05	"	A	72	6.85	4.45	2.0	"	B
32	8.35	5.85	1.9	"	A	73	5.9	4.7	1.5	"	B
33	8.4	5.9	1.8	"	A	74	6.2	5.35	1.45	"	B
34	8.1	5.3	2.1	"	A	75	5.25	3.8	1.6	"	B
35	8.2	5.75	1.8	"	A	76	5.65	2.8	2.45	コバルトブルー	B
36	8.75	7.15	1.45	"	A	77	5.15	4.15	1.45	スカイブルー	C
37	8.7	7.05	1.5	"	A	78	3.55	2.9	1.1	"	C
38	8.75	7.15	2.0	"	A	79	4.15	2.9	1.35	グリーンブルー	C
39	7.25	6.7	1.5	"	A	80	3.55	1.9	1.5	"	C
40	8.1	6.7	2.6	"	A	81	3.5	2.0	1.2	スカイブルー	C
41	8.1	5.4	1.7	"	A	82	3.3	2.6	1.2	"	C

№	径	厚	孔径	色	分類	№	径	厚	孔径	色	分類
83	4.5	2.05	1.85	グリーンブルー	C	124	3.65	3.0	1.45	コバルトブルー	C
84	4.4	2.1	1.55	"	C	125	3.55	2.3	1.25	"	C
85	4.45	2.2	2.0	コバルトブルー	C	126	3.9	2.8	1.3	"	C
86	4.1	2.45	1.45	グリーンブルー	C	127	3.35	2.7	1.2	"	C
87	3.7	2.15	1.25	"	C	128	3.7	2.65	1.35	"	C
88	3.75	2.25	1.7	"	C	129	3.75	2.65	1.15	"	C
89	4.4	2.65	1.65	コバルトブルー	C	130	4.0	3.3	1.3	"	C
90	3.75	2.05	1.35	スカイブルー	C	131	3.4	2.25	1.25	"	C
91	4.0	2.7	1.65	"	C	132	3.4	1.95	1.3	"	C
92	4.35	2.85	1.5	コバルトブルー	C	133	4.0	2.6	1.25	"	C
93	4.25	2.1	1.6	"	C	134	3.6	2.4	1.25	"	C
94	3.95	1.65	1.45	"	C	135	3.05	2.0	1.15	"	C
95	4.05	2.75	1.5	"	C	136	3.7	3.1	1.25	グリーンブルー	C
96	3.4	2.65	1.15	グリーンブルー	C	137	3.7	3.4	1.55	"	C
97	3.5	1.8	1.25	"	C	138	3.85	3.2	1.4	"	C
98	4.4	2.05	1.8	"	C	139	4.4	3.0	1.2	"	C
99	3.3	1.55	1.3	"	C	140	3.45	2.8	1.25	"	C
100	3.3	2.4	1.2	"	C	141	3.3	2.8	1.3	"	C
101	3.75	1.8	1.3	"	C	142	3.5	2.9	1.25	"	C
102	3.4	1.5	1.2	"	C	143	3.85	2.9	1.3	"	C
103	3.6	2.3	1.2	"	C	144	4.25	2.85	1.2	"	C
104	3.25	2.45	1.4	"	C	145	3.35	2.5	1.35	"	C
105	3.4	2.3	1.4	"	C	146	3.45	2.6	1.2	"	C
106	2.95	2.0	1.1	"	C	147	3.55	3.5	1.35	"	C
107	3.0	1.95	1.1	"	C	148	3.75	2.85	1.5	"	C
108	3.75	2.8	1.4	"	C	149	3.85	2.4	1.4	"	C
109	3.35	1.65	1.25	"	C	150	3.65	2.8	1.1	"	C
110	3.75	3.0	1.5	"	C	151	3.05	2.85	1.0	"	C
111	4.2	2.25	1.45	"	C	152	3.45	2.9	1.2	"	C
112	3.4	2.95	1.25	コバルトブルー	C	153	3.9	2.9	1.2	"	C
113	3.55	1.9	1.5	"	C	154	3.4	2.6	1.25	"	C
114	4.0	2.95	1.2	"	C	155	3.45	3.3	1.6	"	C
115	3.95	2.75	1.4	"	C	156	3.0	2.25	1.2	スカイブルー	C
116	4.35	2.45	1.25	"	C	157	3.65	2.2	1.2	"	C
117	4.45	2.1	1.75	"	C	158	3.2	2.4	1.1	"	C
118	4.45	2.15	1.77	"	C	159	3.1	2.65	1.2	"	C
119	4.0	2.25	1.45	"	C	160	3.85	3.3	1.6	イエロー グリーン	C
120	3.8	2.25	1.5	"	C	161	3.5	2.2	1.1	スカイブルー	C
121	3.85	2.15	1.35	"	C	162	3.2	2.3	1.1	"	C
122	3.85	2.75	1.3	"	C	163	3.05	2.25	1.0	"	C
123	3.9	2.2	1.2	"	C	164	2.9	1.9	1.35	"	C

№	径	厚	孔径	色	分類	№	径	厚	孔径	色	分類
165	3.3	2.4	1.0	スカイブルー	C	186	3.25	3.3	1.3	コバルトブルー	E
166	2.7	2.3	1.1	"	C	187	3.4	3.25	1.4	"	E
167	3.2	2.45	1.25	"	C	188	3.5	2.75	1.05	"	E
168	3.15	2.1	1.3	"	C	189	3.2	1.1	1.4	スカイブルー	E
169	3.4	1.4	1.35	コバルトブルー	C	190	2.7	3.6	1.1	"	E
170	3.0	2.45	1.4	"	C	191	2.5	3.05	0.9	コバルトブルー	E
171	2.8	1.95	1.1	"	D	192	2.75	2.05	0.95	"	E
172	2.75	2.1	1.2	"	D	193	2.8	2.4	1.0	"	E
173	2.9	1.2	1.2	"	D	194	2.3	2.8	0.9	"	E
174	2.75	1.55	0.95	"	D	195	2.95	2.6	1.35	"	E
175	3.1	2.1	1.1	"	D	196	3.0	3.25	1.1	"	E
176	2.9	1.75	1.1	"	D	197	2.25	2.75	1.1	"	E
177	2.75	1.4	1.15	"	D	198	2.5	3.75	0.8	"	E
178	2.85	1.7	1.3	"	D	199	2.6	2.45	1.25	"	E
179	2.45	2.2	0.95	"	D	200	2.45	2.9	1.15	"	E
180	2.6	1.7	0.95	"	D	201	2.4	2.85	1.1	コバルトブルー	E
181	2.45	1.95	1.05	"	D	202	2.0	2.55	0.9	"	E
182	2.8	2.0	1.15	"	D	203	2.55	2.3	1.35	"	E
183	3.0	1.6	1.15	スカイブルー	D	204	2.65	2.65	1.1	スカイブルー	E
184	2.8	1.65	1.25	"	D	205	3.0	2.85	1.1	"	E
185	2.55	1.55	0.85	イエロー グリーン	D						

表3 都地W-3号墳出土ガラス小玉計測表

(単位mm)

№	径	厚	孔径	色	分類	№	径	厚	孔径	色	分類
1	7.9	4.6	2.2	コバルトブルー	A	18	8.2	6.2	1.95	コバルトブルー	A
2	8.4	6.35	2.2	"	A	19	8.3	6.85	1.55	"	A
3	8.0	7.6	2.1	"	A	20	8.25	4.75	1.55	"	A
4	8.35	4.8	1.75	"	A	21	7.4	4.95	2.0	"	A
5	8.25	7.3	2.05	"	A	22	10.45	5.4	2.8	"	A
6	6.85	5.8	2.05	"	A	23	7.75	6.35	1.45	"	A
7	7.4	6.0	1.5	"	A	24	8.0	6.1	1.5	"	A
8	9.3	4.95	2.0	"	A	25	8.15	5.6	2.2	"	A
9	8.7	6.6	1.7	"	A	26	8.1	7.15	1.5	"	A
10	7.7	5.7	1.55	"	A	27	7.9	5.1	2.15	"	A
11	8.2	5.35	2.15	"	A	28	8.1	7.95	1.95	"	A
12	8.1	6.05	1.7	"	A	29	7.6	6.0	1.8	"	A
13	7.8	4.3	1.7	"	A	30	7.85	5.9	1.45	"	A
14	8.1	5.9	2.55	"	A	31	7.25	4.3	2.4	"	A
15	9.4	6.45	1.45	"	A	32	7.25	5.2	1.85	"	A
16	7.25	5.3	1.65	"	A	33	7.5	4.5	1.65	"	A
17	7.75	6.45	1.85	"	A						

表4 都地W-3号墳出土管玉計測表

№	管玉 長	幅	孔 径		穿 孔	色
			大	小		
34	23.75	8.3	3.15	1.15	片	濃緑
35	26.95	8.6	3.25	1.25	片	"

4 小 結

要調査面積は工業団地関係の調査対象地として最大の部分ではあったが、予想された遺構は遺存せず、後世の削平が十分に及んでいた。しかし、単独の出土であったが黒曜石石核や縄文時代の遺構を検出し、わりと良好な残りの竪穴系横口式石室を検出することができた。

黒曜石石核は、東京学芸大学教育学部助教授大沢真澄氏に産地同定を目的とした分析を行って頂き、その結果については次章に掲載させて頂いた。

縄文時代の土壙については、単独出土でこれに関連する他の遺構を検出することはできなかった。近接する他のトレンチにおいても土器片すら検出できず、7・8・9トレンチで黒曜石片を検出したにとどまった。土壙の性格については、墓の可能性が残るが必ずしも明瞭ではない。

弥生時代の遺構・遺物については、丘陵南側トレンチで若干の土器片を検出したにとどまり、明確な遺構は全く遺存していない。

古墳時代の遺構は、古墳と溝であり、東支群にある土盛り状の遺構については不明な部分が多く残ったが、この土盛りの内側は、明治時代以降の草競馬の折の馬の寄せ場であったという古老の話があり、蹄鉄の出土と勘案すればその可能性を否定する根拠も見出し難い。東支群の墳丘は、あるいはその時に削平された可能性があり、須恵器の異常な散乱についても、馬の寄せ場造りの際の所産とわれる。

東支群の古墳は遺存状態が悪く、2号石室は横口部を付設するものの、石室内法は極めて小さく、高平古墳群3号石室（註1）に類似している。高平3号石室と異なる点は、都地E-2号石室は耳環2対および鉄製品が出土しており、追葬行為を確認できることである。石室内法の狭小な本石室への追葬に関しては、作業上の技術的困難さを伴ったと推測されるが、その間にかかなりの時間差を想定するか、遺骨をまとめてその隙き間に葬したかのどちらかであろう。周辺から出土する須恵器のうち、ⅢA型式の坏蓋が小片で出土しており、本石室の構築時期は6世紀中葉をさらにさかのぼることはないだろうと推測される。

西支群では、墳丘の明確な1・3号墳が竪穴系横口式石室を内部主体とし、墳丘の低平な2号墳の内部主体は石棺系竪穴式石室の範疇（註2）にはいるものである。4・5号石室についても2号墳の石室と同様に考えられる。4・5号石室はその在り方から3号墳に付随する可能性があり、3号墳との石室構造の差は被葬者の社会的地位の差を反映しているものと想定される。3号墳から出土した供献土器のうち、石室西側の墳丘盛土下層の甕は石室構築に際しての、石室東側墳丘斜面～周溝の甕・甕・坏身・坏蓋等は送葬儀礼に伴う“まつり”に使用されたものと思われる。1・3号墳とも出土土器より、5世紀後半代の所産と考えられる。石室については後述する。

（児玉）

註 1 日高正幸「高平2号墳」『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1979 福岡県教育委員会

2 山中英彦『東宮ノ尾古墳群』1974 北九州市教育委員会

V 都地遺跡出土黒曜石の産地について

二宮 修治 ・ 佐藤 貴義

小島 淑子 ・ 大沢 眞澄

(東京学芸大学教育学部・化学教室)

1 はじめに

考古学諸種試料に対する理化学的研究のうち、遺物の原産地推定（産地分析）に関する研究は、当時の交流、交易をはじめとして文化、社会の具体的実態を把握する上での重要な情報を提供するものと期待される。とくに黒曜石の場合は、時代的にも幅が広く、かつその原産地が比較的限られていることより、多くの関心が寄せられている^{1~6)}。

本研究では、福岡県鞍手郡若宮町都地遺跡より出土した黒曜石の産地の推定を目的とし、九州各地域より採取された原産地黒曜石も含めて分析地球化学的に検討した。一般に黒曜石の原産地推定には、出土黒曜石試料と原産地黒曜石試料との化学組成（元素存在量）の対比による方法が有効なアプローチの一つである^{7~11)}。このため本研究では、第1に出土黒曜石試料ならびに原産地黒曜石試料中の主成分および諸種微量成分元素の存在量の決定、第2に九州各地域の原産地黒曜石の化学組成にもとづく地域区分の指標元素の検討、第3にこの指標元素の対比による本遺跡出土黒曜石の原産地の推定を行った。

主成分元素存在量の決定には原子吸光分析法を、また微量成分元素存在量の決定には機器中性子放射化分析法を用いた。

2 試料

本研究に供した出土黒曜石試料および原産地黒曜石試料を表5に示す。

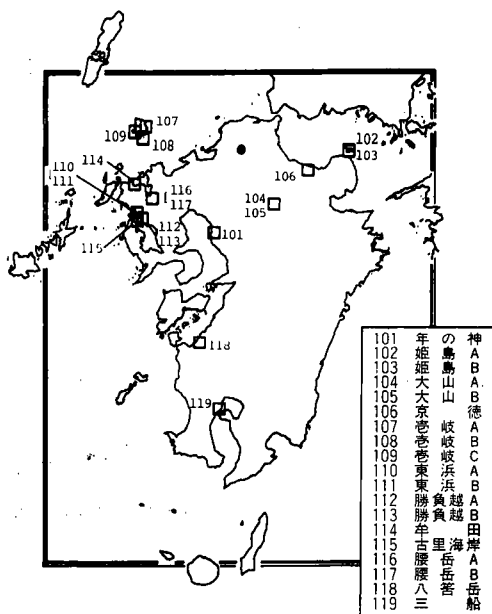
出土黒曜石試料は、都地遺跡出土の黒曜石石核の剥片5点（大体の直径10~15cm, 0.7~1.3kg）であり、福岡県教育庁管理部文化課より供与されたものである。

原産地黒曜石試料は、九州各地15ヶ所で採取されたもの19点であり、その採取地を第70図に示す。No.111, 113, 115試料を除く16点は、出土黒曜石試料同様、福岡県教育庁管理部文化課より供与されたものであり、No.111, 113, 115試料は別途採取したものである。

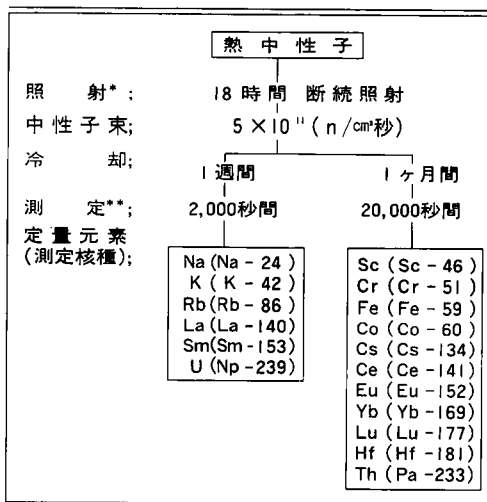
試料はすべて蒸留水一超音波洗浄後、ステンレススチール製エリス型粉碎器で粉碎、メノウ乳鉢で細粉（325メッシュ程度）とし、風乾したものを分析に供した。

表5 出土黒曜石・原産地黒曜石試料一覧

試料番号			
01, 02, 03, 04, 05	出土黒曜石	(福岡県鞍手郡若宮町都地遺跡)	
101	原産地黒曜石	年の神	(福岡県大牟田市)
102	"	姫島A(黒)	(大分県国東郡姫島村)
103	"	姫島B(灰白)	(")
104	"	大山A 大山川中流	(大分県玖珠郡大山町)
105	"	大山B 下釜ダム東側	(")
106	"	京徳	(大分県宇佐市)
107	"	壱岐A 本村触	(長崎県壱岐郡芦辺町)
108	"	壱岐B 印通寺	(" 石田町)
109	"	壱岐C 平人触	(" 郷ノ浦町)
110	"	東浜A	(長崎県佐世保市東浜)
111	"	東浜B	(")
112	"	勝負越A	(" 針尾中町)
113	"	勝負越B	(")
114	"	牟田	(長崎県松浦市)
115	"	古里海岸	(長崎県佐世保市針尾中町)
116	"	腰岳A 渚	(佐賀県伊万里市)
117	"	腰岳B	(")
118	"	矢筈岳	(鹿児島県出水市)
119	"	三船	(鹿児島県鹿児島市)



第70図 (●印は都地遺跡を示す)



*照射; TRIGAMark II型原子炉
回転試料棚
L 立教大学原子力研究所
**測定; 検出器 Ge(Li) 半導体検出器
波高分析器 Canberra 8100型
マルチチャンネル波高分析器 (4096チャンネル)

第71図

3 実験方法

黒曜石試料の主成分7元素は原子吸光分析法により、また主として微量成分元素（微量成分14元素、主成分3元素）は機器中性子放射化分析法により定量を行った。

3. 1 原子吸光分析法

黒曜石試料中の主成分元素であるケイ素 (Si) , アルミニウム (Al) , 鉄 (Fe) , マグネシウム (Mg) , カルシウム (Ca) , ナトリウム (Na) , カリウム (K) は本法により定量した。

3. 1. 1 試薬

試薬は、いずれも分析用特級試薬を用いた。フッ化水素酸は東京芝浦電気製（フッ化水素含量46%）を、その他の試薬は和光純薬工業製を用いた。

検量線用標準溶液は、和光純薬工業製原子吸光分析用標準溶液（1000ppm標準溶液）を用い調製した。干渉抑制剤である1%ランタン溶液は、酸化ランタン（99%）を6N塩酸で溶解し、蒸発乾固後0.3N塩酸溶液で溶解し調製した。

3. 1. 2 試料の分解および分析用試料溶液の調製

テフロン密封容器¹²⁾（ユニシール、内容積23ml）に細粉試料約50mgを精秤し、王水0.5ml、46%フッ化水素酸3.0mlを加え、110°~120°Cオーブン中で40分間加熱し分解した。加熱後室温まで冷却（約2時間）し、内容物を4~6mlの蒸留水で50mlテフロンビーカーに移し、ホウ酸2.8gを加え溶解後蒸留水で100mlとした（試料溶液A）。さらに50mlテフロンビーカーに試料溶液Aを5ml分取し、ホットプレート上で蒸発乾固しフッ化水素酸を除去した。乾固後6N塩酸2mlを加え溶解し、干渉抑制剤として1%ランタン溶液10mlを加え、蒸留水で100mlとした（試料溶液B）¹³⁾。

3. 1. 3 定量

使用した装置は、第二精工舎製S A S—721型原子吸光分光光度計である。本装置による測定条件を表6に示す。

ケイ素、アルミニウムの定量には、試料溶液Aを用い液高温フレーム（亜酸化窒素—アセチレン炎）で測定した。定量の際の検量線用標準溶液は、試料溶液Aと同濃度になるようにフッ化水素酸、王水、ホウ酸を加え調製した。

鉄、マグネシウム、カルシウム、ナトリウム、カリウムの定量には、試料溶液Bを用い低温フレーム（空気—アセチレン炎）で測定した。定量の際のそれぞれの検量線用標準溶液は、試料溶液Bと同濃度になるように王水、ホウ酸、ランタン溶液を加え調製した。

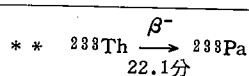
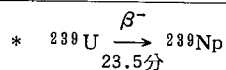
表6 原子吸光分析法—測定条件

	Si*	Al*	Fe**	Mg**	Ca**	Na**	K**
波長 (nm)	251.6	308.8	248.3	284.6	422.3	588.8	766.2
ホローカソードランプ電流値 (mA)	10	10	10	10	10	10	10
燃料流量 (ℓ/分)	8	7	2	2	2	2	2
助燃料流量 (ℓ/分)	17	16	15	15	15	15	15
バーナー角度 (度)	0	0	0	0	0	0	0
検量線直線領域 (ppm)	0—200	0—80	0—5	0—0.5	0—5	0—10	0—3
* 高温フレイム (亜酸化窒素—アセチレン炎) 亜酸化窒素圧力 2.0 kg/cm ² , アセチレン圧力 0.8 kg/cm ²							
** 低温フレイム (空気—アセチレン炎) 空気圧力 2.0 kg/cm ² , アセチレン圧力 0.8 kg/cm ²							

原子吸光分析装置 第二精工舎製 S A S—721型

表7 機器中性子放射化分析法—定量に用いた核種の核的性質

	元素	生成核種	半減期	定量に用いたピーク (keV)
ナトリウム	Na	²⁴ Na	15.0時間	1369, 1732, 2754
カリウム	K	⁴² K	12.4時間	1524
ルビジウム	Rb	⁸⁶ Rb	18.66日	1077
ランタン	La	¹⁴⁰ La	40.22時間	329, 487, 816, 1596
サマリウム	Sm	¹⁵³ Sm	47時間	103
ウラン	U	²³⁹ Np*	2.35日	278
スカンジウム	Sc	⁴⁶ Sc	83.9日	889, 1121
クロム	Cr	⁵¹ Cr	27.8日	320
鉄	Fe	⁵⁹ Fe	45日	1099, 1292
コバルト	Co	⁶⁰ Co	5.26年	1174, 1333
セシウム	Cs	¹³⁴ Cs	2.05年	796
セリウム	Ce	¹⁴¹ Ce	33日	145
ユロピウム	Eu	¹⁵² Eu	12年	123, 779, 1408
イッテルビウム	Yb	¹⁶⁹ Yb	32日	177, 198
ルテチウム	Lu	¹⁷⁷ Lu	6.75日	208
ハフニウム	Hf	¹⁸¹ Hf	42.5日	133, 432
トリウム	Th	²³³ Pa**	27.0日	312, 415



3. 2 機器中性子放射化分析法

本法で用いた分析条件 (中性子照射条件, ガンマ線スペクトルの測定条件) を第71図に示す。

ここでは, 中性子照射による生成核種の半減期により2種類のグループに分け, それぞれの場合のガンマ線スペクトルの測定により, 合計17元素を定量した。本法でも原子吸光分析法で定量した主成分元素である鉄, ナトリウム, カリウムの定量を行った。定量に用いた核種の核的性質¹⁴⁾を表7に示す。

3. 2. 1 中性子照射

細粉試料約100mgを精秤し、ポリエチレン袋に二重に封入(10×10mm)し、立教大学原子力研究所 TRIGA Mark II型原子炉回転試料棚(熱中性子束 $5 \times 10^{11} \text{n/cm}^2 \cdot \text{sec}$)にて、18時間断続(6時間/日×3日間)照射を行った。

3. 2. 2 測定および定量

生成核種のガンマ線の測定には、Canberra社製高分解能リチウムドリフト型ゲルマニウム半導体検出器および同社製8100型マルチチャンネル波高分析装置(4096チャンネル)を用い、照射済試料の非破壊的なガンマ線スペクトル測定を行った¹⁵⁾。

定量は、試料と同時照射した標準物質とのガンマ線強度比による比較法により行った。比較標準には米国地質調査所(USGS)標準岩石試料¹⁶⁾G-2(Granite:花コウ岩), GSP-1(Granodiorite:花コウセン緑岩), AGV-1(Andesite:安山岩)を用いた。

4 結果および考察

4. 1 主成分元素存在量

原子吸光分析法による出土黒曜石試料および原産地黒曜石試料中の主成分元素の定量結果を表8に示す。表中の各元素の定量値はケイ酸塩分析の慣例に従い、酸化物の形で示してある。

表8 主成分元素存在量—原子吸光分析法による(%)

	01	02	03	04	05	101	102	103	104	105	106	107
SiO ₂	70.0	74.2	72.7	73.7	74.7	70.0	76.4	72.5	74.7	71.2	70.8	76.4
Al ₂ O ₃	13.2	12.9	13.1	13.3	13.1	14.9	14.7	14.5	12.7	13.0	14.6	12.4
Fe ₂ O ₃ *	1.14	1.13	1.15	1.03	1.13	1.50	1.35	1.25	1.41	1.38	1.69	1.20
MgO	0.05	0.04	0.04	0.05	0.05	0.28	0.11	0.11	0.17	0.17	0.28	0.07
CaO	0.77	0.56	0.67	0.63	0.69	1.17	0.87	0.89	1.31	1.11	1.20	0.84
Na ₂ O	4.61	4.12	4.07	4.14	4.21	4.62	4.48	4.53	3.72	4.03	4.73	4.08
K ₂ O	4.58	4.52	4.59	4.52	4.50	5.17	3.83	3.73	5.08	4.25	5.29	4.66
	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119
SiO ₂	66.3	67.0	69.5	70.8	66.5	71.7	70.2	70.8	70.8	71.7	74.2	76.6
Al ₂ O ₃	14.2	14.2	13.4	13.3	13.5	13.6	12.7	12.7	13.1	13.1	12.9	12.8
F ₂ O ₃ *	2.26	2.20	1.70	1.60	1.73	1.54	1.50	1.21	1.19	1.19	1.30	1.26
MgO	0.10	0.11	0.14	0.09	0.15	0.10	0.11	0.05	0.10	0.05	0.24	0.25
CaO	0.94	0.87	1.13	0.94	1.23	1.11	0.94	0.74	0.90	0.55	1.29	1.35
Na ₂ O	5.23	5.30	4.37	4.62	4.23	4.65	4.27	4.65	4.11	4.50	4.39	4.37
K ₂ O	5.12	5.23	4.10	4.16	4.49	4.46	4.43	4.70	4.55	4.66	5.32	3.18

* 全鉄を Fe₂O₃ で表示

都地遺跡より出土の黒曜石は、かなり類似した化学組成を示し、同一産地よりの黒曜石であると考えられる。一方原産地黒曜石は、採取地が九州地方内という比較的せまい地域であるため、その主成分元素存在量にはある程度の類似性が認められる。しかし、各黒曜石間で若干の差異がみられるのは、それぞれの生成過程のちがいを反映しているものと思われる。

4. 2 微量成分元素存在量

機器中性子放射化分析法による定量結果を表9に示す。

各試料中の微量成分元素は、先に示した主成分元素存在量に比べて、その存在量の幅すなわち分布範囲がきわめて広く、産地間の相違を示す有効な指標元素となりうるものが多いと考えられる。

4. 3 産地の推定

都地遺跡出土黒曜石試料の産地の推定は、九州各地の原産地黒曜石試料との化学組成の対比により行った。

各試料中の元素存在量をプロットし、各試料間の元素存在量の差異を検討した結果、産地間の差が比較的顕著な鉄、セシウム、ユウロピウムの場合について、その存在量分布を第72～74図に示す。なお、鉄については放射化分析による定量結果を用いた。

出土黒曜石の産地同定のさいの基本的な仮定は、その化学組成が原産地黒曜石の化学組成と一致することであり、第72～74図中に示された都地遺跡出土黒曜石(●)の元素存在量と同程度の元素存在量を示す原産地黒曜石(□)が、本遺跡出土の黒曜石の原産地としての可能性があることになる。このように元素ごとに比較し、消去法により原産地推定は可能であると考えられる。また、鉄、セシウム、ユウロピウムのように各試料間(産地間)の元素存在量の差が顕著な元素間関係をもとに検討すれば、産地の推定がより明確になるであろう。鉄—ユウロピウム、セシウム—ユウロピウム間の関係をそれぞれ第75図、第76図に示す。

都地遺跡出土黒曜石においては、鉄、ユウロピウムともにその存在量が低く(第75図)、これら出土黒曜石と対応する原産地黒曜石としては、姫島(102, 103)、古里海岸(115)、腰岳(116, 117)が考えられる。同様にセシウムとユウロピウム(第76図)においては、都地遺跡出土黒曜石はセシウム存在量が高く、ユウロピウム存在量が低いことが特徴的であり、これらの出土黒曜石と対応する原産地黒曜石としては、古里海岸(115)、腰岳(116, 117)が一致し、この地域が都地遺跡出土の黒曜石の原産地と推定される。なお、前述の姫島産原石(102, 103)は、セシウム存在量がきわめて低く、都地遺跡出土の黒曜石の原産地から除外される。

また、出土黒曜石、原産地黒曜石の希土類元素(ランタン、セリウム、サマリウム、ユウロピウム、イッテルビウム、ルテチウム)存在量は、各産地によりきわめてその差が大きい。

表9 元素存在量—機器中性子放射化分析法による (ppm*)

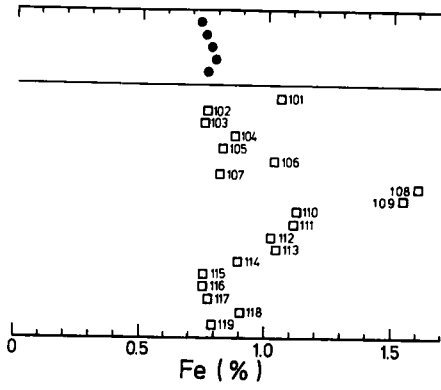
	01	02	03	04	05	101	102	103	104	105	106	107
Na (%)	2.97	2.79	2.71	2.74	2.77	3.35	3.10	3.24	2.82	3.26	3.39	2.96
K (%)	4.0	3.5	3.5	3.8	3.5	3.6	2.8	3.1	4.0	3.9	4.4	3.4
Fe (%)	0.73	0.75	0.77	0.79	0.76	1.05	0.76	0.75	0.87	0.82	1.03	0.81
Rb	170	170	170	180	180	190	81	84	130	130	170	300
Cs	12	12	12	12	12	11	2.7	2.6	5.3	4.8	10	13
La	28	25	25	24	25	38	7.5	8.3	43	45	40	28
Ce	36	52	37	39	39	73	15	16	70	64	71	53
Sm	4.5	3.9	3.8	3.8	3.8	8.1	2.4	2.5	6.3	6.7	3.4	7.4
Eu	0.19	0.19	0.21	0.21	0.22	1.2	0.25	0.26	0.92	0.87	1.2	0.09
Yb	2.0	2.1	2.1	2.2	2.1	3.6	0.77	0.72	2.8	2.7	3.5	4.6
Lu	0.34	0.34	0.32	0.32	0.34	0.61	0.10	0.09	0.47	0.47	0.55	0.57
U	3.2	2.7	2.8	2.8	3.0	4.3	1.2	1.4	2.4	2.2	4.9	9.8
Th	15	16	16	16	16	18	1.8	1.8	15	14	18	49
Hf	2.7	2.8	2.8	2.8	2.7	8.6	1.7	1.5	5.0	4.3	8.2	5.2
Co	0.27	0.25	0.30	0.32	0.24	0.40	0.10	0.06	0.30	0.28	0.34	0.27
Sc	2.0	2.1	2.1	2.2	2.1	7.5	1.1	1.1	2.7	2.5	7.3	2.5
Cr	2	2	2	2	2	1	2	2	1	2	2	2

	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119
Na (%)	3.65	3.64	2.99	3.20	2.88	3.01	2.90	2.91	2.73	2.88	2.31	2.95
K (%)	3.3	4.4	3.2	2.8	3.7	3.5	2.9	3.2	3.4	3.9	3.9	2.3
Fe (%)	1.60	1.55	1.22	1.11	1.02	1.04	0.89	0.75	0.75	0.77	0.90	0.79
Rb	200	200	140	120	150	150	160	170	180	180	200	110
Cs	7.1	6.6	6.4	6.5	10	11	8.5	12	12	13	15	7.5
La	88	88	35	38	36	38	34	26	23	24	33	25
Ce	150	150	58	53	60	60	55	39	38	38	65	40
Sm	12	12	3.7	4.0	4.6	4.8	3.9	4.1	3.6	4.2	6.0	3.2
Eu	0.19	0.17	0.55	0.49	0.46	0.45	0.35	0.20	0.20	0.20	0.63	0.56
Yb	5.9	5.7	1.8	1.8	2.0	2.2	1.7	2.4	2.2	2.4	2.5	1.9
Lu	0.70	0.76	0.25	0.27	0.31	0.32	0.25	0.35	0.34	0.24	0.47	0.38
U	4.3	4.2	2.9	3.4	3.2	3.7	3.1	4.3	3.6	4.1	4.6	2.4
Th	25	25	16	15	16	16	17	16	16	16	24	10
Hf	11	11	4.5	3.9	4.3	4.0	3.1	2.6	2.9	2.7	5.9	3.3
Co	0.37	0.44	0.53	0.53	0.40	0.37	0.42	0.21	0.27	0.30	0.97	0.49
Sc	4.0	3.8	1.9	1.8	2.5	2.4	1.9	1.9	2.1	2.1	3.7	2.8
Cr	2	2	3	8	2	4	1	5	3	2	1	2

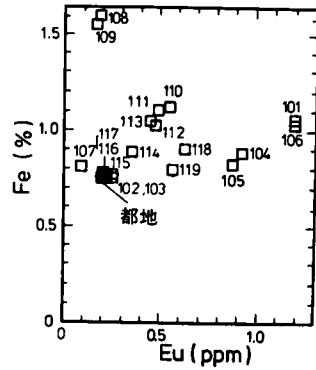
* Na, K, Feについては%で表示

さらに出土および原産地黒曜石各試料中の希土類元素存在量をコンドライト隕石で規格化した。¹⁷⁾ そのうちの代表的な例を第77図に示す。

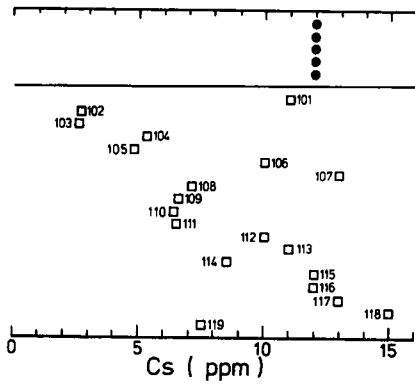
原産地黒曜石(姫島102, 京徳106, 杵岐107, 腰岳116)のコンドライト隕石規格化パターンを比較すると, 希土類元素存在量, パターンの傾き, さらにユウロピウムにみられる負の異



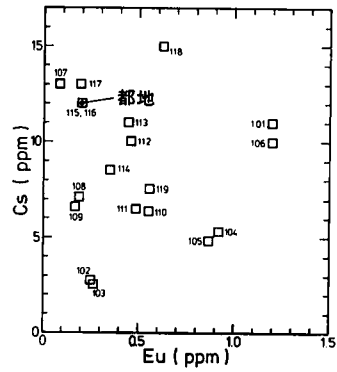
第72図



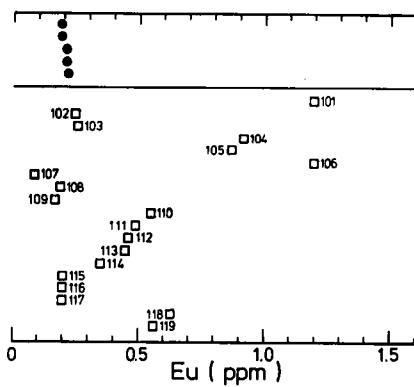
第75図



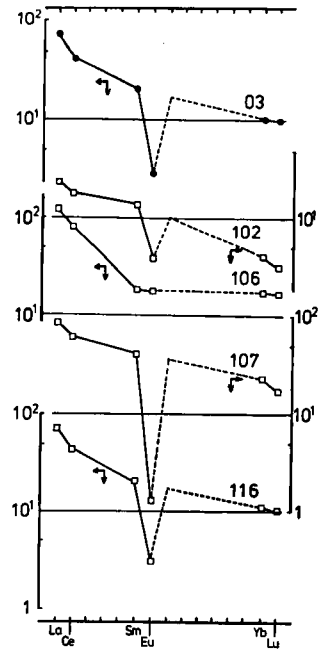
第73図



第76図



第74図



第77図

常の程度等に大きな差異が認められる。これらの原産地黒曜石と本遺跡出土の黒曜石（都地-03）の希土類元素のコンドライト隕石規格化パターンを比較すると、No.116の腰岳産黒曜石ときわめて良い一致を示すことが認められる。またNo.115の古里海岸産黒曜石も同一のパターンを示す。希土類元素のコンドライト隕石規格化パターンによる検討の結果からも明らかなように、本遺跡出土黒曜石の原産地は腰岳、古里海岸であろうと推定される。

以上の結果、本都地遺跡出土の黒曜石5点は、ほぼ同一の化学組成（元素存在量）を示し、同じ原産地より将来されたものであり、また九州各地の原産地黒曜石との化学組成の対比により、これら都地遺跡より出土の黒曜石は、腰岳、古里海岸産のものでであろうと推定される。なお、腰岳産黒曜石と古里海岸産黒曜石とは、化学組成の点できわめて良く一致し、現在の段階では両者の区別は困難である。後者の場合、海岸に点在し、露頭の存在が確認されていない。したがって腰岳産の黒曜石と古里海岸産の黒曜石が同一起源のもので何らかの地学的作用により現在に至ったものか、あるいは全く別系統のものであるかについては、さらに地球化学的に検討を要する問題であろう。

また、本研究では、原産地黒曜石の分析例が少ない（一原産地ごとの分析数、原産地の数）ため、同一原産地内での元素存在量の分布範囲の広さ、さらに原産地間での分布の重なりについてなど、産地分析を行う上で今後さらに検討を加える必要がある。産地の同定では、異なるということは完全に認められるが、化学組成などの一致では、未発見原産地の存在、あるいは過去の原産地の消滅なども含めて、現在のところそのように判断されるという意味にすぎないことは注意すべきことであろう。

試料を提供していただき、多くの有益なご教示を賜った福岡県教育庁管理部文化課児玉真一氏、日高正幸氏、一部試料採取にご協力いただいた長崎県立美術博物館下川達彌氏に深く感謝いたします。

また、原子炉照射実験の際お世話いただいた立教大学原子力研究所関係各位に感謝いたします。

- 註 1) 藤森栄一(1968):「石器」『新版考古学講座, 1, 通論(上)』雄山閣, pp. 108—119。
 2) 江坂輝彌(1971):「黒曜石」『新版考古学講座, 9, 特論(中)』雄山閣, pp. 269—280。
 3) 小野昭(1975):「先土器時代石材運搬論ノート」考古学研究, 21(4), pp. 17—19。
 4) 藤田等(1979):「分業論」『日本考古学を学ぶ(2)』大塚初重, 戸沢充則, 佐原真編, 有斐閣, pp. 192—207。
 5) M. Suzuki(1973):「Chronology of Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan」
 Journal of the Faculty of Science, The University of Tokyo, Sec. V, IV, Part 3,
 pp. 241—318。
 6) 鈴木正男(1977):「ストーン・ロードをたどる」数理科学 No.170, pp. 25—33。

- 7) 大沢眞澄ほか (1974) : 「黒曜石およびひすいの微量成分元素存在量—考古学試料の産地分析について」東京学芸大学紀要, 4 部門, 31集, pp. 188—208.
- 8) 井上真理子 (1976) : 「黒曜石の産地分析」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編東出版亭楽社, pp. 151—167.
- 9) M. Osawa et al. (1977) : 「Trace element abundances in stone artifacts and related materials from Japan by neutron activation analysis. An approach to archaeological provenience studies」J. Radioanal. Chem. **39**, pp. 137—152.
- 10) 近堂祐弘ほか (1979) : 「黒曜石年代測定法の強化」昭和53年度特定研究「古文化財」年次報告書, pp. 57—66.
- 11) 鎌木義昌ほか (1979) : 「石器原材の産地推定とそれによる西日本文化圏の研究」同上, pp. 215—230.
- 12) B. Bernas (1968) : 「A New Method for Decomposition and Comprehensive Analysis of Silicates by Atomic Absorption Spectrometry」Anal. Chem., **40**, pp. 1682—1686.
- 13) 二宮修治・大沢眞澄 (1978) : 「原子吸光分析による土器類中の主成分元素の定量」日本分析化学会第27年会講演要旨集 I E03.
- 14) C. M. Lederer et al. (1978) : 「Table of Isotopes」7th ed., John Wiley & Sons. Inc. New York.
- 15) G. E. Gordon et al. (1968) : 「Instrumental activation analysis of standard rocks with high-resolution γ -ray detectors」Geochim. Cosmochim. Acta, **32**, pp. 369—396.
- 16) F. J. Flanagan (1973) : 「1972 values for international geochemical reference samples」Geochim. Cosmochim. Acta, **37**, pp. 1189—1200.
- 17) L. A. Haskin et al. (1968) : 「Relative and Absolute Terrestrial Abundances of the Rare Earths」『Origin and distribution of the elements』(Ed. L. H. Ahrens), Pergamon Press, Oxford, pp. 889—912.

VI 付・平原古墳群の調査

1 はじめに

若宮・宮田工業団地は、東部の有木地区と西部の若宮地区に大きく二つに分かれる。両地区の工業団相互地の連絡道路の性格を備えた県道室木・下有木・若宮線が九州縦貫自動車道路の南側に沿って建設されることとなった。これは鞍手町から宮田町、若宮町におよびいわば産業道路であり、有木地区の道路法面造成中に古墳1基が用地内に存在することが判明し、福岡県文化財指導委員小方良臣氏を通じて連絡があり、破壊される前に調査をまに合わせる事ができた。

古墳群は円墳2基からなり、直径は10mを超えない。今回調査した古墳を1号墳とし、1号墳東側の用地外の古墳を2号墳とした。1号墳はブルドーザに押されて墳丘は全く残っておらず、後室の天井石はその際に石室内に落下していた。2号墳は墳丘に盗掘蟻が入り乱れ、わずかに石材が露出しており、天井石は完存しているようであった。

発掘調査は昭和54年6月1日から6月9日にかけて実施し、その後、若干の補足調査を行って調査を終了した。

調査関係者は次の通りである。

福岡県教育庁管理部文化課

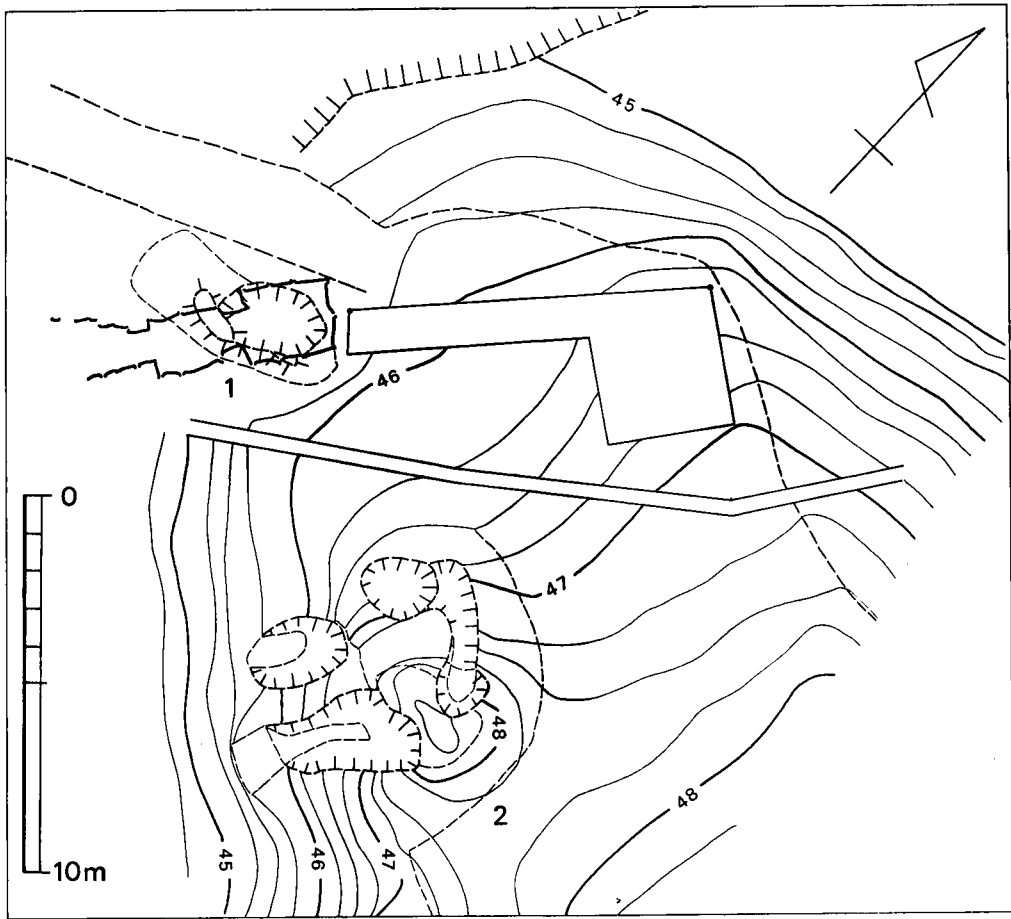
	課長	藤井 功
庶務係	係長	大淵 幸夫
	主任主事	大神 新(担当)
調査第1係	係長	宮小路 賀宏
	技師	児玉 真一(担当)
	調査補助員	日高 正幸

若宮町教育委員会社会教育課

指導係	主事	小方 良臣(県文化財指導委員)
-----	----	-----------------



第78圖 平原古墳群周辺地形圖 (1/2000)



第79図 平原古墳群地形実測図 (1/200)

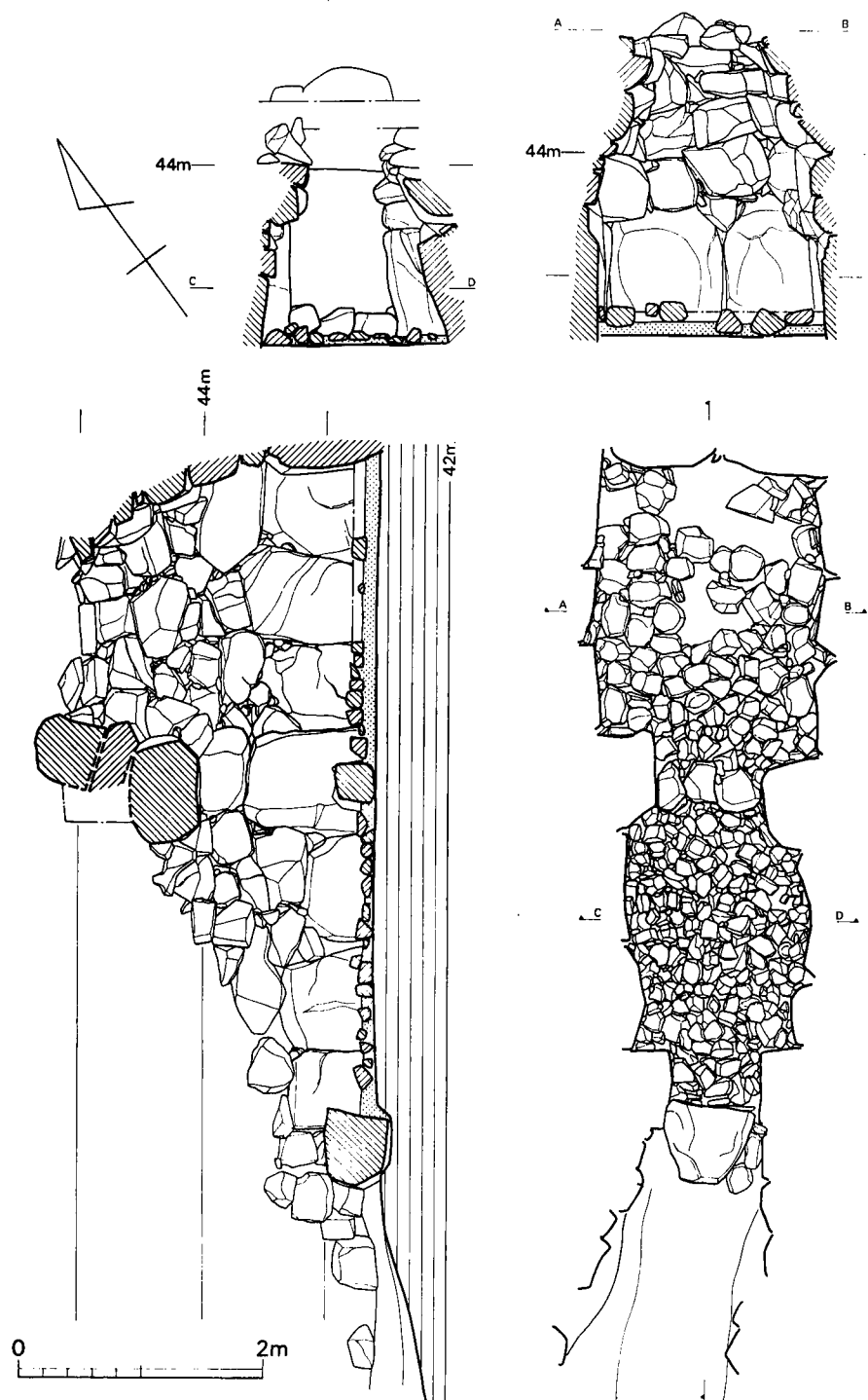
2 平原 1 号墳

(1) 墳丘と石室

墳丘 (第78・79図)

ほぼ東西にのびる丘陵鞍部に構築された円墳で、標高は46m付近を示し、水田面との比高差は約20m程度である。

調査前にブルドーザーで墳丘が削られ、天井石2個が石室中に落下していた。墳丘は前室天井石上部付近に一部しか残っておらず、墳丘背後の弧状溝(周溝)は存在しないので、本墳の構築状態や規模を正確に知る資料を得ることはできなかったが、2号墳の規模や周辺古墳群の



第80图 平原1号墳石室実測図(1/60)

円墳から推測して直径は10mを超えないと思われ、高さは2mを超えないと推測される。

石室（図版29～31，第80図）

南西に開口する複室構造の横穴式石室で、主軸全長7.5mを測る。調査実施直前まで後室天井石が完存していたが、奥壁側からブルドーザーで土取りをした際に後室内に落下したということである。よって後室の壁体は石室構築時に近い状態を呈していると考えて差し支えない。

後室は幅約1.8m、長さは右壁で2.3m、左壁で2.2m、天井石までの高さはおよそ2.4m前後である。奥壁は大き目の石を2石用いて腰石とし、その上に7段の石積みをして壁体を構築し、左右両側壁も同様に積んで隙き間に小石でパッキングしている。両側壁と奥壁とからなる隅部は腰石上の石積みから上は両壁に分散して重量のかかるようにはずに積まれている。

後室入り口は長さ0.6m、幅0.9m、高さ1.2mある。前室・後室の仕切りは3個の自然石を横一列に並べることによって行い、仕切り石を安定させるための配慮はなされていない。

前室は腰石に2石づつ用い、両側壁とも更に5段の石積みが残っている。長さは右壁で1.6m、左壁で1.9m、幅は1.2m～1.5mである。

前室・後室とも床面には自然石を敷いており、後室の敷石は前室のそれよりも大き目の石を使っている。また、両室とも石室掘り方床面レベルはほぼ等しく水平に近いが、後室では敷石下に5cm～10cmの厚さで土砂を敷いて敷石上面の平坦・水平化と安定をはかっている。この土は石室掘り方掘削時に出た地山の土で粘性の花崗岩バイラン土である。前室ではそのような配慮は認められず、結果的に敷石上面の高さが後室より10cm程低くなっている。

前室入り口は幅0.7m、長さ0.6mで、高さは1mまで残っている。羨道との仕切り石は幅・長さとも70cm程度、厚さ50cmの石材を用い、掘り方内に設置して安定化をはかっている。後室入り口の仕切り石とその上面の高さを合わせるために、地山面の低い前室入り口には厚い石材を仕切り石として使用したと推測される。

羨道は石室主軸に対して西に偏してつくられ、石積みの残存状態は悪い。長さは1.5m程である。

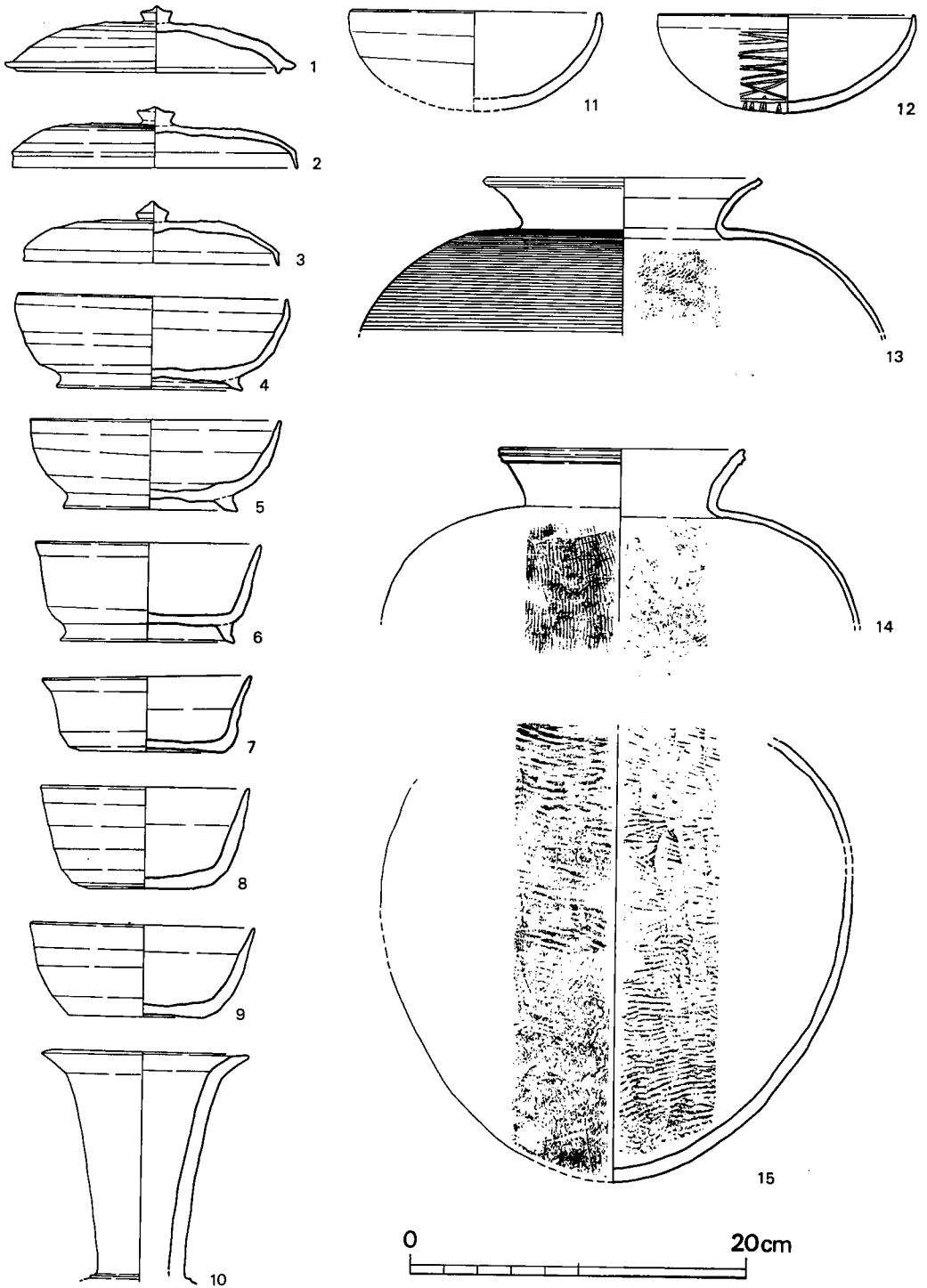
この石室は各部の計測値に見る限りにおいてはかなり企画的に構築されてはいるが、壁面は整美ではなく雑な作りである。使用石材の多くは花崗石である。

(2) 出土遺物（図版51・52，第81・82図）

須恵器および土師器が出土した。歴史時代の土師器が後室床面から5cm程浮いて出土し、石室の再利用を示す資料である。

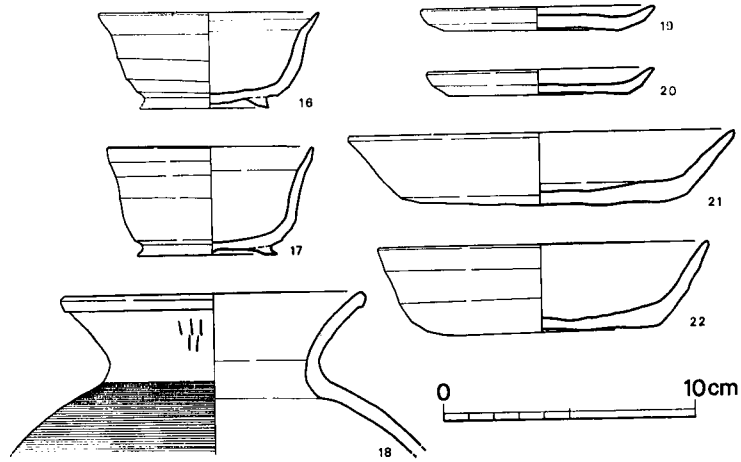
須恵器

坏蓋（1～3）宝珠形のつまみを有するもので、1は羨道入り口から、2・3は前室から出土した。口縁部の作りは1がわずかに受け部を残すだけで、他は端部を折り曲げただけの



第81图 平原1号墳出土土器実測図① (1/4, 13~15は1/6)

ものである。3個体とも天井部外面は回転ヘラ削りを行ないナデおよび回転ナデによる調整を行っている。1は口縁部径17.3cm, 器高4cm, 2は17cm, 3.7cm, 3は15cm, 3.7cmである。砂粒を含み, 焼成良好である。



第82図 平原1号墳出土土器実測図② (1/3, 18は1/6)

高台付坏 (4~6,

16・17) 大・小2種類出土している。4~6は大形の坏で口縁部径16cm~13.5cm, 器高5.5cm~5.8cmを測る。底部は時計方向回転のヘラ削り, 他はナデ, 回転ナデ調整を行っている。16・17は小形品で, 16は口縁部径8.8cm, 器高3.7cm, 17は同じく8.2cm, 4.3cmを測る。16は体部下位にヘラ削り痕を残すが, 両者とも同様なつくりでナデ, 回転ナデにより調整を行っている。4・5は羨道入り口, 6はブルドーザーでおされた土の中, 16・17は前室から出土した。胎土に砂粒を含み焼成良好である。

坏 (7~9) 7は前室, 8・9は羨道入り口周辺で検出した。法量はほぼ等しく, 口縁部径12.5cm~13cm未満, 器高4.5~5.6cmである。底部はヘラ削りされ, ナデ, 回転ナデにより調整されている。焼成良好で堅固である。

長頸壺 (10) 胴部以下を欠失し, 口縁部径12.5cm, 現在高14cmを測る。調整は回転ナデで, 焼成良好で暗灰色を呈する。前室入り口付近で出土している。

甕 (13~15・18) とともに羨道入り口付近の東側墳裾から出土した。胴部内面は当木の圧痕がそのまま残り, 外面はタタキの上からカキ目調整を行うものと, タタキ放しのものがある。口縁部径は21cm~24cmで器高は50cm前後と思われる。18は頸部にヘラ記号を有す。胎土に多量の砂粒を含み, 焼成良好で硬質である。

土師器

坏 (11・12) 前室から出土した。口縁部16cm前後, 器高6cm弱である。外面はヘラミガキがなされるが, 11は器面が剝落して不明である。内面の口縁部下は回転ナデを行い, 以下は剝落して調整不明である。

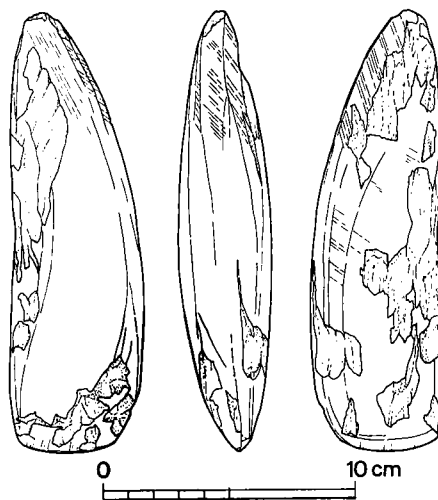
小皿 (19・20) 後室から出土した。口縁部径9.3cm, 器高1cmである。器面が荒れているが, 底部は糸切りだと思われる。

坏 (21・22) 後室から出土した。21は口縁部径15.3cm, 器高3cm, 22は13.2cm, 3.5cmである。底部は糸切りである。 (児玉)

石 斧 (第83図)

1号墳墳丘の西斜面から採集した資料で、蛇紋岩製の磨製石斧。法量は、長さ17.5cm・最大幅5.2cm・厚さ3.1cm・重量470g, 刃部幅は4cm程度を有し頭部は狭くなる。また体部は、頭部端と刃部の中心を結んだ中軸線に対して偏った形状で、振れも生じている。全面に研磨痕を観察できるが、とり残された剝離面も広くみられる。

この種の磨製石斧は、いわゆる北古賀式石斧の範疇に含めうる。蛇紋岩あるいは片岩質という素材のもつ性質に影響された形状ともみれるが、掌に握って使用し易い形状を呈していることに注目されよう。縄文時代後期末～晩期初頭頃の所産であろう。 (小池)



第83図 平原表採の磨製石斧 (1/3)

3 小 結

本石室は壁面も不揃いでかなり雑な石の積み方をしているが、石室各部の計測値を対比してみると、かなり規則正しく構築されていることがわかり、後述するように事前に厳密な設計をしていたことが伺える。

石室全長は主軸で7.4mを離り、そのおよそ $\frac{1}{3}$ の寸法 (2.45m前後) が後室・前室の床面の敷石部分の主軸長に対応する。また、この数値は後室の床面から天井石下面までの高さとはほぼ同一である。さらに、後室敷石部分の主軸長のほぼ $\frac{1}{3}$ が後室入口幅 (床面で0.85m) となり、ここでは「三分の一」の概念の存在をうかがい知ることができる。

次に、後室幅 (平均値) と後室入口幅、前室幅と同入口幅、後室床面から天井石までの高さと同室床面から楯石までの高さは各々2対1の比率を示している。

以上のように、石室各部の計測値はかなり正確な比率を示し、まず、石室全長を決定して他の部分の規模を決定したと推測される。先述した各部の比率から、本石室は等分比、 $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{3}$ の概念のもとに設計されたことがわかる。ただ、墳丘はすでに削平されて不明であるため、墳丘と石室の関係については知ることができなかった。 (児玉)

VII 結 語

昭和51年度から同54年度にわたって行った若宮・宮田工業団地の発掘調査は、九州縦貫自動車道関係と共通の遺跡の調査が大半を占め、結果的に同一の遺跡を関係事業の相違から二度にわたって調査することとなった。よって、柳ヶ谷遺跡についてはその範囲をおよそ知ることができ、汐井掛遺跡、同古墳群については類似の遺構を追加することができた。九州縦貫道関係の遺跡と重複しない遺跡の調査は埋葬遺跡関係のものが主であった。ここではそれらのうち、汐井掛古墳群を中心に堅穴系横口式石室をとりあげ、同一古墳群内における単室横穴式石室との関係について素描することによって結語に変えたい。

堅穴系横口式石室とその消長

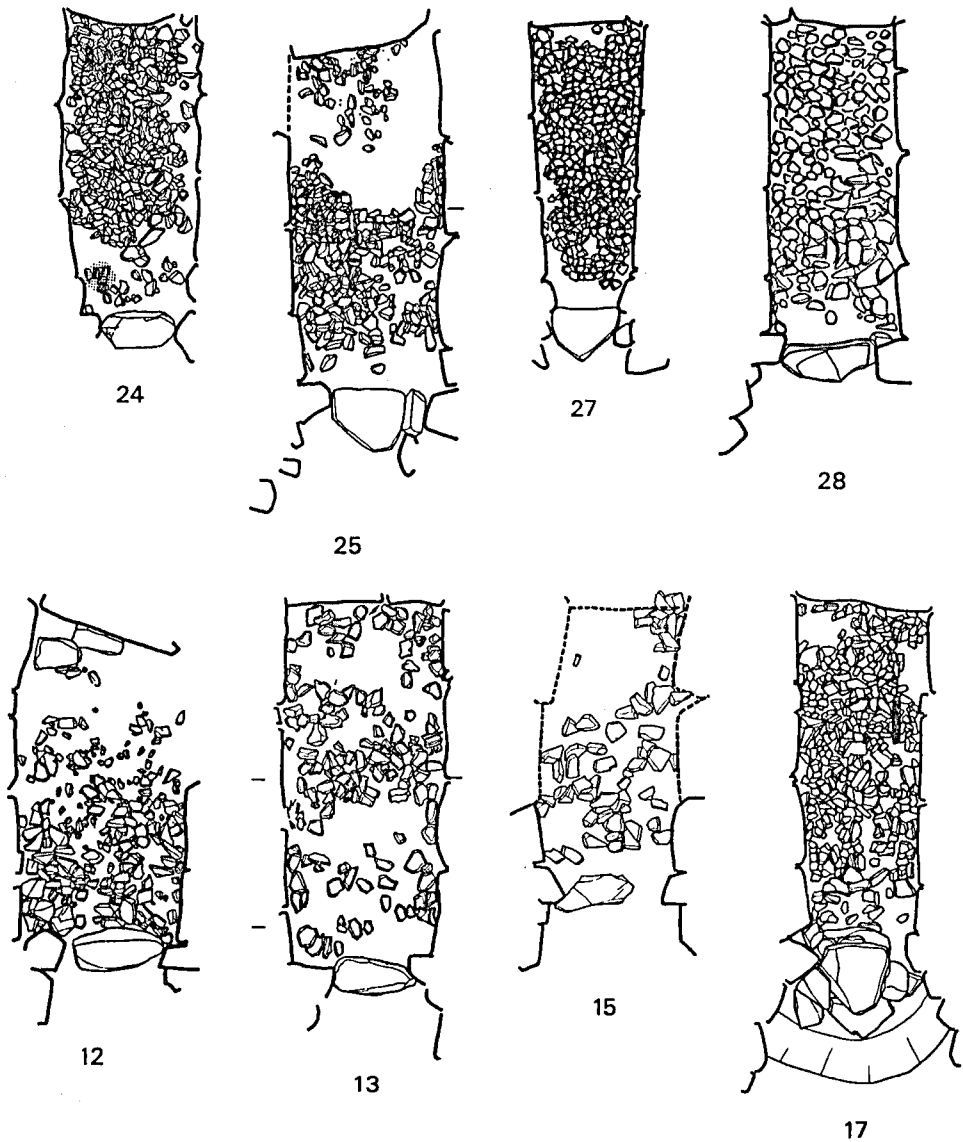
堅穴系横口式石室の抽出（第84図）

九州縦貫道、若宮・宮田工業団地関係で調査を実施した古墳群は西から、小原古墳群（註1）、汐井掛古墳群（註2・3）、高平古墳群（註4）、都地古墳群、南ヶ浦古墳群（註5）があり、県道関係で調査を行った平原1号墳を含めて、総数にして65基の古墳および石室が調査された。これらのうち、後述する堅穴系横口式石室の範疇にはいる石室を内部主体とする古墳は汐井掛古墳群と都地古墳群においてその存在を確認することができ、それは以下のようなものである。

◦ 汐井掛古墳群 A 支群——24・25・26・27・28号墳	5 基
B 支群——12・13・15・17号墳	4 基
◦ 都地古墳群西支群——1・3号墳	2 基

これらの3グループのうち、汐井掛B支群の石室のうち12・13号墳は前壁構造を有しており、石山勲氏の言う意味での堅穴系横口式の範疇にはいるものではない（註6）。前壁構造の有無は堅穴系横口式石室か否かを判断する基準の一つとなり得るには違いないが、筆者はこの種石室の範囲を少し広く考えたい。

堅穴系横口式石室の形態的特徴やその型式分類、さらに石室の系譜的問題等については山中英彦氏（註7）、石山勲氏（註8）、柳沢一男氏（註9）、佐田茂氏（註10）等の論攻に詳しい。詳細は四氏の文献に依られたいが、この種の石室は各古墳群の形成過程の中で考えるべきであり、汐井掛古墳群においては、12・13号墳石室と14号墳石室との間には、前壁構造を有するという共通点はあるものの、前者の玄室プランは後者に比して幅が狭く、前庭部を持つが14号墳のような墓道は持たない。この墓道の有無がこの種の石室の性格を考える一つの重要な



第84図 汐井掛古墳群竪穴系横口式石室集成図 (1/50)

ポイントだと考えられ、追葬を行う場合に石室へはいる為の通路は14号墳の場合は墳裾部近くからやや下降しながら石室側へ傾斜する墓道を通るが、12・13号墳の場合は墓道はなく、墳丘中位付近から前庭部へ向かって斜め下に降りることにより、石室に達することになり、そこには大きな差を見出すことができる。よって、汐井掛古墳群では前壁構造の有無よりも墳裾まで達する墓道の存在の有無をより重視し、12・13号墳を竪穴系横口式石室の範疇に入れた。

堅穴系横口式石室の構造的特徴

堅穴系横口式石室自体の構造面における特色についてはすでに先述の四氏によりほぼ言い尽くされた感がある。石室と墳丘との関係、すなわち、石室に追葬を行う場合の通路の構造に関して、先にあげた11基の古墳について簡単にみてみたい。

11基の古墳のうち、わりと墳丘の残りの良好な都地古墳群西支群の2基、汐井掛古墳群B支群12・13・17号墳等においては、石室は地山深く掘り方の中に築かれ、横口部に続く前庭部の石積み基底部は、前庭部床面の傾斜に沿って手前側の高さは高まる。前庭部床面の傾斜をそのまま延長して墳丘断面でみれば、それは墳裾部に延びるのではなく、墳丘中位より少し下方に至る。すなわち、径10m前後の小円墳の内部主体たるこの種の石室の、単室横穴式石室と決定的に異なる点は、羨道・墓道を持たない点であり、追葬時の通路として、墳裾から石室入り口に対してほぼ水平か、やや下降する程度の墓道を使用する横穴式石室と異なって、墳裾から前庭部の開く墳丘中腹近くまで一度登り、次に多くの場合においてかなりの傾斜を持つ前庭部床面を斜め下方に降りる、といった方法がとられる点に求められる。とりわけ汐井掛古墳群における上述の相違は、6世紀中葉を降らない時期のB支群の16・17号墳の対照において顕著に認められ、B支群の14号墳の石室はすでに堅穴系横口式との間に一線を画することができる。

次に、堅穴系横口式石室の玄室の床面プランは、奥壁側の幅が広い羽子板形のプランを呈するものがあり（17号墳・27号墳等）、先行する汐井掛遺跡の箱式石棺墓に通ずる部分がある。壁体の石積みのし方や床面に小石を敷く点は石棺系堅穴式石室の系譜をひいていると思われる、控え積みを持たない汐井掛古墳群、都地古墳群の堅穴系横口式石室は山中英彦氏の指摘されたように（註11）石棺系堅穴式石室の系譜につらなるものと思われる。

堅穴系横口式石室の系譜と性格

この石室はその名の示す通り、堅穴式石室を母体とし、横穴式石室のもつ思想性をもとに成立した石室として認識され、それ故に、当初から追葬行為を伴って成立したものである。その系譜的問題については山中英彦氏が北九州市小倉北区東宮ノ尾古墳群の石棺系堅穴式石室に関する論攻の中で触れられ、「堅穴系横口式石室は、老司古墳・稲童21号墳などにみる純正な堅穴式石室を母体とするタイプとこの片山古墳群や栗崎山古墳群にみる如く石棺系石室を母体とするタイプに分ける必要がある。」（註12）と考えられている。氏はその母体となった堅穴式石室をⅠ～Ⅲ類に分類され、Ⅰ類は畿内型の石室で名実共に卓越した古墳の埋葬施設であり、Ⅱ類は円墳に多く石室内法は縮小しⅠ類の拡充を象徴する石室とされ、Ⅲ類は箱式石棺を母体に堅穴式石室の手法を導入した石棺系堅穴式石室、とされ、とくに、Ⅰ類とⅡ類の堅穴式石室における対照は、政治的階級性の反映と考えられている。

堅穴式石室のⅠ類とⅡ・Ⅲ類間にみられる政治的階級差の反映は、当然のことながら、各類の堅穴式石室を母体として成立した堅穴系横口式石室にも投影され、若宮町においても、Ⅰ類の堅穴式石室を母体として成立した堅穴系横口式石室を内部主体とする竹原八幡塚古墳（註

13) は、径27mの円墳で埴輪を持ち、馬具、鉄剣・鉄刀・鉄鏃などの武器が副葬され、本墳の南800mの剣塚前方後円墳の系譜に連なる政治的支配者の奥津城と認識される。これに対して、八幡塚古墳北方約1.8kmに位置する汐井掛古墳群、都地古墳の竪穴系横口式石室は先述のⅢ類の石棺系竪穴式石室を母体に成立したものであるが、古墳の径は10m前後で、副葬品は玉類や鉄鏃等の小形鉄製品が主で、盗掘されたものが多いとはいえ、副葬品の質・量は八幡塚古墳に及ばない。汐井掛古墳群や都地古墳群の竪穴系横口式石室は5世紀後半の新しい時期から6世紀前半代（中葉を降らない）に築造されたものであるが、これらは、八幡塚古墳クラスの石室との間には歴然とした格差が存在し、それは単に時期的な差（八幡塚は5世紀後半代とされる）に起因するものではなく、被葬者が生前に占めた政治的ヒエラルキーの中での地位の差の反映と解される。

他地域に目を転じて、Ⅰ類の竪穴式石室を母体とした竪穴系横口式石室は、福岡市老司古墳（註14）、甘木市小田茶臼塚古墳（註15）、津屋崎町瀬戸古墳（註16）等の前方後円墳や、前原町釜塚古墳（註17）、先述した竹原八幡塚古墳のような大型円墳の内部主体として採用され、それぞれの地方で卓越した政治的支配者クラスの古墳と目される。

Ⅱ類の竪穴式石室を母体とする竪穴系横口式石室は行橋市稲童8号墳（註18）、同21号墳（註19）、山門郡名木野10号墳（註20）などがある。稲童8・21号墳は豊富な副葬品を有するが円墳であり、内部主体は不明だが同一古墳群中に帆立貝式前方後円墳（石並古墳—稲童20号墳）があり、21・8号墳の被葬者の生前の政治的地位は20号墳の下部系列につながるものと想定される。正式報告書未刊で詳細は不明であるが、老司1・2・4号石室もこの範疇にはいるのではないと思われる。この3つの石室は3号石室とは異なった在り方をしており、副葬品の質・量ともに劣り、石室のエスタイテスは3号石室よりも低いものである。このタイプの竪穴系横口式石室は、Ⅰ類のそれに対して従属的な位置を占めるようである。

Ⅲ類の石棺系竪穴式石室を母体とした竪穴系横口式石室は5世紀後半から6世紀にかけての小円墳の一般的な埋葬施設としてみられるもので鏡を副葬するものはほとんどなく、玉類や少量の鉄製品を副葬するものが多い。群集墳形成の先駆的の石室としてとらえることができよう。

Ⅰ類の竪穴式石室を母体とする竪穴系横口式石室は老司古墳3号石室の5世紀初頭を初現としておおむね5世紀代に中心をおく。Ⅱ類のそれは、老司1・2・4号石室をこの範疇に含め得るか否か報告書未刊のため疑問が残るが、もし含まれる場合は5世紀前半から6世紀前半の幅の中に求めることができる。Ⅲ類の石棺系竪穴式石室を母体としたものはⅠ・Ⅱのそれよりも後出し、5世紀後半以後にみられる。これら3タイプの竪穴系横口式石室の差は多くの場合において、被葬者の生前の社会的な身分秩序をほぼ忠実に反映しているものと想定される。

これらのことを踏まえてみれば、汐井掛古墳群、都地古墳群の竪穴系横口式石室の性格や被葬者の生前の社会的地位についてもおおむね了解されるだろう。すなわち、先述の3つのタイプの石室のうち、最もエスタイテスの低いものと思われるものであり、その石室を採用した

(あるいはそれしか採用できなかった) 両古墳群の11基の古墳の被葬者達は堅穴系横口式石室の示す階級差の中で最も低い地位——当時の支配機構の末端につらなる人々——の埋葬施設であつたらうと想定されるのである。彼等の存立基盤は両古墳群の存在する丘陵の西および南の山口川流域の平野部であり、この流域を直接的な生産活動の場とした集団(その実体についてはここで述べることはできない)を直接に統轄した地域的小首長層の形成した古墳群と想定される。

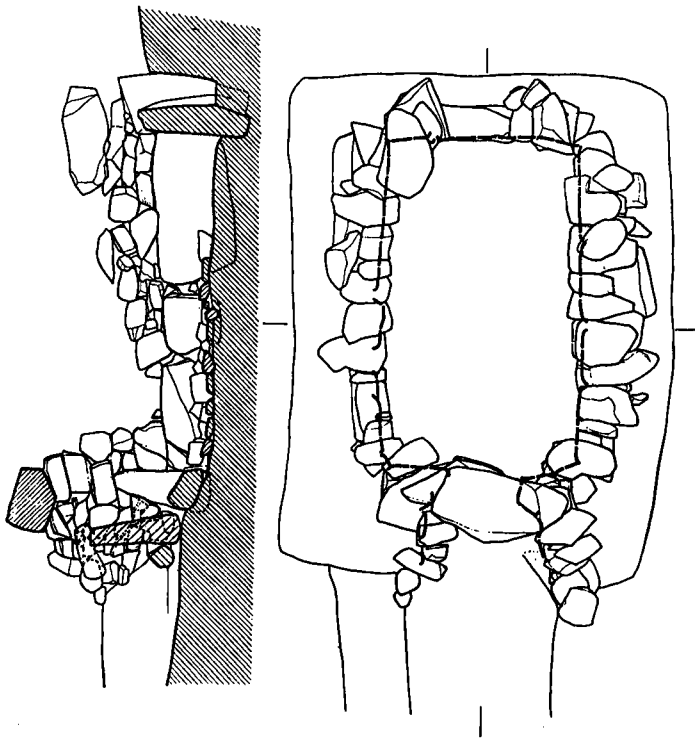
堅穴系横口式石室と単室の横穴式石室

汐井掛丘陵周辺古墳群のうち、標記の両石室が存在するのは、群集墳形成への動きが早くも5両紀後半代にはじまった汐井掛古墳群においてだけみることができる。他の古墳群では、たとえば都地古墳群のように堅穴系横口式石室の段階で造墓活動は途絶えているようで次の新しい石室を持つ古墳はなく、小原古墳群や高平古墳群のように、複室構造の横穴式石室がすでに出現している6世紀後半以降の古墳から成っている。よって汐井掛古墳群では堅穴系横口式石室から単室の横穴式石室への移行を見ることができる。

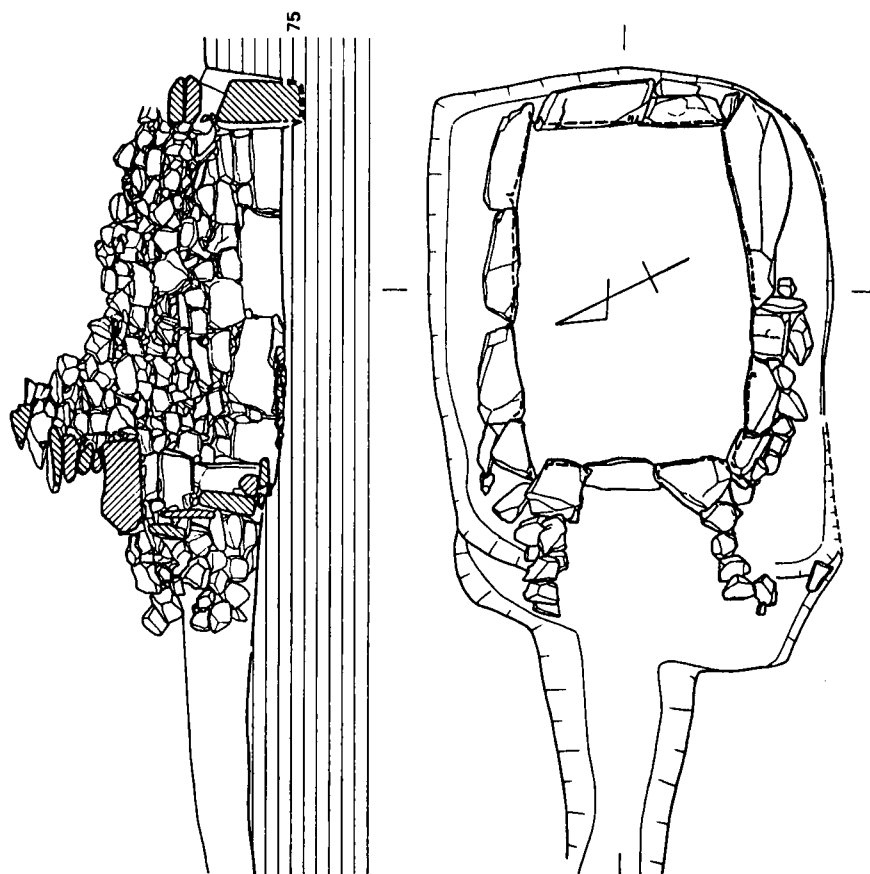
汐井掛古墳群B支群では、先述したように堅穴系横口式石室と単室の横穴式石室とが存在し、14号墳の石室(第85図)のように、堅穴系横口式石室自体の構造的な特色を完全には払拭しきれないものと、16号墳の石室(第86図)のように完全に横穴式石室として定着した構造のもの

が存在する。

14号石室は、12・13・15・17号墳の堅穴系横口式石室と比較して、石室内法は広くなり、中でも玄室幅と同長さの比は1:2以上となり、幅広くなる。石の積み方については、玄室と前庭部の壁体は各々別に積まれるのではなく、袖石天場以上の石積みは前壁を含めて同一作業過程を経たものと見なされ、17号墳石室のように袖石を境に玄室と前庭部の石の積み方が各々別



第85図 汐井掛14号墳石室(1/60)



第86図 汐井掛1号墳石室 (1/60)

になされたと思われるのに対して全く異った手法に依っている。14号墳石室のこのような石の積み方は16号墳石室と全く同様である。

墳丘裾部から玄門に到る通路については先述したようにゆるやか傾斜を持つ墓道が墳裾と前庭部を接続し、11号墳や16号墳の墓道とほぼ同様な構造のものである。

前庭部の構造は平面的には16号墳と同じように“ハ”字形に開くものであるが、基底部の石積みの仕方に違いがみられる。14号墳石室の前底部の基底部の石は、堅穴系横口式のそのように玄門部側から墓道側に向かって除々に高まりをみせ、墓道寄りの石積みの段数は少なくなる。16号墳石室の前庭部の基底部の石は、14号墳と違ってほぼ水平であり、石室自体の構造も堅穴系横口式とは異なる。また、16号墳は12～15・17号墳が墳裾を接するかのよう構築されているのに対して、これらから超然と離れて存在し、出土した土器で見限りにおいては6世紀前半の中葉寄りの頃の時期が与えられ、上記の5基ときわだった時期差はない。

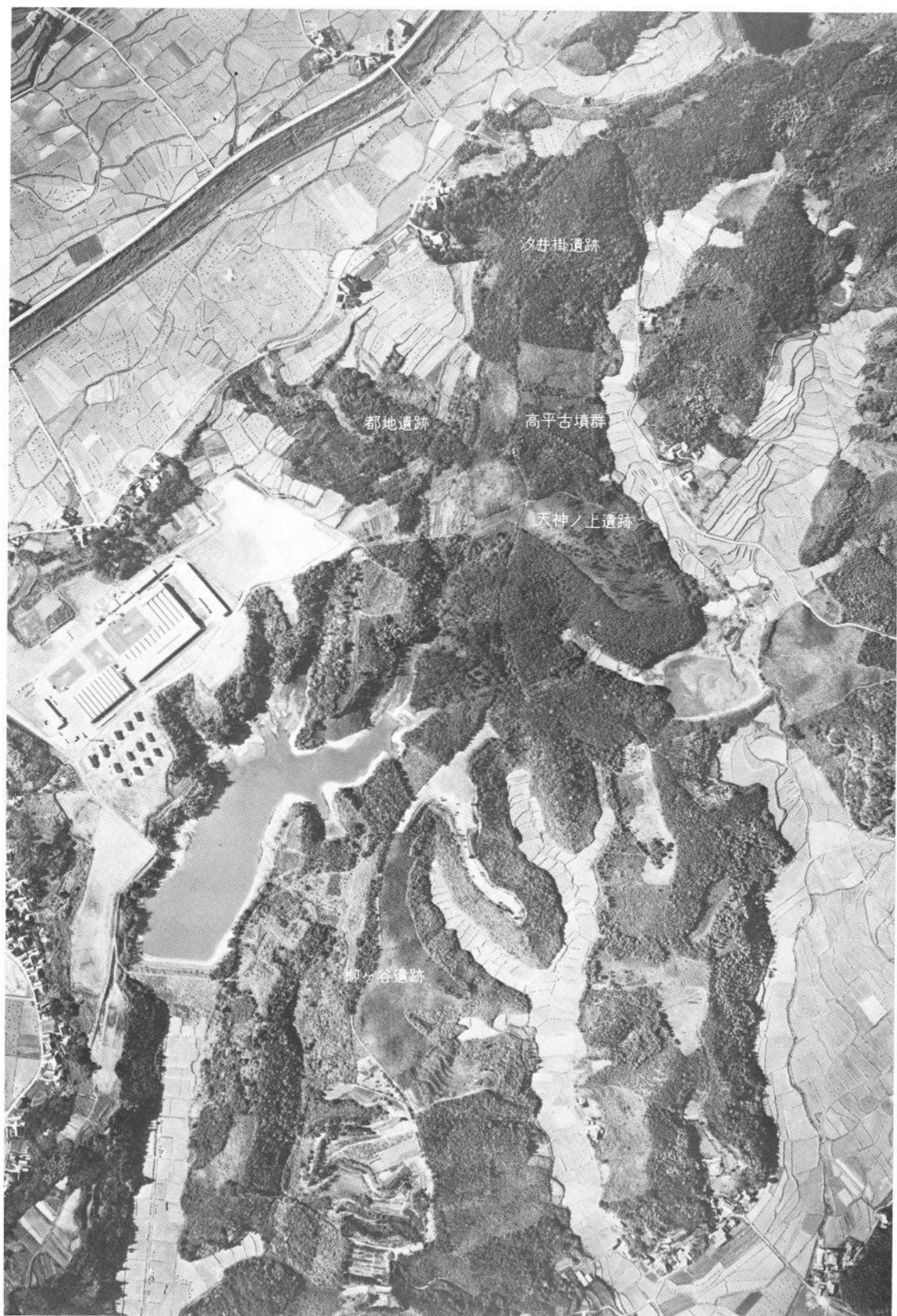
このように、汐井掛古墳群においてはその群形成の初期にA支群において堅穴系横口式石室が採用され、6世紀代にはいってB支群へと受けつがれており、その中で完全な横穴式石室として16号墳が成立する。14号墳は16号墳をのぞいたB支群の中では石室の構造や墓道を持つ点から16号墳の石室への接近を思わせるものがあり、もはや堅穴系横口式石室の名はふさわしくない。12～17号墳のうち、先述したように16号墳だけは他の5基から離れて存在し、供献土器の中に器台を有し、5基の古墳とは性格の異なるものと考えられる。また、石室構造の相違は単に時期差だけを反映したものではなく、B支群の被葬者達の生前の社会的地位を反映しているだろうと思われる。6世紀前半代で中葉まで降らない時期に成立した16号墳と他の5基は上のような背景の中で構築されたと想定され、この時期においては生前の階層差によって採用し得る石室が異なっていたのかも知れない。

また、弥生時代後期～5世紀代までにわたって営まれた汐井掛遺跡の埋葬施設群のうち、箱式石棺墓の残照は古墳時代後期にまでおよび、石棺系堅穴式石室、堅穴系横口式石室へと展開する。北九州の伝統的墓制たる箱式石棺は5世紀後半代以降においても全く痕跡を残さないまでに衰退したのではなく、その残照は古墳時代を通じて見出すことができる。すなわち、人間の行為がひとただ伝統というものに昇華され定式化された時、伝統はすでに人間の意識の底部に沈澱しながらも、れそは忘れられず、変容されながら新しい文化の源泉となったのである。

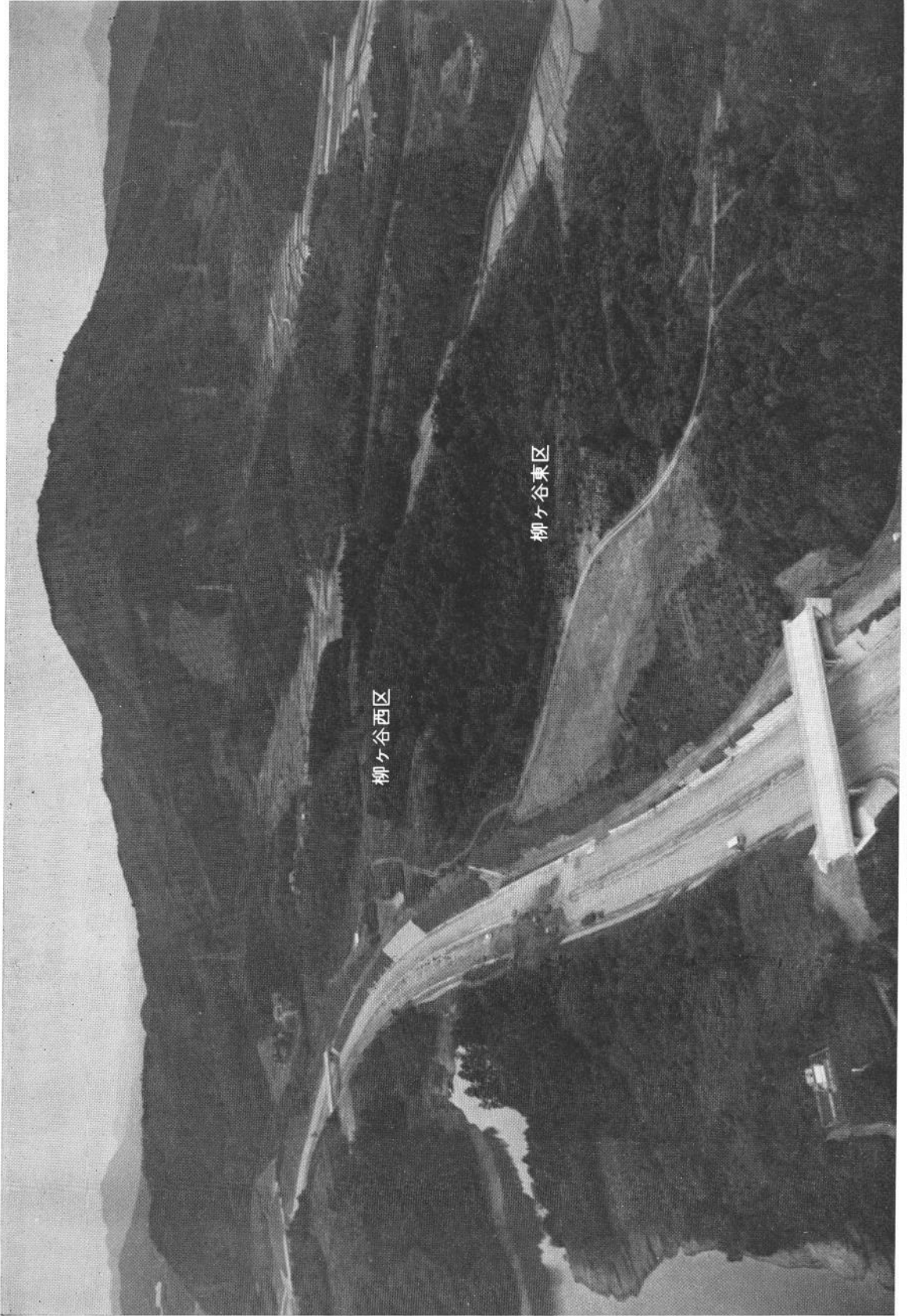
(児玉)

- 註 1 児玉真一編『九州縦貫自動車道関係埋文蔵文化財調査報告』—XI— 1977 福岡県教育委員会
 2 上野精志編『九州縦貫自動車道関係埋草文化財調査報告』—X X II— 1978 福岡県教育委員会
 3 児玉真一編『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』 第1集 1979 福岡県教育委員会
 4・5 3に同
 6 石山勲「平原古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋草文化財調査報告』—III— 所収 1972 福岡県教育委員会
 7 山中英彦他『稲童古墳群第2次調期抄報』 1965 蔵内古文化研究所
 『東宮ノ尾古墳群』 1974 北九州市教育委員会
 8 石山勲他『片山古墳群』 1970 福岡県教育委員会 註6文献
 9 柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』所収 1975
 10 佐田茂「堅穴系横口式石室の一側面」史淵112 1975
 11・12 山中英彦『東宮ノ尾古墳』 1974 北九州市教育委員会
 13 柳田康雄「竹原八幡塚古墳の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』 第13集 1979 福岡県教育委員会
 14 岡崎敬・森貞次郎他『福岡市老司古墳調査概報』 1969 福岡市教育委員会
 15 柳田康雄『小田茶臼塚古墳』 1979 甘木市教育委員会
 16 調査を担当した九州歴史資料館調査課森田勉氏(当時県文化課)の御教示による。
 17 石山勲「県内屈指の円墳(釜塚古墳)」 1974 ふるさとの自然と歴史24
 18 山中英彦『稲童古墳群第1次調査抄報』 1964 蔵内古文化研究所
 19 山中英彦『稲童古墳群第2次調査抄報』 1965 蔵内古文化研究所
 20 新原正典・佐土原逸男編『名木野古墳群』1977 瀬高町教育委員会、この中で10号墳丘下の石室を「山中氏のいう石棺系石室を母胎としたタイプの一類型」とされているが、本石室は明確な控え積みを持っており、山中氏のいう純正な堅穴式石室のうちⅡ類を母体にして成立したもので、石棺系石室を母体としたものではない。なぜなら、石棺系石室は控え積みを当然持たないし、10号墳石室の壁体の石積みに石棺系石室特有の手法は見られないからである。

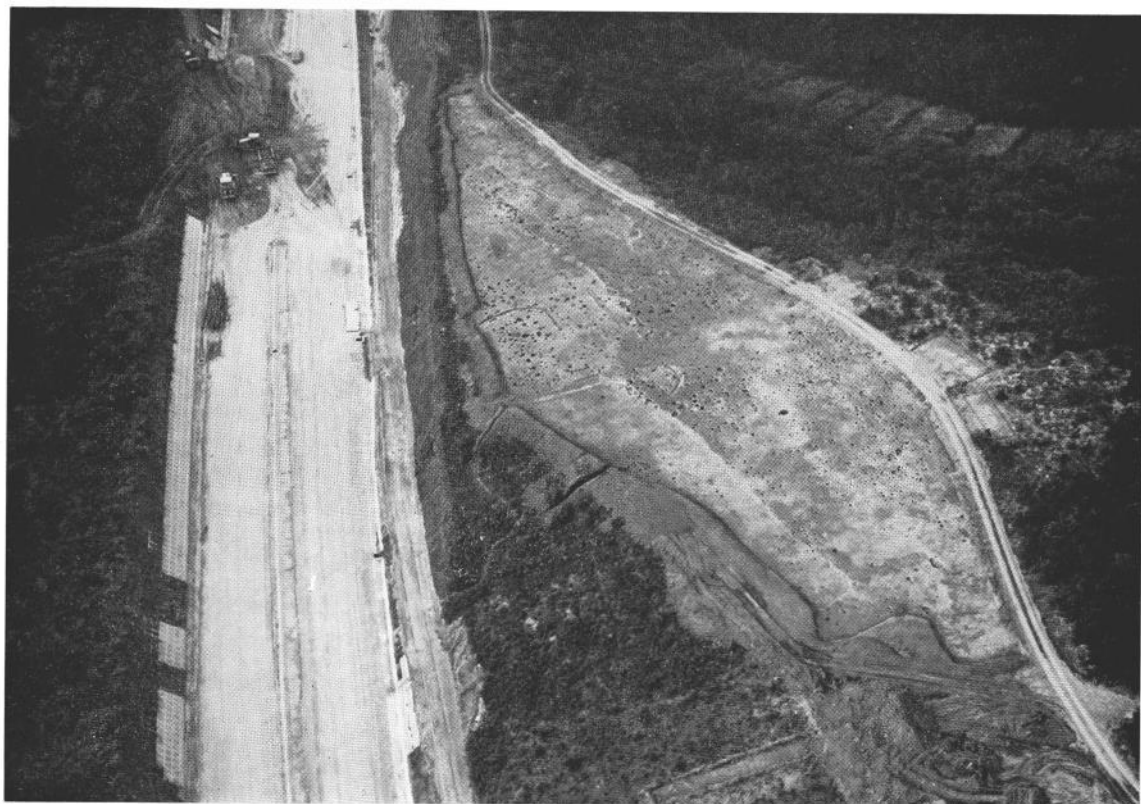
圖 版



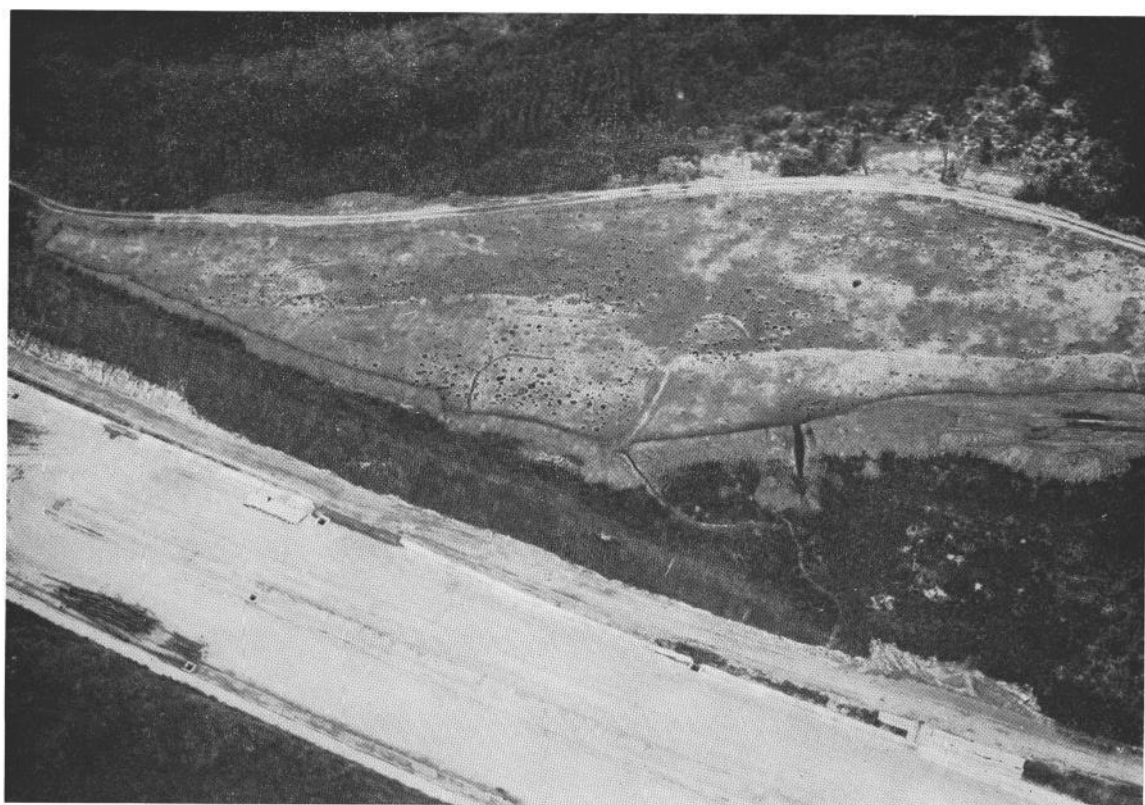
宮田工業団地内遺跡航空写真（調査前）



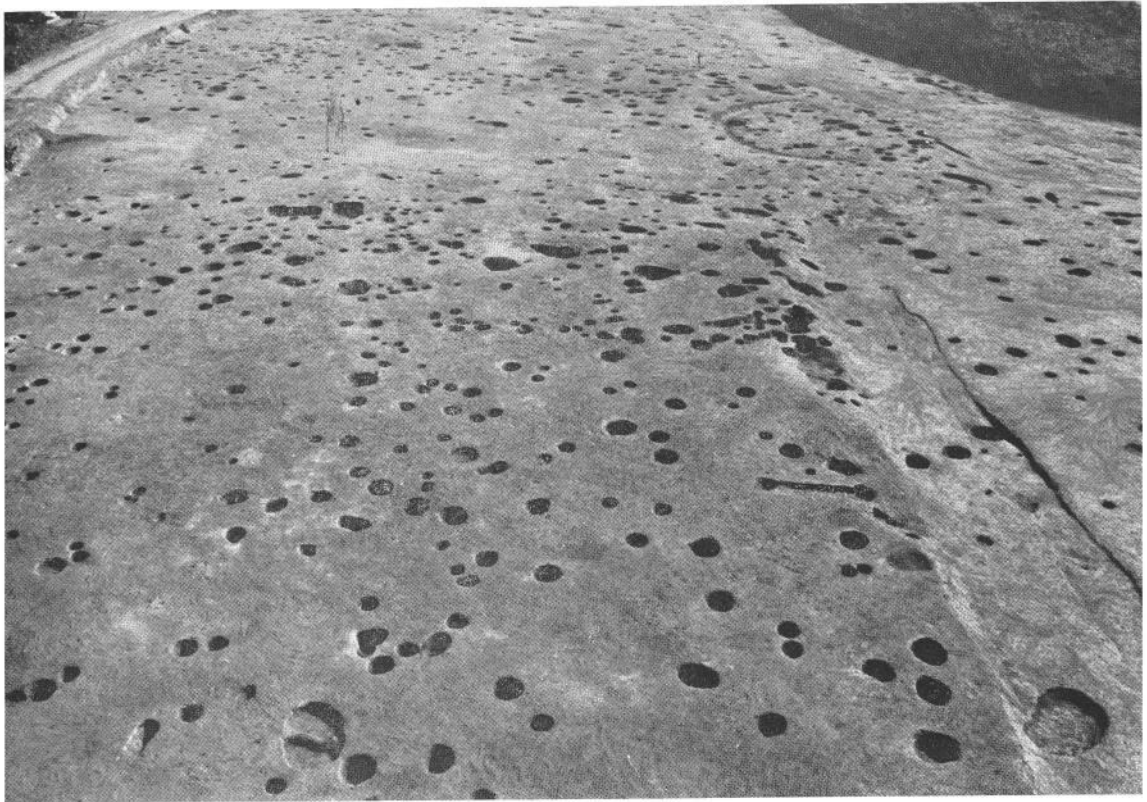
柳ヶ谷遺跡周辺航空写真（南東上空から）



(1) 柳ヶ谷遺跡東区全景 (南東上空から)



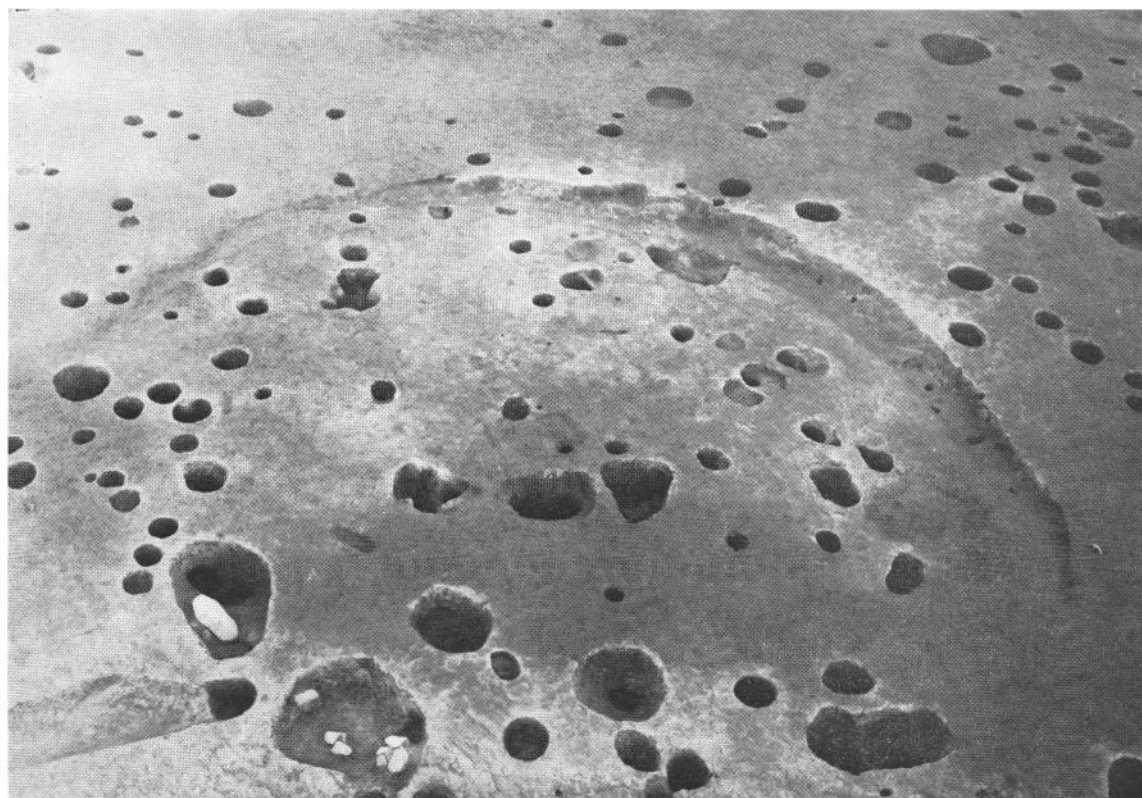
(2) 柳ヶ谷遺跡東区全景 (南上空から)



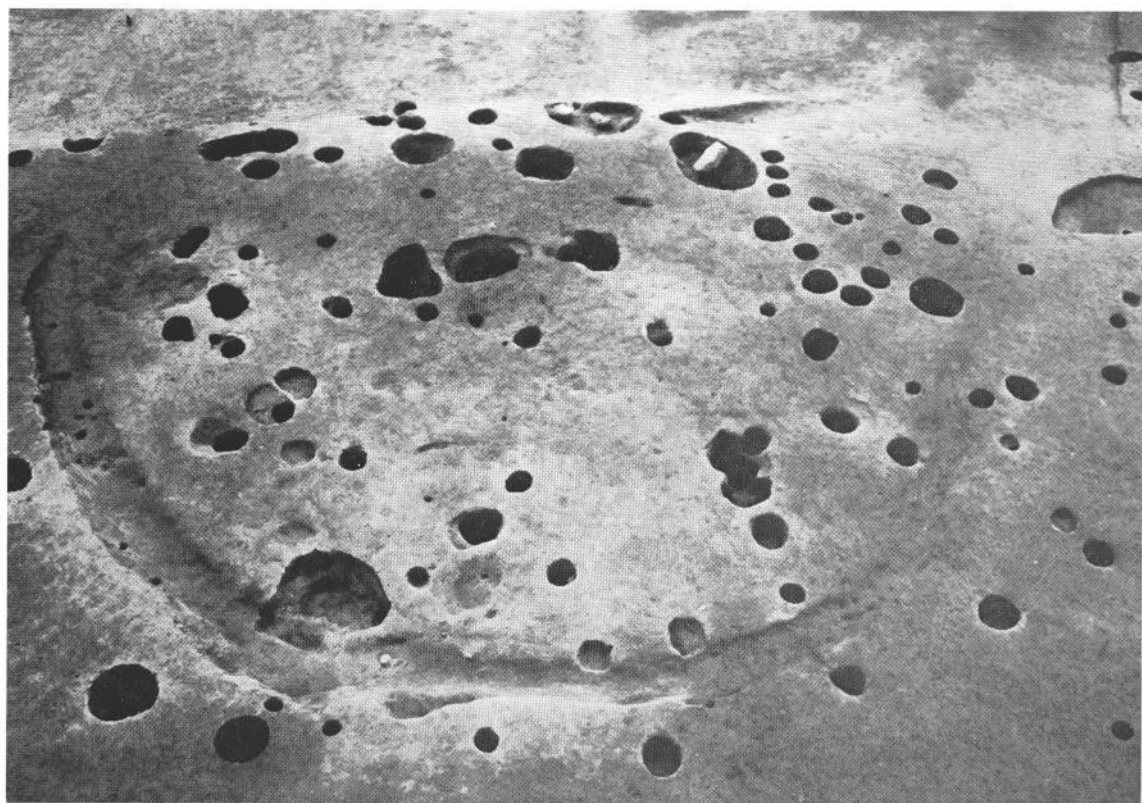
(1) 柳ヶ谷遺跡東区ピット群 (西から)



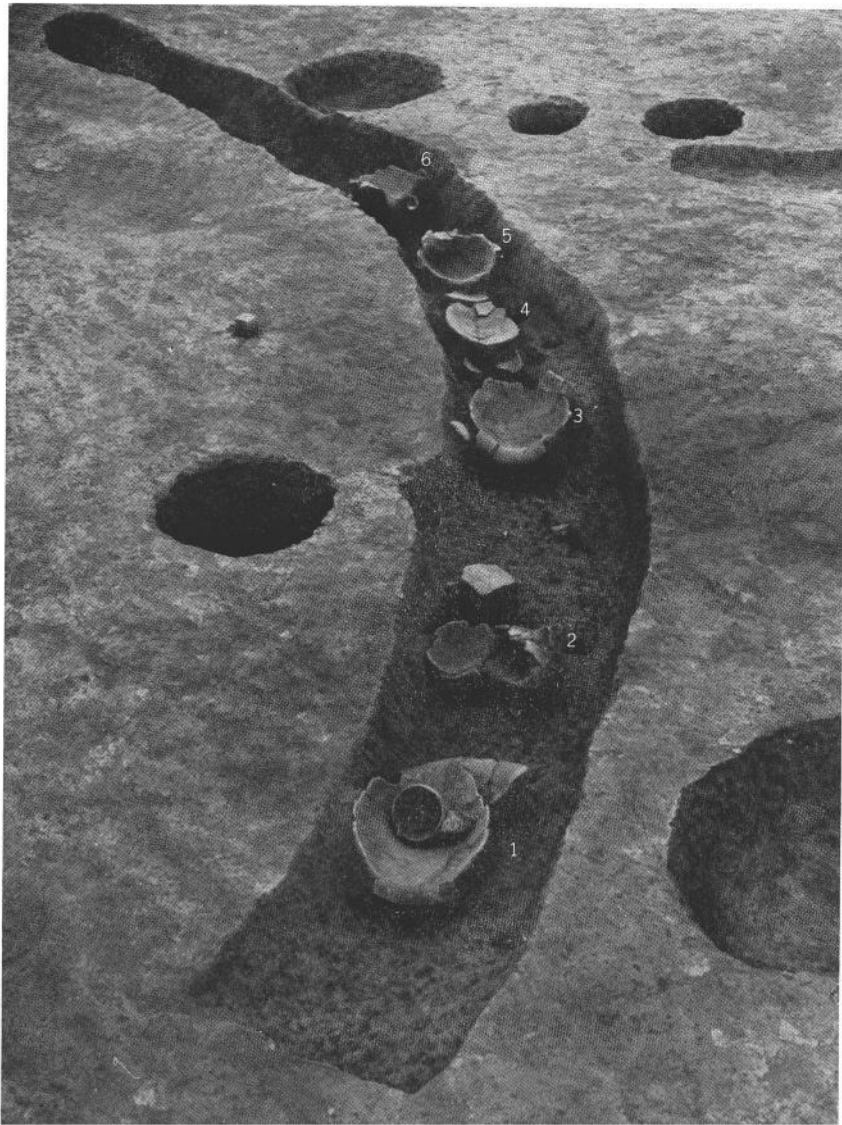
(2) 柳ヶ谷遺跡東区26号住居跡 (南西から)



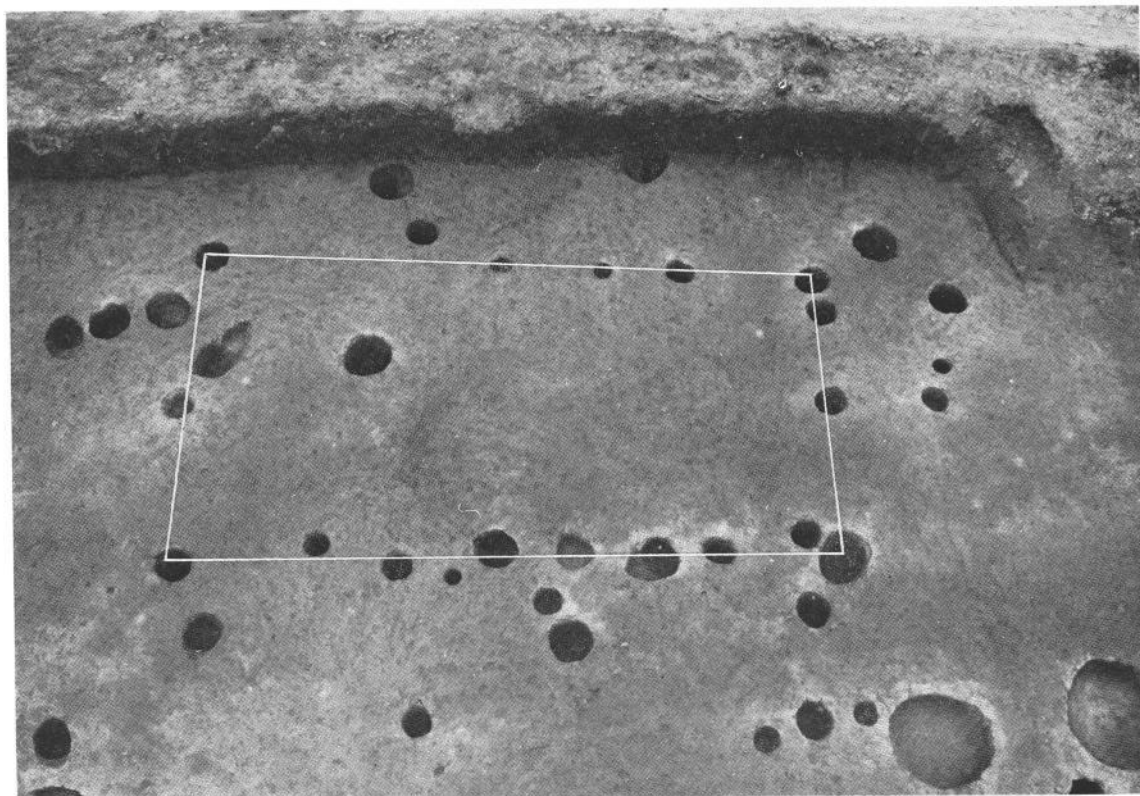
(1) 柳ヶ谷遺跡東区27号住居跡（南西から）



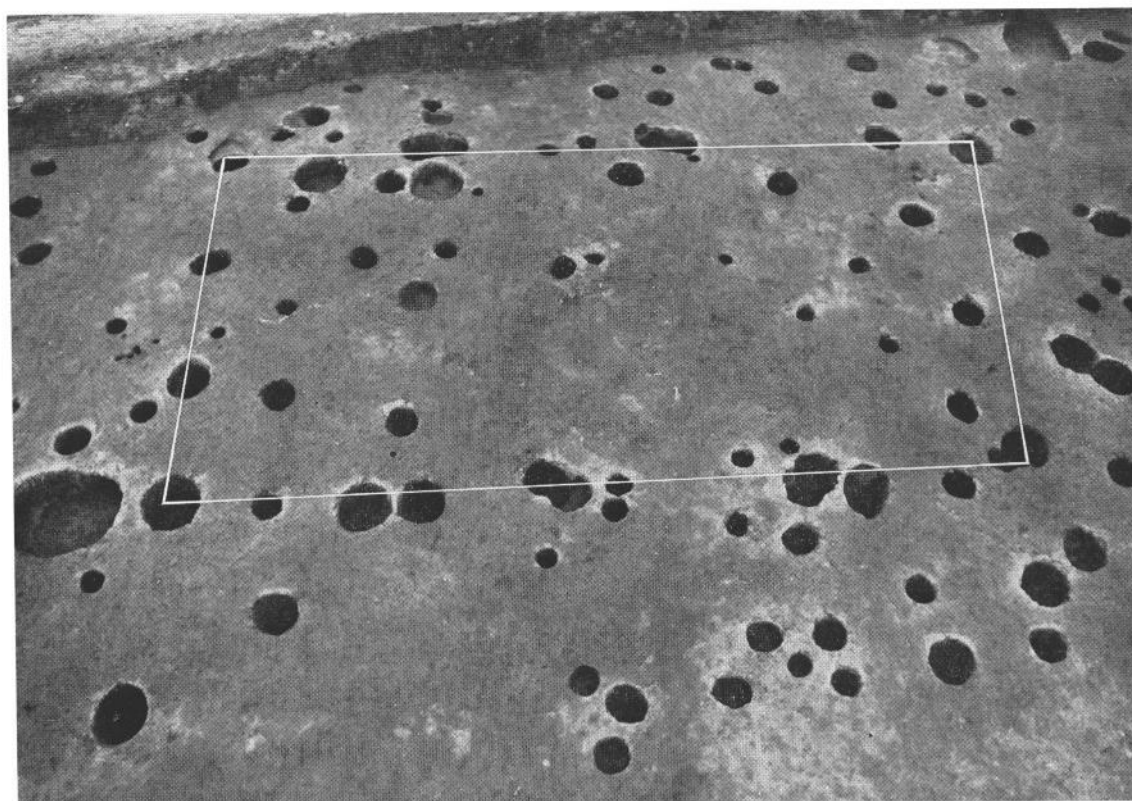
(2) 柳ヶ谷遺跡東区27号住居跡（北東から）



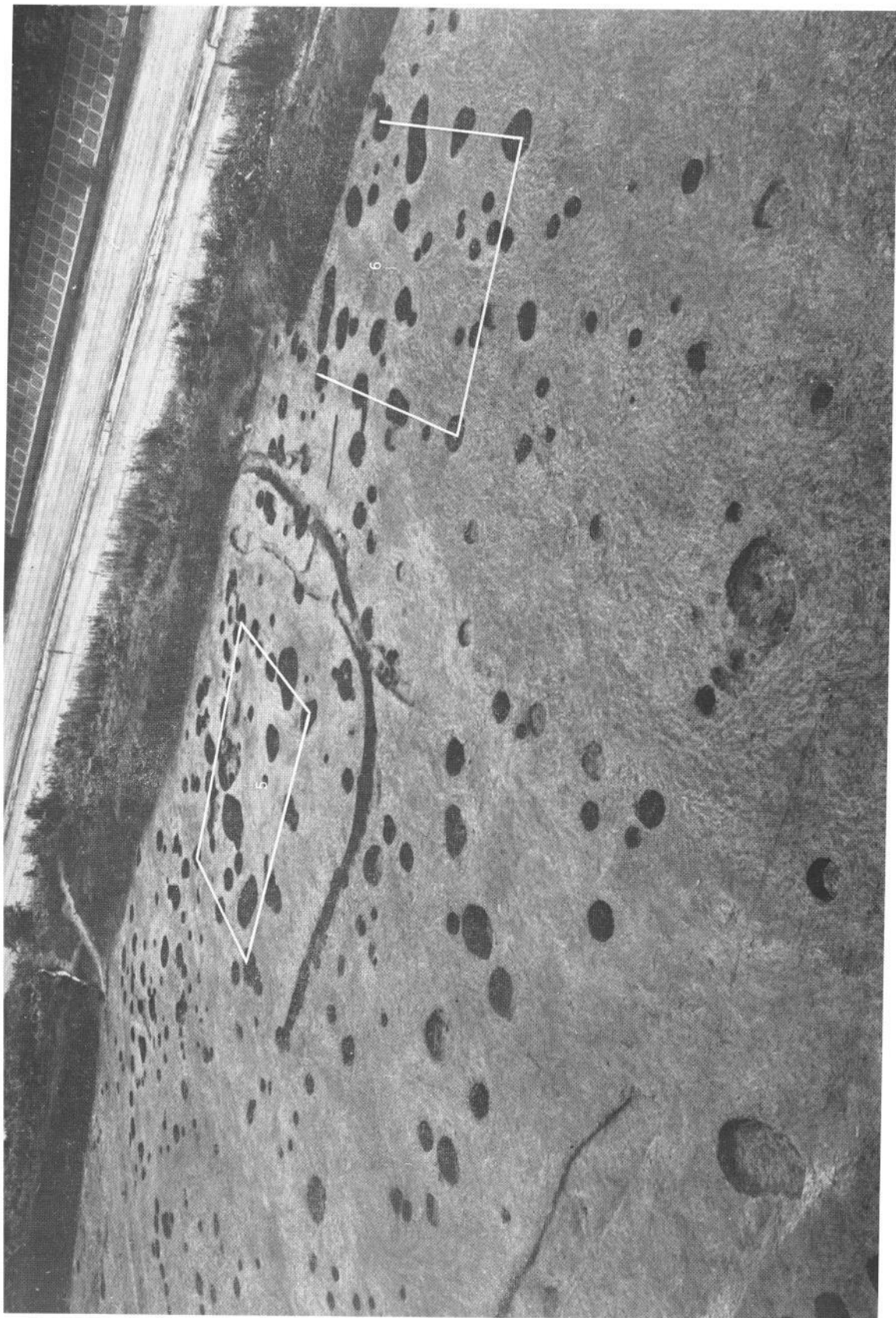
(上) 柳ヶ谷遺跡東区1号土壙土器出土状態
(下) 柳ヶ谷遺跡東区1号溝状遺構土器出土状態



(1) 第1号掘立柱建物（南から）

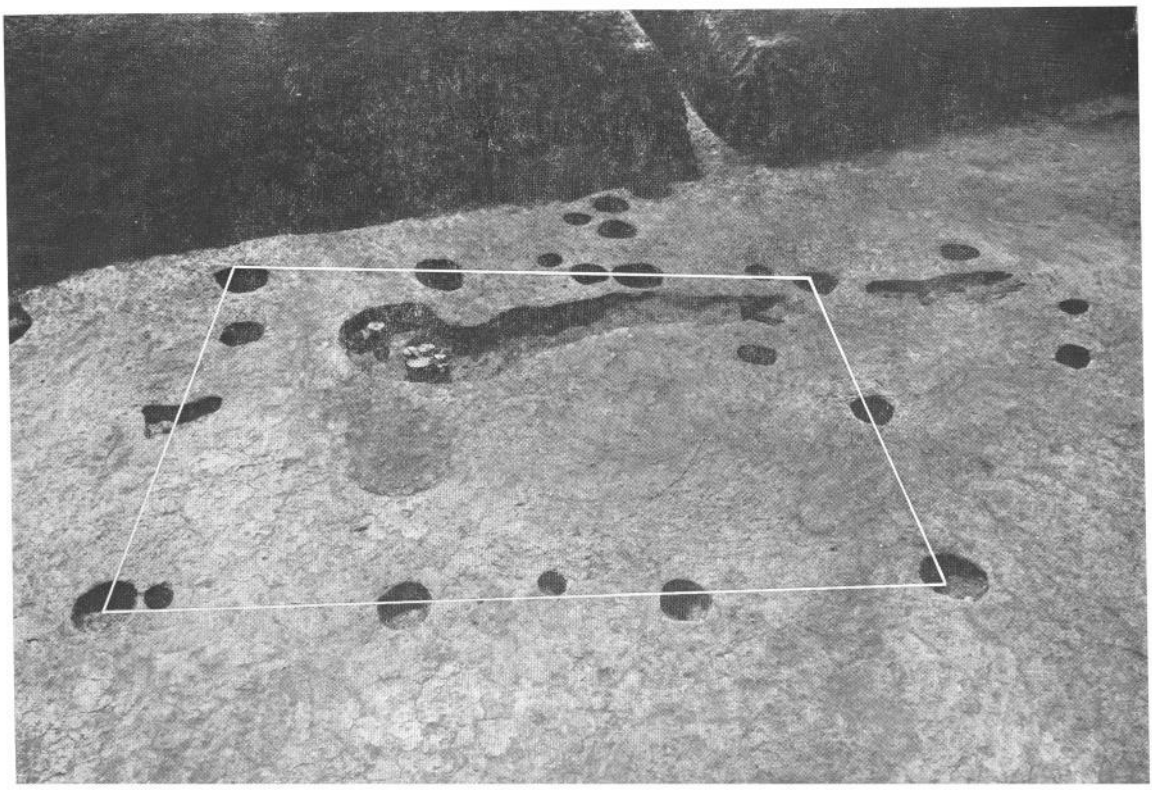
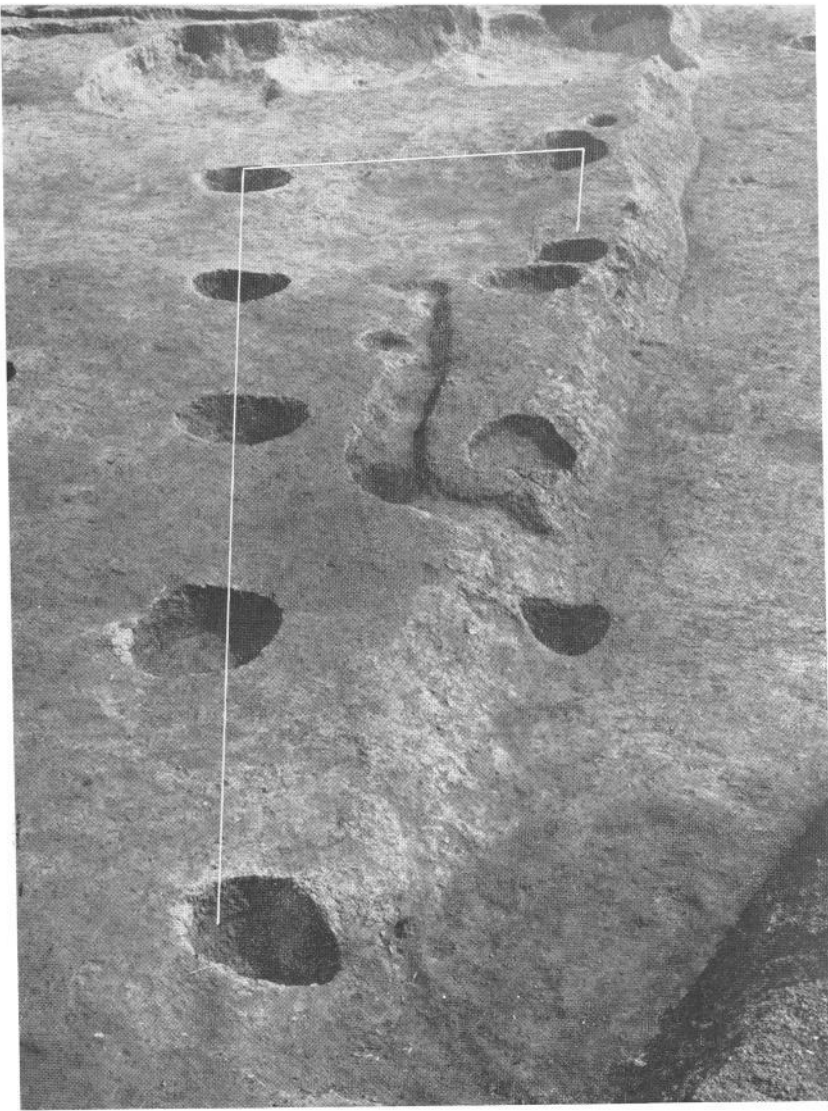


(2) 第2号掘立柱建物（南から）



第 5・6 号掘立柱建物と溝状遺構（北から）

(上) 第7号掘立柱建物(西から)
(下) 第3号掘立柱建物(北から)

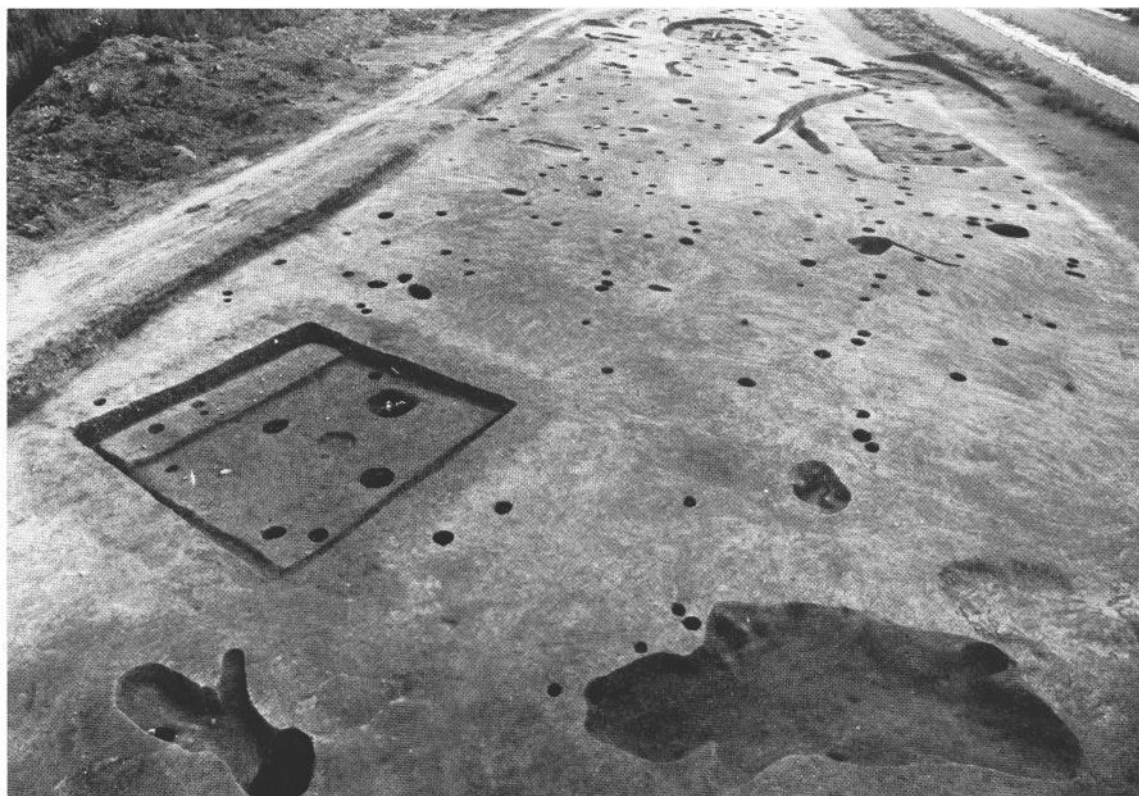




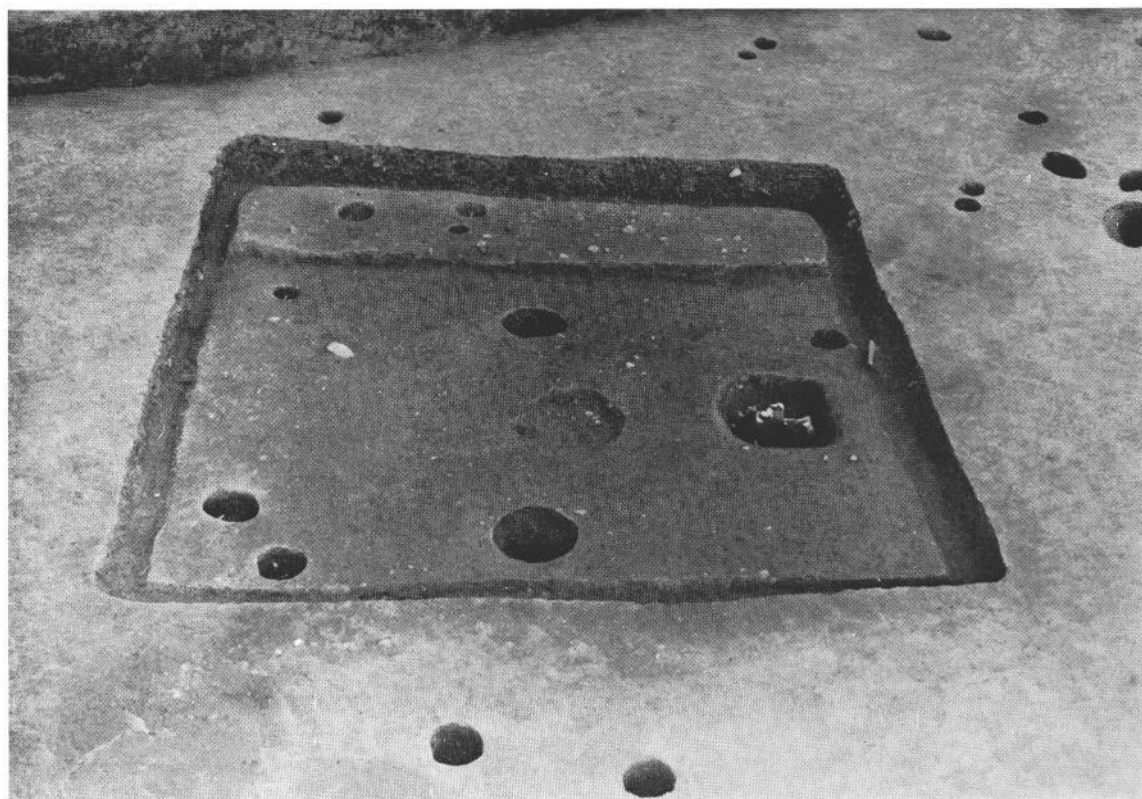
(1) 柳ヶ谷遺跡西区全景（西上空から）



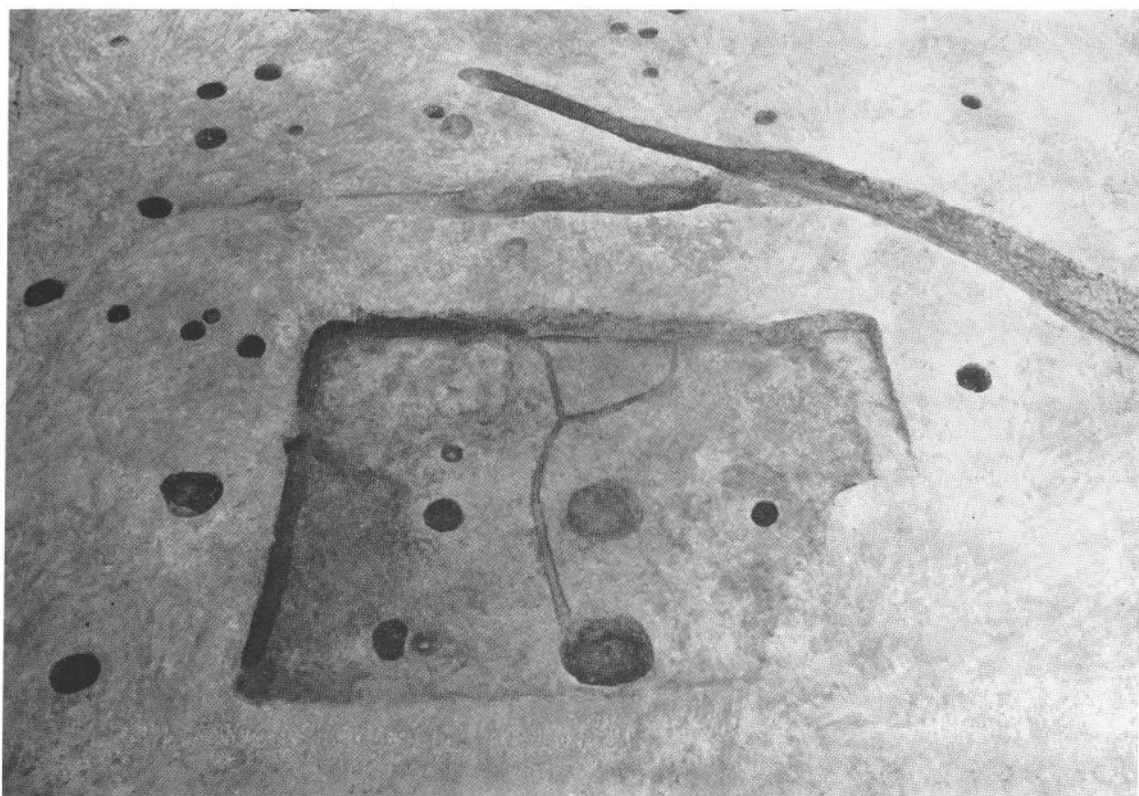
(2) 柳ヶ谷遺跡西区全景（北上空から）



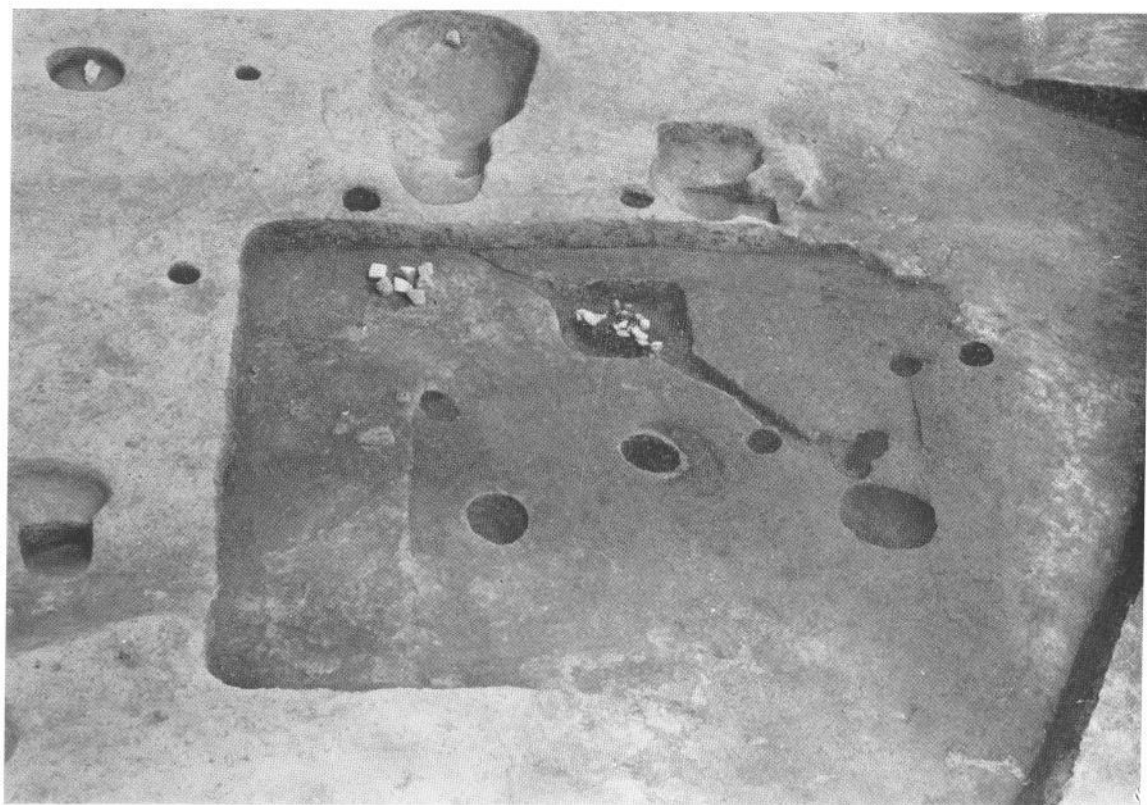
(1) 柳ヶ谷遺跡跡西区住居跡とピット群（西から）



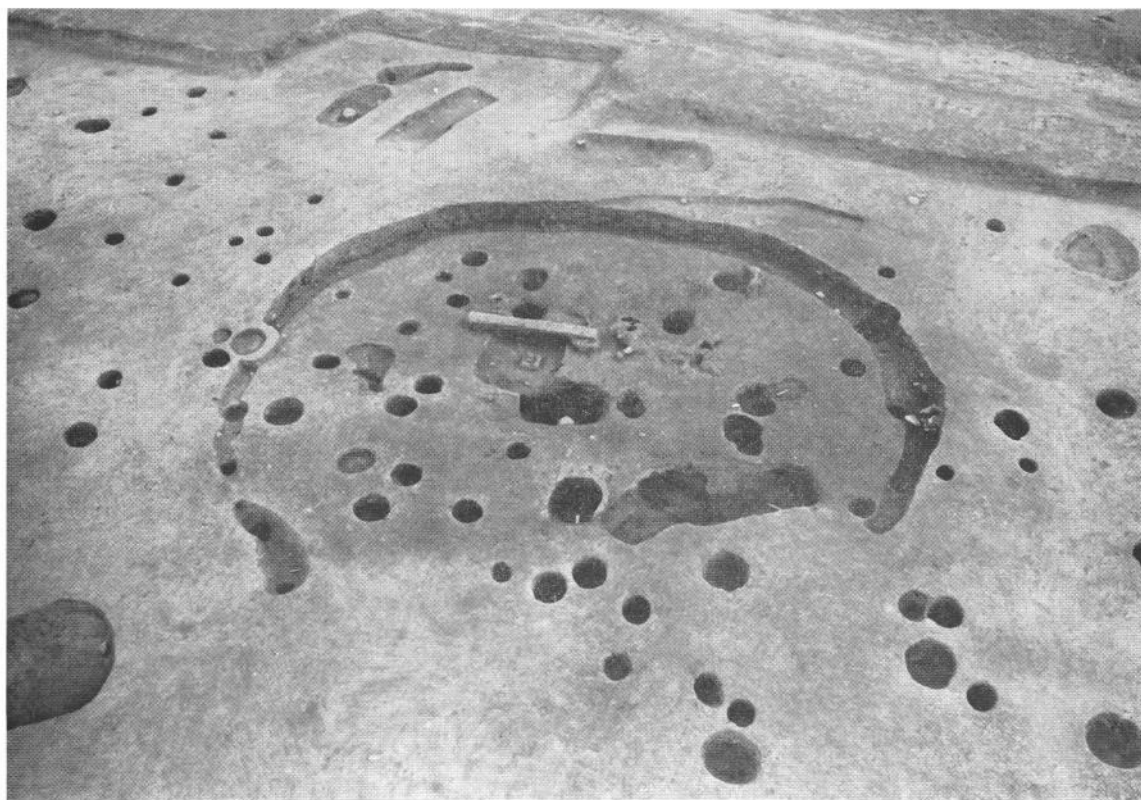
(2) 柳ヶ谷遺跡西区22号住居跡（南から）



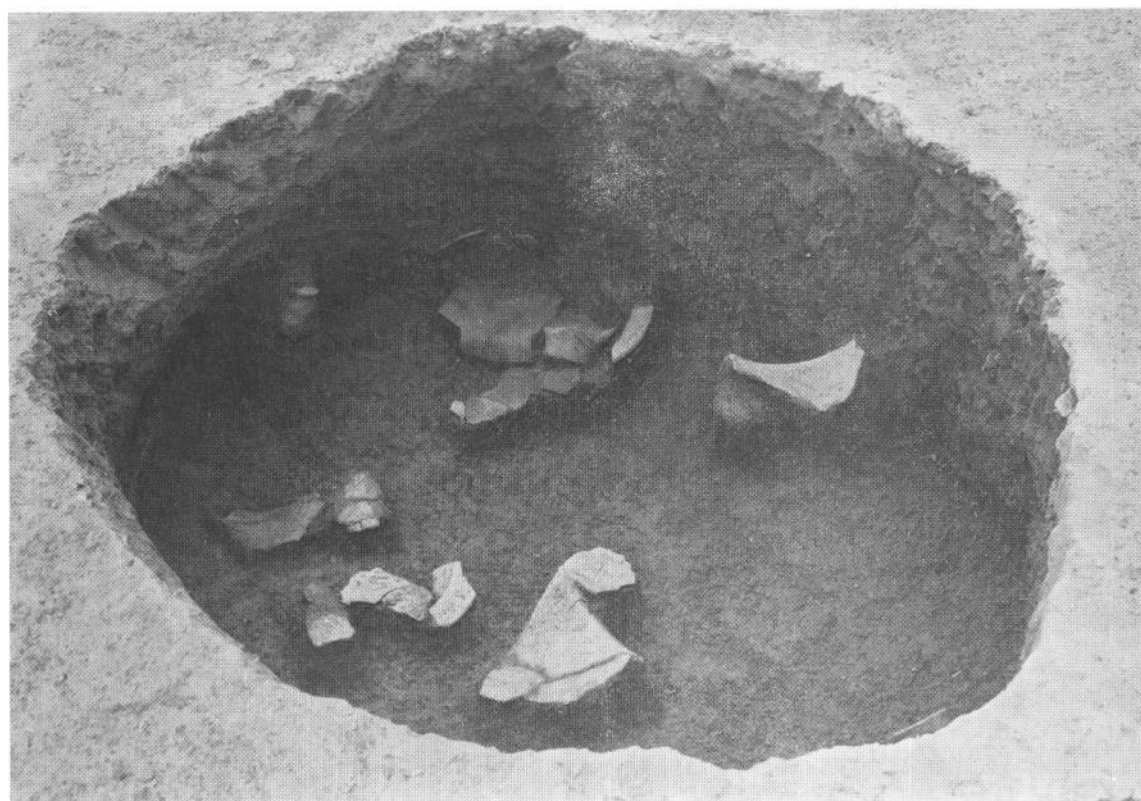
(1) 柳ヶ谷遺跡西区23号住居跡（南から）



(2) 柳ヶ谷遺跡西区24号住居跡（南から）



(1) 柳ヶ谷遺跡西区25号住居跡（南から）



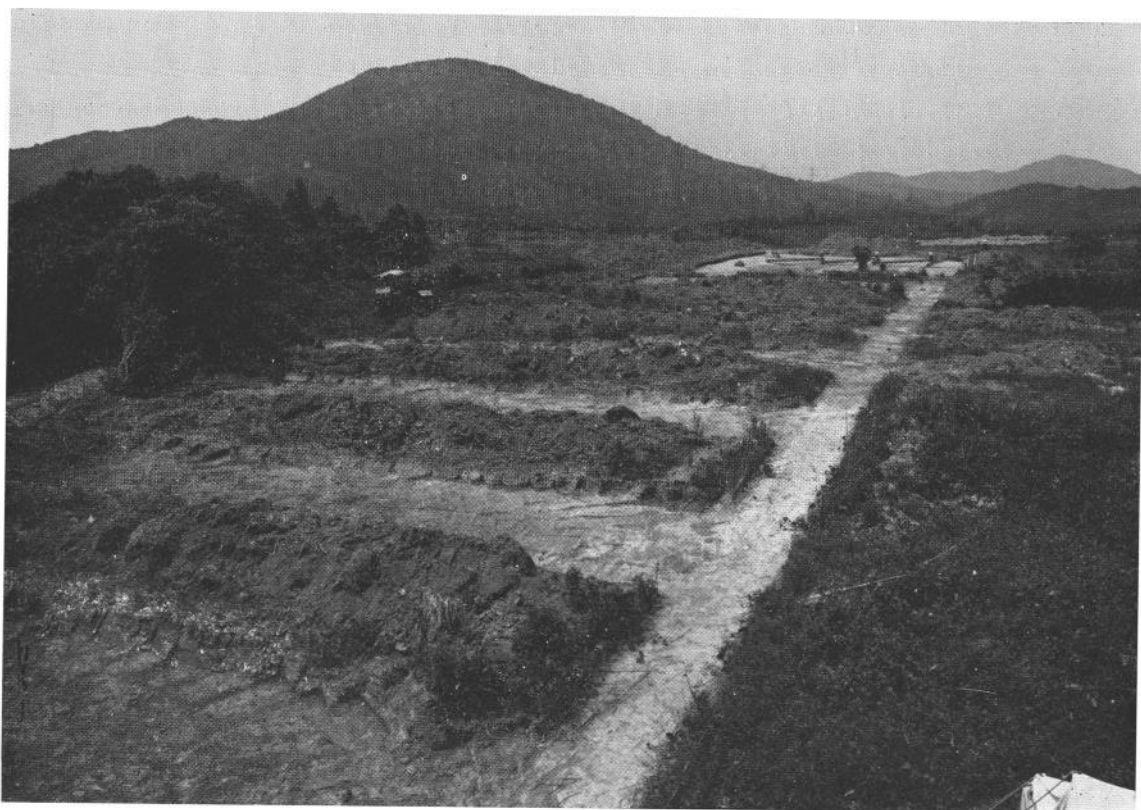
(2) 柳ヶ谷遺跡西区貯蔵穴



(1) 都地遺跡第22トレンチ全景（西から）



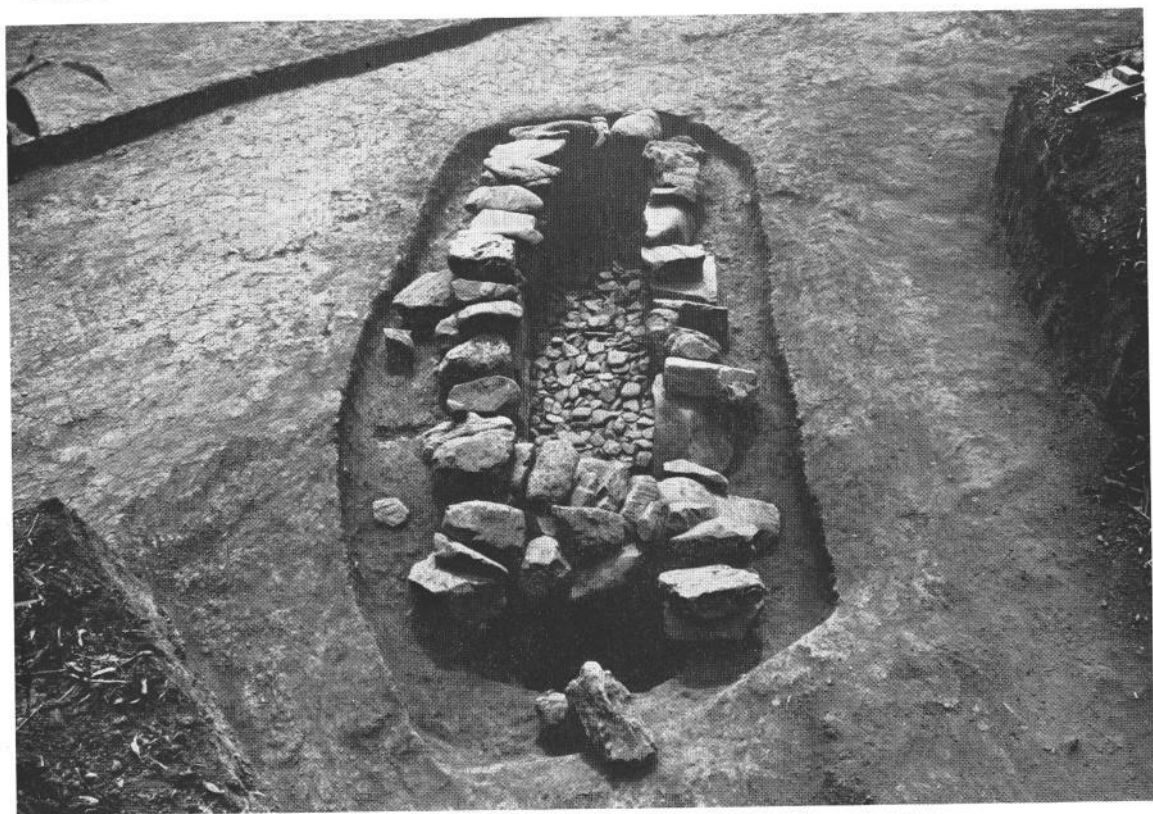
(2) 同上土壙および土器出土状態



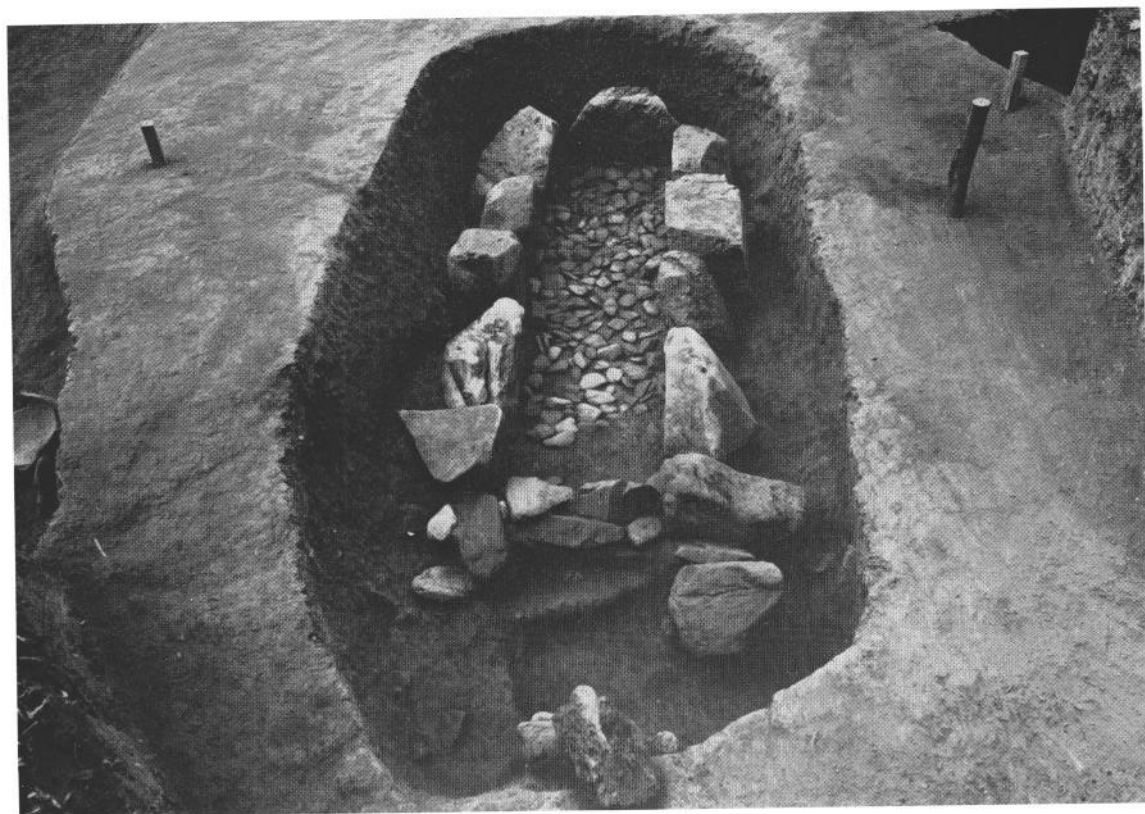
(1) 都地遺跡トレンチ北半部全景 (南から)



(2) 都地古墳群東支群1号墳全景 (北東から)



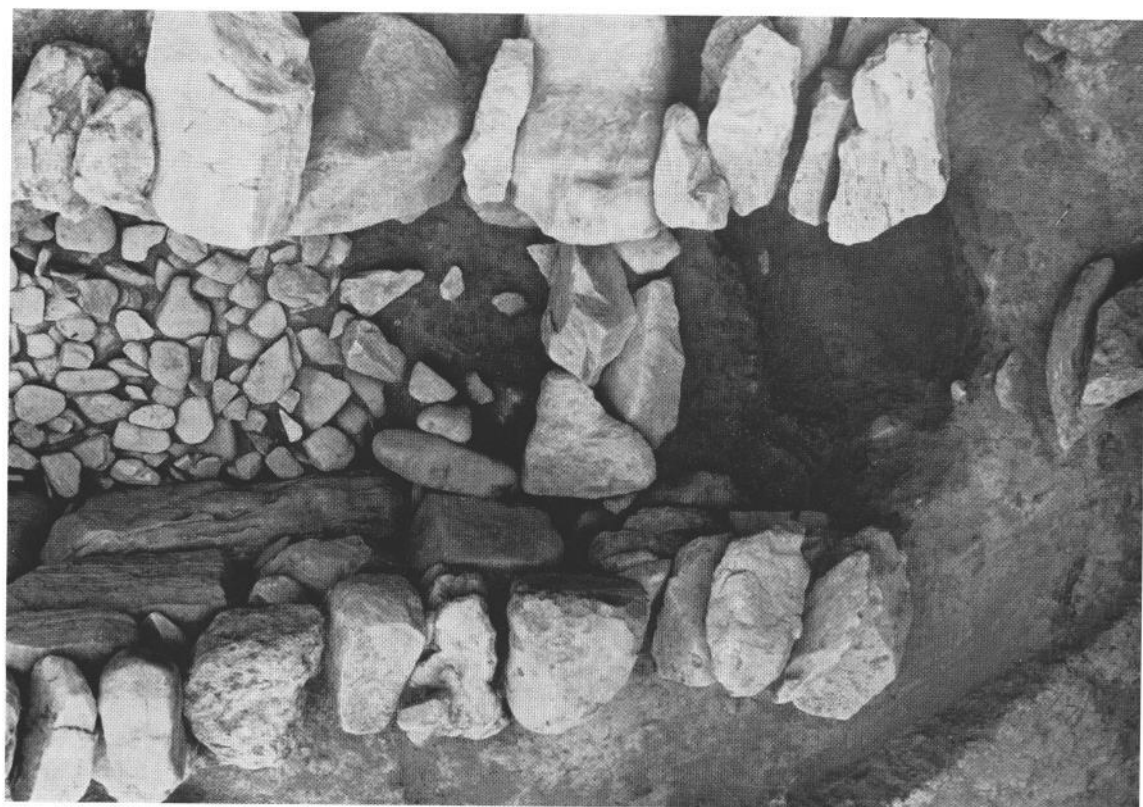
(1) 都地古墳群東支群2号石室全景



(2) 同上閉塞石，積み石除去後の状態



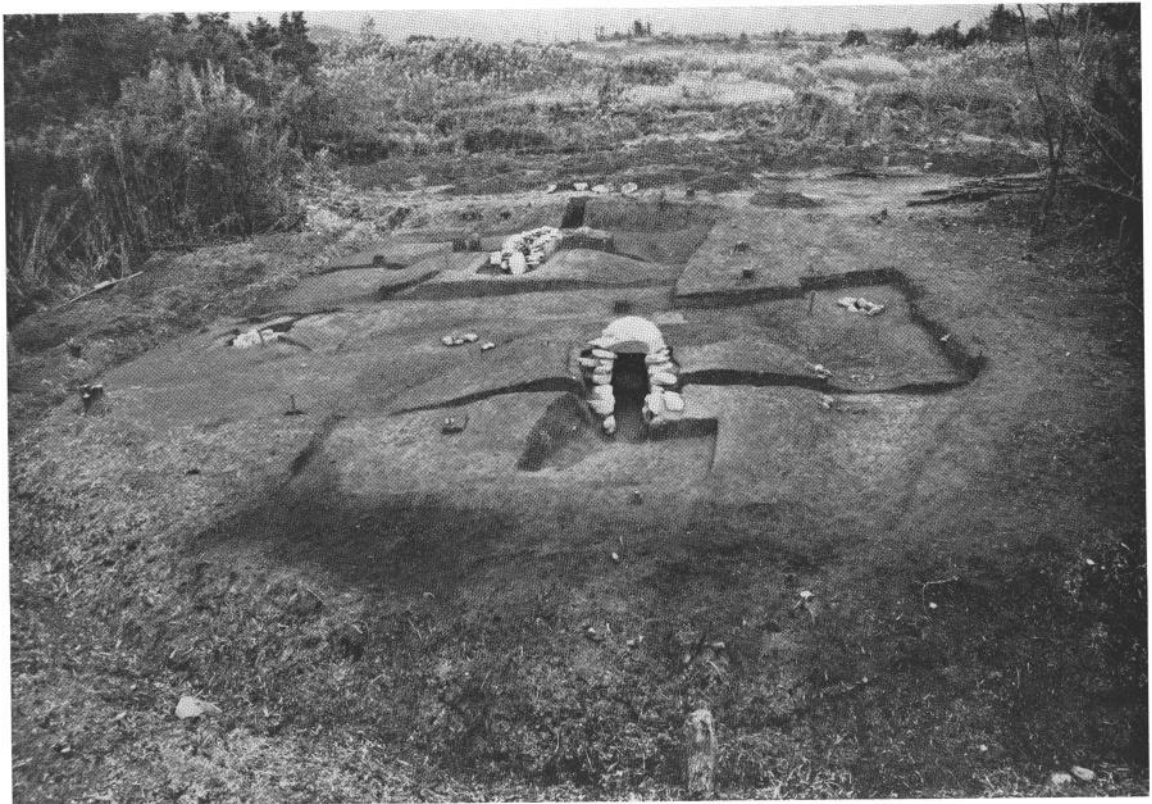
(1) 都地古墳群東支群2号石室閉塞状況（北から）



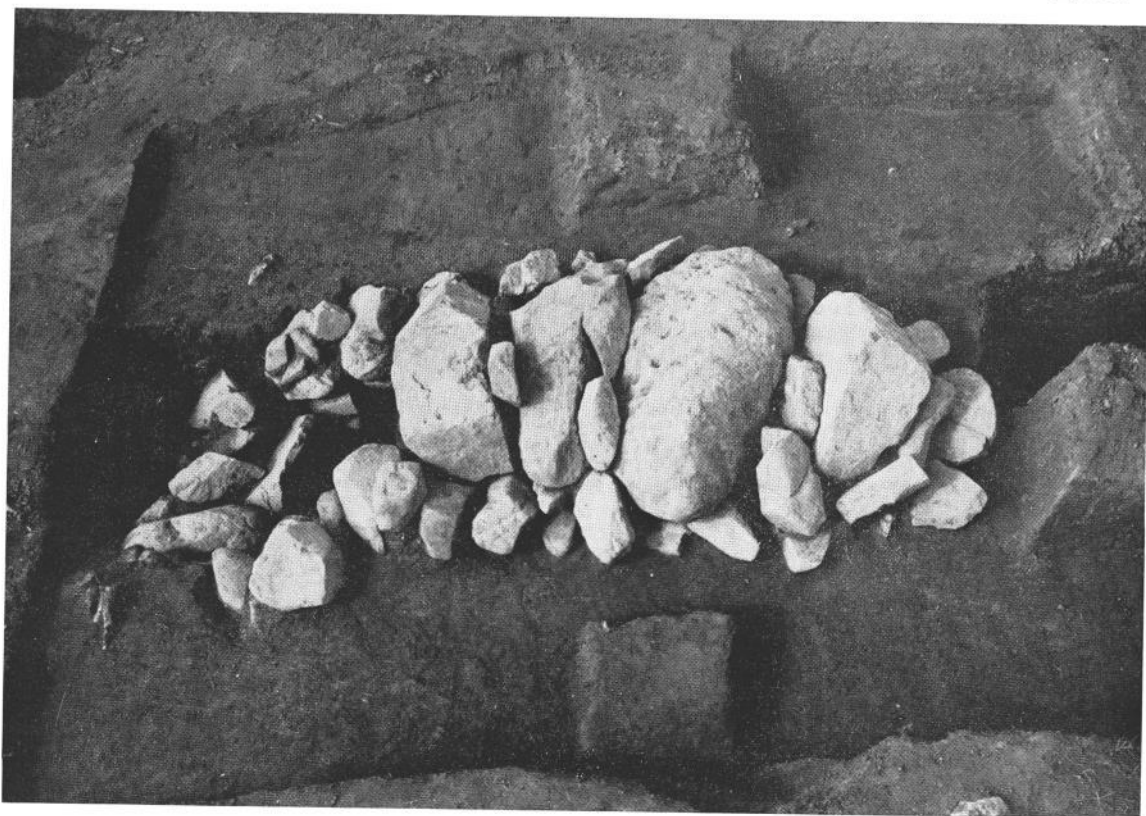
(2) 同上閉塞石除去後の状態（北から）



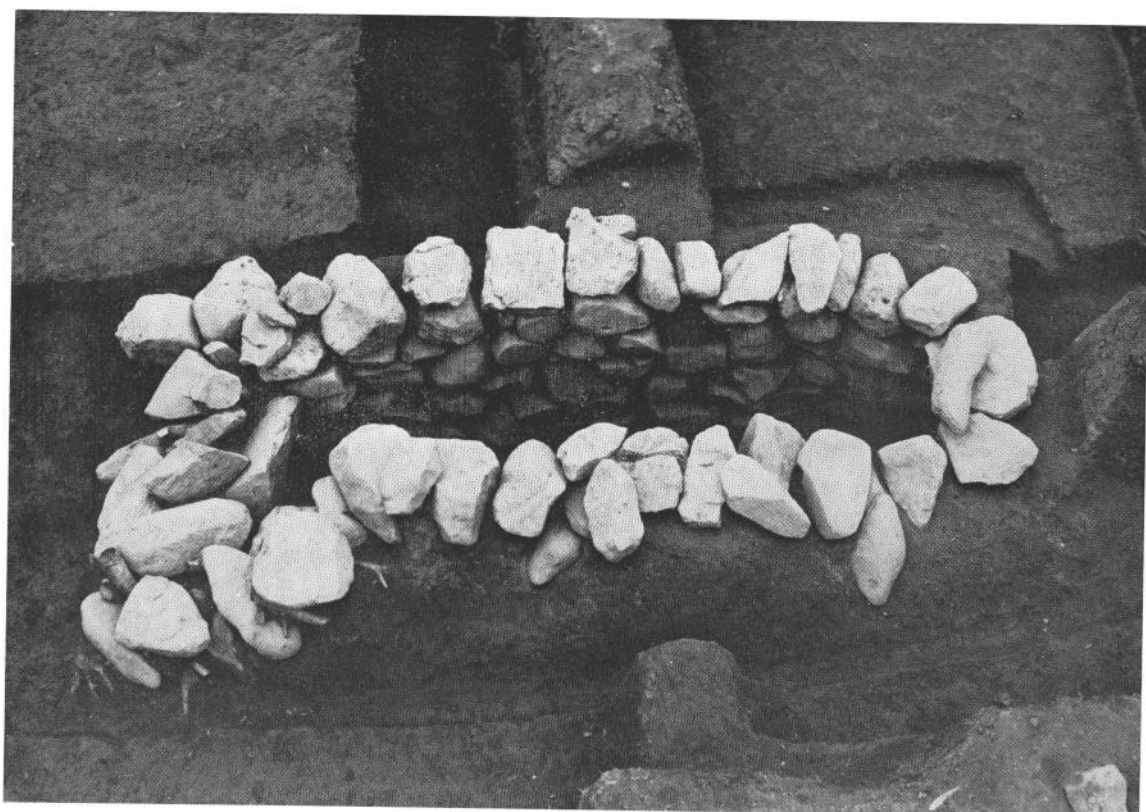
(1) 都地古墳群西支群調査前全景（北から）



(2) 都地古墳群西支群全景（南西から，5号石室はこの時点で未調査）



(1) 都地古墳群西支群1号墳石室全景(南西から)



(2) 同上天井石除去後全景(南西から)



(1) 都地古墳群西支群1号墳閉塞状況その1



(2) 同上その2

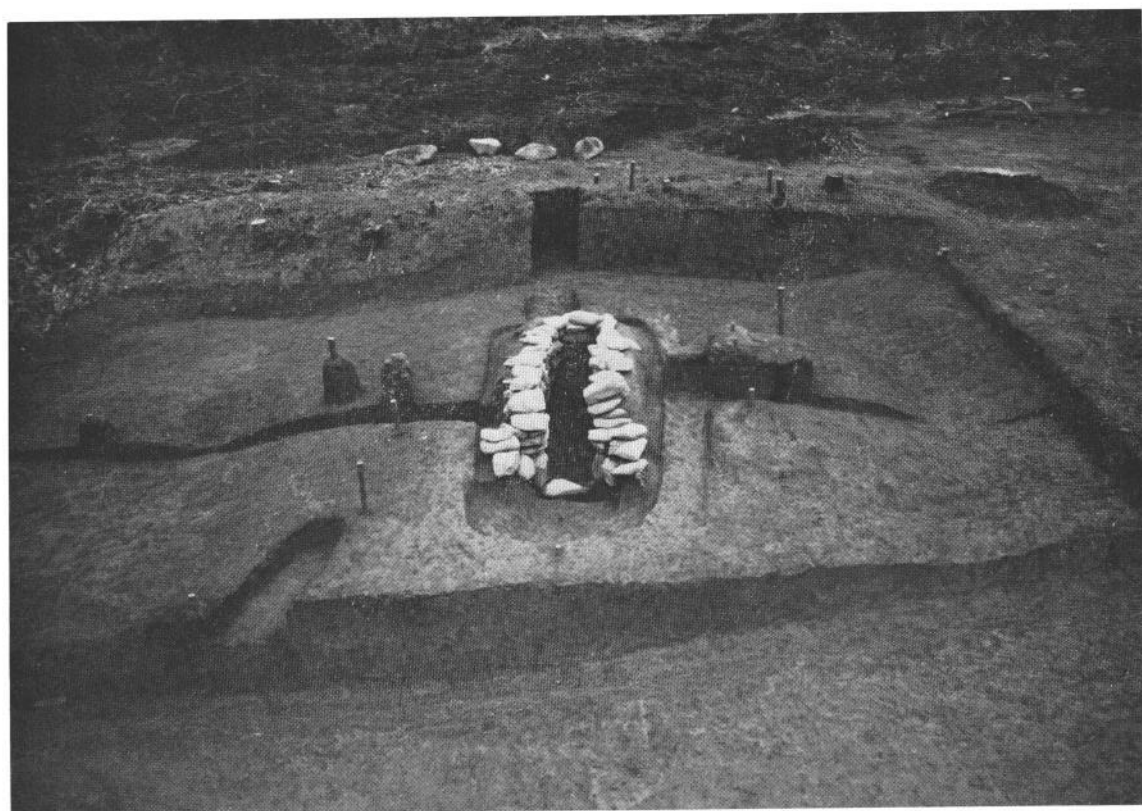
(上) 都地古墳群西支群1号墳奥壁

(下) 同上床面および閉塞部

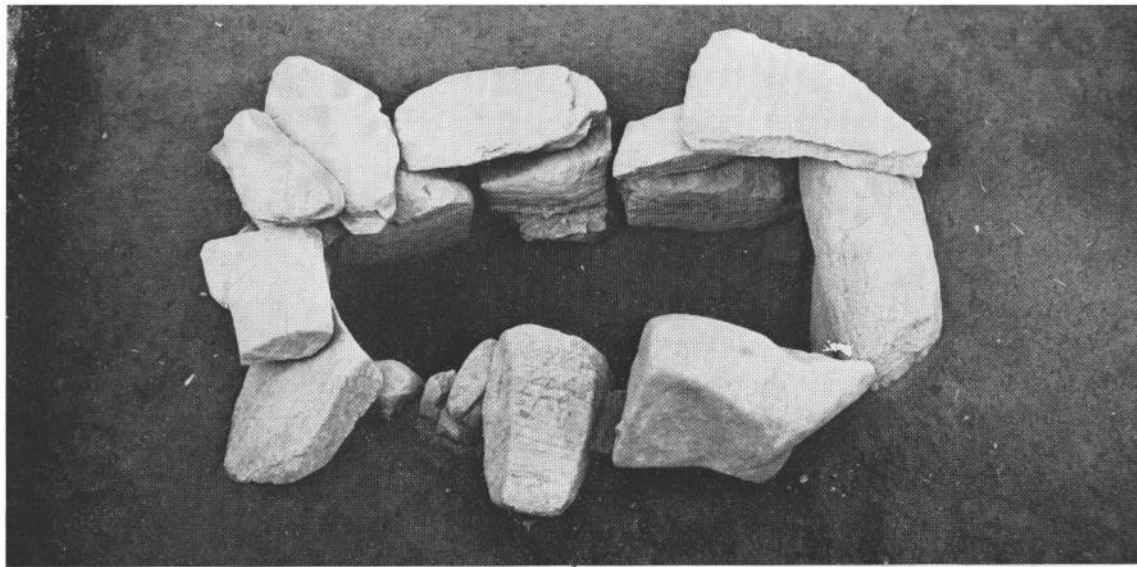




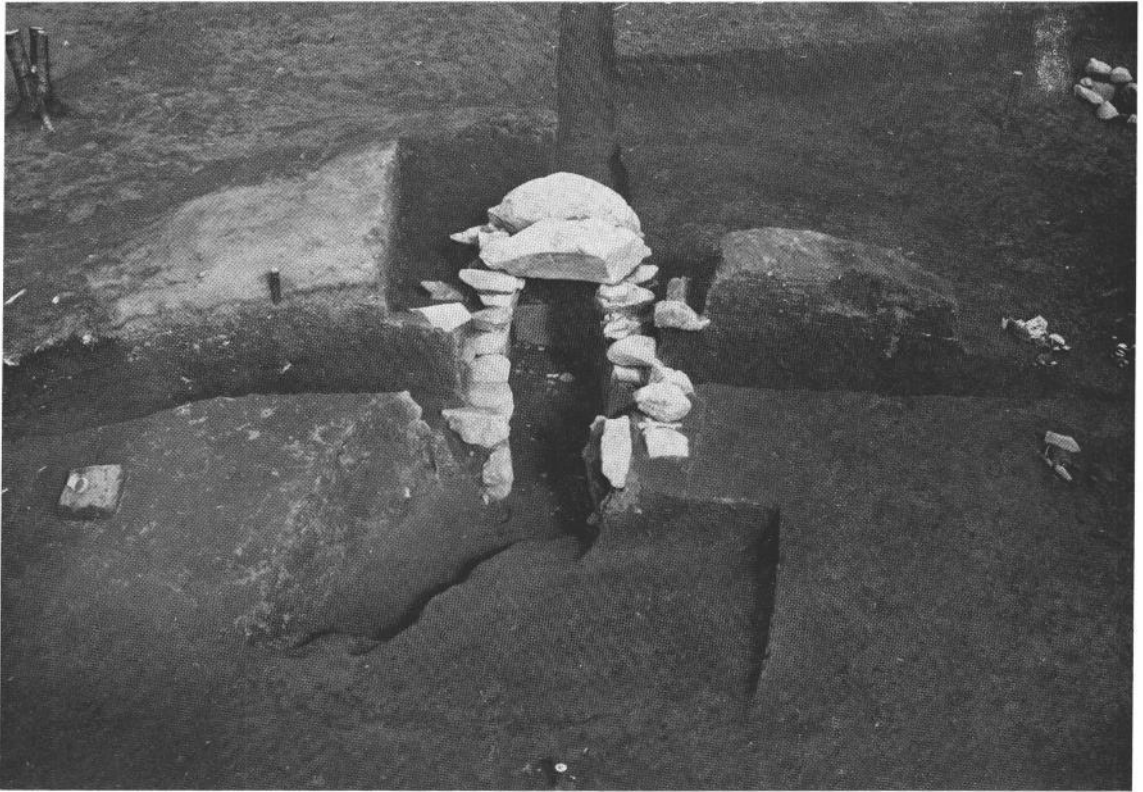
(1) 都地古墳群西支群1号墳積み石の状態



(2) 都地古墳群西支群1号墳全景と溝状遺構



(上) 都地古墳群西支群2号墳石室全景
(中) 同上、腰石と掘り方
(下) 同上全景



(1) 都地古墳群西支群3号墳石室全景



(2) 同上奥壁石積み状態



(1) 都地古墳群西支群3号墳右壁石積みの状態



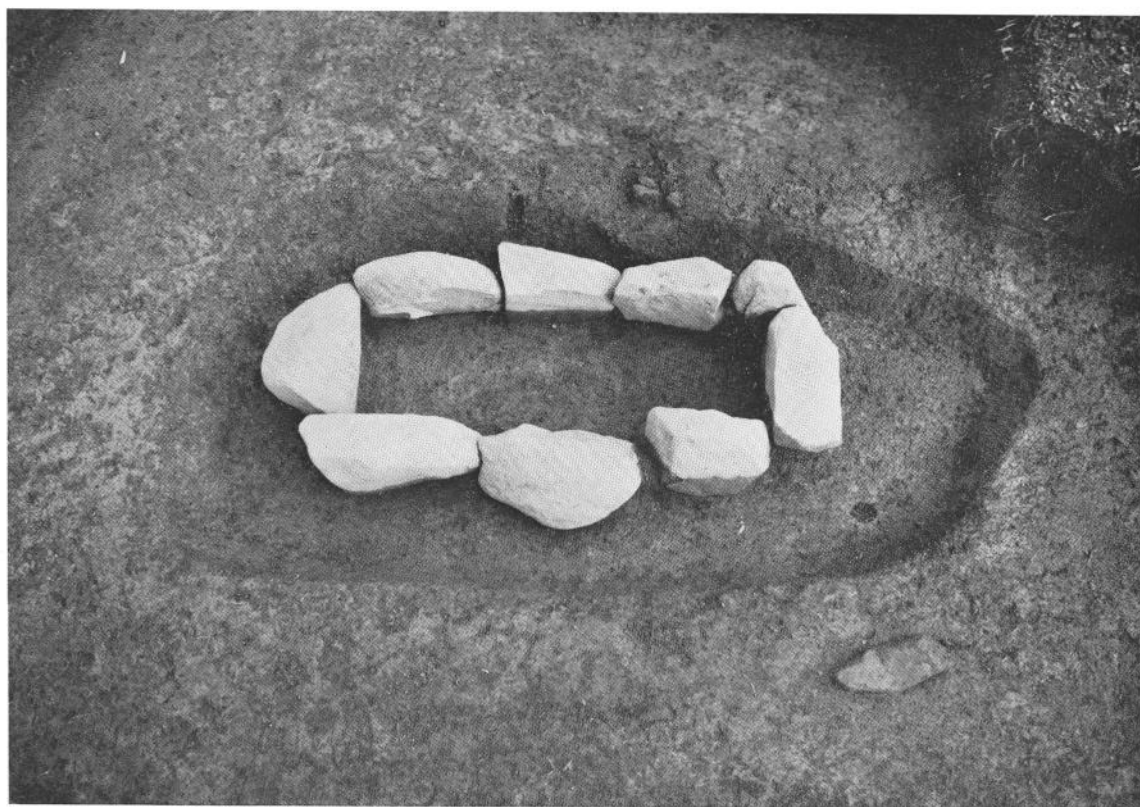
(2) 都地古墳群西支群3号墳土器出土状態



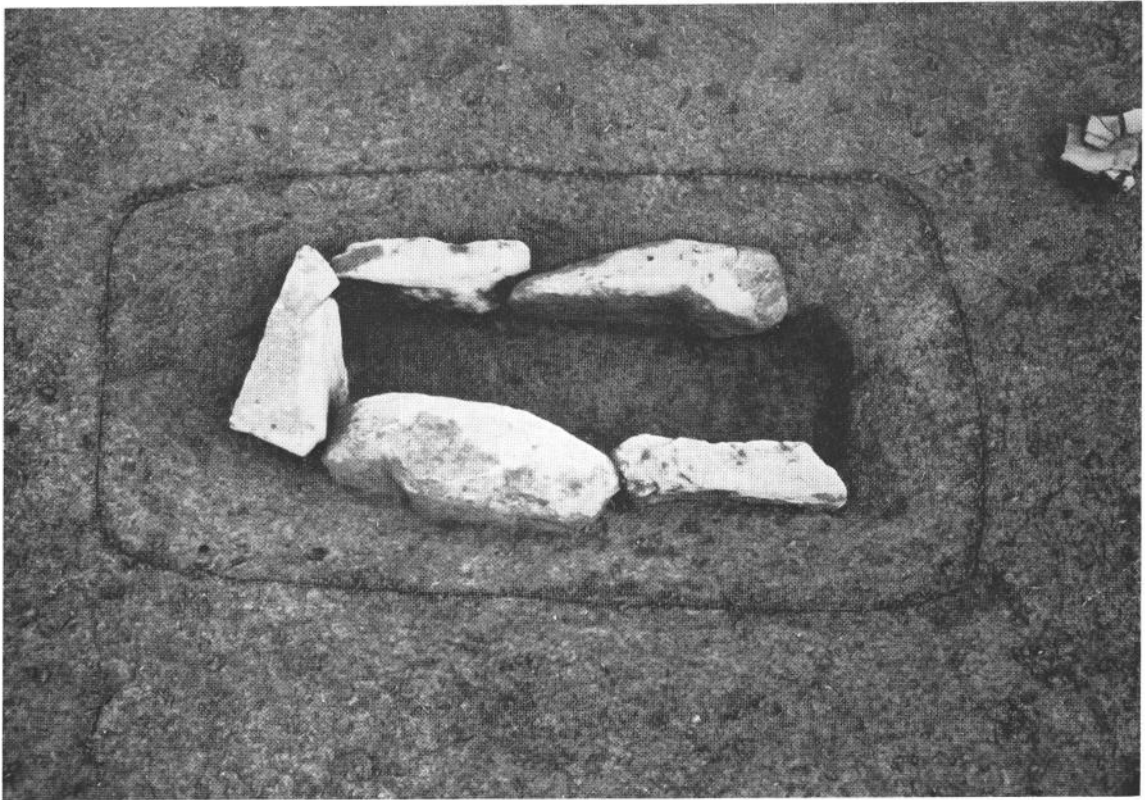
都地古墳群西支群3号墳墳丘盛り土の状態



(1) 都地古墳西支群4号石室全景(西から)



(2) 同上石室と掘り方の関係



(1) 都地古墳群西支群5号石室全景(西から)



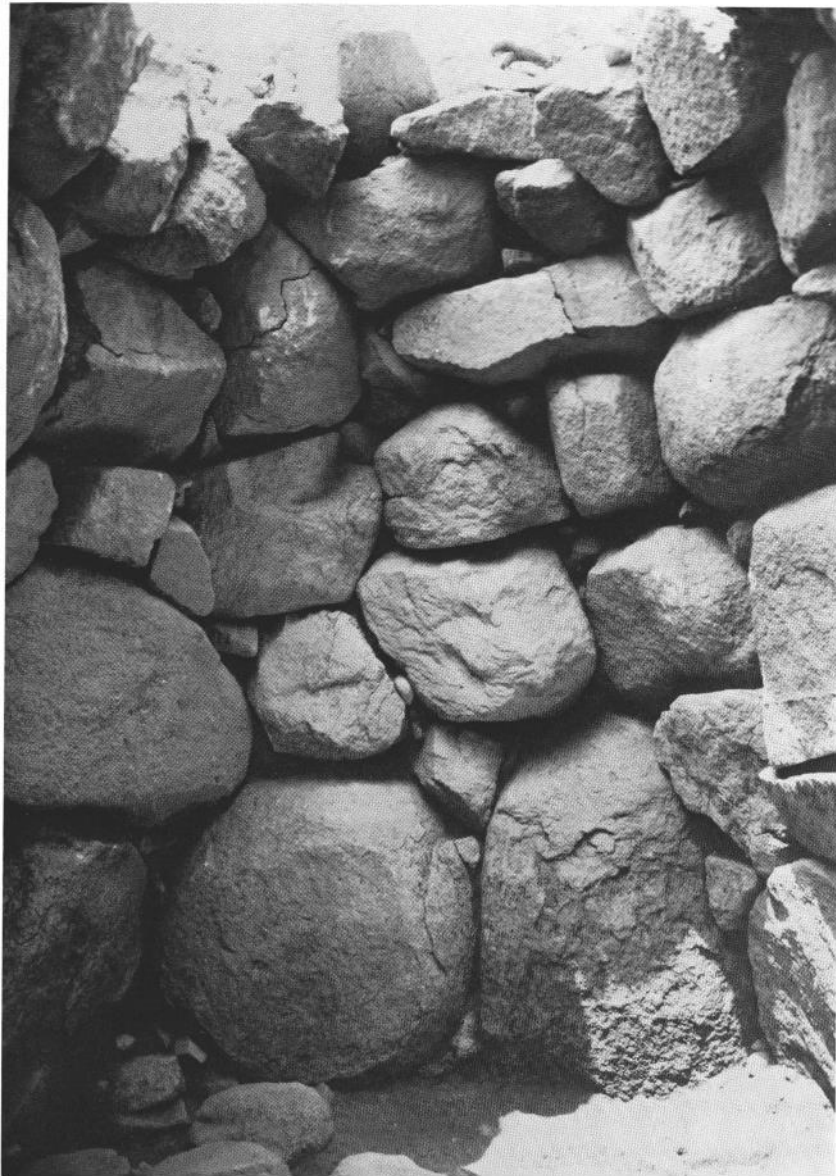
(2) 都地古墳群西支群石組み遺構(南西から)

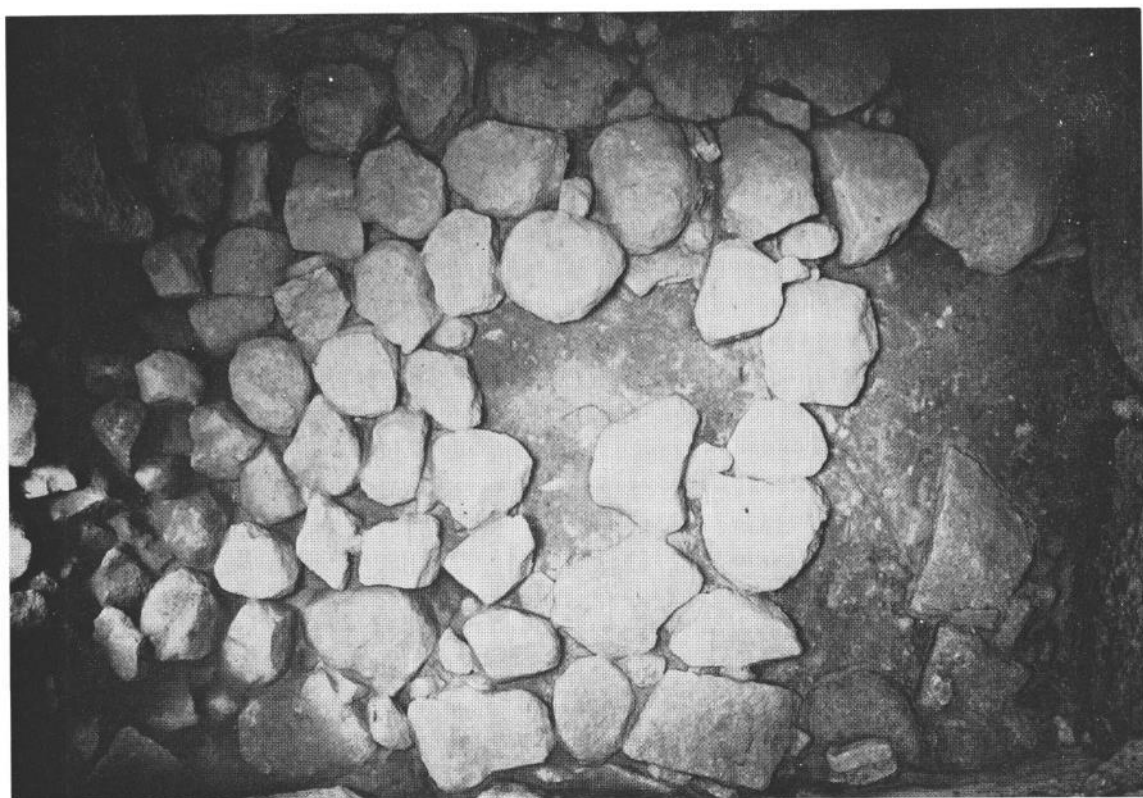


図版
29

(上) 平原1号墳石室

(下) 平原1号墳奥壁石積み状況

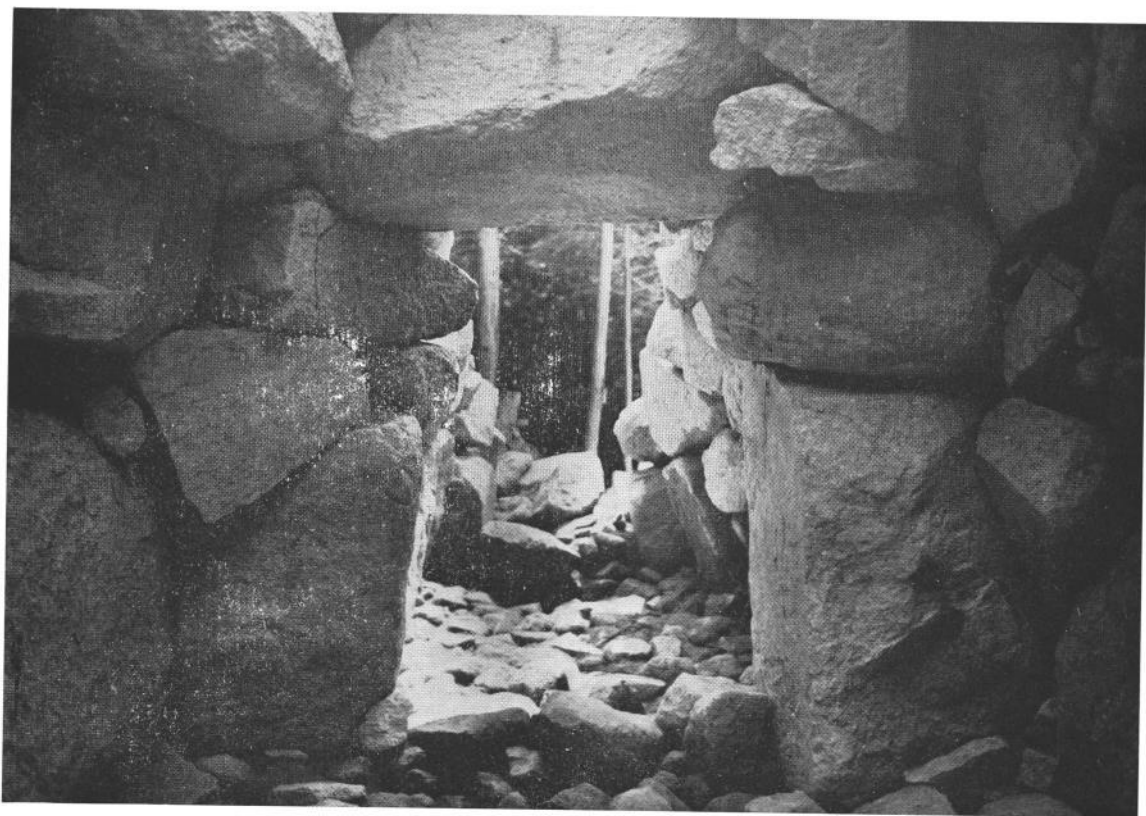




(1) 平原1号墳後室床面全景



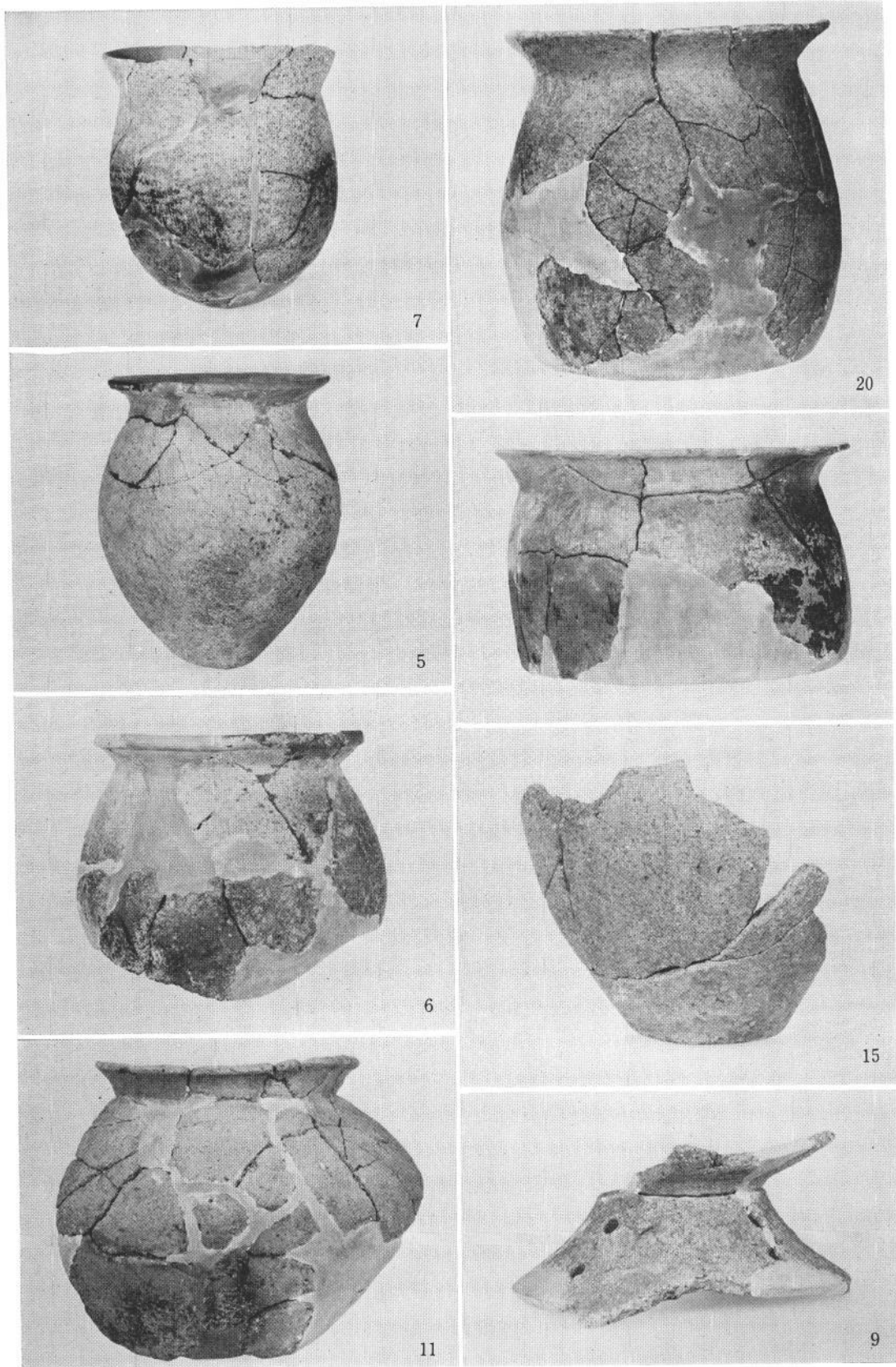
(2) 同上遺物出土状態



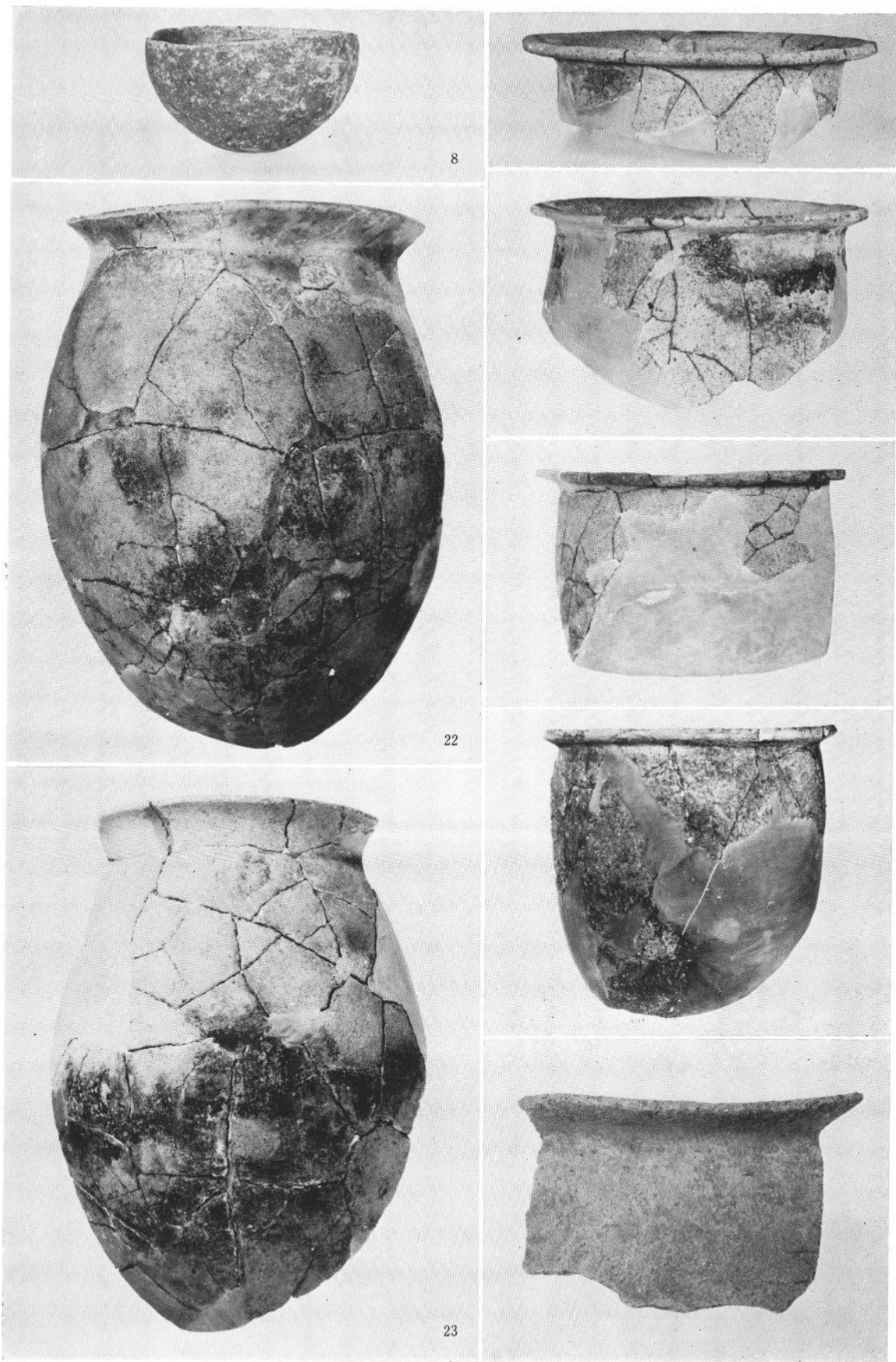
(1) 平原1号墳後室入り口と前室床面



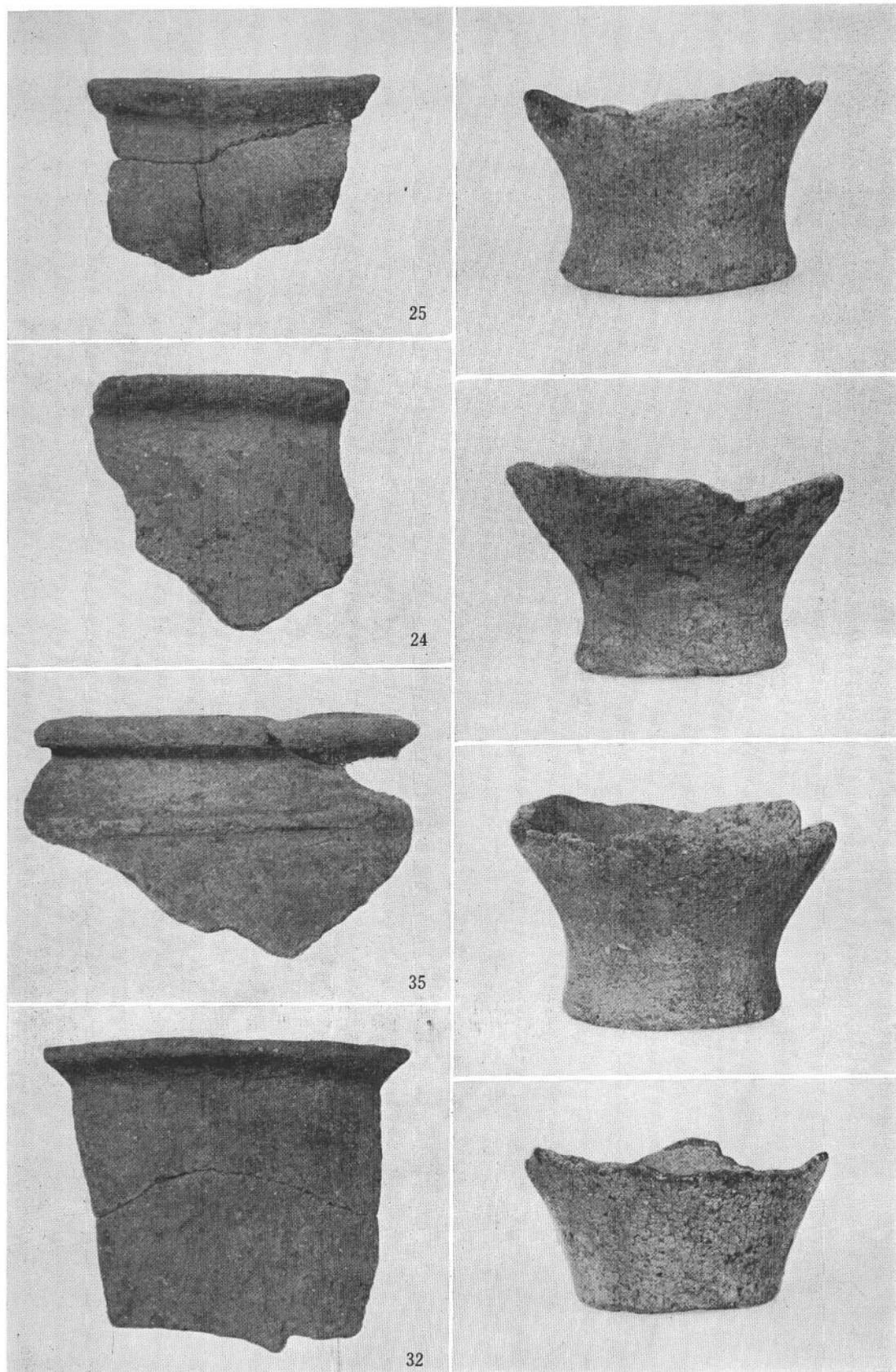
(2) 平原1号墳閉塞状況



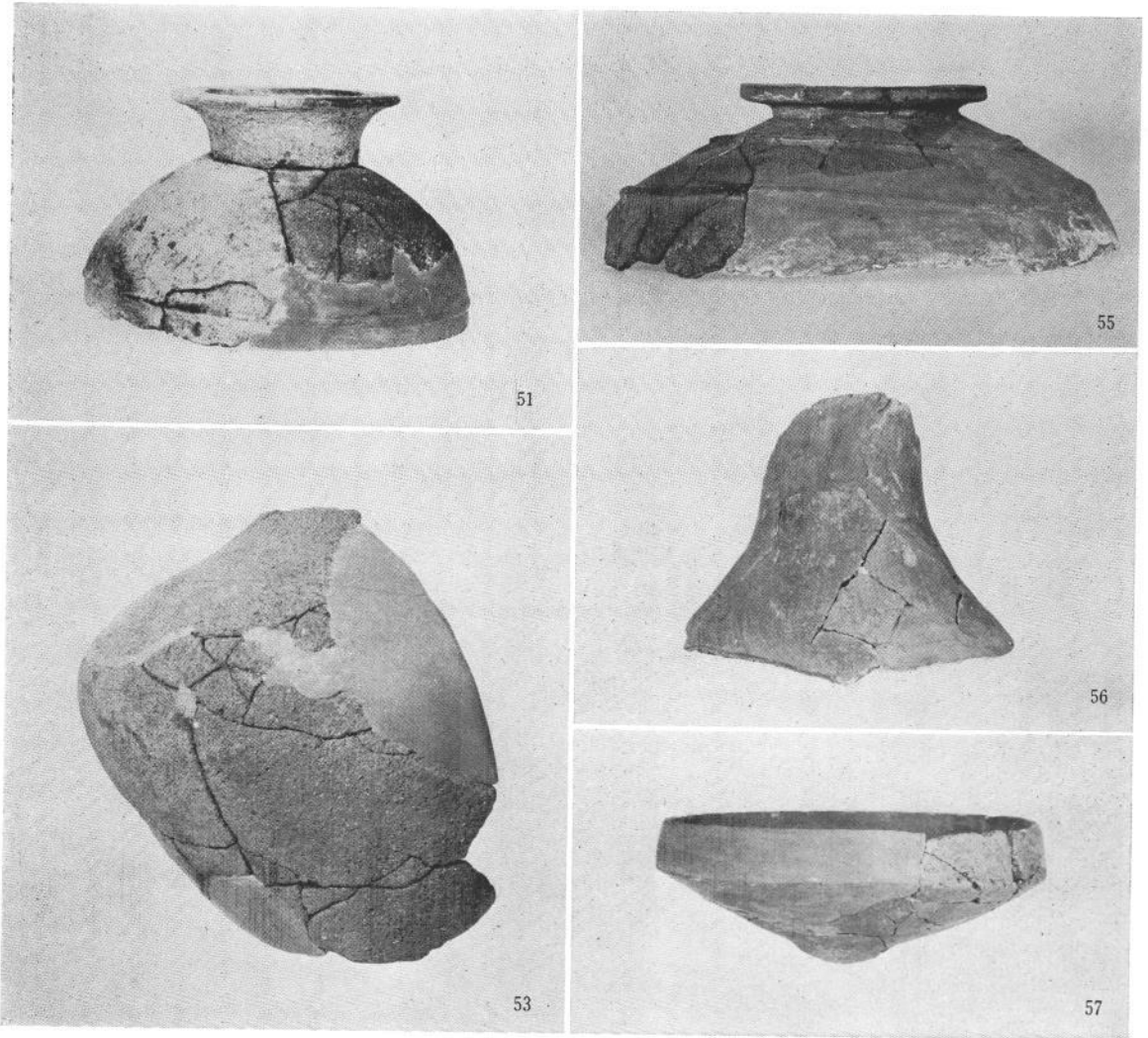
柳ヶ谷遺跡東区1号土壙・1号溝出土土器



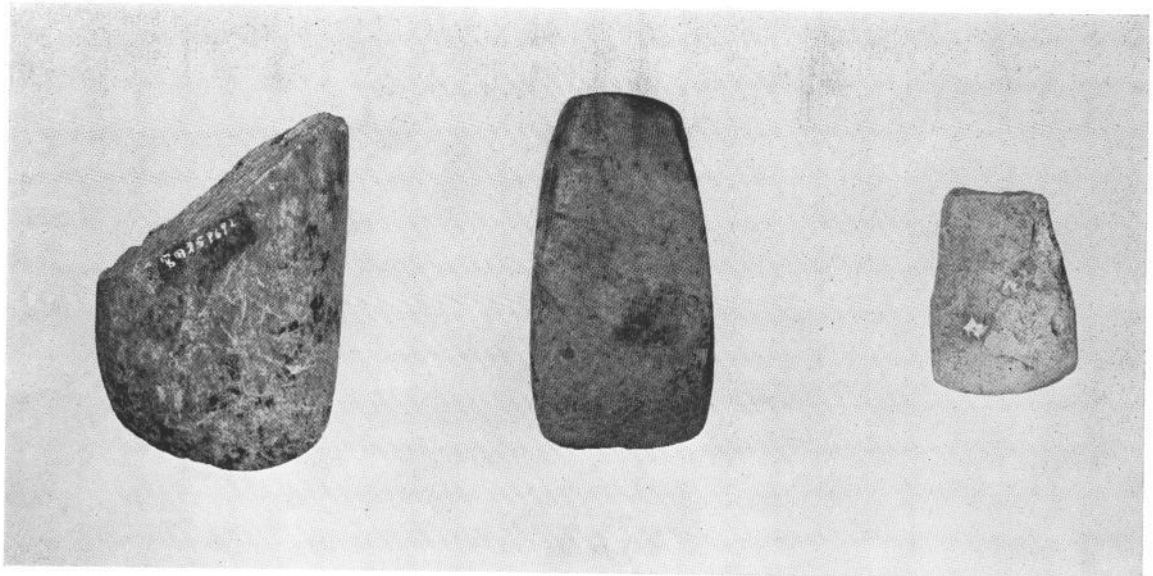
柳ヶ谷東区1号溝・ピット群出土土器



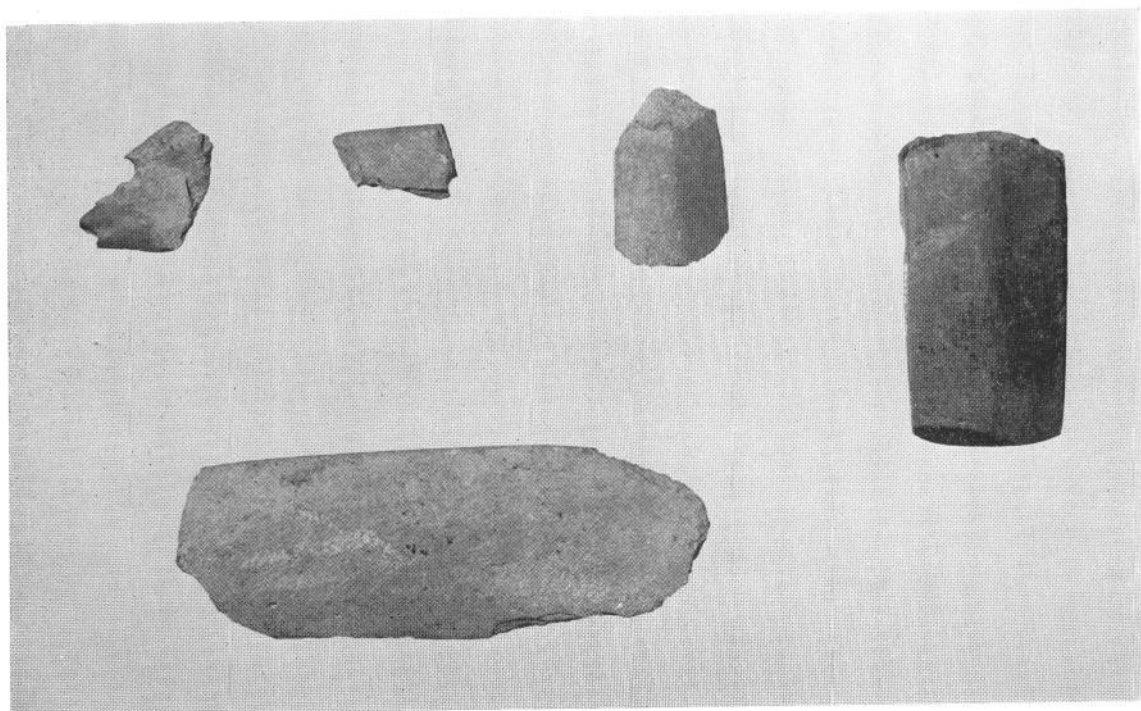
柳ヶ谷遺跡東区出土土器



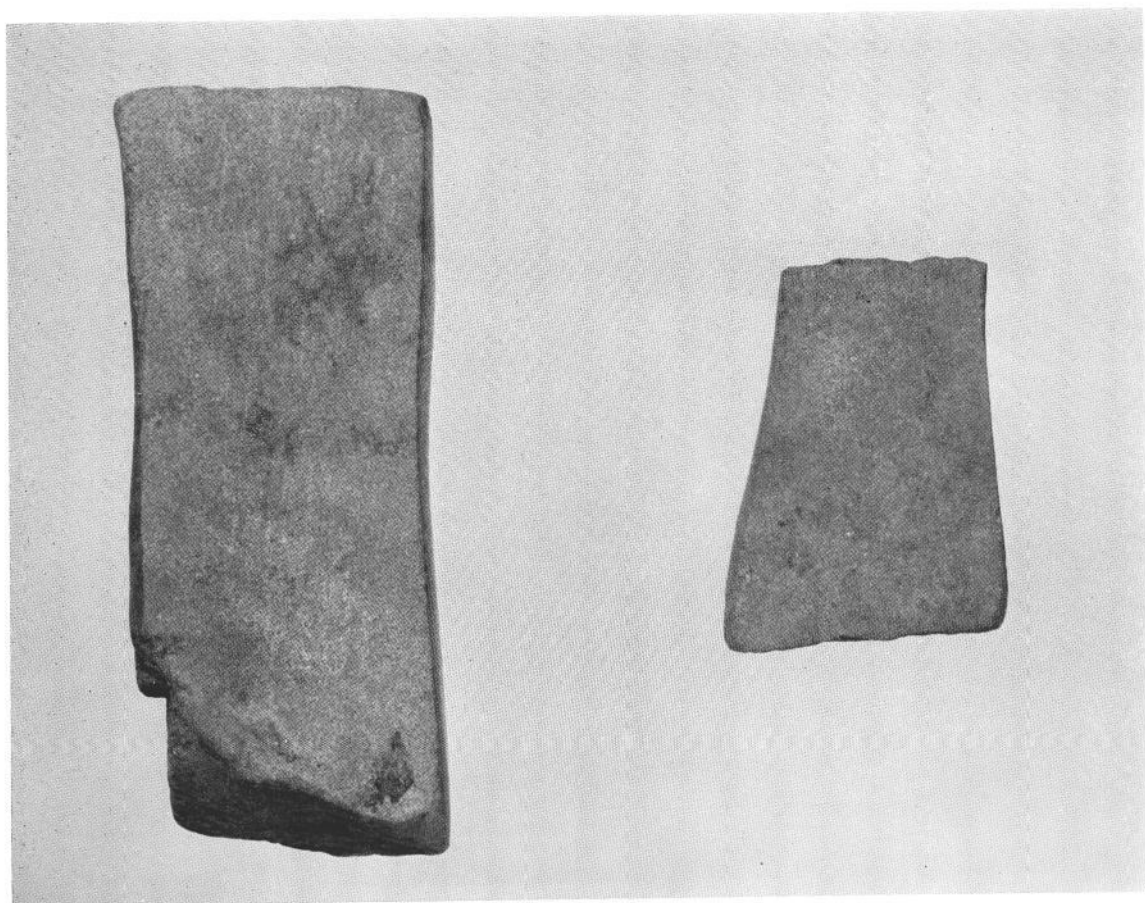
(1) 柳ヶ谷遺跡東区出土土器



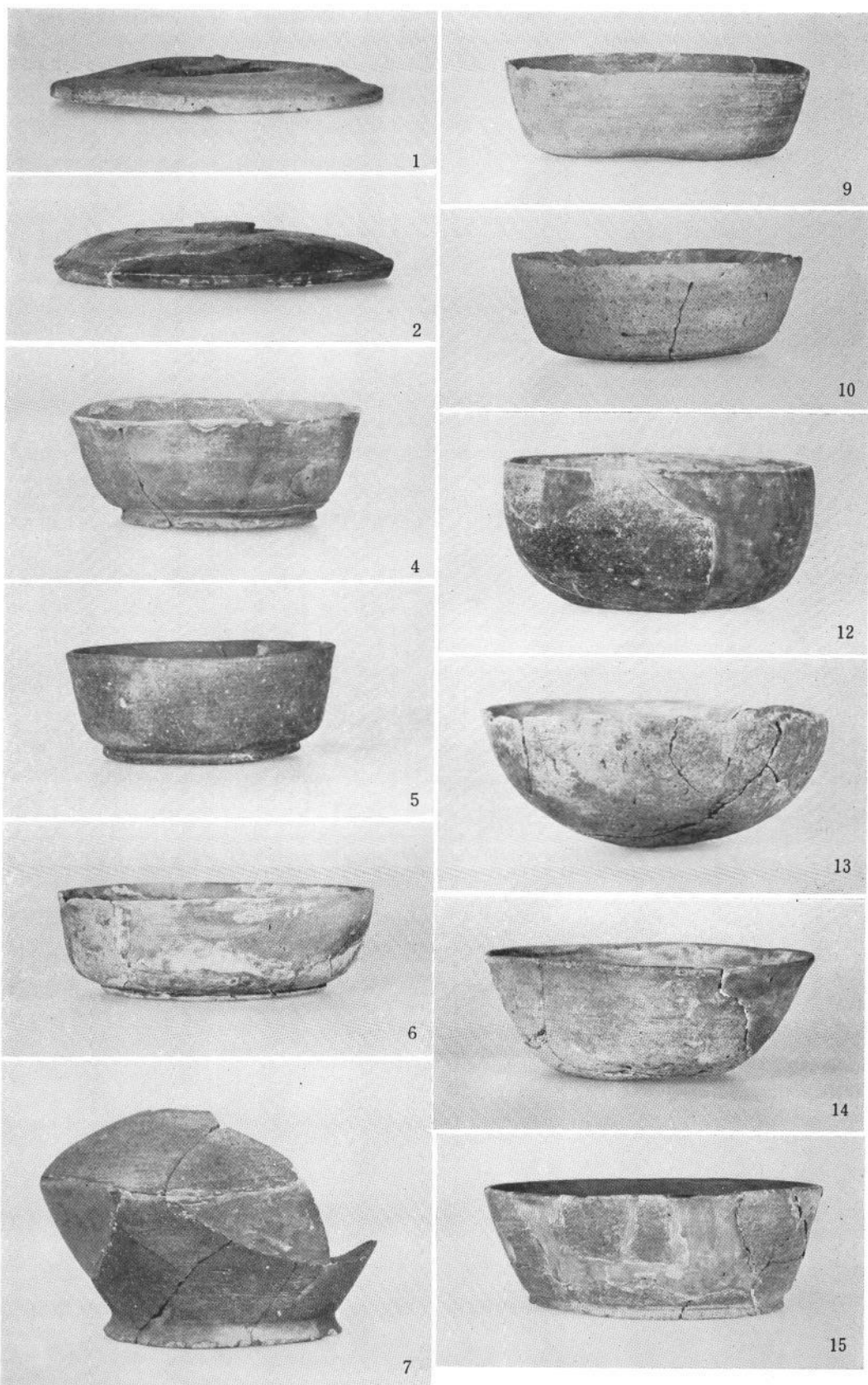
(2) 柳ヶ谷遺跡東区出土石器



(1) 柳ヶ谷遺跡東区出土石器



(2) 柳ヶ谷遺跡東区出土石器



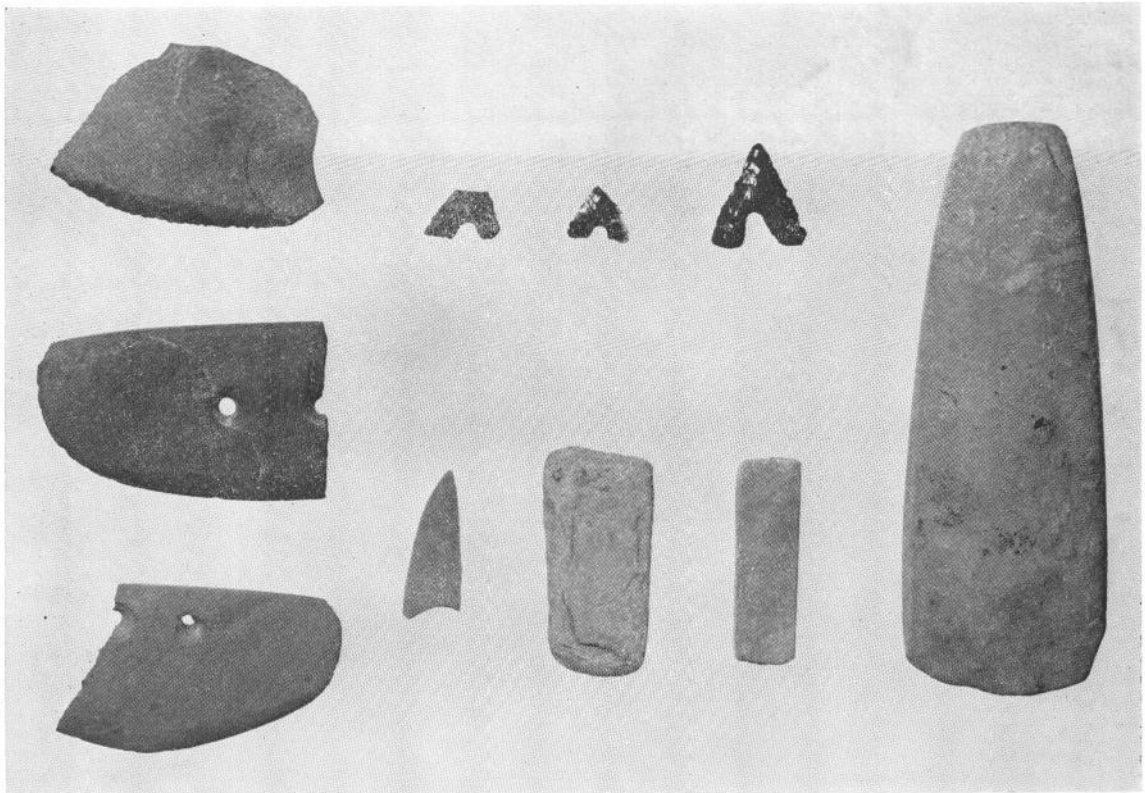
柳ヶ谷遺跡東区出土土器



(1) 柳ヶ谷遺跡西区出土土器



(2) 柳ヶ谷遺跡西区出土石器

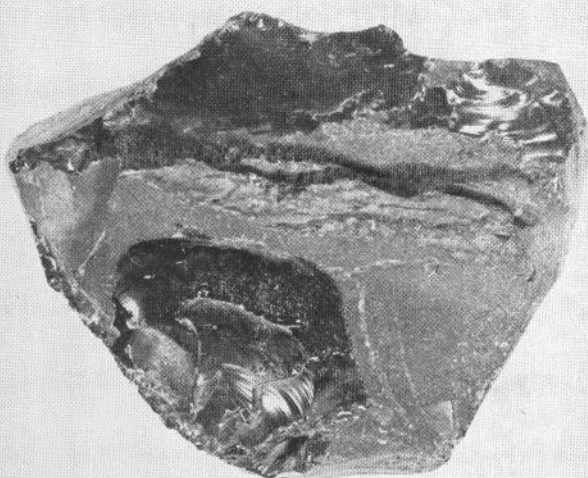
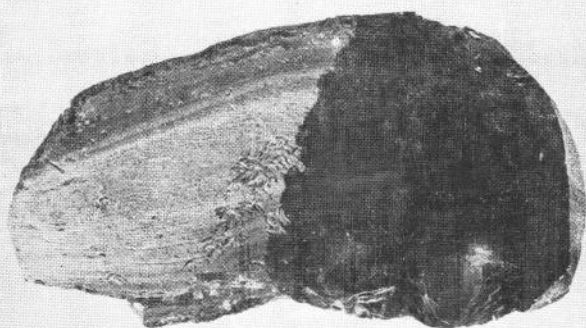
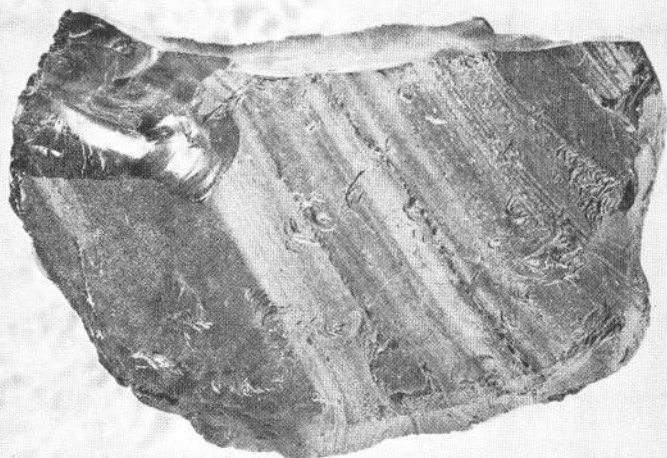


(3) 柳ヶ谷遺跡西区出土石器

(上) 都地10トレンチ出土黒曜石核1

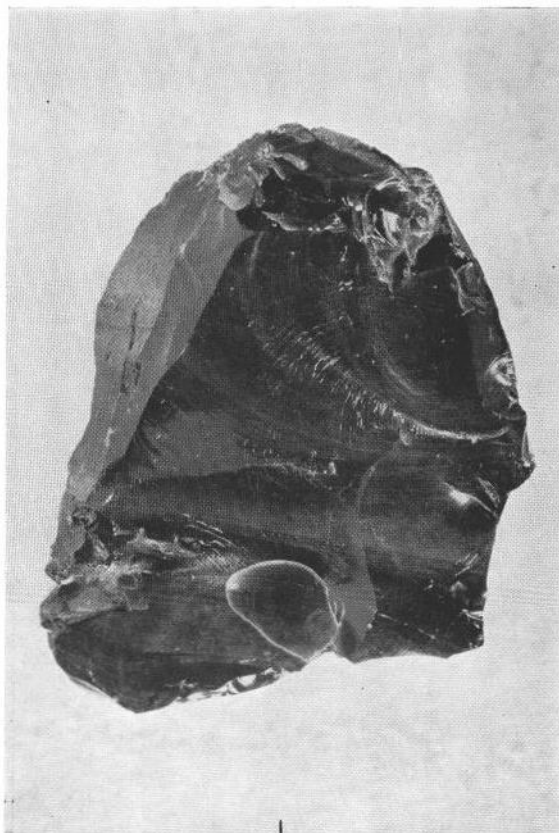
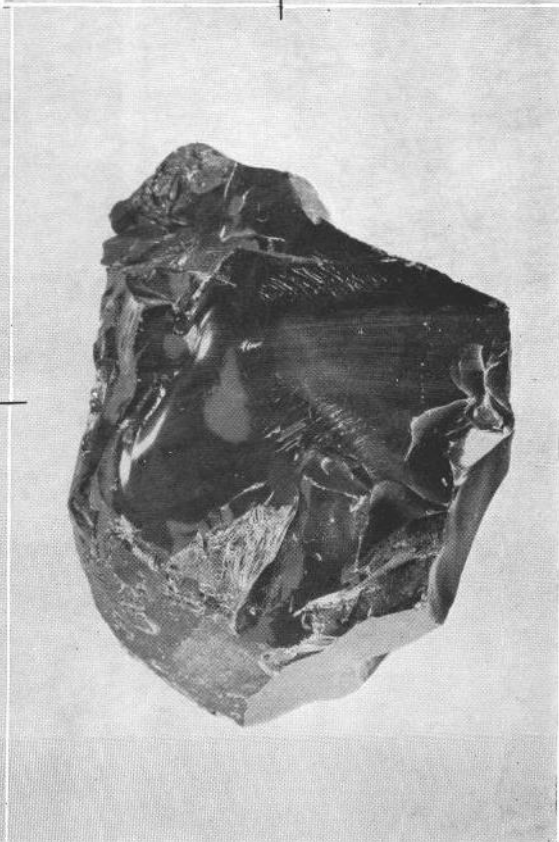
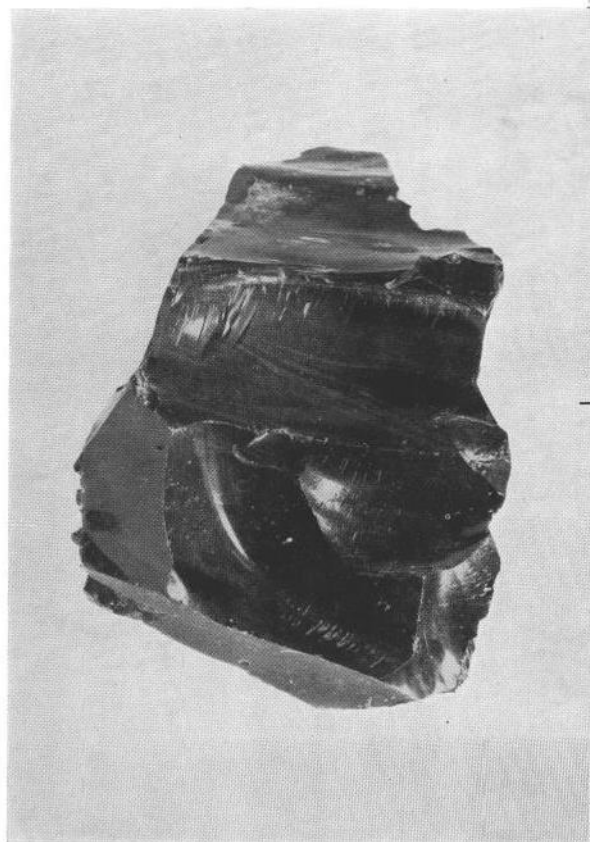
(下) 同上

2



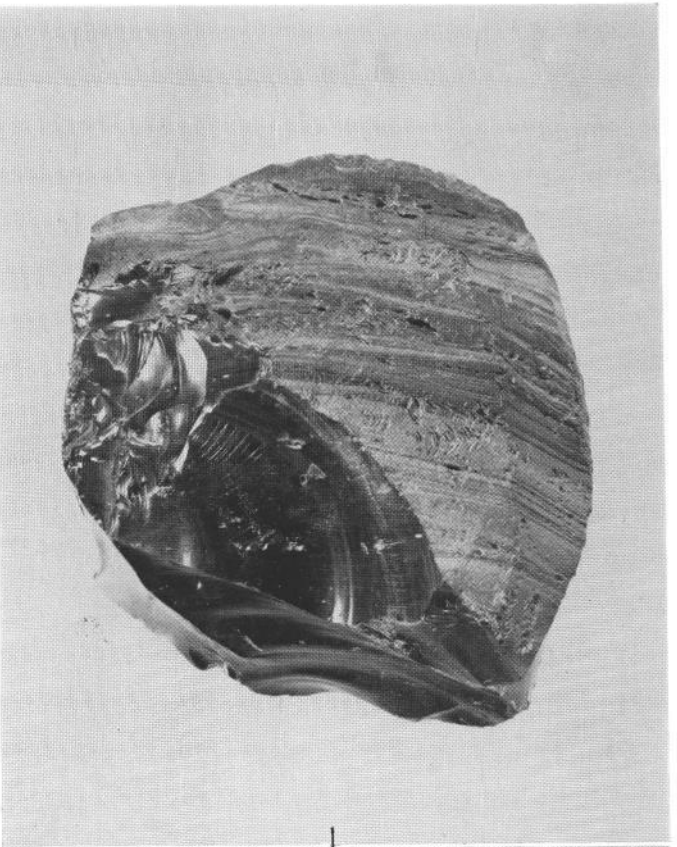
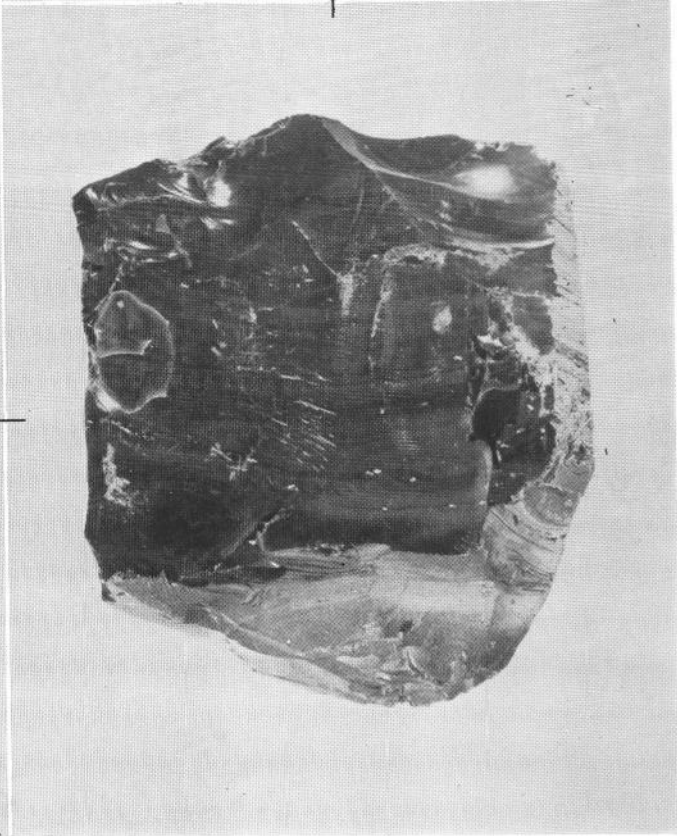
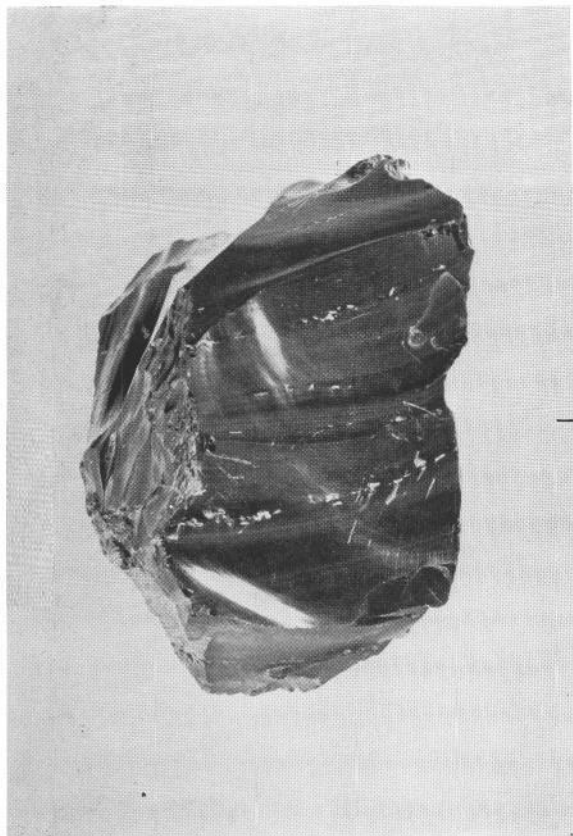
図版40

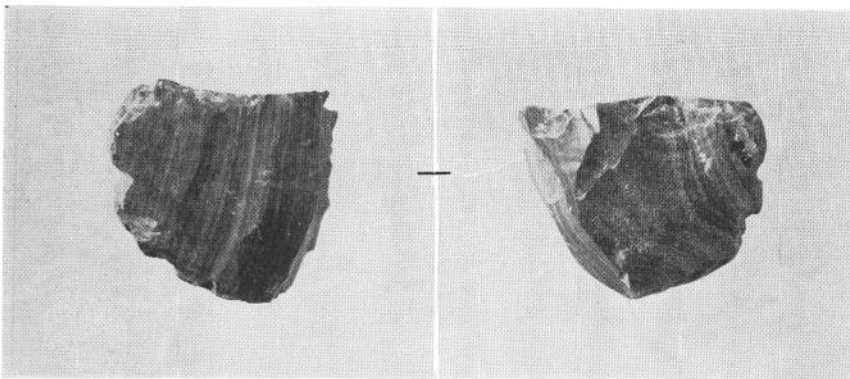
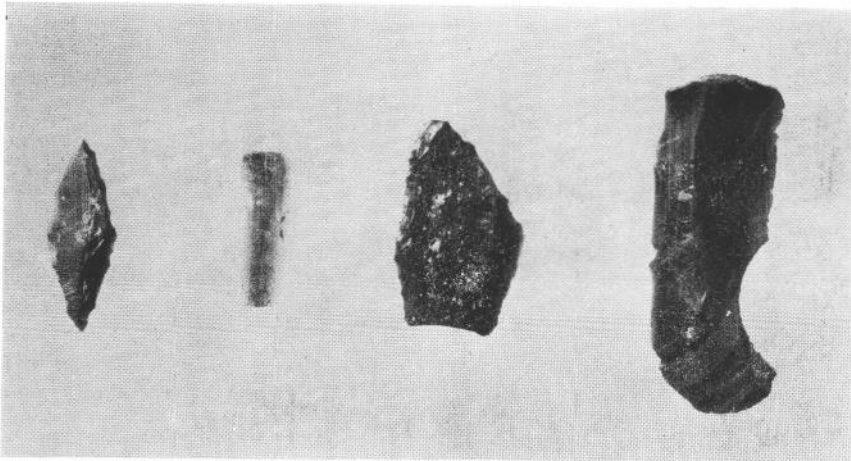
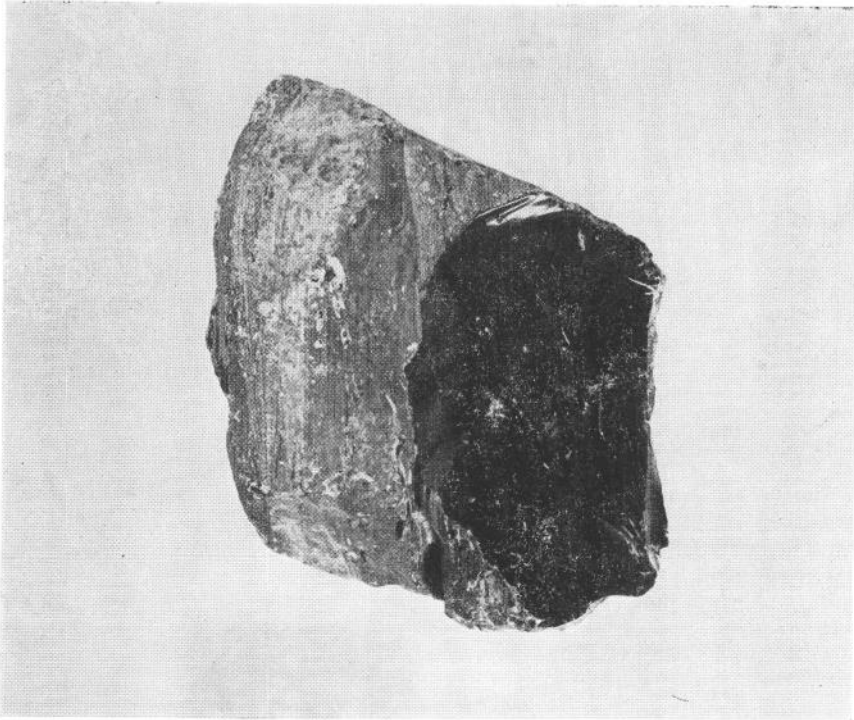
都地遺跡10トレンチ出土黒曜石核3



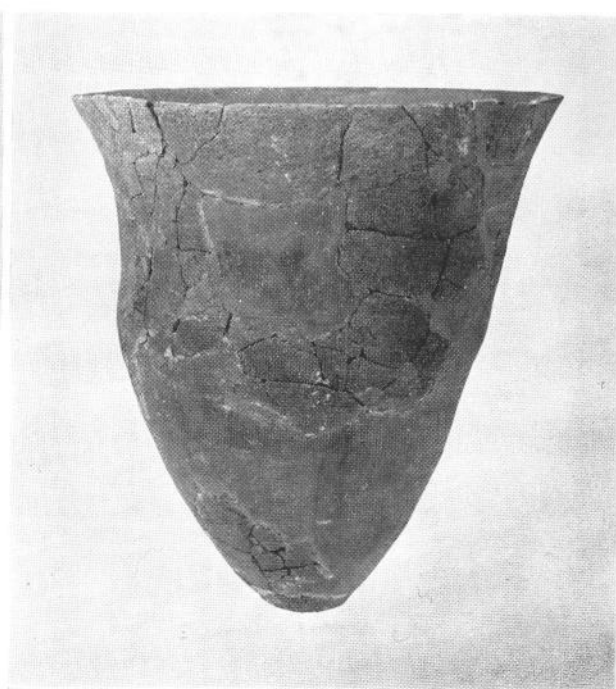
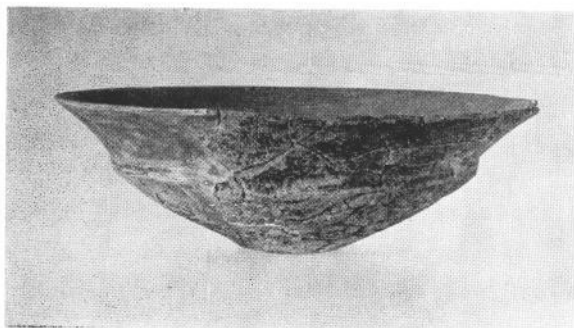
図版41

都地遺跡10トレンチ出土黒曜石核4

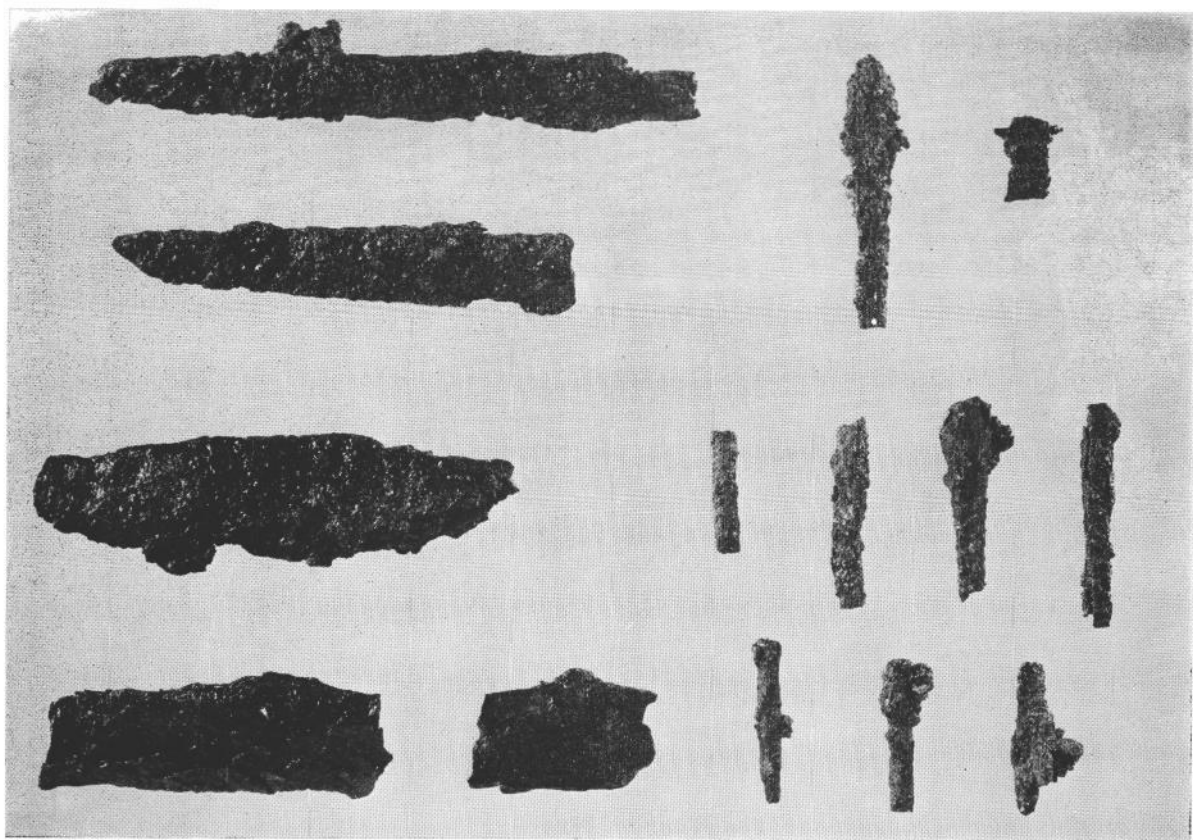




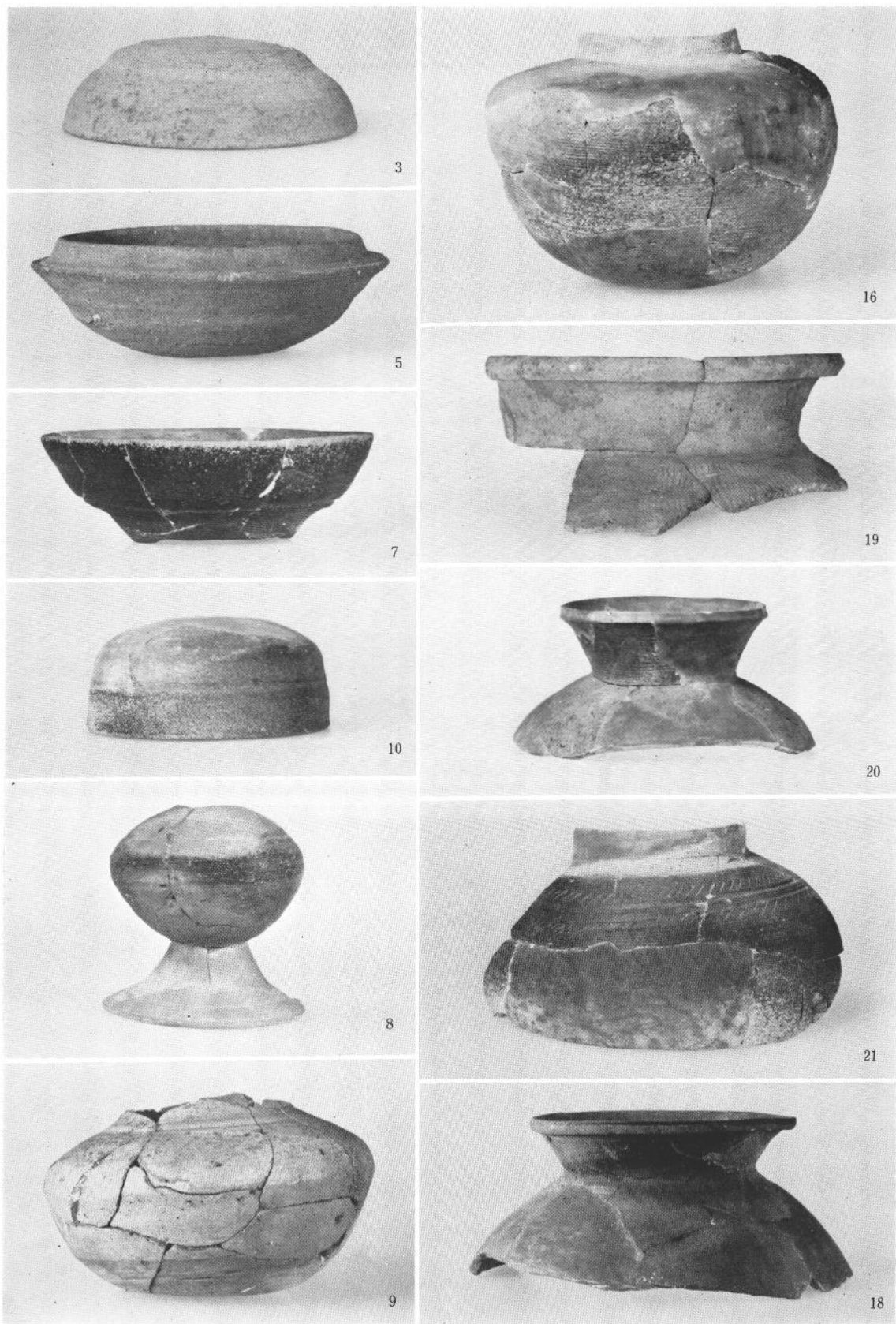
(上) 都地遺跡10トレンチ出土黒曜石核5
(中) 都地古墳群東支群出土石器
(下) 同右出土石核



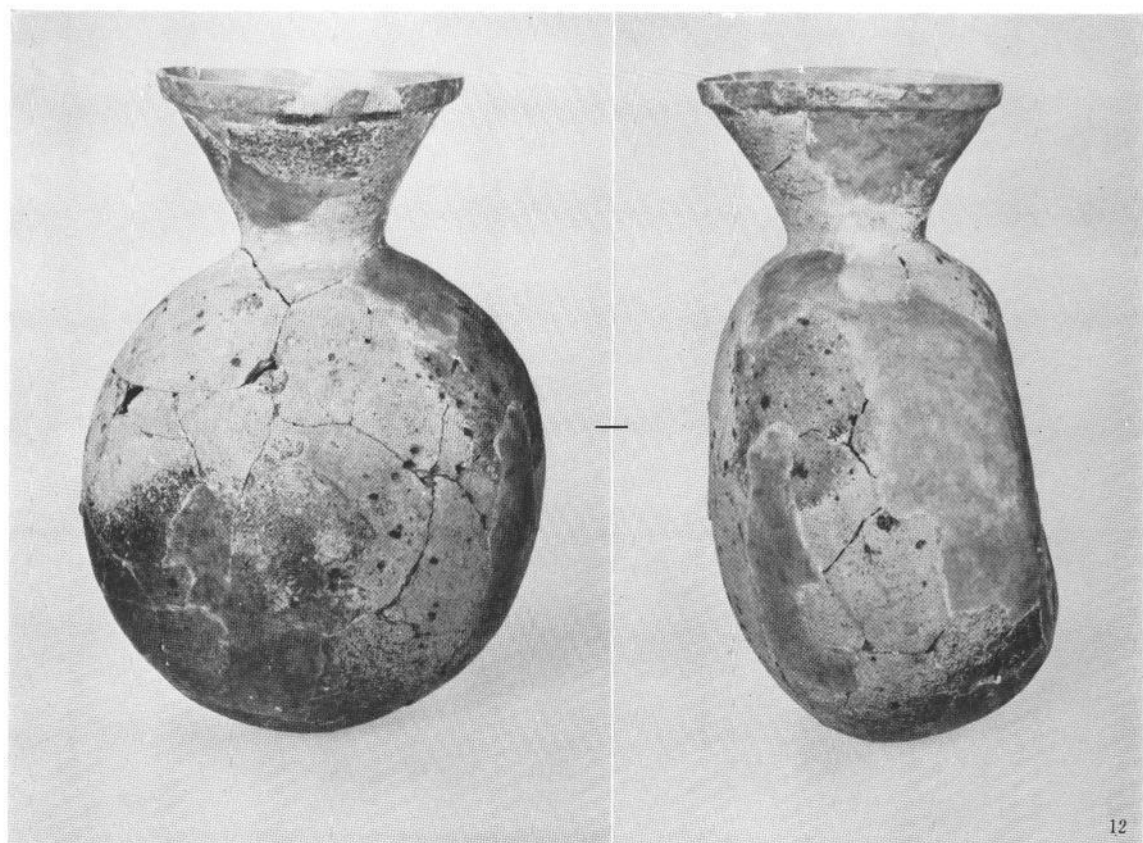
(1) 上・右 都地遺跡22トレンチ土壙出土土器



(2) 都地古墳群東支群2号石室出土鉄器



都地古墳群東支群出土土器①



12

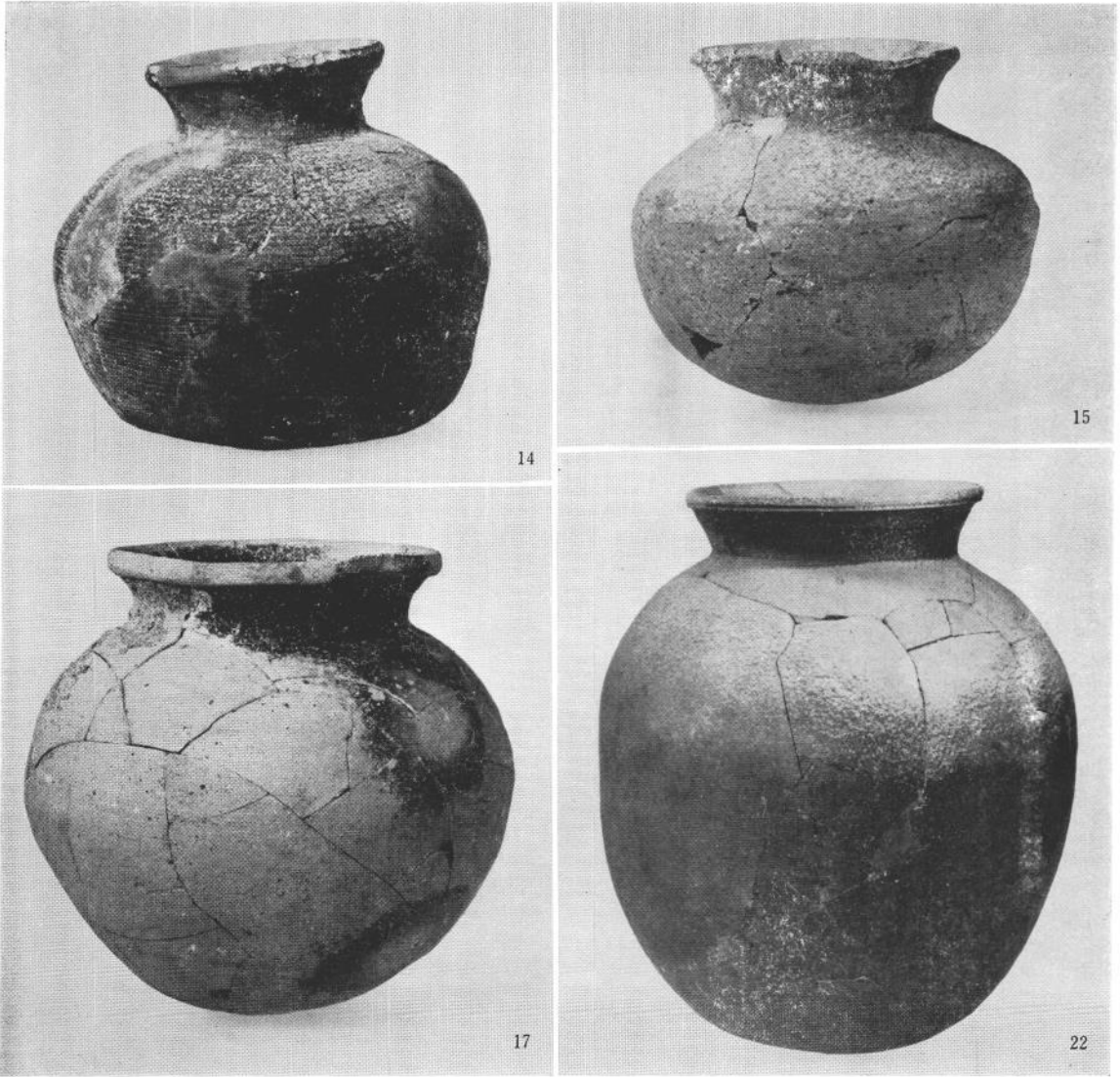


11

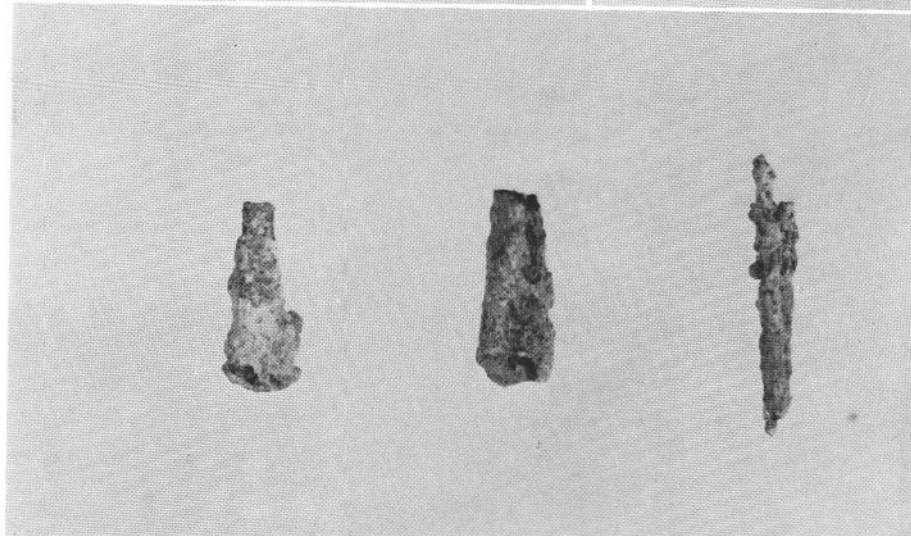
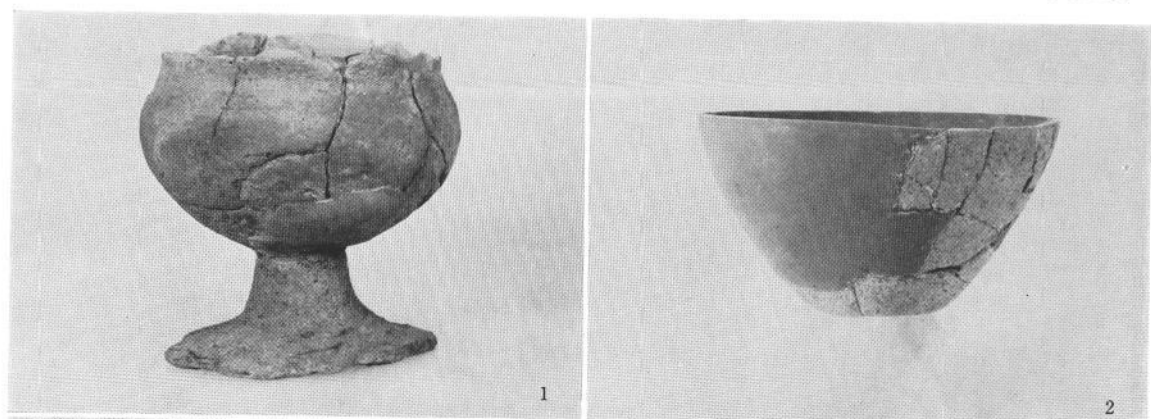


13

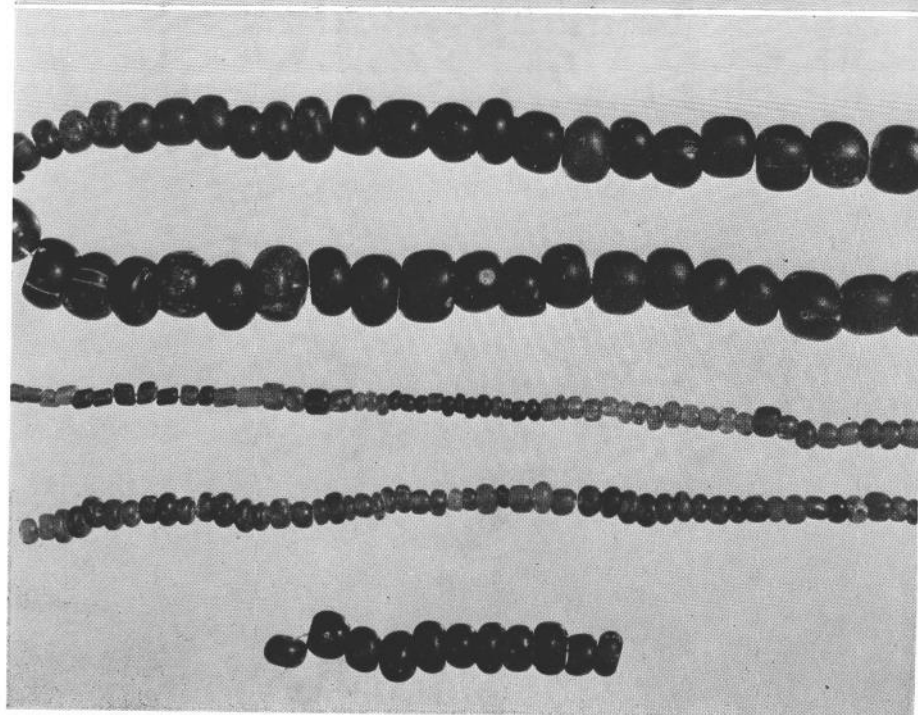
都地古墳群東支群出土土器②

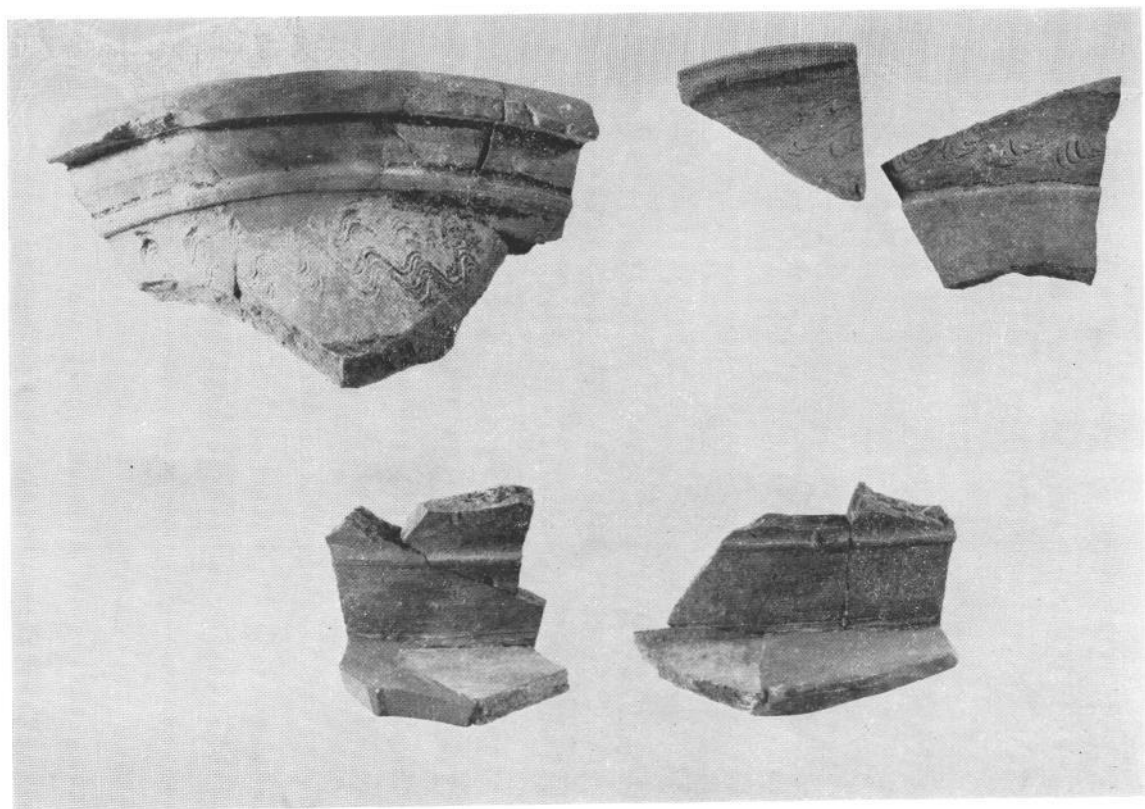


都地古墳群東支群出土土器③

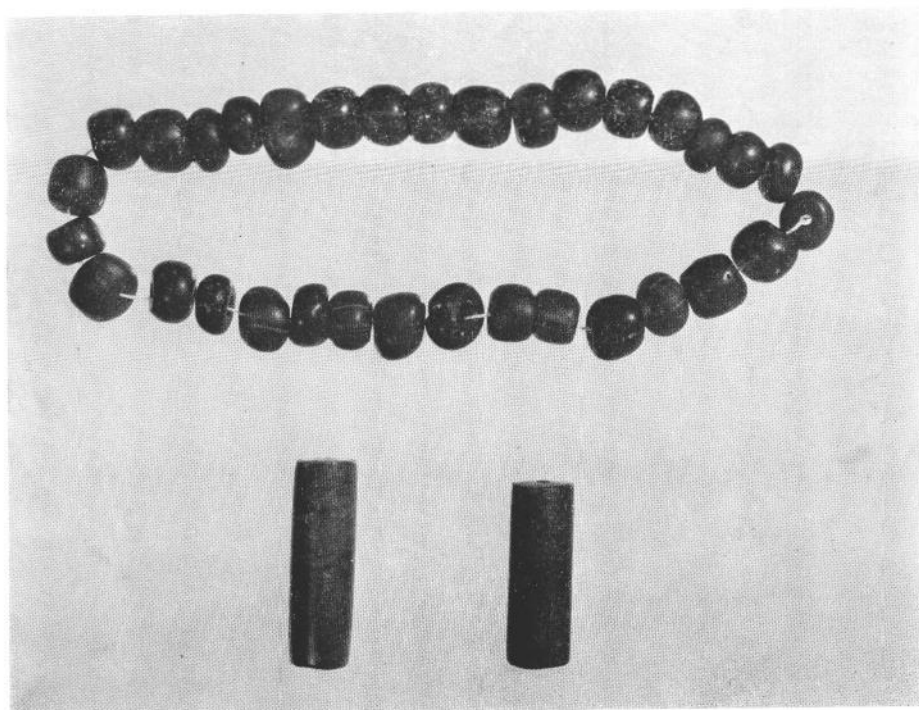


(上) 都地古墳群西支群1号墳墳裾部出土土器
(中) 同上石室出土鉄器
(下) 同上石室出土玉類(実大)

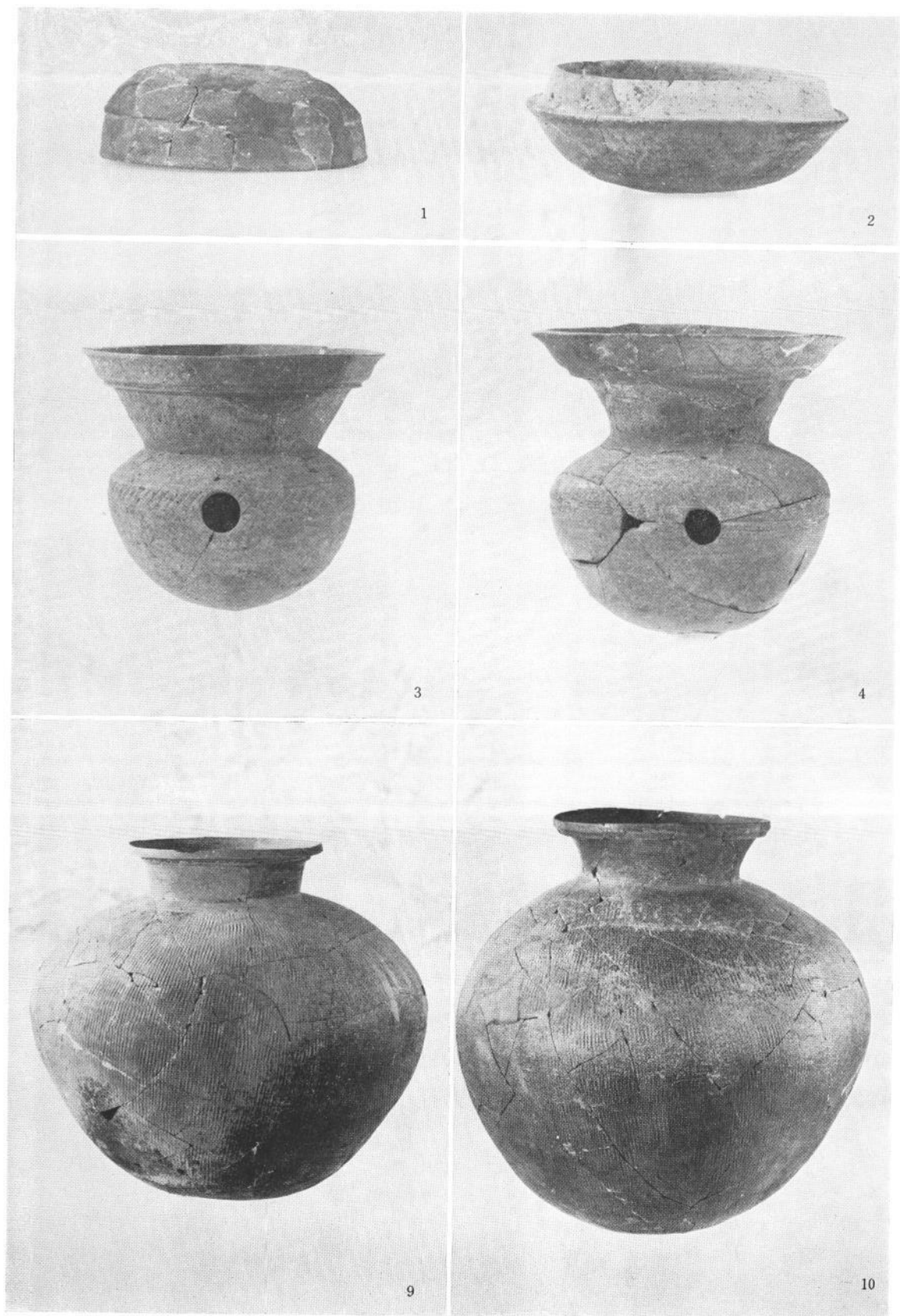




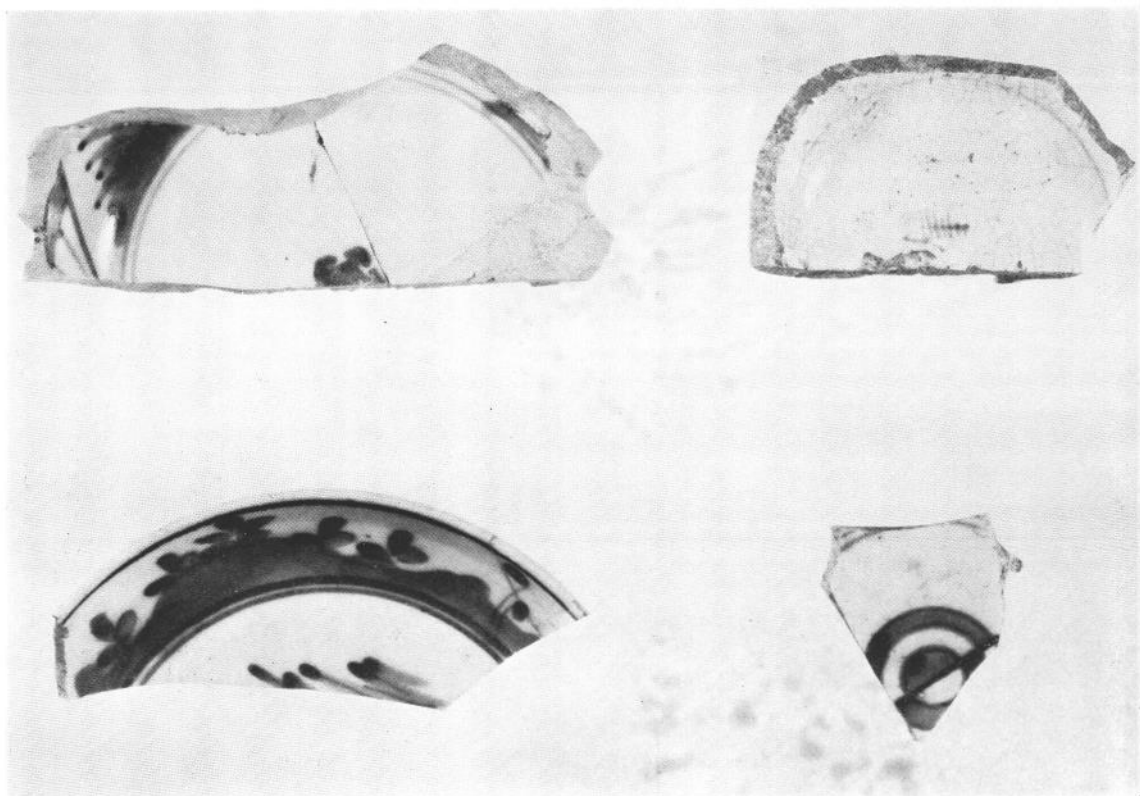
(1) 都地古墳群西支群1号墳出土土器片



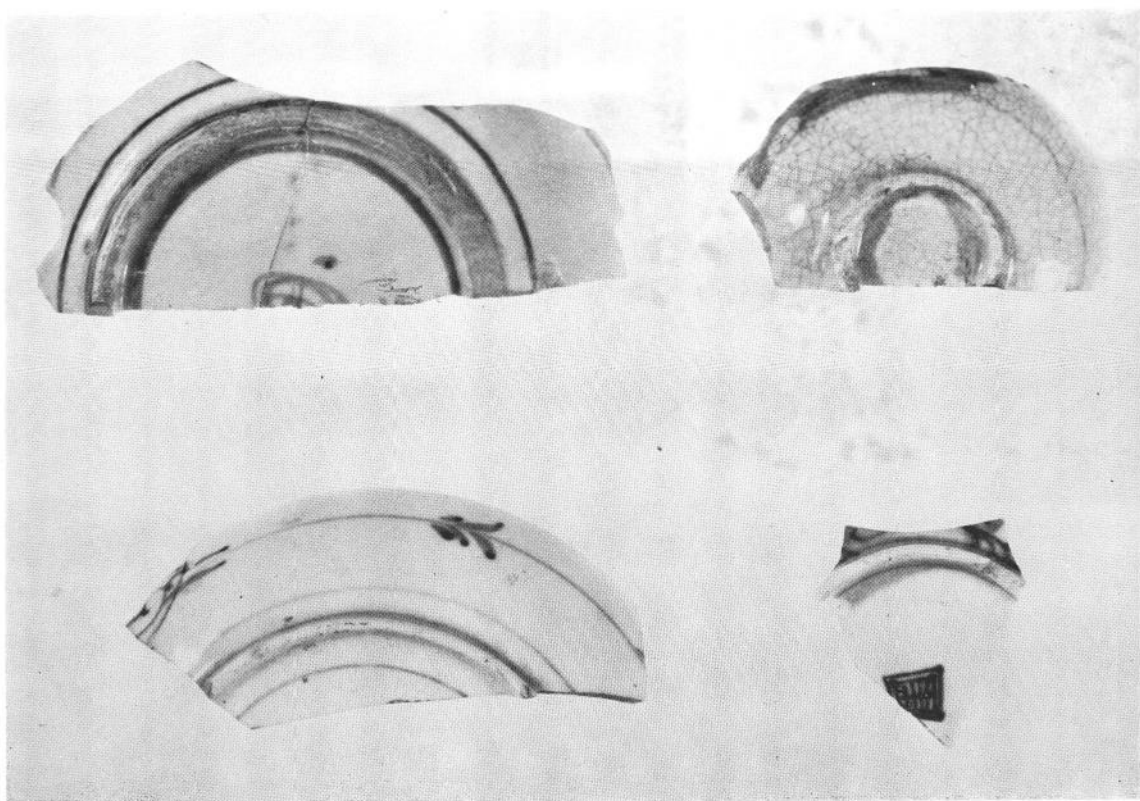
(2) 都地古墳群西支群3号墳出土玉類(実大)



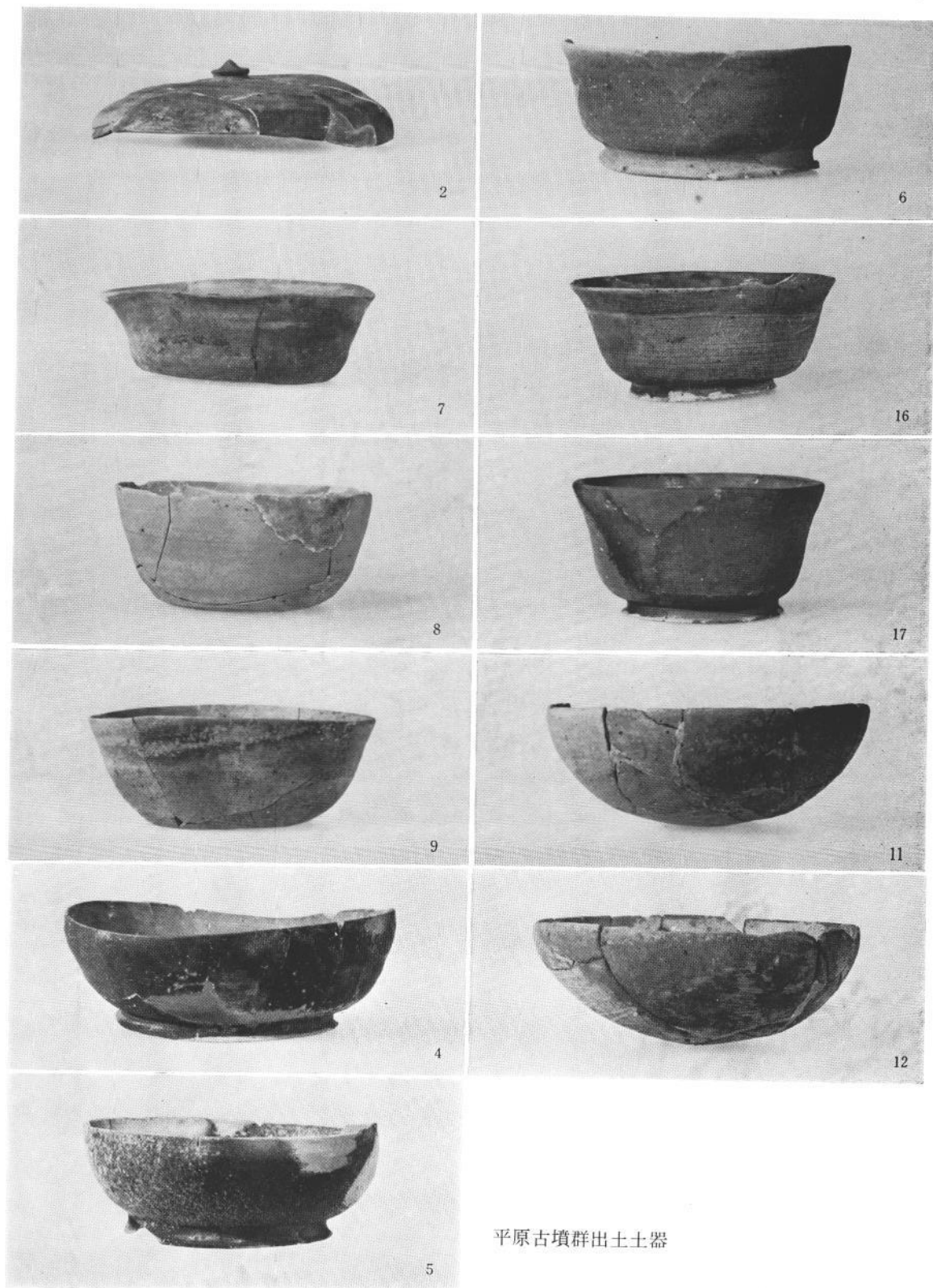
都地古墳群西支群3号墳出土土器



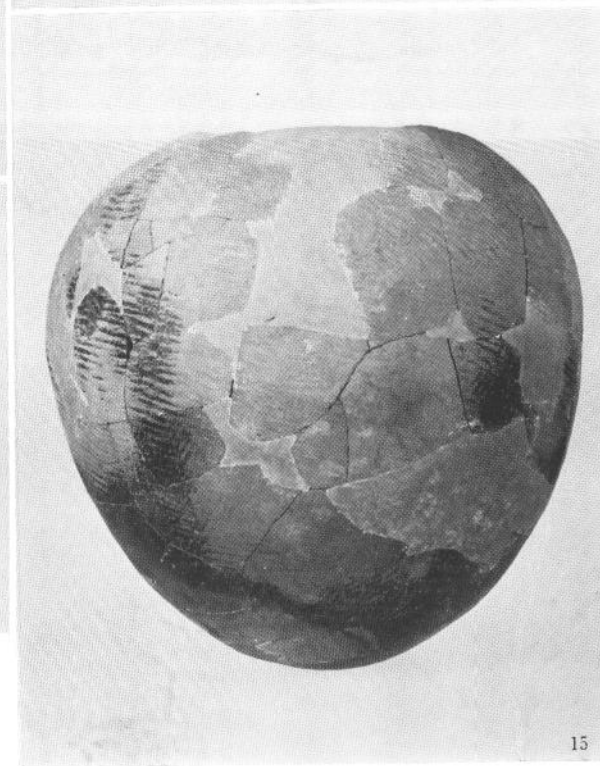
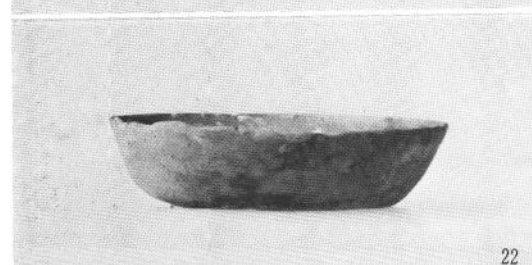
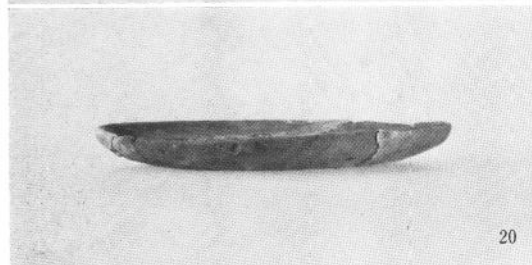
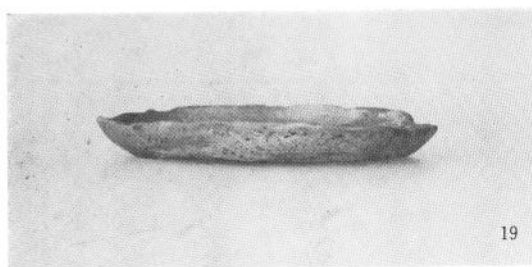
(1) 都地遺跡・同古墳群表採近世陶磁器（内面）



(2) 同上（外面）



平原古墳群出土土器



平原古墳群出土土器

若宮宮田工業団地関係
埋蔵文化財調査報告

第 3 集

昭和 55 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会
福岡市中央区西中洲 6-29

印 刷 (株) チューエツ 福岡工場
福岡市博多区東比恵 2 丁目 1 番 9 号

若宮宮田工業団地関係
埋蔵文化財調査報告

第 3 集

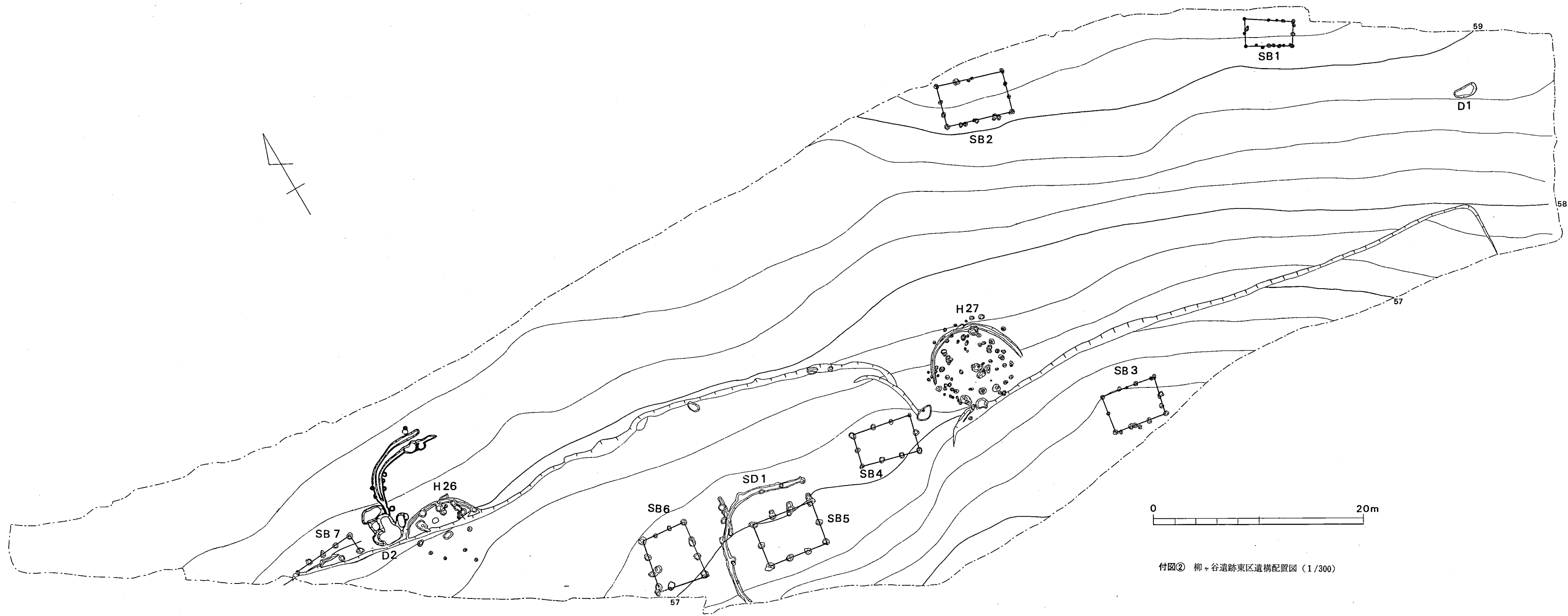
付 図

1980

福岡県教育委員会



付図① 柳ヶ谷遺跡東区全体図 (1/300)



付図② 柳ヶ谷遺跡東区遺構配置図 (1/300)